



棚田サミット  
Takashima

# 第27回 全国 棚田 千枚田 サミット

テーマ 棚田をつなぐ人のかけ橋  
～びわ湖を育む清流の輪～

開催地：滋賀県高島市

開催日：1日目 10月1日(土) 2日目 10月2日(日)

報告書







## 目次

開催風景 .....	2
高島市指定棚田地域一覧(11)地域 .....	9
共同宣言 .....	10
大会概要 .....	12
大会日程 .....	13
来賓紹介 .....	14
参加者数・後援団体 .....	15
オープニング .....	16
開会式 .....	18
事例発表 .....	24
基調講演 .....	30
第1分科会 .....	49
第2分科会 .....	66
第3分科会 .....	85
特別分科会 .....	99
閉会式 .....	118

# 開催風景

## 開会式



主催者挨拶 **加藤 正美**  
全国棚田(千枚田)連絡協議会 会長  
山形県大蔵村



開催地挨拶 **福井 正明**  
全国棚田(千枚田)サミット実行委員会 会長  
滋賀県高島市



開催地挨拶 **三日月 大造 様**  
滋賀県知事



来賓祝辞 **鶴保 庸介 様**  
棚田振興議員連盟 会長  
参議院議員



来賓祝辞 **江藤 拓 様**  
自民党棚田支援に関するPT 座長  
衆議院議員



来賓祝辞 **青山 豊久 様**  
農林水産省農村振興局 局長



総合司会  
**安藤 未来子**



## オープニング



## 事例発表「中山間地域の取組と活動紹介」 滋賀県農政水産部 農村振興課 副主幹 丸橋 のぞみ 氏



## 基調講演「棚田地域の保全と継承」 棚田学会 会長 山路 永司 氏

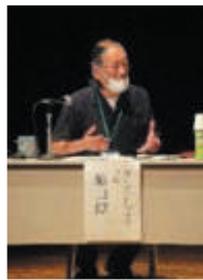


# 開催風景

## 第1分科会 「棚田を見守る“人”が芽生える ～関係人口の創出と外部との連携～」



## 第2分科会 「棚田に根付く“価値”を繋げる～地域産業の振興と次世代への継承～」



## 第3分科会 「棚田を囲む“暮らし”を感じる～農山村の魅力体験と移住促進～」



## 特別分科会 「棚田まもりびとミーティング」



## 閉会式



共同宣言 水口 淳氏  
みなくちファーム 代表



御礼の挨拶 福井 正明  
滋賀県高島市長



次期開催地  
挨拶 堀 順一郎  
和歌山県那智勝浦町長



分科会  
まとめ発表 坂本 清彦氏  
龍谷大学社会学部准教授



分科会  
まとめ発表 脇田 健一氏  
龍谷大学社会学部教授



分科会  
まとめ発表 西川 芳昭氏  
龍谷大学経済学部教授



分科会  
まとめ発表 中島 峰広氏  
NPO法人棚田ネットワーク名譽代表



# 開催風景

## 現地見学会① 「畑の棚田」コース



## 現地見学会② 「鵜川の棚田」コース



## 観光エクスカーション① 針江のかばた見学コース



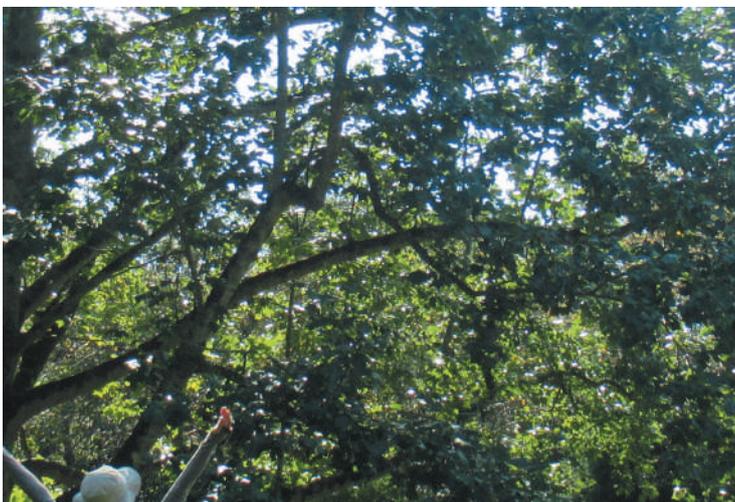
観光エクスカージョン② メタセコイア並木散策と秋の味覚狩りコース



観光エクスカージョン③ おっきん椋川交流館訪問コース



観光エクスカージョン④ 森林公園くつきの森でクアオルト健康ウォーキングコース



# 開催風景

## スナップ



# 高島市指定棚田地域一覧 (11地域)



日本の棚田百選 畑棚田



鵜川棚田



森西棚田



黒谷棚田



鹿ヶ瀬棚田



中溝棚田



伊黒棚田



市場棚田



野口棚田



石庭棚田



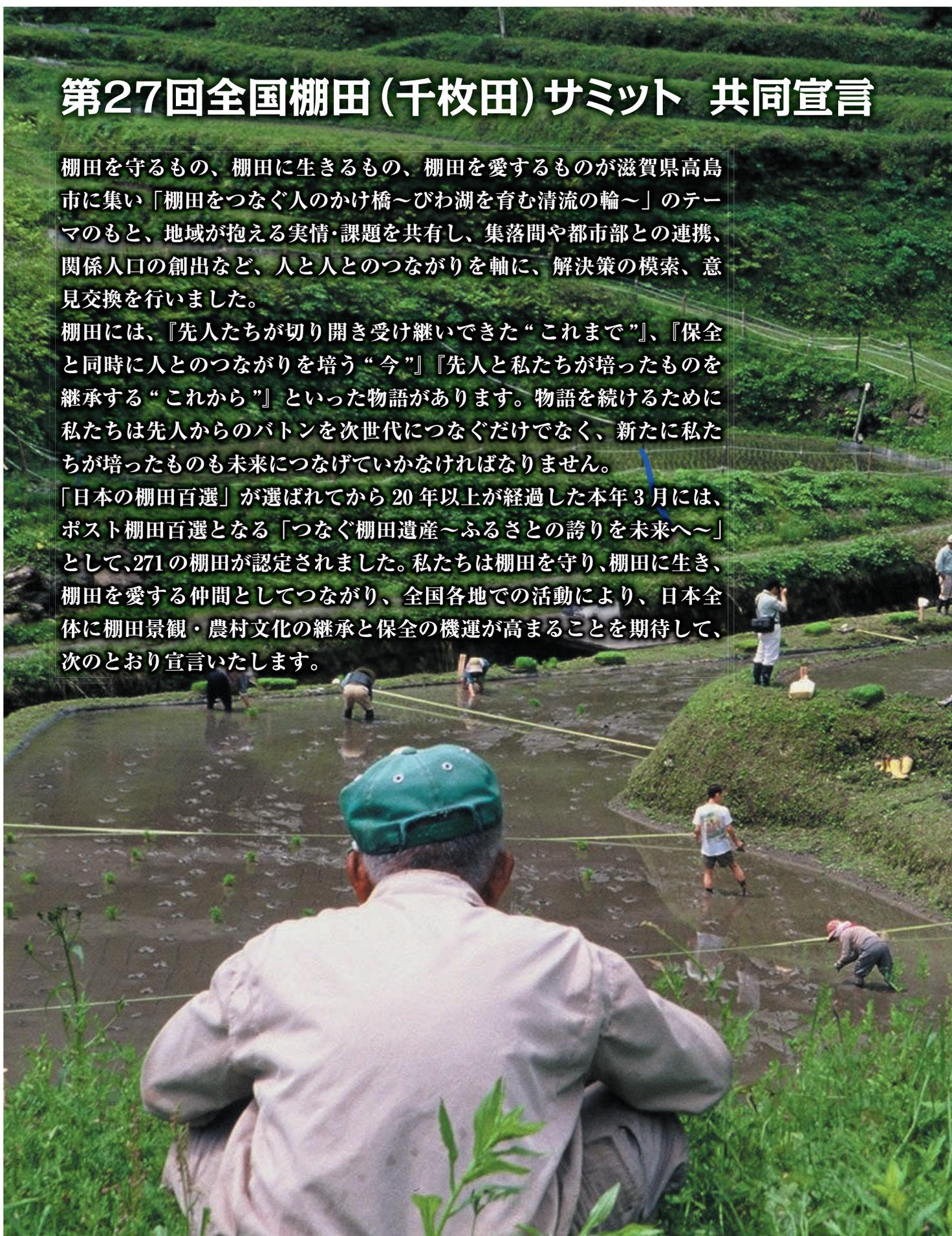
在原棚田

## 第27回全国棚田(千枚田)サミット 共同宣言

棚田を守るもの、棚田に生きるもの、棚田を愛するものが滋賀県高島市に集い「棚田をつなぐ人のかけ橋～びわ湖を育む清流の輪～」のテーマのもと、地域が抱える実情・課題を共有し、集落間や都市部との連携、関係人口の創出など、人と人とのつながりを軸に、解決策の模索、意見交換を行いました。

棚田には、『先人たちが切り開き受け継いできた“これまで”』、『保全と同時に人とのつながりを培う“今”』、『先人と私たちが培ったものを継承する“これから”』といった物語があります。物語を続けるために私たちは先人からのバトンを次世代につなぐだけでなく、新たに私たちが培ったものも未来につなげていかなければなりません。

「日本の棚田百選」が選ばれてから20年以上が経過した本年3月には、ポスト棚田百選となる「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」として、271の棚田が認定されました。私たちは棚田を守り、棚田に生き、棚田を愛する仲間としてつながり、全国各地での活動により、日本全体に棚田景観・農村文化の継承と保全の機運が高まることを期待して、次のとおり宣言いたします。



一、私たちは、日本の原風景である棚田の景色・景観を守るため、そして次の世代に引き継げるよう保全活動に取り組み、地域をめぐる恵みの水や地域に広がる肥沃な大地を大切にします。

一、私たちは、多くの国民に棚田の魅力を感じてもらえるよう情報発信を強化し、農村と都市との距離がより近づき、多様な人々が共鳴しあうことで地域の活性化を図ります。

一、私たちは、棚田地域に根付く伝統と文化を大切にするとともに、体験や交流の場としてこれらを活かし、地域の活性化を図るとともに、次の世代へつなげます。

一、私たちは、棚田が持つ良好な景観や水源かん養などの機能が十分に発揮されるよう、地域と棚田に想いをよせる人がお互いに支え合いながら取り組みを進め、中山間地域の安全で安心できる暮らしや魅力あふれる持続可能な地域づくりを目指します。

令和4年10月2日  
第27回全国棚田(千枚田)サミット  
参加者一同

# 大会概要

## 開催日程

令和4年10月1日（土）～10月2日（日）

## 開催地

滋賀県高島市

## 主催

全国棚田（千枚田）連絡協議会

## 主管

第27回全国棚田（千枚田）サミット実行委員会

## テーマ

棚田をつなぐ人のかけ橋～びわ湖を育む清流の輪～

## 開催趣旨

現在の棚田地域は人口減少や高齢化の影響、地理的不利性などから棚田の保全はもとより地域コミュニティの維持が困難な状況になってきており、集落単独による状況の打開は容易ではありません。その様な中で、従来の姿を維持するために地域に出来る新たな可能性を探ります。そのカギとなるのが「人のつながり」。地域内、集落間、都市部、異世代と様々な人がつながり、国民の財産である棚田を守り、そこに暮らす人々を守るための取り組みを参加者と一緒に考え、あらためて棚田の持つ価値、地域の持つ可能性を見つめ直すため「第27回全国棚田（千枚田）サミット」を開催します。

## 参加人数

463人

（※来賓等、講師・コーディネーター・パネリストを含む。）



## 大会日程

### 令和4年9月30日(金)

時間	内容	場所
16:00～	全国棚田(千枚田)連絡協議会 理事会	今津東コミュニティセンター
16:45～	全国棚田(千枚田)連絡協議会 総会	

### 令和4年10月1日(土)

時間	内容	場所
9:30～	オープニング	高島市民会館
10:00～	開会式	
10:30～	事例発表「中山間地域の取組と活動紹介」	
11:00～	基調講演「棚田地域の保全と継承」	
12:30～	移動・昼食・休憩	
14:30～	<b>第1分科会</b> 棚田を見守る“人”が芽生える～関係人口の創出と外部との連携～	ガリバーホール
	<b>第2分科会</b> 棚田に根付く“価値”を繋げる～地域産業の振興と次世代への継承～	藤樹の里文化芸術会館
	<b>第3分科会</b> 棚田を囲む“暮らし”を感じる～農山村の魅力体験と移住促進～	高島市民会館
	<b>特別分科会</b> 棚田まもりびとミーティング	今津東コミュニティセンター

### 令和4年10月2日(日)

時間	内容	場所
8:30～	<b>現地見学会</b> 「畑の棚田」コース 「鵜川の棚田」コース	市内各地
	<b>観光エクスカーション</b> 針江のかばた見学コース メタセコイア並木散策と秋の味覚狩りコース おっきん椋川交流館訪問コース 森林公園くつきの森でクアオルト健康ウォーキングコース	
11:30～	閉会式	高島市民会館

## 来賓紹介

(順不同)

- 棚田振興議員連盟 会長 参議院議員 鶴保 庸介 様
- 自民党棚田支援に関するプロジェクトチーム 座長 衆議院議員 江藤 拓 様
- 棚田振興議員連盟 事務局長代理 参議院議員 進藤 金日子 様
- 衆議院議員 大岡 敏孝 様
- 衆議院議員 斎藤 アレックス 様
- 参議院議員 小鍬 隆史 様
- 参議院議員 嘉田 由紀子 様
- 内閣府地方創生推進事務局 審議官 内田 幸雄 様
- 農林水産省農村振興局 局長 青山 豊久 様
- 農林水産省農村振興局農村政策部地域振興課 課長 富田 晋司 様
- 農林水産省近畿農政局 局長 出倉 功一 様
- 滋賀県 知事 三日月 大造 様
- 滋賀県議会 副議長 清水 鉄次 様
- 滋賀県議会 議員 海東 英和 様
- 滋賀県農政水産部 部長 宇野 良彦 様
- 滋賀県大津市長 佐藤 健司 様 (代理：産業観光部田園づくり振興課 課長 森口 直樹 様)
- 滋賀県甲賀市長 岩永 裕貴 様 (代理：産業経済部 理事 八田 忠 様)
- 愛媛県大洲市長 二宮 隆久 様
- 高島市議会 副議長 河越 安実治 様
- 高島市議会 議員 今城 克啓 様
- 高島市議会 議員 藍原 章 様
- 高島市議会 議員 早川 浩徳 様
- 高島市議会 議員 板持 文子 様
- 高島市議会 議員 中川 あゆこ 様
- 高島市議会 議員 廣部 真造 様
- 高島市議会 議員 森脇 徹 様
- 高島市議会 議員 磯部 亜希 様
- 高島市議会 議員 澤本 長俊 様
- 高島市議会 議員 山下 巧 様
- 高島市議会 議員 藤田 昭 様
- 高島市議会 議員 是永 宙 様
- 高島市議会 議員 高木 広和 様
- 高島市議会 議員 早川 康生 様

## 参加者数

### ■都道府県別参加者数（※来賓等、講師・コーディネーター・パネリストを含む。）

都道府県名	人数	人数	
東北地方	青森県	2	19
	宮城県	2	
	山形県	12	
	福島県	3	
関東地方	茨城県	1	51
	埼玉県	2	
	千葉県	24	
	東京都	21	
	神奈川県	3	
中部地方	新潟県	10	98
	富山県	2	
	石川県	18	
	山梨県	2	
	長野県	23	
	岐阜県	18	
	静岡県	11	
	愛知県	14	
関西地方	三重県	6	213
	滋賀県	139	
	京都府	9	
	大阪府	4	
	兵庫県	3	
	奈良県	7	
	和歌山県	45	

都道府県名	人数	人数	
中国地方	岡山県	4	8
	山口県	4	
四国地方	徳島県	1	25
	香川県	11	
	愛媛県	10	
	高知県	3	
九州地方	福岡県	9	49
	佐賀県	23	
	長崎県	3	
	熊本県	2	
	大分県	7	
	宮崎県	4	
鹿児島県	1		
計		463	

※滋賀県内参加者内訳 高島市内55人 市外84人

### ■行事別参加者数（※来賓等、講師・コーディネーター・パネリストを含む。）

区分			人数
10月1日(土)	分科会	第1分科会	130
		第2分科会	90
		第3分科会	112
		特別分科会	82
10月2日(日)	現地見学会	畑の棚田コース	117
		鶴川の棚田コース	100
	観光エクスカーション	針江のかばた見学コース	19
		メタセコイア並木散策と秋の味覚狩りコース	22
		おっきん椋川交流館訪問コース	23
		森林公園つつきの森でクアオルト健康ウォーキングコース	6

## 後援団体

(順不同)

内閣府、総務省、農林水産省、国土交通省、環境省、文化庁、全国知事会、  
 全国都道府県議会議長会、全国市長会、全国市議会議長会、全国町村会、全国町村議会議長会、  
 一般社団法人全国農業会議所、一般社団法人全国農業協同組合中央会、  
 一般社団法人全国消費者団体連絡会、日本生活協同組合連合会、全国土地改良事業団体連合会、  
 一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構、全国農業新聞、公益社団法人全国農業共済協会、  
 株式会社日本農業新聞、滋賀県、滋賀県市長会、滋賀県町村会、滋賀県市議会議長会、  
 滋賀県町村議会議長会、滋賀県農業協同組合中央会、全国農業協同組合連合会滋賀県本部、  
 一般社団法人滋賀県農業会議、滋賀県農業共済組合、滋賀県土地改良事業団体連合会、  
 朝日新聞大津総局、読売新聞大津支局、毎日新聞大津支局、京都新聞、中日新聞社、  
 日本経済新聞社大津支局、一般社団法人共同通信社大津支局、株式会社時事通信社大津支局、  
 NHK大津放送局、びわ湖放送株式会社、株式会社エフエム滋賀

## テーマ 高島の自然と私の未来(披露作文)

### みんなでよりよい高島へ・・・

私たちが住んでいる高島市には、メタセコイア並木や畑の棚田、朽木の桜、私の住んでいる新旭町では針江のかばたなどたくさんの自然があります。そして滋賀県には大きな湖、琵琶湖があります。

けれど、琵琶湖近くの浜辺、ビーチなどには、ペットボトルやビニール袋が捨てられてあったり、そのせいで琵琶湖の水が濁ったり、臭くなったり少しずつ汚れていっています。それを解決するためには、琵琶湖をキレイにする活動や、ゴミを拾ったり、捨てないようにしっかり持ち帰ることが大切だと思いました。

一人一人が琵琶湖や自然を守るために・・・

私は自然や琵琶湖の変化を調べてみました。琵琶湖では、外来魚の増加や水草が大量に生い茂るなどのように、生態系に大きな変化が起きています。他にも、人々の生活様式の変化による環境が、琵琶湖を汚していきます。そのために、琵琶湖ルールや地域の取り組みの支援などがされています。スローガンは、～人と自然とが共生する美しい琵琶湖をめざして～私はこのスローガンを見て、自然がキレイで市は発展していないの

と、市は発展しているのに自然が汚れているのでは、どちらもすることはむずかしいですがそれをすることが大切ということのスローガンから感じることができました。

一方自然では、シカ、サル、カワウ、などの野生鳥獣種による被害が多くなり、大きな社会問題となっています。このことは、自然だけでなく、人や、社会にも大きな影響があります。

私はこのことから、自然や琵琶湖そして人、社会を守ることが大切と改めてわかりました。そして、これらを守るには、たくさんの人が協力したり、一人一人が自分のできる行動をするようにしたいです。私は、ゴミ拾いを少しずつはじめていたり、ゴミを捨てようとする人たちに注意をしたりしたいです。そして地域の活動に協力していきたいです。このようなことをする人を少しずつ増やしていき、みんなでよりよいキレイな琵琶湖、高島市、高島の自然をつくっていききたいです。そうすれば自分にも「プラス」になっていくと私は思っているので、みんなで協力していきましょう。

### 高島の文化と大切な思い

僕たちが住む高島市には豊かな自然があり、それを利用した文化が昔から根付いている。先日は校外学習で棚田のある地域にも行ったので、改めて高島の自然や文化について考えた。

まず高島市の文化の例としては、有名なところだと「かばた」がある。かばたとは豊富な湧水を洗いものや飲み水などさまざまな用途で使う井戸のようなもの。とても綺麗な水がそれぞれの家のかばたで自噴している。その水は一年中温度が一定で、夏は冷たく、冬は温かく感じる。かばたのある針江のシステムはかばただけではない。針江の水路にはお掃除屋としてコイが住んでおり、かばたでの洗い物で出たよごれなどを食べて水を綺麗にしてくれている。しかしそれでも、水を汚さないという下流への配慮は昔から暗黙のルールとして守られてきた。このようなルールが、かばたが自然と生活する文化として続いている秘訣なのかなと考えた。

他に、「棚田」がある。僕たちは校外学習で畑という地域に行った。畑というところは山奥の少し高いところにあり、かなり奥まで広がっている棚田と、いくつかの川がまざり目にとまった。そして集落の神社にはとても大きな杉の木があり、この地に長い歴史があることが分かった。棚田のところで地元の講師の方にお話を聞いた。棚田では、水を使う時の工夫がされている。畑に流れている水は冷たく、そのままでは米が作れない。なの

で、田んぼと水路の間に小さなスペースを作り、そこを水が通るときに温められるような工夫がされていた。さらには余分な水を外へ流す仕組みまで作られていて、とてもよく考えられていると驚いた。昔の人の知恵は大変すごいものだなと思った。また、道中に見つけた川は谷筋の水や小川が合流したものだそう。そしてそれらは合流して「鴨川」となり琵琶湖に注ぐということだそう。つまり、棚田のところで水を汚せば、最終的に琵琶湖を汚すことになる。なので、水を使う時は注意を払っているとおっしゃっていた。水がたくさん棚田を育てている分、それを使う側には責任があるんだなと思った。

これら二つの文化で共通して言えることがある。昔からずっと続いている文化であること、自然をただ使うのではなく、配慮・工夫して利用していることだ。長い年月、自然と共に生活を営む上で築き上げられた文化は、自然をしっかりと理解しているからこそ工夫ができたり、自然への配慮が大切にされたりしているのではないだろうか。そして、この「自然への理解」というものは僕達が今後、文化を学んだり、担い手になったりするときにも大切なのではないかと思う。高島の文化はただ「物」がすごいのではなく、それを使う人々の意識が素晴らしいからこそ、価値のより高いものになっているのだと思った。そして自然への理解を深めつつ、高島の文化を残していきたいと考えた。

## よりよい未来を目指して

日本の誇りの一つであるお米ですが、今たぐさんの問題が起きていることを知っていますか。

私の家は代々田んぼを営んでいます。私も小さい頃から手伝いをしていて、自然ともたくさん触れ合ってきました。ゴールデンウィークには田植えをし、秋になると稲刈りをします。田んぼと聞いたら大変というイメージを持っている人も多いと思いますが、田んぼにはカマキリ、エビヤカニ、トンボなどたぐさんの生き物がいて、面白いという一面もあります。

しかし最近では、田んぼを営む人が減ってきています。実際に、私の家の周りでも、昔田んぼだった所が今では家が建っていたり、田んぼを営むことをやめたりする人が増えてきています。こうなったのには、二つの理由があります。

一つ目は、少子高齢化です。今、日本では少子高齢化が大きな問題となっていますが、この問題はお米の問題とも関係しています。なぜなら、若い人が減少し、SNSが発展している今、農業に興味を持つ人が少なくなっているからです。

二つ目は、後継者がいないことです。一つ目の理由も原因ですが、結婚しなくてもよいと考える人が増えてきたことです。そのため、後継する人がいず、農業をやめてしまうということが多くなってきています。このままこの現状が続くと、いずれ農業をする人がいなくなってしまうかもしれません。

こうした問題をなくしていくためにも、今、私たちができることは、農業について少しでも興味をもったり、環境をよりよくするためにゴミ拾いをしたりするなど、できることはたくさんあります。私も最近では、田んぼについて興味をもち、おいしいお米を作る為のポイントなどをたぐさん教えてもらっています。まだ、私自身、将来について、何も決まっていなくても、私は大人になっても、田んぼを手伝いたいと思っています。こうして、一人一人が意識をし、行動を起こすことで、必ず日本はもっともったい国になっていくと思います。まずは、簡単なことからでいいので行動し、よりよい未来を目指して、一緒に頑張りましょう。

### OP合唱楽曲

- ① 棚田へ行こう!
- ② TAKASHIMA
- ③ 生きている琵琶湖
- ④ 琵琶湖周航の歌

### 出演団体

- 演劇集団つばめ
- マキノ少年少女合唱団
- 混声合唱団コーロ・いまづ
- グリーンハーモニー
- ふじコーラス
- 高島少年少女合唱団
- どれみふぁ倶楽部
- 湖西高島「命の第九」を歌う会
- ほほえみコーラス
- 針江よし笛の会



市内小・中・高校生から「高島の自然と私の未来」というテーマで募集した作文の朗読と市内団体による合唱を組み合わせた舞台発表をオープニングで披露しました。

# 開 会 式

## 【主催者挨拶】

全国棚田(千枚田)連絡協議会会長

山形県大蔵村長 **加藤 正美**



皆さんおはようございます。今日は素晴らしい天気恵まれました。きっと皆さんの心がけが良いからだというふうに思っているところであります。第27回全国棚田(千枚田)サミットにご参加をいただきまして誠にありがとうございます。私はただいま紹介ありました全国棚田(千枚田)連絡協議会会長を仰せつかりました山形県大蔵村長の加藤でございます。第27回サミットの開会にあたり一言ご挨拶を申し上げます。

本日、日本最大の淡水湖・古代湖、琵琶湖を有するここ滋賀県高島市を会場に、全国から大勢の皆様方にご参集をいただき、盛大に全国棚田(千枚田)サミットが開催されますことに衷心より感謝を申し上げます。また、大変ご多忙の中を国会議員の先生方、農林水産省の皆様方や滋賀県知事様をはじめとする多くのご来賓の皆様方にご臨席を賜りましたこと、厚く御礼を申し上げます。

初めに私ども山形県大蔵村「四ヶ村の棚田」を会場にしました第26回全国棚田(千枚田)サミットが、新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の適用等により2年続けて開催できなかったことにつきまして、改めてお詫びを申し上げます。サミットの開催は叶いませんでしたが、コロナが終息した折にはぜひおいいただき、120haの壮大な四ヶ村の棚田をご覧いただきたいと思っているところであります。棚田地域の再生・維持そして次世代へと引き継ぐため、今後とも会員皆様方のご指導を賜りますよう、よろしくお願いを申し上げます。

さて、山形県大蔵村での第26回サミットは「『棚田再生』-中山間地農業の新たな出発…灯そう地域の明かり-」と題して、これからの棚田地域農業のあり方と正面から向き合い、参加される皆さんと議論を交わすこととしておりました。棚田の保全には生産条件の不利等から多大なコストを要し、人口減少、高齢化、自然災害の頻発化、鳥獣被害の深刻化等が相まって、耕作放棄地が増大し荒廃の危機に直面しております。名もない人々の手によって過酷な日本の農の歴史とともに粘り強く築き上げられてきた棚田は、無くてはならない貴重な遺産であることは言うまでもありません。「棚田をつなぐ人のかけ橋〜びわ湖を育む清流の輪〜」のテーマに基づき、棚田地域と都市との人と人とをつなぐネットワークにぜひとも中山間地農業棚田地域に多くの明かりが灯ることを期待するものであります。

結びになりますが、本サミットを契機に今後さらに棚田の理解が高まり、全国の棚田地域が活性化され、美しい棚田が未来へ継承されますことをご祈念申し上げますとともに、コロナ禍で開催判断の難しい状況において今日まで開催準備を進めてこられました高島市長様をはじめ、高島市開催実行委員会の皆様方や地元棚田地域の皆様方のご労苦に対し心から敬意と感謝を申し上げましてご挨拶といたします。

今日明日とよろしくお願いを申し上げます。ありがとうございました。

## 【開催地挨拶】

第27回全国棚田(千枚田)サミット実行委員会会長

滋賀県高島市長 **福井 正明**



改めまして皆さんおはようございます。ただいまご紹介いただきました地元高島市長の福井でございます。開催地を代表させていただきます、一言御礼と歓迎のご挨拶をさせていただきます。

まずは3年ぶりとなります第27回の全国棚田(千枚田)サミットを開催させていただきましたところ、本当に全国各地からこのように大変大勢の皆様にご参加をいただきましたことを心から感謝を申し上げますとともに、あわせて歓迎を申し上げる次第でもあります。また本日は公務等本当に何かとお忙しい中にも関わらず、滋賀県知事の三日月大造様、そして棚田振興議員連盟の会長を担っていただいております参議院議員の鶴保庸介様、そして同じく棚田振興議員連盟の会長代行を担っていただいております衆議院議員の江藤拓様、そして国からは農林水産省の農村振興局長の青山豊久様をはじめ、本当に大勢の関係者の皆様にお忙しいところ多数ご出席を賜りまして本当にありがとうございます。

さてここ高島は先ほどのオープニングの際にもいろいろな形でPRをしていただきましたけれども、目の前に雄大な琵琶湖に面してございます。この琵琶湖は今から約440万年前に誕生したと言われてございまして、まさにその琵琶湖とともにここに住まう私どもは悠久の歴史を重ねてきたところでもあります。そのように長年にわたりまして琵琶湖とともに当地域の暮らしがあり、そして様々な文化が創り上げられ、それと同時に農業文化もそのようなまさに水とともに生まれ営まれてきた歴史がございます。そのような中で今日明日こうした棚田のサミットということでございますけれども、当地におきましても畑地域の棚田をはじめ各地に中山間を中心とした多くの棚田を有してございます。しかしながら、ご案内の通り高齢化の問題でありますとか、あるいはその担い手の問題などなど様々な課題があるのも事実でございます。これは何も私ども高島市だけでは無しに、全国の農業あるいは農村におけます多面的な特性をどうしても維持あるいは保全していかなければならないものの、様々な課題に囲まれて

いるのが我が国の農業のありようでもあります。そのような中で、令和元年でありますけれども、国会におきまして棚田地域の振興法が可決成立をいただきました。私ども高島市といたしましては、その棚田地域の振興法の可決成立を契機に、もう一度市内全域の農地を総点検させていただき、そして振興法の要件に該当する場所、例えば傾斜度でありますとか、その地域の耕作状況等々を総点検させていただきまして、改めまして中山間地域の指定区域を増加といいますか約1.5倍余りに増やさせていただいて、市を挙げてそうした中山間地域の農地を中心とした保全につなげているところでもあります。国会議員の各位におかれましては、この令和元年度の可決成立をしていただきました棚田地域振興法の成立に本当にご尽力をいただき、改めて高いところからでございますが感謝を申し上げる次第でございます。本当にありがとうございます。

このようにしてそれぞれの地域が現行法を最大限活用して、さらに国政におきましてはこのように棚田振興議員連盟まで設置をいただき、我が国の棚田を中心とした農地の保全、あるいは次の世代へ引き継ぐことに取り組んでいただいておりますので、それぞれの地域としてはその思いその期待にしっかりと応えなければならないというふうにも私自身考えているところでもあります。そのような中で、今日明日2日間の短い時間ではございますが、このように全国からご参加をいただきまして、この棚田地域の保全、さらには次の世代にしっかりと引き継いでいけるようなその手立て、それぞれの地域の活動状況を報告いただき、そして課題を共有させていただきながら、このサミットを一つの契機としてさらに日本全国の棚田を中心とした農業・農村の多面的な特性を保全につなげていただければ幸いです。

結びになりますけれども、本当に改めまして全国からお越しいただきました皆様にご心から感謝と歓迎を申し上げますとともに、今日明日の2日間お世話になりますけれども、皆様のそれぞれの地域での活動に資すればというふうにご考えているところでもあります。本当に本日はありがとうございます。以上で歓迎のご挨拶とさせていただきます。

## 【開催県知事歓迎挨拶】

滋賀県知事 三日月 大造 様



皆さんおはようございます。ご紹介いただきました滋賀県知事の三日月大造と申します。変わった名前ですけども本名でございます。一生満月になれません。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は第27回の全国棚田(千枚田)サミット、先ほど大蔵村長の加藤会長よりご挨拶ございましたけれども、コロナの影響もあって3年ぶりということでございますが、ここ滋賀県高島市で開催できますことをとても嬉しく思いますと同時に、皆様方のご来県、心から歓迎申し上げます。ぜひ2日間に渡ってテーマにもございます「棚田をつなぐ人のかけ橋～びわ湖を育む清流の輪～」を感じていただければ幸いです。

ここ滋賀県は日本のちょうど真ん中にありまして、周囲を山々に囲まれ真ん中に日本最大の湖、琵琶湖をお預かりしております。世界有数の古代湖であると同時に近畿1,450万人の命の水源をお預かりしてございます。その周りに私たちは暮らしをさせていただいておりますが、農業・工業・商業など様々な産業を営みながら、自然環境・水を大切に保全・涵養していこうと心がけているところでございます。その琵琶湖をお預かりする本県の森・里・湖に育まれる農業と漁業が織りなす琵琶湖システムというものがこの夏、世界的にも重要、未来に継承すべき農林水産業システムということで、世界農業遺産

に認定されました。また、棚田につきましては滋賀県には約2,200ha、当地高島にも畑地区や鶴川地区など多くの棚田がありますけれども、皆さんの地域同様、人口減少、高齢化、さらには獣害などなどで担い手不足や耕作放棄地の増加など多くの課題を抱えているところであります。ぜひこの2日間のサミットで課題を克服し、可能性を伸ばしていくための知恵を皆さんと一緒に集め、これからにつなげていきたいと考えているところであります。また、後ほど紹介させていただきますけれども、この滋賀県の農林水産業・農村を活性化するためにしがのふるさと支え合いプロジェクトというものをつくりまして、県内16地域、19の協定を企業・大学・高校・NPOの皆様方とともに結んで活性化の取り組みを進めているところであります。その取り組みの一端も皆様方にご紹介しながら、ぜひ一緒に盛り上げていきたいと存じます。

どうか皆さん、たくさん近江米を食べて帰ってください。そして鮎寿司苦手な方も含めてチャレンジしてみてください。アユも美味しいです。ビワマスも美味しいです。近江のお茶、近江の地酒、たくさん楽しんでください。近江牛も美味しいです。

まだまだ言いたいことありますけれども、たくさんの方がご挨拶されますのでこれにて歓迎のご挨拶とさせていただきます。おめでとうございます。頑張りましょう。

## 【来賓祝辞】

棚田振興議員連盟会長

参議院議員 **鶴保 庸介** 様



おはようございます。ご紹介を賜りました棚田振興議員連盟の会長を仰せつかっております参議院議員の鶴保庸介と申します。地元は和歌山で、来年那智勝浦町で開かせていただくということも聞いておりますので、ぜひこの機会に寄せていただきたくお邪魔をいたしました。東京から参りましたので3時間半ぐらいかかりましたかね。ただ3時間半かかると申し上げても棚田の地域に行き着くには、大体全国、東京から考えたらそれぐらいかかってしまうかもしれません。多くのところが僻地と言われるようなところに存在し、そしてその棚田の存在を危ぶまれているのは事実であります。先ほど高島市長からもご紹介ありました通り、そんな問題意識の中から棚田振興議員連盟は振興法をつくらせていただき、地域の活性化のために様々な努力をもっとやすく、適応しやすくしようじゃないかということで努力をいただきました。超党派の議連ですから、私以外にもたくさんの委員の先生方がその地域地域で棚田振興のために努力をしておられることをぜひ皆さん頭の中に入れておいていただきたいというふうに思います。

さっきオープニングのときに作文がございましたね。その中で大変私が印象に残ったのは、中学生だったと思いますが、自然と共生していることを人が営みをしてることで大変有意義なことなんだと。その棚田があることもさること

ながらという話を中学生がこんなこと言うんだと。本当に本人が書いたのかなと思うぐらいびっくりしましたが、ただ私も全くその通りだと思います。地域を守るためにその棚田というものを使いながら私たちはその地域の文化や伝統やそして営みを守っていききたい、その思いであります。そしてなおかつその価値を残念ながらその地域に住んでるそのときになかなか感じないものなんですね。そこから出た後に、あるいは外から眺めたときに初めてその価値や重みに気付く。そして多くの場合、気付いたときにはもうちょっと手遅れだったりすることがある。だからこそ、私たちは手に手を取ってこのようなサミットをつくりながら大きな政治的なうねりにしていかなければならないんじゃないかなというふうに思っております。私にも地元和歌山県たくさんの棚田がございます。その地域の方々とお話をしているたびに、粉骨砕身とは言いませんが本当に努力をされている、汗をかいておられる、その姿に本当に感動すら覚えるような状況であります。私はそういった方々と一緒になって棚田地域、そして棚田地域を原点とする地方、我々の文化、日本のふるさとをぜひ守っていききたい、そんな決意であることをぜひお諮りをいただきたいと思います。このサミットが有意義な2日間でありますことを心から祈念を申し上げ、お祝いのご挨拶に代えさせていただきます。おめでとうございました。

## 【来賓祝辞】

自民党棚田支援に関するプロジェクトチーム座長  
棚田振興議員連盟会長代行

衆議院議員 **江藤 拓** 様



皆様おはようございます。ご紹介賜りました江藤拓でございます。この場に立つことができたことを本当に感慨深く、私自身嬉しくとも思っています。私の地元は宮崎県です。宮崎の中でも県北と言われる北の方ですから山ばかり。椎葉村、平家の落人が有名なところ。それから天孫降臨の高千穂。そういうところが私の選挙区です。議員になって選挙区を回っております。例えば高千穂に行く。国道218号線。高千穂神社にたくさんの観光客の方々も見えます。その両側には美しい山々、そしてその手前には綺麗な棚田がばーっと並んでるわけですよ。それが一体となって、やっぱり神話の里高千穂なんですよ。しかしそれが当選回数を重ねるにつれて、少しずつ少しずつ耕作放棄地が出てきてしまう。このままではいかんと思いつつ、いろんなことを会長のもとに努力をしてみたりしました。しかしそれでも止まらない。そんな中、安倍総理が所信表明演説をされました。息をのむほど美しい棚田の風景と。チャンスだと。総理大臣が言うんだからこれはやれるだろうということで取り組んだわけですが、大きな壁がありました。農林水産省の施策として棚田振興策を組むことはそんなに難しくはない。予算の問題ですから。ただ、棚田の価値は農地としての価値だけではなくて、そこに住まう人、伝統文化、景観、様々な国家的な国民の価値としてのその意義を国として認めるのが総理のご意向でしょうと安倍総理に言ったらその通りだと。じゃあ法律をつくろうではありませんかということで、平成28年から私が中心になって始めました。最初は3人ぐらいで始めました。そこで問題になったのは、農林省はやる気ですよ、もちろんやる気満々。だけど文科省に言うと、「いや、農林省の話でしょ。」と。経産

省に言っても、「我々はちょっとお手伝いする程度の話で。」と。環境省に言っても、「いやいや何かお手伝いすることがあったらやらせていただきます。」と。全然乗ってこない。そして3年経って岸田政調会長のときに、「政調会長、総理もあんなに言ってるんですよ。やらんと嘘つきになりますよ。」という話をしたら、政調会長直属のPT（プロジェクトチーム）として、「じゃあつくってぜひやってくれ。」と岸田総理が言ってくださいました。そしてお話ありましたように令和元年に全ての政党が賛成してくださってこの法律ができました。政治家をやっている、立法府の人間ですからこういった仕事ができただけは私にとっても大きな誇りでありまして、そして何と言っても棚田地域で頑張ってる方々から法律ができたことが嬉しいと、国がこの棚田の価値を認めてくれたと、その事実が何よりも嬉しいと、そう言っていただきました。しかし、国がどんなに旗を振ったって棚田地域は守られません。そこに心を寄せてくれる人、そこで活動してくださる方、そういった方がいらっしゃるからこそ棚田が守られます。指定地域も700を超えました。そしてPTで議論して超急傾斜加算もさらに支援として付けるようになりました。今や面積も6,800ha。急傾斜加算も2,000ha。非常にいい感じにはなってきました。しかしお金の問題ではない。日本人が日本人として日本の伝統文化、その原点であるこの棚田を国民の財産として守っていくという意識を、これから皆様方のお力を借りて醸成することが何よりも大切だと思っております。皆様方の日頃のご協力に心から感謝を申し上げます。皆様本当にありがとうございます。

## 【来賓祝辞】

農林水産省農村振興局長 **青山 豊久** 様



ご紹介いただきました、農林水産省農村振興局長の青山でございます。第27回の全国棚田(千枚田)サミットの開催にあたり、一言お祝いのご挨拶をさせていただきます。

初めに本サミットの準備をしていただきました皆様に深く敬意を表しますとともに、全国から棚田保全に関心を持つ多くの方々が集まり、本サミットが盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。本日ご出席の鶴保先生、江藤先生をはじめ、多くの国会議員の先生方にご尽力をいただきまして、令和元年に棚田地域振興法をつくっていただきました。農林水産省では、この法律に基づいて棚田を守り、次世代に引き継いでいっていただくための活動の支援を行ってまいりました。先ほど江藤先生からもご紹介いただきましたけれども、自民党の棚田支援に関する

プロジェクトチームの提言を受けまして、今年度から中山間直接支払を通じました棚田地域の支援について大きな拡充をさせていただきました。それとともに複数地域と一緒に地域を支え合い、これからの農村づくりをつくっていく農村RMO（農村型地域運営組織）の形成支援を始めたところでございます。今後とも、棚田地域の振興について関係省庁間の連携を密にして取り組んでまいりますので、皆様方のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに当たりまして、本サミットの成功とここにご参集の皆様方のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、私のお祝いの挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



# 事例発表

## 「中山間地域の取組と活動紹介」

滋賀県農政水産部農村振興課

副主幹 **丸橋 のぞみ** 氏



### 中山間地域の 取組と活動紹介



2022年10月1日  
滋賀県農村振興課

ただいまご紹介に預かりました滋賀県農村振興課の丸橋と申します。よろしくお願いいたします。それでは中山間地域の取り組みと活動紹介についてお話をさせていただきます。

#### 目次

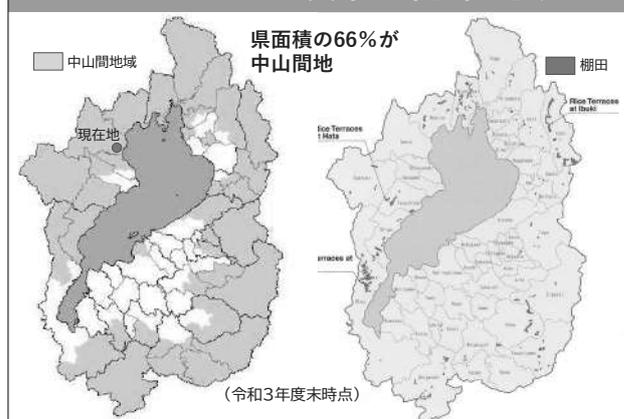
- ①はじめに  
現状と課題
- ②取組の概要  
しがのふるさと支え合いプロジェクト  
農山村の新生活様式サポート事業  
たな友制度
- ③まとめ  
今後の展開

今日お話をさせていただく内容ですが、まず現状と課題をお話させていただき、その後、滋賀県の取り組みの3事業をご紹介させていただきます。そして最後に今後の展開ということでお話をさせていただきます。

それでは初めに滋賀県の中山間地域の概要をお話させていただきます。

この図にあります通り滋賀県は県の中心に琵琶湖があり、その周辺を近江盆地が取り囲んでおり、さらにその外側を山々が取り囲むような地形となっております。このピンクの部分

#### はじめに： 滋賀県の中山間地域



県面積の66%に当たるんですけども、中山間地域に当たるということで、非常に多くの面積を中山間地域が占めているということになります。そのうち棚田の面積が約2,200haで、右の地図の点の部分の部分が棚田になるということになります。

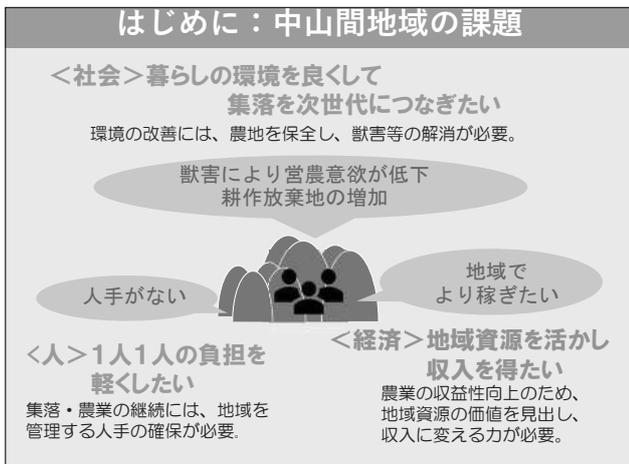
#### はじめに： 中山間地域の現状

##### 農家は減少し高齢化、耕作放棄地は増加

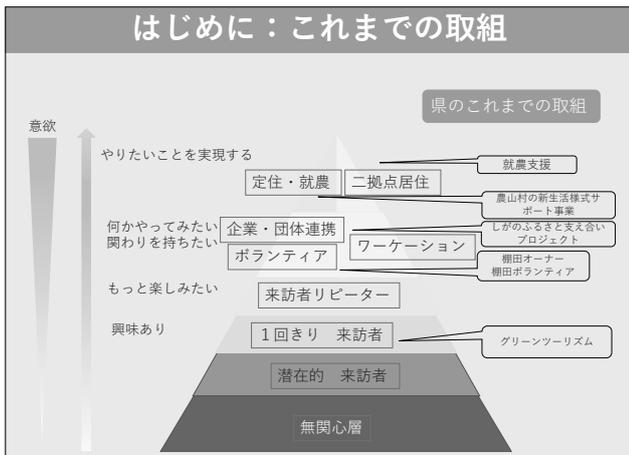
- ・販売農家数は20年間で約半分に減少
- ・農業就業者の半数以上が70歳以上
- ・30%以上の農家が耕作放棄地を有する

滋賀県の中山間地域の現状を数字で見えていきますと、販売農家数はこの20年間に約半分に減少しておりますし、また農業就業者数の半数以上が70歳以上ということになっております。また、その30%以上の農家の方が耕作放棄地を有しておられるということで、こういった高齢化ですとか人口減少により、これまでのように棚田等の農地を地域の皆さんだけでは管理しきれなくなってきたというような現状がございます。

こういった中、中山間地域の課題ということなんですけれども、



まず獣害等の対策を行わない暮らしの環境を良くして集落を次世代につなぐような、そういった取り組みが必要になりますし、一人一人の負担を軽減して地域の活動を継続していけるようにする必要があります。また、地域資源を生かした収入を得るような、そういった方策も検討していく必要があると思います。



滋賀県ではこういった課題の解決を図るために中山間地域の皆さんと都市部の皆さんのつながりを深めて一緒に課題を解決していただくような、そういった取り組みを推進してまいりましたので、それをご紹介させていただきたいと思います。

事業の一つ目は、「しがのふるさと支え合いプロジェクト」ということで、こちらは課題を解決したい集落の方と、それを支援したい企業、大学を県がマッチングいたしまして、その双方の合意が取れたら知事の立会いのもと、協定を締結していただきます。協定が結ばれたら、その後3年間協働活動に取り組んでいただいで、地域の課題解決に取り組んでいただくというような事業になります。

ここで実際活動されている事例を2事例紹介させていただきます。

まず一つ目が、甲賀市土山町の「<sup>あけびはら</sup>山女原棚田ボランティア委員会」さんで、こちらはそこに書いてありますように二つの企業と協働活動をしていただいでおります。具体的な活動



として、棚田地域の草刈りを一緒にしていただいたり、またこちらはオニグルミというクルミが自生している地域でして、このクルミで地域を盛り上げていきたいということで、クルミをもっと植栽してそれをお菓子づくり等の商品化につなげていきたいなということで、そういった産地化ですとか商品開発の取り組みも、こういった企業の皆さんと一緒に取り組んでおられるということになります。非常に活発に活動しておられる地域の方になります。



続きましては、滋賀県栗東市にあります「<sup>はしり</sup>明日の走井を考える会」の皆さんと株式会社パナソニックと、それから今年度さらに

協定を締結いただきます立命館大学経済学部の方々の活動になります。こちらでも地域の草刈り等の作業を協働で行なっていていただいておりますし、またそこにきれいなアジサイがあると思いますが、地域の“あじさいロード”の管理等も協働で行なっていていただいております。またこの地域は田植え体験ですとか都市農村交流のイベントを非常に多数行なっていていただいておりますので、そういったイベントの企画立案ですとか当日の運営までこういった企業、大学の方と一緒にいただいております。また、最近では田んぼアート、この右下のアジサイの田んぼアートなんですけれども、こういったものにも取り組んでいただいで、日々新しい活動に積極的に取り組んでいただいております。

**取組の概要① しがのふるさとと支え合いプロジェクト**

H30～R3 協定締結地区

計16地域で 19協定を締結

この「しがのふるさとと支え合いプロジェクト」は、この4年間に19の協定を結んでいただくことができいております。さらに、今年度も5つの協定を結んでいただくことになっております。

**取組の概要① しがのふるさとと支え合いプロジェクト**

それではここでこのプロジェクトに関する動画がございますのでそちらの方をご覧くださいと思います。

(上映された動画は下記のQRコードよりご覧いただけます。)



動画をご覧くださいましたけれども、このようにこのふるさと支え合いプロジェクトにつきましては中山間集落の方だけでなく、そこに携わっていただく大学や企業の方、双方にとって価値があるような活動かと思っておりますので、今後もこういった活動を積極的に進めてまいりたいと思っております。

**取組の概要② 農山村の新生活様式サポート事業**

**概要**

仕事はどこでもできる。田舎暮らしがしたい

試しに田舎で生活してみたい

農山村に住もう！

都市住民 → 移住志向者 → 移住

移住者事例 受入組織 について 情報発信

お試し移住プラン (農山村体験)

・テレワークの普及  
・コロナ禍による 田園回帰志向

↑ ↑

県(市町と連携)

それでは続きまして二つ目の事業です。農山村の新生活様式サポート事業についてお話をさせていただきます。

こちらはいわゆるお試し移住をしていただくような事業で、先ほどからお話しておりますように、中山間地域では近年、人口減少が進んで都市部から人が移住してきてほしいなという声が多く聞かれております。一方で、都市部ではコロナ禍でテレワークが普及し、どこにいても仕事ができるような方が増えてまいりました。また、都会の密を避けて自然豊かな地方で暮らしてみるのもいいかなということで、田園回帰の風潮も高まっているところです。こういった中でこの事業はテレワークで都会から仕事は持ってきていただいて、その仕事の合間に地域活動と一緒に参加していただきたい、そういう人を増やしていくために都市部の方にお試し移住をする機会を提供し、実際移住していただいて、その農山村暮らしの魅力をSNS等で広く情報発信していただくようなことを行なって、それを移住促進につなげていきたいというふうに思っております。

**取組の概要② 農山村の新生活様式サポート事業**

新しい滋賀の農山村ぐらし!!

お試し移住で農山村体験

農山村でのお試し移住プラン 参加者募集!

滋賀県が推進する農山村での新しい暮らし。農山村のアドベンチャー体験型移住プランに参加してみませんか!

期間: 2023年6月22日(水)～7月31日(日)

対象: 20歳以上74歳未満(75歳以上の方は要相談)

内容: 移住期間: 最大1ヶ月(12ヶ月の滞在プランあり)

費用: 移住期間中の食費・宿泊費は無料(交通費は別途)

お問い合わせ: 074-422-1111

お問い合わせ先: 農山村暮らし推進課

お問い合わせURL: <https://www.pref.shiga.jp/kyosei/kyosei/kyosei/kyosei/>

お問い合わせ用QRコード

この写真が実際去年滋賀県多賀町の方でお試し移住をしていただいたときの写真で、手に人参を持っておられますが、体験移住期間中に人参の収穫体験ですとか、それから下の写真は先輩の移住者の方と交流していただいているところになります。その他木材を製材する体験ですね、林業体験をしていただいて非常にいろんな活動をしていただきました。また、活動の最後にはこういった農山村暮らしの魅力を発信するような YouTube の動画を作ってくださいまして、それも発信することができました。なおこのお試し移住につきましては、今年度も3組の方に約2週間ずつ体験いただく予定で、そのうち応募いただいた1組の学生の方は、昨年度この移住された方が作られた YouTube 動画を見てご応募いただいたということで、ささやかですが来年へのつながりが感じられております。なお今年度お試し移住していただく方は、先ほどの学生の方の他に、ご家族連れの方ですとか、地域で薬草を使ったカフェを開きたいという女性の方ですとか、いろいろな立場の方に来ていただいて、それぞれの視点から農山村の魅力を発信していただきたいと考えております。

取組の概要② 農山村の新生活様式サポート事業

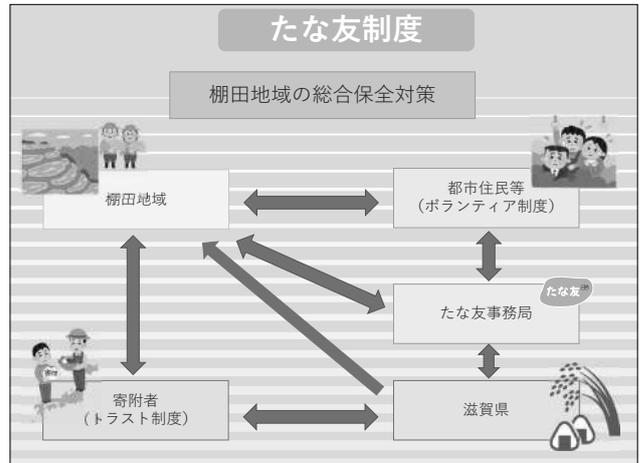
その他の情報発信



- ・ 県内の移住者による座談会を実施
- ・ オンラインツアーでお試し移住モデル地域を紹介
- ・ 「農山村移住ガイド」を作成し、移住促進を図る

その他の情報発信ということで昨年度になりますが、県内の先輩移住者の方による座談会を開催しましてその様子を YouTube で情報発信したんですけれども、その動画の視聴回数が 22,700 回ということで、非常に多くの方にご覧いただくことができました。また今年度は、オンライン移住体験ツアーということで、県内 6 か所でお試し移住ができるんですけれども、それぞれの地域をインスタライブで生配信で紹介していくような、そういったツアーを企画したところ、そちらの方は 5,700 人以上の方にご覧いただけたということで、近年の移住に対する関心の高さが非常にうかがわれるような結果となっております。

またこの事業によって移住の受け入れの窓口が明確になったことで、地域に対する移住の問い合わせが非常に増えまして、滋賀県の東近江市愛東地区というところでは昨年 1 年間で立て続けに 2 人の方が移住してこられたということで、非常に地域の方から喜びの声を聞いています。また今後につきましては農山村移住ガイドというものを作成して、さらに移住促進を図っていきたいと考えております。



次に三つ目の事業になります。「たな友制度」ということで滋賀県では重要な多面的機能を持つ棚田を今後も保全していくために、平成 16 年に「しが棚田ボランティア制度」という制度をつくりました。ただ、当初はこの事業は棚田地域の方がボランティアの方を自分たちで募集して、その参加者の取りまとめ等を全部地域の方が行っていたということで、非常に事務が煩雑だったということがあります。それを改善するために昨年度の 9 月に「たな友事務局」というものを設立いたしました。こちらのたな友事務局が棚田ボランティアの方をたな友として登録いたしまして、この登録していただいたたな友の方に事務局から各棚田で行われる農作業ですとかイベントについて情報の発信をし、たな友事務局に参加申し込みをいただく、そういった参加者の集計等もたな友事務局が一括して行われるような仕組みになりまして、地域の方々の負担を少しでも軽減することができたかなというふうに考えております。またたな友の活動の最後には事務局がたな友の皆さんにアンケートを取りまして、その結果をまた取りまとめ、次の活動に向けた改善点の検討等にも役立てるということで、そういったメリットがございます。

取組の概要③ たな友制度

たな友登録者数：213名 (R4.9.20時点)

みんなで棚田を守ろう!  
たな友募集中

このたな友なんですけれども、現在 213 名の方にご登録いただいております、今後もこの数の拡大を積極的に進めたいと考えております。またこのたな友と棚田ボランティアを

受け入れていただいている地区の数は県内で9地区ということで、こちらをもたまた拡大していきたいと考えております。こちらのたな友につきましては、「たな友交流会」ということで、今年は山女原の方で草刈り機の使い方講習会を行いまして、実際のたな友の皆さんに草刈り機を使っていた後、お昼ご飯をその棚田地域の方と一緒に食べていただいて、そこで楽しくお話しをして交流していただいたということで、今後もこのような棚田地域の方とたな友の方とのつながりを深めるような、そういったイベントを積極的に開催したいと考えております。

**取組の概要③ たな友制度**

**仰木自然文化庭園構想八王子組 (大津市)**  
はっちよし

棚田枚数780枚 (約46ha)

実際にたな友とボランティアの受け入れをしていただいている地域を2事例紹介させていただきたいと思ひます。

まず一つ目の事例が、滋賀県大津市にありまする「仰木自然文化庭園構想八王寺組」の皆さんになります。こちらでは棚田の保全活動ですね、具体的には草刈り等にこついったたな友の方と一緒に活動いただいておりますし、またたな友の方を交えて多数の交流イベント等を開催いただいております。非常に熱心に活動いただいております、こついった活動以外にもこちらの地域では棚田オーナー制度にも取り組んでいただいておりますし、棚田米を使った日本酒の商品化ですとか、それから藁の家づくりということで、非常に面白い個性的なイベントを多数展開していただいているという非常に先進的な地域の皆さんになります。

**取組の概要③ たな友制度**

**池原の自然と環境をまもる会 (長浜市)**

棚田枚数144枚 (約11ha)

二つ目の事例としましては、滋賀県長浜市余呉町という

ところにありまする「池原の自然と環境をまもる会」の皆さんになります。こちらの皆さんも棚田の草刈りを一緒にボランティアの方で行なつていただいているんですけども、それだけではなくこちらの特徴はお米以外に蕎麦を熱心に栽培されておしまして、草刈りをしていただいた後にそば打ち体験ができると、それで打つた美味しいお蕎麦をその後地域の皆さんと交流しながら楽しく食べることができるといふことで、棚田ボランティアの方に非常に人気な取り組みとなつております。

これ以外にも棚田地域で非常に熱心に活動いただいているところもたくさんございまするので、詳細につきましてはお手元配付しました「たな友募集中」と書いたリーフレットがあるかと思ひます。こちらの方に県内9地区をご紹介させていただいておりますので、詳しくはこちらの方を後ほどご覧いただきたいと思ひます。

**まとめ**

**取組の成果**

- ・企業・大学等、多様な主体と連携した協働活動や、「たな友」活動により、農地や環境が保全でき、地域の活気が高まった。
- ・協働活動を通して、SDGsの取組推進に寄与できた。

すべての人に健康と福祉を  
住み続けられるまちづくりを  
パートナーシップで目標を達成しよう

それでは最後まとめをさせていただきますが、こついった取り組みの成果といたしましては、県でこついった多様な活動を推進することで農地や環境が保全できたのはもちろんのこと、地域の方の活気が非常に高まったといふことが言えるのではないかと思ひます。また、こついった協働活動を通してSDGs等の取り組み推進にも寄与できたのではないかといふふうと考えております。

**まとめ**

**具体的な成果：地域**

- ・地域共同活動が活発化し、農地が保全できた。
- ・耕作放棄地で新規作物を栽培し、産地化や商品化・六次産業化を図れた。

具体的な成果といふことで地域の方の側から見ますと、農地の保全以外にも耕作放棄地で新しい作物を栽培して、

それを商品化するという6次産業化にも取り組んでいただける集落も多数出てきております。写真にあります通り棚田米のおにぎりを使っておにぎり弁当を販売していただいたり、オリーブを植えてそのオリーブでお茶を作っていたり、また地域のお米を使って日本酒を造っていただいたりということで、それぞれの地域の特色にあふれた商品の展開をいただいているところになります。

**まとめ**

**具体的な成果：地域**

- ・ 地域資源を活用した取組により、地域が活性化した。

**田んぼアート、都市農村交流活動、空き家の活用**

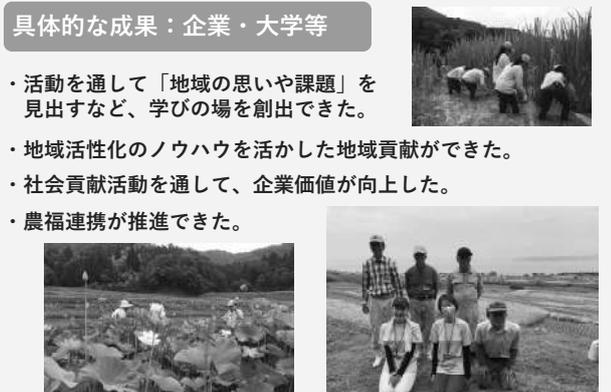


また、地域資源を生かした取り組みということで、こういった本格的な田んぼアートに取り組んでいただいたり、また稲刈り体験等の都市農村交流のイベントに取り組んでいただけるようなそういった集落も多数出てきております。

**まとめ**

**具体的な成果：企業・大学等**

- ・ 活動を通して「地域の思いや課題」を見出すなど、学びの場を創出できた。
- ・ 地域活性化のノウハウを活かした地域貢献ができた。
- ・ 社会貢献活動を通して、企業価値が向上した。
- ・ 農福連携が推進できた。



企業・大学の皆さんから見た成果といたしましては、こういった活動は地域の課題解決を図る学びの場ということで、そういった研究の場を創出することにつながっているかと思えます。また企業の皆様方につきましては社会貢献活動によって企業のイメージが良くなったり、また従業員一人一人の自己研鑽につながったりということで、結果的に企業価値が向上したと思えますというようなお声をいただいているところです。また、社会福祉法人と作業所の皆様方にとりましては、協働活動の場が農福連携につながっているということで、今後もこういった活動の高まりを期待するようなお声をいただいております。

このような活動を今後も続けてまいりまして、この図にあり



ますような中山間地域と関わる「人のすそ野」を拡大していきまして、また豊かな資源を今後も次世代に引き継いでその資源が農業農村の付加価値を高める結果につながるように、またそういったことで最終的に目指す姿として書いてありますが、人々の営みが継続されて多面的機能が未来に引き継がれるこの姿が実現されるように、今後も滋賀県は取り組みを続けてまいりたいと思います。

それでは、今後も棚田と中山間地域の皆さんとそれを支援する皆さんがそれぞれの魅力を存分に発揮していただきまして、生き生きと楽しみながら地域の活性化に取り組んでいけるように、今後も県としてご支援を続けてまいりたいと思いますので、皆様のご協力をよろしくお願いしたいと思います。

それでは以上で、事例発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

**ご清聴ありがとうございました**



# 基調講演

## 演題「棚田地域の保全と継承」

講師 棚田学会会長

### 山路 永司 氏



皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました山路です。現在棚田学会の会長を拝命しております関係で今回お呼びいただきました。まずもって、このコロナが下がり始めたとは言え開け切っていない中、今回の開催に踏み切られた協議会の会長様、それから高島市の市長様はじめ職員の皆様、大変ご苦労様でした。ありがとうございます。そしておめでとうございます。そして今日お集まりの皆様も500名というふうに聞いております。3年ぶり、長門市以来かと思えますけれども、長門市はちょっと天気が悪くて前の日に来れなかった人も大勢いたわけですけれども、本当に今日はいい天気恵まれております。それでサミットのテーマが「棚田をつなぐ人のかけ橋～びわ湖を育む清流の輪～」という素敵なテーマなんですけれども、その中で私はその「棚田地域の保全と継承」というテーマをいただきました。一応あちこちいくつか現場を見せていただいたところを、その中で皆さんのご参考になればというようなお話もさせていただくんですが、さっきも滋賀県さんがすごくいいお話をされたので、非常に困っておりますが持ち時間で話させていただきます。

ことを何にも知らないわけにはいかないもので、6月にこちらを訪問させていただいて見せていただいたときの写真です。昨日、来る時電車で見たら右側にこのちょっと下流側ですけれども、もう稲刈りをやっていてハサ木にかけて天日干しも始めてました。すごくいい光景でした。さすがにその写真は今日ありませんけれどもということで話させていただきます。

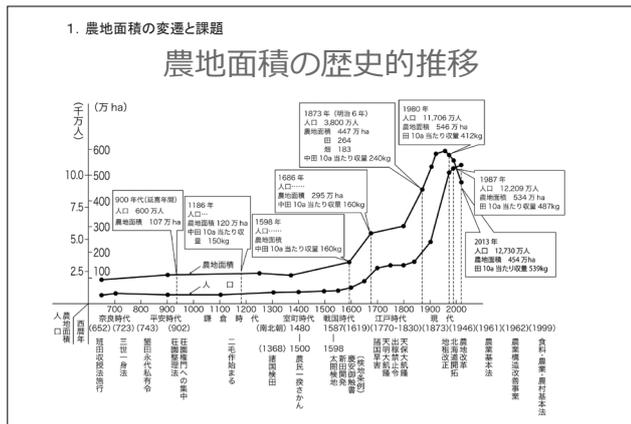


これは高島市の鵜川の棚田です。札が立っているのは棚田オーナー制度をやっているからで、ちょうど特急が通過するところで、向かいの陸地の島も見えて非常に良い光景でした。私、こちらの方面は棚田学会で6年前に見学会があったときに2日間お世話になりました。ですが私ちょっと所用で2日目だけ参加させていただいたので、実は仰木の方は見せていただいたんですけれども高島の方は見せていただいてなくて、そういうことだったので基調講演で喋れと言われて高島市の

それで私農家の子だったんですが、私と棚田の出会いはこちらです。愛媛県西条市の棚田で、うちは平坦地だったんですけれどもここまで大体7、8kmあります。小学校3、4年のときに歩いて行きました。2時間以上かかったと思います。この当時ありました千町小学校というところの子どもたちと交流会をやったら、途中から雨が降ってきて大変だったことも覚えております。生まれが四国ですので定年になったら行きたいなと思っていたのがこの四国の遍路です。2020年の3月に定年退職したんですけれども、当然ですが送別会なしとか最終講義なしとかで未だに定年になった気分がしないんですが、それでも5月から行こうと思ってたら、やっぱりコロナでお寺が納経所を閉鎖したり、宿坊が辞めたり、民宿が営業してなかったりと。それからそもそも私、ちょうど母親があの世に逝った時期だったので帰ったんですけども、兄貴からお前は来るなと言われて、東京の人間は絶対駄目だと言われてたんですが、母親の葬儀に行かなくてはいけないし、もちろん行きました。ですが非常に小さな葬式でありました。ようやく11月11日に出かけたんですけれども、ちょうどその日にたまたまロケに出会って、何の謀もしてないんですが偶然ばったり会って、なんか撮影されてるなと思ったんですね。どうせ

映らないだろうと思って、しかも名前聞かれたわけでも何でもない、何も起きないだろうと思ってたら徳島県のときにふと見たら映ってて1分半も出ていて、しまったと思ったんです。もっと分かってたら一族と知り合いに知らせてテレビの前で待っていてくれと言おうと思ったんですが残念ながらそれはできませんでした。それでさっき言いましたように私は農業と環境というか環境と調和する農業や圃場整備、農村計画等をこれまでやってきました。

ことですので、棚田地域がやっぱり生産は続けてほしいし、それ以上に棚田の美しさ、それから環境価値、それから棚田地域に暮らす人々、そこを存続させたいというふうには思っております。自給率だけのためではありませんがこういう図も出しました。



900年から1250年頃の農地面積・人口グラフです。長いが真っ平らでほとんど平行。つまり農地がないと人はいられない。農地の分だけしか人口はないというのが当たり前のことです。それで江戸時代に人口が増えると農地も増える。それで明治以降、1800年から1940年頃でこの農地の増え方に比べると人口の増え方が急です。これは品種改良、それから肥料、いろんな革命的なことがあったからこうなったわけですが、農地は1961年をピークにどんどん下がって、今もかなり下がっています。

2. 棚田の定義と特徴

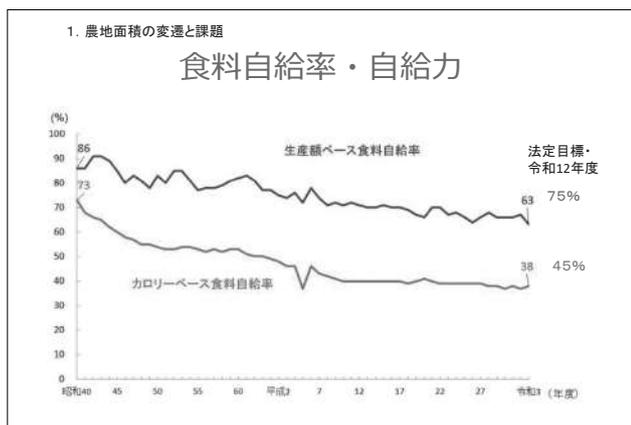
### 棚田という言葉

稲作の始まりは棚田で？  
飛鳥での水田が立地したのは平坦部ではなく  
丘陵・山地に刻まれた小さな谷 (古島敏雄, 1967)

「棚田」という言葉  
建武五年(1338)紀伊国淡田荘の検注帳の中にあり (高木徳郎, 2010)  
もちこめだ ぜんだ ていでん  
籾田、棚田、膳田と呼ばれる。中国では梯田とも (中島峰広, 1999)  
あまり棚田とは呼ばれない。  
田、田んぼ、山田、谷田、谷戸田、・・・ (海老澤表, 2012)

寄り道  
・ 平坦地の水田も棚田である (静岡市立登呂博物館, 2001)

それから「棚田」という言葉。海老澤先生(早稲田大学教授)が棚田と呼ばないと。田とか田んぼ、山田や谷田、谷戸田。実際私たちが「棚田」とは呼んでませんでした。ですが最近では「棚田」という言葉が普通に使われるようになって、中島先生(早稲田大学名誉教授)の本の影響も大きいと思います。2年くらい前に棚田学会の理事会で静岡県に登呂遺跡というのがあります。登呂遺跡は安倍川の下流の真っ平らな田んぼで、ほとんど真っ平らな田んぼです。ところがその静岡市立登呂博物館には「登呂の水田は棚田である」というふうに書いたものがあると竹田理事(新潟大学教授)が言ってたので半年ほど前にわざわざ行ってきました。図書館で見たら本当に書いてました。ものすごく平坦だけど、よく見るとやっぱり10cmぐらいの段差があります。棚です。ただ緩いだけです。ですから、日本全国全ての田んぼは棚田です。そういう理解で言えばですね。ところが一方アメリカの水田は例えばカリフォルニアの水田は棚田ではありません。現況の傾斜をそのまま残して斜めのまま無理やり田んぼとして使っています。ですから棚田ではないです。その分斜めで使ってるので1枚の中に水深の浅いところ深いところが出てきますけれども、それよりも労働生産性あるいは土を動かす切り盛りはしないというようなことです。ただアメリカのテキサス州では切り盛りをして、棚田にしているところもあります。そう言って全部棚田と言ってしまうと身も蓋もないわけですから、やっぱり何か基準が必要となります。



結果として食料自給率はこんな状況で一応法定目標としては、価格ベース75%、カロリーベース45%ということになってるんですけども、なかなか厳しい状況にあるかと思えます。棚田面積の話はこの後15万haなのか20万haなのかというお話をしますが、棚田だけではなくて他を含めて中山間地域というくくりで見ると少し古い統計ですけども、国土面積の7割弱、農家人口の4割が農業総生産額の4割弱という

傾斜20分の1に立地する水田と定義すると34万5,000haぐらいありました。何度も調査されていますが急傾斜は3万ha近くありますとか。いろんな統計があるし、今はその直払(中山間地域等直接支払交付金制度)のことで地図も整備されてきて、かなり正確に分かってきたんですが、およそ20万haぐらい。それから耕作されてる棚田は15万haぐらいではないかというふうに言われています。

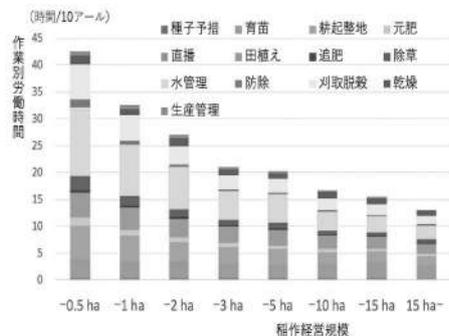
2. 棚田の定義と特徴

## 日本の棚田面積

- ・ 棚田：傾斜1/20以上に立地する水田と定義した。（田中正邦・岡田正行、1978）
- ・ 345,000ha（農林省農地局、1970年）
- ・ 250,820ha（農林省、1993年）
- ・ 急傾斜の棚田（傾斜1/6以上）  
29,459ha（1992年）（中島、1999）
- ・ 221,067ha（中島、2007）
- ・ 以上より、約20万ヘクタールと推定する。
- ・ 耕作されている棚田は15万ヘクタール前後。

2. 棚田の定義と特徴

## 稲作規模別に見た農作業時間



もう言うまでもなく棚田の仕事は大変です。これは農水省の生産費調査で稲作規模別に集計したやつです。ちょっとそこが統計的にやや残念なところで、棚田だどののくらいかというのなかなかデータがないです。ですが、小規模な経営が概して棚田ではないか、あるいは棚田が多く含まれるのではないかということは言えるかと思えます。そうしますと、この灰色の耕起整地とか除草とか水管理とか、これがものすごく違ってきます。一方このオレンジ色はほとんど一緒。これは育苗です。ですから農作業のどんな作業でどのくらいかかるか、特に棚田では何が問題かということがあります。ちょっと不思議なのは、ここの除草ですけれども、茶色でこのくらい他の面積規模よりは多いんですけども、実際棚田で話を聞くとこんなものではないですね。おそらく除草がもう3分の1くらいやらないといけないところとかがいっぱいあります。ですからこういう経営規模の統計だけではなくて、農家さんがどんな土地を耕しているか統計が欲しいところです。ただ統計局はどんどん小さくなって今問題になっているのが次のセンサスで集落のデータをもう取らない、取れなくなってくるということになって、それについてその統計の一貫性ということが非常に大事なので、各学会がお願いをしているところなんですけど、ただ人がいないとできないというのはこれ間違いないので非常に難しいところです。

例えばこれ、末永さんらが福岡で調査して農家2人いろいろな作業日誌をつけてもらって、そうすると農作業時間が

2. 棚田の定義と特徴

## 棚田の特徴

- ・ 棚田での農作業時間  
丸山の棚田 320時間/10a（1955年）、  
全国販売農家 190時間/10a（1955年）  
全国平均の3.2倍、2.1倍（末永ら、2010）
- ・ 棚田の特徴…初出は田中・岡田、1978  
(1) 用水 (2) 排水 (3) 農道 (4) 区画  
(5) 日照・通風 (6) 通作距離
- ・ 棚田の機能 (1) 生産 (2) 保水 (3) 洪水調節  
(4) 土壌侵食防止 (5) 景観
- ・ 棚田の耕作放棄  
かなりの面積で放棄が見られる。

全国平均の A さんは 3.2 倍、B さんは 2.1 倍こんなことがあります。いずれにしても相当です。私も棚田に行って、そもそも20年くらいオーナー制で借りてたんですけども、そこへ行くだけでも帰る時坂道で大変です。実際にはそこを重いものを背負って行ったりということをしていないといけないので、もう労働が大変というのはもう分かりきっていることです。

2. 棚田の定義と特徴

## 旧市町村別の棚田面積

点の数と面積とは必ずしも比例しないことに注意



これは旧市町村別でデータはこんなふうです。

3(1) 棚田観光

ということなんですけど、でも棚田魅力ですね。この右上の「棚田に恋」。農水省が2、3年くらい前に作ったんですかね、すごい素敵なものです。それから関東の人はニュースで時々大山千枚田とか嬢捨の棚田とか出てきます。この前ブラタモリで白米千枚田をやったんで大勢行ったかと思えます。

それから東京からだ大山千枚田。それから姨捨に行く人もいるし、近畿圏で白米まで行く人もいるし、距離は関係なくやっぱりファンになってくれる人は多少遠くても来てくれるというところがあります。旅行会社のもので、ここで魅力的な写真を撮りましょうという写真ツアーです。写真家の人と一緒に撮りましょうというツアー、あるいはJ社が滴る緑と澄み切った空に抱かれた云々とかですね、K社では日本の棚田百選にも選ばれた広大な風景を付近に擁する和風宿とこんな謳い文句があります。これは今のいろんな棚田へのお誘いですが、棚田×農泊とか、それからグリーンツーリズム滋賀、今お話あったかと思えますけれどもこういうのがあります。



これは「田毎の月」ですね。これは物理学的には全くあり得ない話です。月がこんなに全ての田んぼに映るなんてあり得ないですが、体感的にはあり得る。端っこから歩き始めると、この左の田んぼに月が映ってる。もうちょっと歩くと次の田んぼに映ってる。もうちょっと歩くと、とそういう実際に感じるところをそのまま絵にするとこんなふうになったり、あるいは俳句が作られたりしました。



現代の棚田、現代のアートでいうと多分これかなと思います。これはカバコフさん夫妻が作った作品なんですけれども、背景の棚田に小さいプレート形状をつけたオブジェですね。それで手前に文字、詩が書いてあるとても素敵なものです。私も十数年前に見てきて写真撮ったんですが、見返してみるとあまり写りが良くないんでこれはホームページからいただきました。

3(3)棚田米の価値  
棚田米はどうして美味しいのか？

- 棚田学会では、第10回のシンポジウム(2008年8月3日開催)で、上記をテーマとした。
- 生産者3名、消費者1名、お米屋さん1名、研究者1名の報告
- ①清浄な水、②清浄な空気、③優しい風、④夜の涼風(気温の日較差)、⑤痩せた土(栄養過多でない土)、⑥ハゼ掛け(天日干し)、⑦耕作者の汗、⑧耕作者の温かい心、⑨オーナー制で自分で作った、⑩稲で貯蔵、であった。
- 全ての要素が棚田独自のものではないが、①②④は棚田独自のものと言えよう。⑦⑧⑨は、信頼感、安心感と言えよう。

次が棚田米の価値。「棚田米はどうして美味しいのか」という企画を2008年8月3日のシンポジウムで行いました。これは設定がちょっと嘘つきです。どうして棚田米が美味しいのかと聞くのは棚田米が美味しいんだということが前提になったやつですね。答え実は美味しいんですけども、棚田米は本当に美味しいのかということで、棚田米と他のお米とブラインドテストをやらせないといけないんですが、このときは上記をテーマとして行いました。生産者3名、消費者1名、お米屋さん1名、研究者1名の報告があっという間に議論をしまして、10まで出てきました。でもこれ全ての要素が必ず独自ではありません。ですが、①番の「清浄な水」、②番の「清浄な空気」、③番の「優しい風」も、④番のこれ結構大きいですが、「夜の涼風(気温の日較差)」。気温が昼間の気温と夜の気温の較差が大きいほど美味しい。これはもう事実です。棚田地域は多くを内陸に立地して中山間にありますので、昼夜の温度差は非常に大きいです。それから痩せた土、栄養過多でない土といったこの辺が棚田独自のものかと思えます。それから⑦、⑧、⑨番です。「耕作者の汗」、「耕作者の温かい心」、「オーナー制で自分で作った」、これは別の理由でなぜ美味しいかということになります。ですがお米屋さんからは知名度が高くない品種を売ることは難しいんだと、それから棚田米を販売することも難しいということが報告されました。これが10年くらい前です。今日、高島市さんからいただいた中に返礼品のチラシが入っていましたよね。こういうのも出てきました。

3(3)棚田米の価値

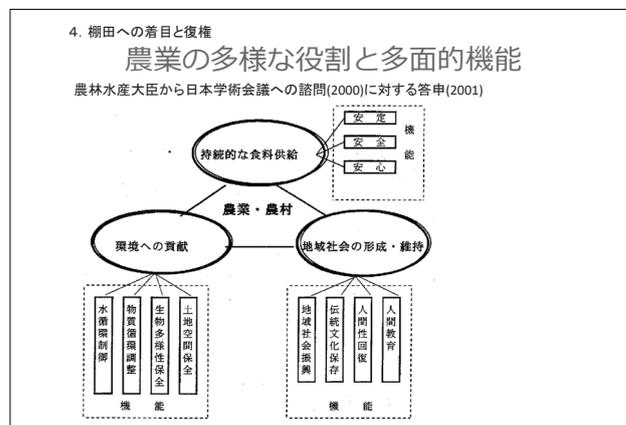
表1 ふるさと納税返礼品における「棚田米」商品 (菊地, 2021)			
返礼内容	件数	割合(%)	
棚田米	537	73.0	
棚田米加工品	125	17.0	
地域の紹介	53	7.2	
棚田地域旅行	17	2.3	
棚田保全体験	7	1.0	
棚田米の食事	5	0.7	
その他	1	0.1	
合計	745	101.3	

注：複数の返礼品があるため、合計は100%を超える

今日も来てますが学会の理事の菊地さんが整理してくれたものなのですが、ふるさと納税返礼品における棚田米というのがどのくらい出てくるかというのを1年少し前に調べたものになります。棚田米というのが537件、加工品125件、こんなふうなものがあります。それから私もコロナ前に、食堂に棚田米ありますといったのぼりを見たことがあります。少しずつ認知度が出てきたのではないかと思います。こうやって返礼品があるんですが、その返礼品の価値がどのくらいなのかです。いくら寄付したらどのくらいもらえるか。これ(高島市のふるさと納税返礼品のチラシ)は1万8,000円で10kgですから1kg当たり1,800円ということになります。菊地さんの集計では、30品種の平均額が1,952円で棚田米の平均は2,012円でした。少し値段がついてます。ですから高島市さんも、もっと高くつけてもいいと思います。これは返礼品なんですけれども、直接買う場合、お金を出して買う場合、いくらだろうかというのがあります。ちょうどこの原稿を書いているときに8月にAmazonを見ました。Amazonのサイトを見ますと棚田米5kgの価格が産地や栽培の特徴で違いますけれども6,000円とか1万円とかというものはあります。だから平均だと3,000円ぐらいでした。今年の8月に見たときです。米で検索すると2,000円。ですから、Amazonで今後買う人が棚田米を選ぶときは5割高いけどそれでも買うんだというふうに理解していいかと思えます。



でも現在では、世界遺産の棚田とかそれから非常に美しい棚田とかが着目されるようになりました。



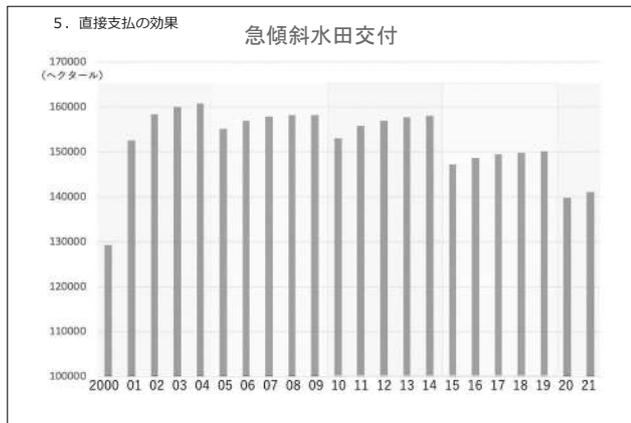
それから多面的機能という形の多面的ないろんな紹介もありますけれども、これは農林水産大臣から日本学術会議に棚田の多様な役割を整理しなさいということで、学術会議の方が答申をした結果です。持続的な食料供給ということで、安定、安全、安心というこれがまずベースにあるわけですけれども、環境への貢献として土地空間保全、水循環、物質循環、生物多様性、さらにその地域社会の形成・維持ということで、地域社会の振興、伝統文化、人間性回復といったこういう機能があるということはおもう明かです。

4. 棚田への着目と復権
- 1990年頃まで、棚田への着目は殆どなかった。
  - 故石塚克彦(劇団ふるさとときやらばん)の「発見」と紹介 1998年10月星野村棚田見学ツアー
  - 棚田オーナー制度 1992年高知県橋原町で始まる
  - 棚田サミット 1995年9月高知県橋原町で開催 by全国棚田(千枚田)連絡協議会
  - 棚田ネットワーク 1995年12月「棚田支援市民ネットワーク」設立、2002年2月改名
  - 棚田百選 1999年7月26日、農林水産省構造改善局認定(当時)、117市町村134ヶ所
  - 棚田学会 1999年8月3日設立
  - 棚田米への好イメージ
  - 重要文化的景観の制定(2004)と選定(2006)
  - 棚田の環境保全機能

それから「棚田」という言葉を使わなかった、着目されなかったということがあつたという話をささしましたが、今いろんな活動、特にオーナー制度が始まり、それからサミットが始まり、ネットワークのいろんな支援、こういったことから使うようになりました。やっぱり言葉は大切です。これは言い古された話ですが、昭和天皇の雑草の話というのがありますよね。昭和天皇は植物が趣味というか研究をして、歩きながらいろいろ植物の状況を見て、そうすると侍従の一人が、「陛下、この雑草は。」と言ったときに叱られたそうです。「君、雑草という植物はあり得ない。ちゃんと名前を持って。皆名前を持ってんだから名前を覚えなさい。」と言われたという話がありますが、やっぱり棚田を棚田として、それがどこそこの棚田というふうにやっぱり固有名詞で言ってもらえるようなことが必要ではないかというふうに思えます。

5. 直接支払の効果
- #### 中山間地域等直接支払制度(直接支払い、直払い)
- 中山間地域(≒棚田を主とする傾斜地)の農業生産の維持を図りながら、多面的機能を確保。
- 令和3(2021)年度  
協定数23,592、65.3万ha(対象75.1万haの79.4%)  
地目別: 田30.5万ha、畑5.0万ha、  
草地22.9万ha、採草放牧地1.3万ha
- 集落マスタープラン  
目指すべき将来像、将来像を実現するための活動方針
  - 農業生産活動等  
耕作放棄の防止、水路・農道等の管理活動  
多面的機能を増進する活動
  - 体制整備

そこで中山間地域直接支払制度が2000年から登場しますが、この制度はEU（ヨーロッパ連合）では1972年くらいから条件不利地域、元々はイギリスが言い始めた。イギリスは結構北の方にあります。非常に緯度が高くて特にスコットランドとかはもう寒くてろくに生産できない。ジャガイモを作るのに南北で大きな差があります。ですからEUで農業市場統一をしたときに、イギリスの農家というか農林省というか同じ値段で取引されたのではイギリスは不利だと。特にフランス、イタリアに対してなんですけれども。じゃあ条件不利地域、イギリスの中の特に条件不利地域は補助金出しましょう。そしてイタリアの方も、うちは南の方で平地はいいけど山の上は気候も寒いいろいろ問題あるからということでイタリアも入る。きちんと気温とか霜の日数とかそういうものを計算して条件不利地域を作って、その条件不利地域に対して生産をすれば一定金額補助しようというのが1972年から徐々に整備されてきました。それで日本の2000年から開始の中山間地域の直接支払は、中山間地域の標高、傾斜、いろんな条件が不利だからぜひこれはサポートして生産を続けていきたいと思いますということで始めて、非常に助かっているものです。マスタープランを作ったり生産活動をしったりするわけですけども、



これが急傾斜水田の交付なんですけど、こちら5年ごとに薄く色を付けており、最初はまだ認知度はあまりなくて段々分かってきて増えるんですが、ここで次の第2期に入るときに要件が変わって、そうするとまた少しずつ増えてということで今、5期の3年目ですね。この数字は先月末に公表された数字で、こういうふうな変遷を辿っています。「つなぐ棚田遺産」に認定されたあるところで、直接支払を知らないというのを聞いたので驚きまして、来年度から申請をようやくやりますと。ちょっとびっくりしたんですけどもこんなところですよ。

それから次にオーナー制です。私も少しオーナー制で遊ばせていただきましたが、オーナー制というのはなんかこっちの方が名前としては普通ですね。リング1本全部の実をあげます。1万8,000円ですとかですね、これがオーナー制ですけども、棚田オーナー制という名前になってます。2001年の棚田学会シンポジウムでオーナー制度の議論をしました。私はまだ棚田学を始めたばかりだったので、すでにオーナー

6. 棚田オーナー制度

### 棚田オーナー制度の分類

- I. 農業体験・交流型: 田植え、草刈り、稲刈りなどの来訪が2~3回。
- II. 農業体験・飯米確保型: 一家の飯米を確保することが主目的。来訪は2~3回。
- III. 作業参加・交流型: 来訪の回数や作業の種類が増え、農業体験から一歩進んだ類型。来訪の回数は、田起こし・田植え・草刈り・稲刈り・脱穀などの作業に4回以上参加。
- IV. 就農・交流型: 来訪頻度が最も高く、年10回以上。作業には農機具を使用。
- V. 保全・支援型: 金銭的支援、オーナー田の管理費や保存会等の組織の運営費にあてる。

(中島峰広、2007)

だったんですけどやっぱりオーナーと呼ばれるのは何か気持ち悪いなということがあって、そのときにアン・マクドナルドさんが講演者でございまして、彼女は今大学教員をやってますけども、以前英会話の講師をやったという話も聞いてたので質問しました。オーナー制度ということについてどう思いますかと。「制度はよく分かりますし、大変結構です。ですが英語としてはおかしいです。棚田トラスト制度とか、棚田パートナーシップ制度というのが英語としては正しい。ですがここは日本ですから、カタカナで書く分には構いません。」というふうにおっしゃられました。

6. 棚田オーナー制度

### 全国棚田(千枚田)検索サイト 棚田NAVI

棚田オーナー制度がある棚田

棚田オーナー制度とは、国産米の生産と消費の両方を担うことにより、地域活性化と食料安全保障の両方を図ることを目的とした制度です。

**【基本】** 田植え・草刈り・稲刈り

田植え(2月15日) | 稲刈り(10月15日)

田植えの時期は、各地域の気候や土壌の状況によって異なります。稲刈りの時期は、稲の成熟具合によって異なります。稲刈りには、専用の機械を使用します。

**【料金】** 田植え・草刈り・稲刈り

田植えの費用、稲刈りの費用にそれぞれ1万円程度です。田植え・草刈り・稲刈りには、専用の機械を使用します。稲刈りには、専用の機械を使用します。

オーナー制度がどのくらいあるのかということで、これは棚田ネットワークさんが整備してる棚田 NAVI で、すごく綺麗だし分かりやすいです。これ今写真と説明が出てますけどもすごく分かりやすいです。私もまだ調べ方が足りないのかもしれないので違ってたらごめんなさい。

かなり前のホームページはこんな感じだったんですね。こんな感じだったので割とすぐ自分はどこにいるからここがいいなと見つけることができましたし、ちょっと前のホームページだと鎌の量、草刈り稲刈りの作業量ともらえるお米の量ですね、たくさん働くとたくさんもらえますよ。ちょっとしか働かないとちょっとしかもらえませんよ。これはもうちょっと後で言いますが、たくさん働くというのは労働時間だけでやっぱり自分の持ち時間がありますよね。どのくらいできるか。お米づくり体験したいけどそんなしょっちゅう行けるわけじゃないという場合はこれを

6. 棚田オーナー制度 かなり前のホームページ

6. 棚田オーナー制度 少し前のホームページ

都道府県	地区	棚田名【詳細ページ】	作業量	収穫量	参加費
秋田県	藤沢町	横巻棚田	★★★★	🍷	9,000円/年金額制
福島県	柳津町	大原山棚田	★★★★	🍷🍷	30,000円/年額
福島県	妻多町	藤原棚田	★★★★	🍷🍷	30,000円/年額

都道府県	地区	棚田名【詳細ページ】	作業量	収穫量	参加費
千葉県	鴨川市	大山千枚田	★★★★★	🍷🍷🍷	30,000円/年額
千葉県	鴨川市	奥山千枚田	★★★★★	🍷🍷🍷	30,000円/年額
千葉県	鴨川市	藤原二重山	★★★★★	🍷🍷🍷	30,000円/年額
千葉県	鴨川市	長上越前山	★★★★★	🍷🍷🍷	30,000円/年額
千葉県	鴨川市	山入棚田	★★★★★	🍷🍷🍷	30,000円/年額
千葉県	鴨川市	江上野木千枚田	★★★★★	🍷🍷🍷	30,000円/年額
千葉県	鴨川市	高小千枚田	★★★★★	🍷🍷🍷	30,000円/年額

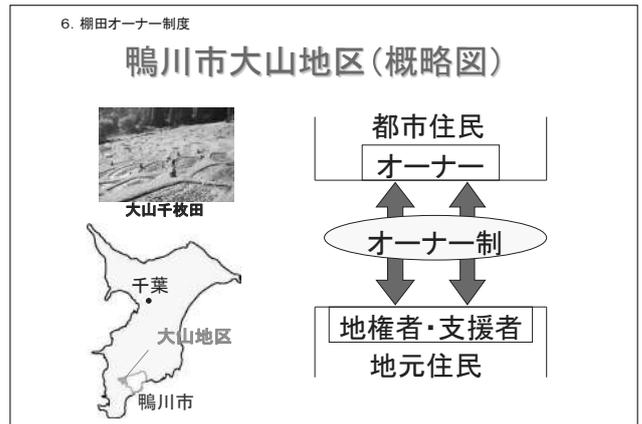
選ばざるを得ないし、もっともっとやりたいという人は鎌5本でなくて10本でもやりたいという人もいます。いろんな人がいますのでそれに対応するような受け皿が必要で実際そうなるわけですが、このホームページだと大体70地区ぐらいが登録されてるようです。

6. 棚田オーナー制度 実施地区数

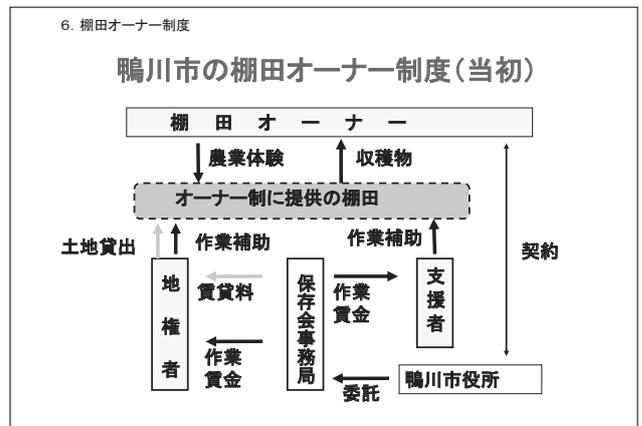
- ・ NPO法人棚田ネットワークによる調査 70地区前後
- ・ 中山間地域等直接支払制度での取組数

一方、直払の方でオーナー制をやってますというのがこのグラフです。最高時は308ありました。ですが、この取り組みは当該市町村の広報あたりには出てると思うんですけども、他の市町村の人はどこでオーナー制をやってるかということは一切分かりません。分かるのでしょうか。私は知りません。ですのでこれ勝手に地方区という呼び方をさせていたでいておまして、さっきのこちら(スライド23ページ)は全国区

です。全国の棚田です。全国区ですから先ほども言いましたように、姨捨には東京から行く人もいます。能登には近畿から行く人もいます。それから栲原には大阪から行く人もいます。地方区のこういう具体的にどこか公開資料を見る限り分からないんですけども、こういうところもぜひいいところもいろいろあるので行きたいなどは思っているところです。



それでオーナー制自体は基本的にはもう地権者・支援者と都市住民との契約になるんですけども、最初鴨川市の棚田オーナー制度、ここに市役所が入ってました。

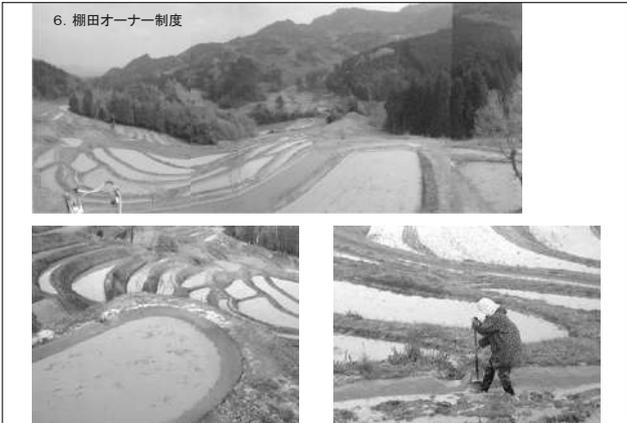


保存会は最初受け皿として認められてなかったんですね。市町村あたりはOKだったんですけども。

それで小泉内閣の特区という形で特別に許される、特別に施行しようという形でいくつかのところでいろんなことが始まって、それでOKだからちゃんと法律を変えて誰それもOKということにしようということで、今は保存会が直接オーナーとやり取りできますので、当時は市役所が間に入ったというところなんです。

こんなところで、この畔塗は地元の人がやって、田植えから稲刈りまで。私がオーナーだった最大の理由は、私のところの学生にぜひ日本の棚田を見せたい、農作業させたいということで借りてたわけですけども、この畔で食べるのが美味しいんですね。ということがありました。

もう一つがバレーボールです。こんなことをやったりもしてました。当時調べましたら、日本の中で田んぼのバレーボールは



結構あったんです。ですが、棚田は多分ここが初めてだろうと。それで現代農業の2007年の8月号にこれが出ました。こんなことをやって。「大学対抗泥んこバレーボール大会」という大変立派な名前の大会が行われたこともあります。それからそろそろというか本題ですが棚田百選です。1999年に134地区が選定されました。滋賀県は先ほどのお話もありましたが畑地区の1地区が百選に選ばれたわけです。ということから20年ほど経ちまして、棚田地域振興法ができていよいよ本格的に改めて棚田を見直そうということで、当初、ちょうど1年ちょっと前ですね、ポスト棚田百選という



7. 棚田百選からつなぐ棚田遺産へ

## 滋賀県の棚田百選(1999)

付表1 日本の棚田百選(その1)

地区		平均	面積	耕作	法面	水源	開発	推薦
府県	市町村	勾配	(ha)	放棄	構造		起源	理由
滋賀	高島町	畑	1/6	15.4	359	C	土 河川	中世 景

耕作放棄 A(10%未満)、B(10-20%)、C(20-30%)、D(30%以上)

推薦理由 国(国土保全)、景(景観)、生(生態系保全)、伝(伝統文化維持保全)

備考 集落名と異なる棚田名

出典  
中島峰広「日本の棚田」(1999)

ことをやりましょうということを実施しました。ポスト棚田百選という名称でやるわけにはいかないので、名称案の公募をやりました。9月1日から30日の1か月です。私も一票、一つ応募しましたが予選敗退です。後ほど聞きましたら473点の応募がありました。ポスト棚田百選(仮称)選定委員会というのが設置されて、こういう人たちの委員が選ばれました。

7. 棚田百選からつなぐ棚田遺産へ

### つなぐ棚田遺産選定委員会委員

 増嶋 このみ 千葉大学大学院 農芸学研究所 環境生態デザイン学 研究室准教授	 池田 乃生(くろだのぶ) 筑波大学 芸術系 教授
 藤川 かおり 株式会社トークナビ代表取締役 アナウンサー	 中島 淳 福岡県健康環境研究所 専門研究員
 中島 峰広 棚田ネットワーク 代表 早稲田大学 名誉教授	 永柳 大地 NPO 法人奥田上山棚田館 理事 みんなの森プロジェクト 代表
 山崎 永司 棚田学会 会長 東京大学 名誉教授	 山本 早苗 筑波大学 社会学部 社会学科 准教授

これ2つの特徴があります。一つは、こちら農水省から推薦されたのは確か2人です。国交省から1人文科省から1人というような形で先ほどのお話にありました共管法ですね。棚田は農水省だけのものではないということで、委員もそれぞれの省庁から選ばれた、推薦された人たちでしたし、それからこの委員会のオブザーバーとして各省庁から課長補佐クラスくらいの人たちに臨席していただきまして委員会をやりました。

それで473点あって、事務局の方でカテゴリー別に分けてこういうのがどうですかみたいなもので、いきなりゼロから始めると委員会が何時間かかるか分かりませんからそれを元に議論をしました。一度は別なものになりそうだったんですけども、やっぱりおかしいのではないかなということで、結果として「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」ですね、関係した者としては非常にいいものができたなというふうに勝手に思っております。この10月28日にはそういう名称を議論した後に、それでは応募してもらいましょうと。応募してもらったときに基準を三つ、「積極的な維持・保全が行われていること」、別の言い方をすると耕作放棄はあまりされてないと。ゼロで

7. 棚田百選からつなぐ棚田遺産へ

## ポスト棚田百選

- ・ ポスト棚田百選(仮称)の実施 R3.8
- ・ 名称案の公募 R3.9.1-30 →473点の応募
- ・ ポスト棚田百選(仮称)選定委員会の設置・開催 R3.10.28

選定の趣旨、選定基準、名称

基準①積極的な維持・保全、

②1/20以上の棚田が1ha以上、

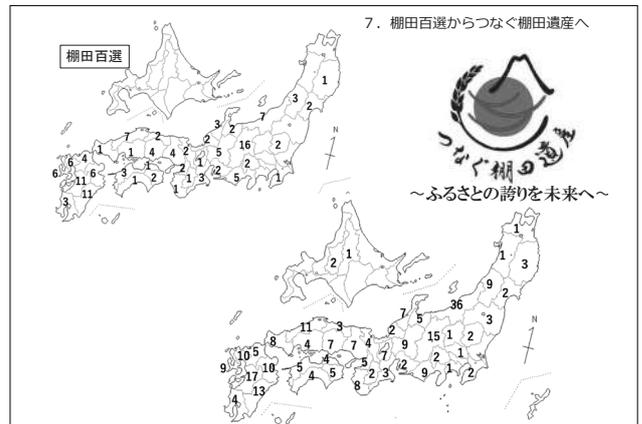
③地域振興にかかる取組に多様な主体が参加

- ・ 公募 R3.11.15-12.15 →多数の応募
- ・ 第2回つなぐ棚田遺産選定委員会 R4.2.14  
提出された推薦書をもとに審査

・ 結果の公表

・ 認定式 R4.3.25

なくてもいいけどあまりされていないこと。それから原則として「勾配が20分の1以上が1ha以上」。それから3番、「地域振興にかかる取組みに多様な主体が参加」。多様な主体が参加ということが持続性になりますし、多様な主体の人に楽しんでいただくということが大事だということでこの基準の3つを作りました。公募が1か月ですが多数の応募があって2月に委員会を行いまして271のところ認定され、3月に認定式が行われたという経緯です。



「百選」と「つなぐ」とを比べてみますと、全体的に数がちょうど倍ぐらいになってるわけですけども、数が増えただけではなくて、こちら「百選」の方は、北海道、福島、茨城等、白いところがありましたが、この「つなぐ」の方は白いところがかなり減りました。ということで特に北海道ですね、旭川空港で降りるときに左側に棚田が見えたんですけども、あそこいいなと思っていたら本当にこれで選ばれたようです。

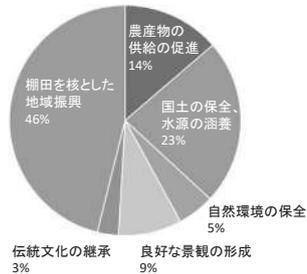
それで最も力を入れた取り組みということで、6つカテゴリーをつけて271地区にどうですかと聞いたところ「棚田を核とした地域振興」、これが一番大勢の棚田地域が選んでいたところでした。

具体的な内容としては6次産業化の推進、オーナー制度、農泊、企業のCSR、芸術文化活動、農家レストラン、こういったものを頑張ってますというようなところですよ。

それから実質的にというか一番重要だと思われる地域振興に参加している主体は、市町村とか集落協定とかが

7. 棚田百選からつなく棚田遺産へ

最も力を入れた取り組み(選定271地区)



7. 棚田百選からつなく棚田遺産へ

滋賀県認定7棚田の平均像

	面積 (ha)	うち1/20以上 (ha)	荒廃農地面積 (ha)	荒廃農地割合 (%)	枚数 (枚)
最大	90.0	90.0	1.5	10.0	3000
最小	4.7	4.3	0.0	0.0	47
平均	32.6	26.4	0.5	3.8	707
全国平均(仮)	24.1	20.5	1.1	6.1	292

7. 棚田百選からつなく棚田遺産へ

取り組みの具体例(選定271地区)

- 農産物の供給の促進
    - 棚田米のブランド化
    - 付加価値を高めた販売
    - 棚田地域の特産物のブランド化
  - 国土の保全、水源の涵養
    - 棚田の法面や水路の維持・管理
    - 棚田の生産基盤の整備
    - 自然災害被災時の棚田の復旧
  - 自然環境の保全
    - 里地里山の保全
    - 生物多様性の確保
    - 希少種や絶滅危惧種保護の取組
    - ビオトープの形成
  - 良好な景観の形成
    - 景観法に基づく景観計画の策定
    - 重要な文化的景観への選定
  - 伝統文化の継承
    - 棚田に由来する地域の伝統行事や祭りの維持・承継
  - 棚田を核とした地域の振興
    - イベント等の開催
    - 農業体験・環境学習等の教育活動
    - 6次産業化の推進
    - 棚田オーナー制度
    - 学術研究の場の提供
    - 農泊
    - 企業のCSR活動
    - 芸術文化活動の推進
    - 農家レストラン
- 注: 各取組の中で多い順に記載(13%以上)

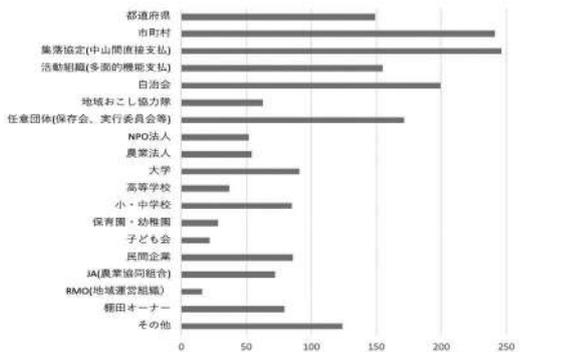
7. 棚田百選からつなく棚田遺産へ

最も力を入れている取り組み

	第1位とした地区数	割合 (%)	全国の割合 (%)	2位以下の地区数
①農産物供給の促進	0	0	14	6
②国土保全、水源涵養	1	14	23	6
③自然環境保全	1	14	5	6
④良好な景観形成	0	0	9	5
⑤伝統文化の継承	0	0	3	3
⑥棚田を核とした地域振興	5	71	46	2
	7	100	100	

7. 棚田百選からつなく棚田遺産へ

地域振興に参加している主体(選定271地区)



ほとんどの地域。それから学校関係、協力隊、さっきご紹介ありましたRMO(地域運営組織)、まだ数は少ないですが今後には増えていくかと思えますし、この会場には認定された地域の方も多くいらっしゃると思いますけれども、自分家のところでもしやってなくて、こんな人たちも取り込みたいなというときはぜひお願いしたいというふうに思っています。

滋賀県は7地区です。少し整理してみました。面積は全国平均より少し多いですが20ha以上も少し多い。ところが荒廃面積は半分以下。荒廃の農地も6割ぐらい。つまり平均よりもやや広くて耕作されているという大変優秀な状況です。引き続きやっていただければと思います。

それから最も力を入れている取り組みで、1位しか選べ

ないのでしょがないのですが、5つの地区が地域振興、それから②・③がありました、全国の割合とちょっと数が7つなのでパーセンテージに多少開きありますが、ただ2位以下であっても選べますのでほとんどの地域はこんなことをやっていますというふうを選んでおります。

8. 保全と継承のために

- (1) 棚田の美しさを維持した基盤整備
- (2) スマート農業の取り組み
- (3) 棚田米の販売チャンネル
- (4) 後継者の育成と「新たな棚田農」
- (5) 棚田の顕彰
- (6) 地域の力
- (7) 国民意識の醸成と政治の力

ここからがタイトルに見合った話、保全と継承のためにどうすればいいんだということで考えさせていただきました。

一つは圃場整備です。これはマキノ町の先ほど言いました6月に来たときに撮らせてもらった写真です。見える線が平行です。ですからこれは平行に整備をし、一方道路が真っ直ぐではないです。これは元々の地形がまっすぐではないんですけど、多くの地域ではこれまっすぐにしてしまう

8(1)棚田の美しさを維持した基盤整備



高島市マキノ町野口 2022年6月20日

ことが結構多いんです。まっすぐしないことがやっぱりここはいいことだと思います。まっすぐしなくても圃場の中の作業性については全然問題ありません。

8(1)棚田の美しさを維持した基盤整備

長辺方向の畦畔が平行であること

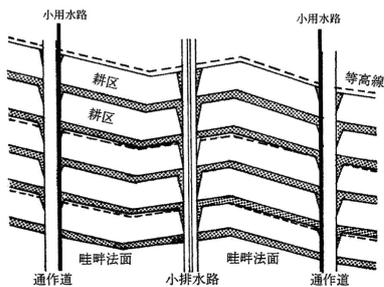


図1 平行畦畔型等高線型区画の模式図(文献(6)より)  
土地改良事業計画設計基準(2000)

それからこれが設計基準の中に出てくるこういうのもありだよという図面です。こういうものは実は見たことなかったもので、さっき滋賀県のスライドの中で出てきてびっくりしました。これ理論的にはOKなんです。とにかく平行でさえあれば。直線に対して30度ぐらいまでだったら農作業にほとんど支障がないよというのが研究であります。これが90度もあればそれはそれで耕し残しがあったり植え残しが出てしまいますけども、このくらいだったら全然問題ない。これは元の地形次第です。元の地形がなるべく切り盛りしないようにするためにこの形を選ぶことはあります。そうした方が法面は少なくなって草刈りが楽になって進入路が短くなって事故が減ってということが期待できます。ですから、もうこれ計画基準でやっていいよということになってます。現場ではなかなかなんとなくこわいなと思ってるのかもしれませんがやっても大丈夫です。先ほど滋賀県の中で出てきましたので安心しました。

平行四辺形はいくつかあります。それからこれバリ島の水田で、ここはトラクターが使えませんが牛に働いてもらいますからやっぱり真っ直ぐ働く方がいいわけです。これ平行なところというか同じ幅です。まっすぐではないので数学で平行というもバツになりますけども気分は平行ですね。こんな田んぼでもいいし、これはやっぱりなかなかなんだというふうに思い

8(1)棚田の美しさを維持した基盤整備

長辺方向の畦畔が平行であること



平行四辺形区画(新潟県)



等幅曲線区画(バリ島)

ます。今お話ししたのが「8. 保全と継承のために」の1番上の棚田の美しさを維持した基盤整備という内容です。

8(2)スマート農業の取り組み

スマート農業の推進実証の加速化

スマート農業実証プロジェクト

◎2019年度から全国205地区で展開。



次が「スマート農業の取り組み」です。2019年度から全国でやっていて、終わったところはもう公開されてますので、公開されてるデータだけを整理しますと、こんな表が作られます。

8(2)スマート農業の取り組み

分類	各種作業等	米	穀物	茶	野菜	果物	畜産
圃場機械作業	自動運転トラクタ	○	○				
	直進アシスト田植機	○					
	自動運転アシストコンバイン	○					
	自動除草機						○
データ取得+圃場作業	意味・収量センサー付きコンバイン	○					
	データに基づく圃場施肥		○		○		
空中作業	ドローンによる農薬散布			○			○
	予測システムによる殺虫剤散布			○			○
地上データ取得+分析	生育データ取得+予測	○					
	病虫害診断+予測						○
空中データ取得+分析(リモートセンシング)	温室環境制御+生育予測						○
	生育診断						○
圃場水管理	土壌診断	○					
	自動給水		○				
作業支援	自動水管理システム	○					○
	無人搬送機						○
経営管理	パワーアシストスーツ						○
	圃場作業計画支援		○				
家畜飼養	経営管理支援		○				○
	自動搾乳機、自動給餌器						○
	発情機発見						○

出典：農林水産省公表資料より作成

水田作だと自動運転トラクターとかアシストコンバインとか法面除草機とか、こんなものが実証実験で行われています。必ずしも全部うまくいってるわけではありませんけれども、そういうふうなものが始まってきているということは、今後、中山間地域も確か十数地区実証済みの公表をされてますけれども、こういうことでうまくいけるとなったらぜひ全国的に広がっていただきたいなというふうに思っております。



それから3番目が「棚田米の販売チャンネル」です。棚田米に対して Amazon を見る人は高く買ってもいいよと言ってるし、それからふるさと納税でお米をもらう人もいます。滋賀県のアンテナショップ「ここ滋賀」が東京駅の近くにありますが、ここでもぜひいろんな情報を発信していただければと思います。

8(4) 耕作者の育成と「新たな棚田農」

### 後継者・耕作者の育成

- ・ 棚田オーナー制を実施しても、労働量は減らない。むしろ増えることも。
- ・ オーナー制はサポーターなしでは無理。
- ・ オーナーがちゃんと働くオーナー制もある。
- ・ 農作業体験から小規模自作へ。
- ・ 習う側から教える側へ。
- ・ 半農半X、半X半農。

4番目、「耕作者の育成と『新たな棚田農』」という表現をしました。普通ここ後継者と書くんですね。後継者と書かないで別にもう地縁血縁関係ないだろうと。農家は家業ではあるけど家業だけではないよということで耕作者というふうにしました。今多くの企業は週休二日制ですけども、週休三日をやろうという会社もあります。週休三日を本当にやってくれば、例えば農業をやりたいと思ったら3日間できます。半農半Xで1日2日だとちょっとなかなか十分ではないけども、3日働けばかなりのことができます。ですから半農半Xでなく半X半農もありかなというふうに思います。それから定年がずいぶん二極化してきます。割と若い段階で定年になる。そこから別の会社に行く人もいますが、定年帰農という言葉があります。現在定年帰農は60歳前後で会社を定年になった人が農家でやって、それまで土日でやってたのがフルタイムでやる。10年20年はできますから。今後スマート農業はこれまでほとんど効率化の話しかしていない、していないことでもないんですけども、安全性を高めるスマート農業をぜひ進めるべきだし、やれると思います。やっぱり高齢者はどうしても体力、判断力が厳しいんですけども、事故なくさえやってくれば

若者が1時間で作業するところを2時間かかっても別に構わない。安全であればとにかくそれが大事だと思います。そういったスマート農業ができれば定年帰農も十分な戦力だし、今でも戦力ですけれども、若い年齢での定年帰農もますます行けるなというふうに思っております。何をしても農家は、私も農家の息子ではありますが、明日から定年帰農しろと言われてもなかなかすぐにはできません。でも一般市民はなかなか機会がありませんので、これ8(4)で「後継者・耕作者の育成」ということでいくつか書かせていただきました。少し詳しくに本文には書いてあるので簡単に言います。

8(4) 耕作者の育成と「新たな棚田農」

### 後継者・耕作者の育成

- ・ 里山農教室：手賀沼トラスト(千葉県)  
有機生態系農業の研究と実践(年間20回程度)  
学ぶ側から教える側へ
- ・ 4段階の支援：久留米木棚田(静岡県)  
サポーター→稲作体験→棚田塾→耕作会員
- ・ 棚田学校：かみえちご山里ファン倶楽部(新潟県)  
稲作技術の伝承、稲作体験の機会の提供
- ・ 稲株主制度：上山棚田(岡山県)  
棚田の稲100株の株主
- ・ 市民農業者＝「市民農園超・新規就農未滿」  
地縁型集団の可能性(小池聡、2016)
- ・ たな友：棚田ボランティア(滋賀県)  
自分だけの棚田ふるさと、棚田大学で学び

これは「千葉県手賀沼トラスト」で、年間20回ほど有機生態系農業の研究と実践をします。この有機生態系農業は茨城大、筑波大で有機農業を研究した第一人者の人が教えていました。最近亡くなったので後継者がやってますけども、実践します。やっぱり学ぶ側から教える側になる、これがすごく大事です。そこまでやれるというのが非常に良いかと思えます。ただ、じゃあ来年から20回毎週でもないけど土曜日来なさい、日曜日来なさいと言われてもなかなか時間が取れないと思います。

静岡の「久留米木棚田」では4段階、入り口は低くして段々高くすると。最初の方のサポーターはお米を買うだけで、次に稲作体験というメニューがある。それから棚田塾をやって、全行程をやることもできます。それで耕作会員。こういう段階を踏む。こういうメニューというカリキュラム、スケジュールが明確になると、ちょっとやってみようかなという気になりやすいと思います。

それから「かみえちご山里ファン倶楽部」は、こういった稲作技術を伝えるだけではなくて伝統文化を守る。棚田学校では農作業だけではなくて地域の祭礼行事への参加をしたり、さらには民族行事の復活や継承、高齢者同士の交流の場づくり、介護予防教室、買い物バス、こういったこともやられてます。

4番目は「英田上山」のことで、これやってる方々が先ほど言いました半農半Xの人たちなんですけども、株主制度です。東京証券取引所の株ではなくてこの上山棚田の稲株ですけども、「株主になる」、「オーナーになる」、どちらもいい響きですね。そういう名称をつけて、名称だけじゃなくてももちろん

活動も、やはり高齢者向けの日用品販売をしたり高齢者の生活支援、名前がいいですね、「みんなの孫プロジェクト」とかですね、それから山野草から活用した薬効野草販売。ということで暮らしやすい地域づくりというものを作ろうとしています。この3つ目4つ目の「かみえちご」と「上山」については、今年度棚田学会で棚田学会賞を授与させていただきました。

それからあと2つ、市民農園は都市ではずいぶんあります。ほとんどが畑です。水田も若干ありますけどもほとんどが畑です。ですが市民農園よりは、新規就農ほどは行かないけど、いろんな知識を身につけたいという人もいます。これも小池さんが新農業者という名付けをしました。これもすぐ棚田に来てくれるわけではないですけども、良い財産がつけられてるのではないかというふうに思います。

それから先ほどもご紹介ありましたが滋賀県の「たな友」、棚田ボランティアですね。ここは説明を割愛させていただきます。

8(5)棚田の顕彰		農村地域資源の認定と顕彰	
世界遺産(自然遺産・文化遺産・複合遺産)(UNESCO)	……	日本遺産(文化庁)	
世界重要農業遺産システム(FAO)	………	日本農業遺産(農水省)	
		重要文化的景観(文化庁)	
		景観法(共管)	— 景観農振(農水省)
わが村は美しく(ドイツ)	………	(農村アメニティコンクール)	
わが村には未来がある		(美の里づくりコンクール)	(農水省)
フランスの美しい村連合	………	「日本で最も美しい村」連合	
世界で最も美しい村連合		(当該自治体の連合)	
世界傾斜農地会議	………	棚田百選 つなぐ棚田遺産、etc.	
		全国棚田(千枚田)協議会	

この表で左側が世界あるいはそれぞれの国で日本が右側です。琵琶湖が世界農業遺産システムに今年認定されましたが、対応するものがあつたりします。

8(5)棚田の顕彰		世界遺産認定の農村(一部)	
		• ピニャレス渓谷(1999)	
		• リュウゼツランの景観とテキーラ工場群(2006)	
		• エーランド島南部の農業景観(2000)	
		• オルチャ渓谷(2004)	
		• ムザブの谷(1982)	
		• アフラージ灌漑施設(2006)	
		• コルディエラの棚田(1995)	
		• イフガオの歌 フットウッド(2008)	
		• 紅河ハニ棚田群の文化的景観(2013)	
		• バリ州の文化的景観:トリ・ヒタ・カラナ哲学に基づくスバック灌漑システム(2012)	

世界遺産では棚田でいうとバリの文化的景観「紅河ハニ」、これは棚田そのものです。それから「コルディエラ」、これも棚田です。イフガオの歌「フットウッド」、これ伝統文化なんです。棚田地域に展開する伝統文化です。日本にも田植え歌があります。棚田で行われる労働歌とそれから宗教的な意味のある歌といろんなものが混じってますが、そういうものを

含めて世界遺産というふうになっています。ですが世界遺産ってなったらおしまいではないんですよね。



ちゃんとやってないと世界危機遺産というものに指定されて、サッカーでいうイエローカードです。「あなたのところ、もうちょっとちゃんとやらないと取り消しますよ。」というイエローカードが出ました。これですあ大変だということで地元の州政府、それから大学、民間の人たちでいろいろ頑張って、こういう荒れたところがないようにとかやって、危機遺産から今は脱しておりますが、世界遺産で取り消されたところはいくつかあります。いま千以上ありますけども1桁台とはいえ、取り消されたところもいくつかありますしイエローカードが出てるところもあります。

8(5)棚田の顕彰

### バリ島の棚田

- 2012年に「バリ島の棚田と水利システム」が世界文化遺産に登録。
- 棚田景観&スバック
- バリ島を訪れる観光客の多くはビーチを目指すが、山中のウブド地区も人気のスポットであり、その周辺部には棚田を眺めるコテージやレストランが多く立地している。



それからもう一つ、バリの棚田です。世界遺産認定書。これは高野山、日本中だと京都に行ってもお寺にこんなのを飾ってます。左側は高野山に飾ってるやつで、この地域を世界遺産に認定しますということで、大きさはA3ぐらいのものが額に入ってるんですけども、バリ島の方にはそれをちょっと大きくして高さ5mぐらいの石造りの立派な看板です。これが棚田の中心部に置いてます。すごいです。バリ島を訪れる観光客は概してビーチに行くんですが山の中にも行きます。



例えばウェブサイトで、これきれいな棚田ですし、プールがあったりコテージがあったりします。先ほどのアン・マクドナルドさんのお話の中で、もう一つはこのバリ島の高いところ1泊5万円だけどほとんど満室だというお話でした。

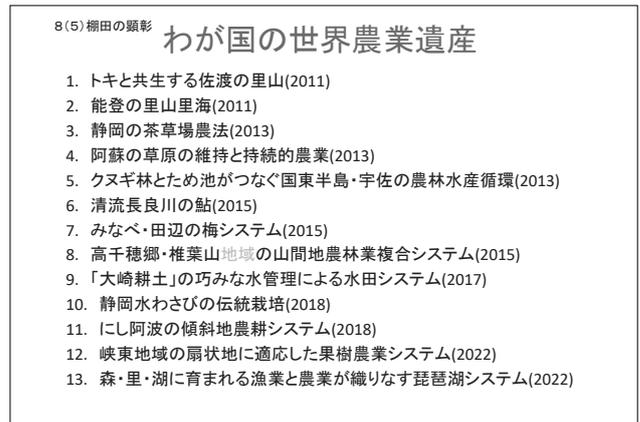


私は5万円を出して泊まる気も財布もなかったのですが、非常に勝手なことに高級ホテルに行きまして、フロントで「お宅に来た人たちがどういふメニューの棚田を楽しんでますか。」と聞いたら、泊まり客ではないんですが、「こんな散歩道があるのでこんな地図があります。」とそれを渡されましたので、その道を歩いていくと、西洋人らしき人たちが散歩したり途中にカフェがあったり画廊があったりしました。それからこの右下のインドネシアの中学生です。彼女たちはもちろん高級ホテルに泊まるわけではありません。それからこのホテルはやっぱり棚田あつてのホテルですから、地元にも多少の貢献はしてます。お祭りがあると必ず多額の寄付をする。多額っていくらですかと聞いたけれど教えてくれませんでした。そういう

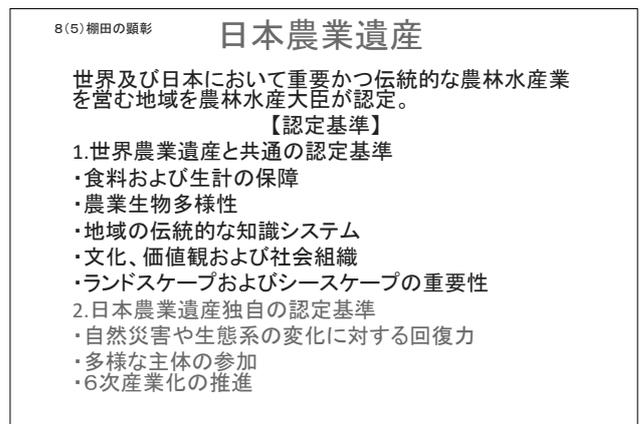
形で持ちつ持たれつという関係にあるようです。



それから先ほどありました GIAHS（世界重要農業遺産システム）。

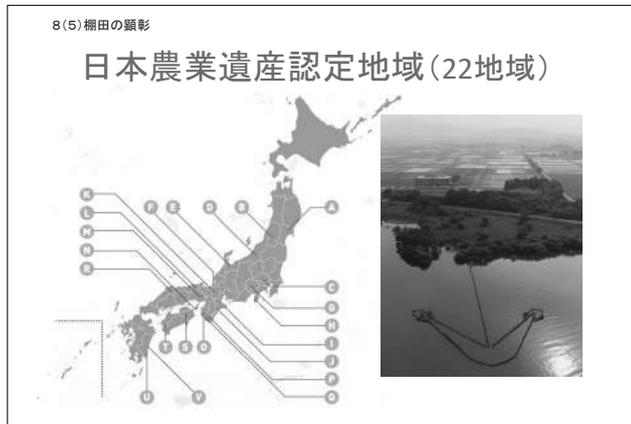


それで、わが国の世界農業遺産でこの琵琶湖、「森・里・湖に育まれる漁業と農業が織りなす琵琶湖システム」、これがちょうど今年認定されました。



それから日本農業遺産の方はこの基準が大事だと思います。世界農業遺産と同じ基準もあるんですけども、2番が日本独自です。自然災害や生態系の変化に対する回復力、レジリエンスと言ったりしますが、これはやっぱり日本で2011年の東日本大震災だけではなくて、その後も大きな災害がいくつもあります。今後どうしてもそれは避けられない

と思います。ですがそれを軽減する回復力は今後どうするか。それから多様な主体の参加、これもつなぐ棚田遺産にも共通します。それから6次産業化の推進。こういったものを評価して日本農業遺産と。



これは琵琶湖ですけれども、琵琶湖の漁法です。こんなものがあります。

8(5) 棚田の顕彰 **わが村は美しく(ドイツ)**

第二次大戦で疲弊した農村地域を元気づけるため  
花いっぱい運動的なもの  
→ 経済的発展、生態系、住民参加、自助努力  
わが村には未来がある、に改名

3年に1回(当初は2年に1回)の表彰  
募集→申請→州で選考(金・銀・銅)  
→各州の金賞を連邦に推薦→選考(金・銀・銅)

採点基準の例(ニーダーザクセン州)  
構想およびその実現(10)、経済的発展およびイニシアティブ(15)、社会的および文化的な生活(20)、建築の形成および発展(20)、緑の形成および発展(20)、景観の中における村落(15)

日本で農村アメニティ・コンクールが一つの時代、その後ふるさとづくりコンクールで20年ほどやって一定の役割を終えて終了しましたが、その元になったのが「わが村は美しく」で、最初は「美しく」です。花で飾ったり壁を飾ったり、そうしたところが選ばれたんですが、そうではなくて経済的発展、生態系、住民参加、自助努力ということで、「わが村には未来がある」というように改名されました。これは毎年ではなくて3年に1回です。それで選ばれたところは日本だと農林水産大臣賞、内閣総理大臣賞、もっと言うと天皇賞とかになるんですけど、ここは金賞・銀賞・銅賞という言い方をします。

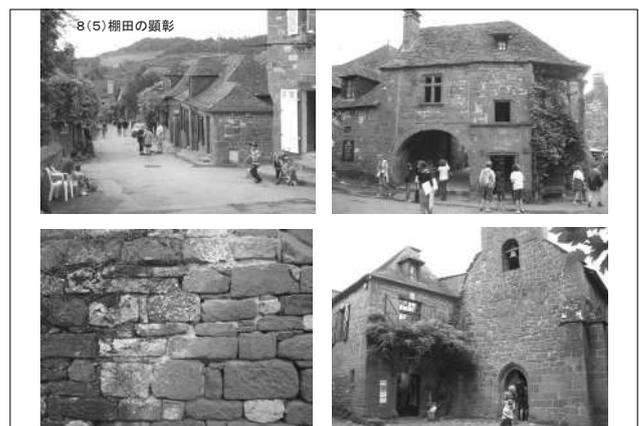
こういう基準でやるんですけれども、クラインメッセルゼンという村が人口千人の小さい村ですが、ドイツで2回金賞を取っています。1971年、2001年。1回金賞取ったらもういいじゃないかと思わずに2000年以降の村長さんはもう1回やろうということになりました。2006年11月に行って、これがその風景なんですが、怒られたわけじゃないけどなんで夏に来てくれないんだと。もう木の葉っぱが落ちて夏に来るともって緑が多くて青が澄んでいいんだというふうなことを言われましたが、



11月でも十分きれいです。ここも選ばれたのは景観だけではないです。例えば住民活動。人口千人のうち男性50人ぐらいは消防団になって、近くの高速度道路で事故があると警察が来る前に第一報を受けたらすぐに交通整理をしたり、負傷者を運んだりということもやっています。きっちり訓練していつ何があっても大丈夫だというふうな組織、それからそういう組織が動くということは住民同士の信頼関係があるわけですから、そういったものが2001年のときには評価されたと伺いました。



それからこれはフランスの最も美しい村々協会というところの本拠地です。コロージュ・ラ・ルージュ村という村です。これがそのシンボルマークなんですけれども、中にこんな古い家がありました。



これコロنجユ・ラ・ルージュという、ルージュは赤で、赤い村なんですけども、ある時期にこの赤色かっこ悪いからって白く塗ったらしいんですね、全部。でも時代が変わって、うちの特徴の赤にやっぱり戻そうよということで、一度塗った白いのを剥がしたんですが、どうしても剥がし残しが出て、ちょっと白いのが所々残ってますが、これはこれでいい味ではないかというふうに思います。

8(5)棚田の顕彰 農村地域資源の認定と顕彰	
世界遺産(自然遺産・文化遺産・複合遺産)(UNESCO) ……	日本遺産(文化庁)
世界重要農業遺産システム(FAO) ……	日本農業遺産(農水省)
	重要文化的景観(文化庁)
	景観法(共管) - 景観農振(農水省)
わが村は美しく(ドイツ) ……	(農村アメニティコンクール)
わが村には未来がある	(美の里づくりコンクール)(農水省)
フランスの美しい村連合 ……	「日本で最も美しい村」連合
世界で最も美しい村連合	(当該自治体の連合)
世界傾斜農地会議 ……	棚田百選 つなぐ棚田遺産、etc.
	全国棚田(千枚田)協議会

それから我々は今、全国棚田(千枚田)協議会のイベントでここにいます。百選、つなぐ棚田遺産、日本それから韓国の農業遺産学会というのはやっぱり棚田の審議をしたところなんですけど、世界傾斜農地会議なんていうのがあるのを知りませんでした。こういうものを愛する人たちもいます。

8(5)棚田の顕彰 世界傾斜農地会議 ITLA International Terraced Landscape Alliance	
第1回：中国、第2回：ペルー	
第3回：2016年10月6日～15日@イタリア ベネツィア(ベニス)会議：開会式、基調報告 分科会：イタリア各地：テーマ別 パドヴァ(パドヴァ)会議：とりまとめ、閉会式	
第4回：2019年3月10日～20日@カナリア諸島 ラスパルマス会議：開会式、基調報告 分科会：8つの島 ラゴメラ会議：とりまとめ、閉会式	
第5回：2022年…延期 ブータン、フィリピン、インドネシア、(日本)	

第1回中国、第2回ペルー、これ全部知らなかったんですが第3回がイタリア、第4回がカナリア諸島で、これも行くし長いです。最初にある町で開会式をやって基調報告をやって分科会もやるんですけども、次に現場に行きます。このときはイタリア各地に3、4日行って戻ってくる。このときはカナリア諸島のいくつかの島に行って戻ってくるというようなことをします。最後また戻って「自分はあそこでこれ見てきて非常に良かった。」とか、「こう改善したらいい。」とかそういう取りまとめ会議をします。第3回にペルーで活躍した馬場さん、以前佐賀副市長をされた馬場さんが教えてくれたので行きましたけど、10日間とても行けないので、イタリアのときは取りまとめだけ、カナリア諸島は分科会だけ行きました。第5回は今年

ブータンでやるはずだったんですが、世界中コロナなんで多分2年ぐらい先になろうかと思います。それからイタリアのときに「日本でやってくれ。」と言われました。ちょっとそれは無理だろうなということでご勘弁を願っているんですが、ただその代わりにこの前小谷村で行なったときに国際分科会というのを作ってこの組織の幹部4人来てもらって、それから別関係で台湾から研究者1人、その皆さんに発表していただいて日本からも発表して、世界の傾斜農地はこうだよというような話をさせていただきました。その前の年は、波佐見町のときは日本人だけでその準備会のようなことをやりました。ということもやったんですが、大々的に日本でこれをやるのはちょっと難しいの



ではないかと思っています。

これはイタリアの最終日に子どもたちの発表とか、あと取りまとめですね、傾斜農地のイメージ、イタリアの多くはブドウ畑ですけども、あと石垣が多いです。それをどう保全するかというイメージ。それからこれはカナリア諸島ですけども、向こう側に非常に細い農地が見えますが、ここは農地が狭いだけではなくて住居も狭くて、住居は以前穴を掘ってほら穴生活をしてたんです。農地はほら穴では育ちませんからそうはいかないけれど、人はもうしょうがないのでほら穴に住んでとそういうところが残っているところなんです。



この中央の下はさっきご紹介しましたが、つなぐ棚田遺産のロゴ。それから左下の日本で最も美しい村、これは認定地区だけが使えるロゴです。美しい村日本に今40か50あります

市町村の境目に行くとちゃんとこれが出てます。つなぐ棚田遺産もぜひ各棚田に置いていただきたいなというふうに思います。

8(5) 棚田の顕彰

オフィシャルサポーターの活用

それからオフィシャルサポーター。もうちょっと増えたらいいですけど、こういったところが支援していただいていると。

8(6) 地域の力

多くの参加主体：つなぐ棚田遺産の一要件

地域の力ですね。これはモンテ棚田米です。山形県Jリーグチームのモンテディオ山形がモンテの選手が棚田に行くこと地元の町の子どもたち・若者が「じゃあ俺も行こう。」と言うので行くし、それからホームゲームではモンテ棚田米を勝ったチームに贈呈するとかですね。

それからこちらは静岡の石部ですけども、「一社一村静岡運動」ということもやっていて、そこだと大学が農作業支援をする。酒造り会社が棚田米で焼酎を造る。会社が農業体験をする。これは飲料会社ですけども、売り上げの一部を棚田に寄付をするとかこんなことをやっています。多くの参加者、いろんな人が関わることでより発展するということになろうかと思っています。

それからこれは滋賀県のこと、もうお話しあったと思いますが滋賀県の棚田トラスト制度で県と棚田地域で個人や企業が寄付をして運営を報告するということです。

それから最後ですが、国民意識の醸成と政治の力です。これは載せたやつが小さいのですが、要はいろんな使えるものがあります。先ほど直接支払をご存知ないと聞いてびっくりしましたがこれ以外にもいろいろあると思います。こういったものをぜひ行政の方でお示しいただいて、分かりやすく、

8(6) 地域の力

滋賀県の取り組み

- ・しが棚田ボランティア制度
- ・しが棚田トラスト制度

・普及啓発活動

8(7) 国民意識の醸成と政治の力

表5 棚田保全や地域活性化に有効で現在も活用できる国の施策

日本型直接支払 (中山間地域等直接支払交付金)
中山間地域等における農業生産条件の不利益を補正するため、条件不利地域での農業生産活動を継続して行う農業者等に交付金を交付
日本型直接支払 (多面的機能支払交付金)
農業者等で構成される活動組織が農地を農地として維持していくために行う地域活動や、地域住民を含む活動組織が行う地域資源の質的向上を図る活動に交付金を交付
農山漁村振興交付金 (農山漁村定住促進対策 (農山漁村活性化整備対策))
交付金の事業メニューとして、里地や棚田等において、多面的機能の良好な発揮や豊かな自然環境の保全・再生のために必要な施設等の整備を実施
農山漁村振興交付金 (農山漁村普及啓発対策、農山漁村交流対策、農山漁村定住促進対策)
地域の創意工夫による活動の計画づくりから農業者等を含む地域住民の就業の場の確保、農山漁村における所得の向上や雇用の増大に結びつける取組を総合的に支援し、農山漁村の活性化を推進
農山漁村地域整備交付金 (農村集落基盤再編・整備事業 (中山間地域総合整備事業))
都道府県又は市町村が策定する農村振興基本計画等に即し、農地や農業用排水施設などの農業生産基盤の整備と、農業集落道や農業集落排水施設などの農村生活環境の整備を総合的に実施
中山間地農業ルネッサンス事業
傾斜地等の条件不利性とともに鳥獣被害の増加、人口減少・高齢化・担い手不足など、厳しい状況に置かれている中山間地において、清らかな水、冷涼な気候、棚田の歴史等の中山間地の特色を活かした多様な取組に対し、各種支援事業における優先枠の設定や制度の拡充等により支援
棚田地域振興緊急対策交付金
令和元年9月の棚田地域振興法の施行を受け、棚田地域の振興に取り組む地域に対し、必要な調査や景観修復などの棚田保全、振興の取組に必要な環境整備を緊急的に支援 (令和元年度補正予算)

8(7) 国民意識の醸成と政治の力

棚田保全・地域活性化にかかる国の施策

- ・日本型直接支払 (中山間地域等直接支払交付金)
- ・日本型直接支払 (多面的機能支払交付金)
- ・農山漁村振興交付金 (農山漁村活性化整備対策)
- ・農山漁村振興交付金 (農泊推進対策、農農連携対策、地域活性化対策 (活動計画策定事業))
- ・農山漁村地域整備交付金
- ・中山間地農業ルネッサンス事業
- ・棚田地域振興緊急対策交付金
- ・棚田カードプロジェクト～棚田に恋～

↓

- ・棚田地域振興法 (令和元年6月)
- ・指定棚田地域 財政的支援、人的支援



できればワンストップでお示しいただいて有効活用されればよいのではないかと思います。実はここまでは用意してきたんですが、やっぱりこれ喋りたいなと。みどりの食料システム戦略です。

8(8)補論 2050年までに目指す姿

- ・ 農林水産業のCO2ゼロエミッション化の実現
- ・ 化学農業の使用量をリスク換算で50%低減
- ・ 化学肥料の使用量を30%低減
- ・ 耕地面積に占める有機農業の取組面積を25%、100万haに拡大
- ・ 2030年までに持続可能性に配慮した輸入原材料調達の実現
- ・ エリートツリー等を林業用苗木の9割以上に拡大
- ・ ニホンウナギ、クロマグロ等の養殖において人工種苗比率100%を実現等

(農林水産省)

2050年までに、CO<sub>2</sub>ゼロエミッションとか化学肥料30%低減という大構想を農林水産省が打ち出しました。そんなことを言われても難しいんじゃないのという人もいますが、でも日本の歴史を振り返ると、排ガス規制したって絶対できないって言われていたのができました。目標を決めて、それに対する努力をすれば何とかできる。目標を決めなければ何もできないですから、目標を示すことはいいことだと思います。

8(8)補論 有機JASの例



消費者アンケート

- 90% - 有機農業という言葉を知っている。
- 54% - 有機JAS認証ラベルのことは、知らない。
- 5% - 有機JAS認証制度について、よく知っている。

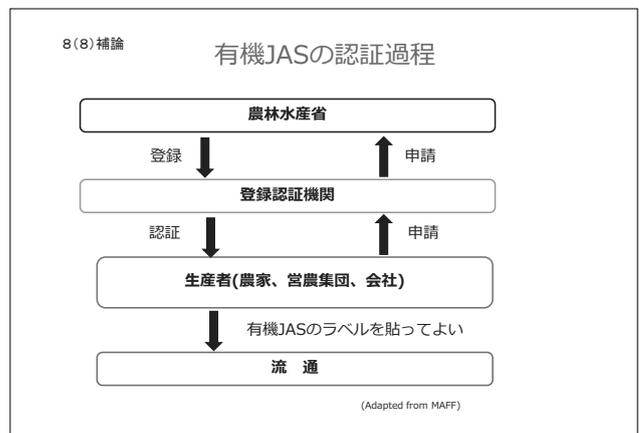
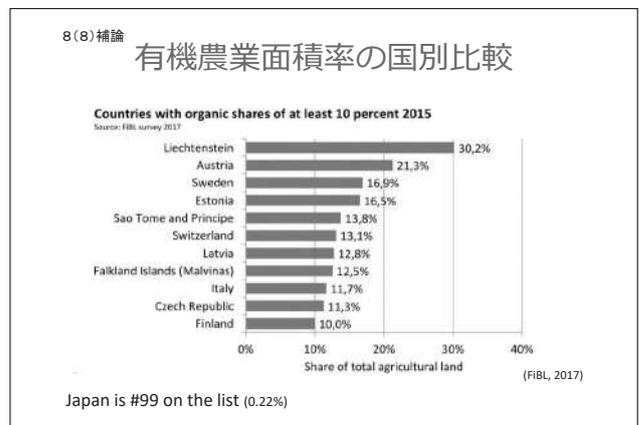
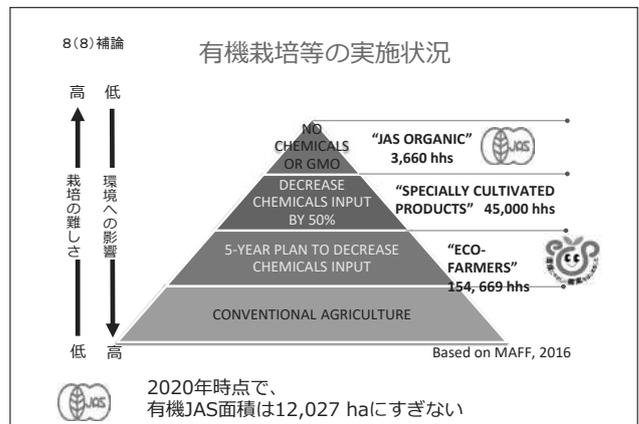
(日本有機農業研究会, 2011)

ただ、現実には今のところ有機JAS、例えば有機農業研究会とかあまり新しいものはないんですけども、有機農業という言葉は知ってるけども、JAS認証は半分ぐらいしか知らない。よく知ってるのはほんのちょっとだけですね。

有機栽培でJAS有機をやっているのはほんの一握り。特別栽培やエコファーマーがあったりしますが、JASオーガニックは2016年で3,600ha。

諸外国と比べると、実は日本は出てきません。日本はほんのちょっとで99番目なのでこのグラフには出てきません。

いろんな壁があるんですけど、一つは認証の手続きです。ちょっと面倒くさいとか、お金がかかる。小規模な0.5から1haくらいの農家が認証を受けるためには、その準備期間も必要です。諸経費がこのくらいかかる。これだけ払って



8(8)補論 有機JAS認証にかかる経費

申請費 + 検査費 + 検査員の旅費・宿泊費

例1: 農家 (0.5~1.0ha)  
 総経費 = 37,000円\* + 18,000円\*\* + 20,000円\*\*\* = 75,000円 + 消費税

例2: 会社 (1.0~1.5ha)  
 総経費 = 70,000円\* + 23,000円\*\* + 20,000円\*\*\* = 113,000円 + 消費税

\* 0.5ha増えるごとに5000円+税増加  
 \*\* 検査時間を3時間として  
 \*\*\* 宿泊費は上限10,000円+税 & 旅費は実費

Based on information from Organic Certification Center HP

見合うのかということ。それからその有機 JAS がちゃんと有機 JAS の値段として、棚田米が棚田米のプレミアムがちゃんと付くかどうか、あるいは棚田の有機米がちゃんと消費者に認められるかどうか。それはいろんな働きかけなり制度も必要

8(8)補論 **低炭素農法**

- 中干し期間の延長
- 間断灌溉 AWDI、SRI
- 浅水灌溉、潤土灌溉

→地球環境に優しい農業は農家さんに届くか  
 間断灌溉は強い稲が育つ  
 易(東大・溝口研)の研究(2022)  
 鳥山の実験(進行中)



かなとは思っています。

もう一つは低炭素農法です。今農水省の方で中干し期間を延長したらどうなるかとかということの試験を始めておりますが、元々その間断灌溉、AWDIとか浅水灌溉、潤土灌溉とか、これやるとメタンは確実に減ります。私10年ぐらいずっとメタンと亜酸化窒素を測ってきました。それで地球環境にやさしい農業なんですけども、なかなか農家さんに届かない。だけど間断灌溉は強い稲が育つというのはもう分かってるんです。例えばこれはベトナムの田んぼですけども、左と右とでこのくらい倒れ方が違いますよということで、東大の溝口研の易くんという留学生が去年研究して今年発表しました。それから仲間の上越の農業試験所の鳥山さんが今実験してます。再来週あたりに最終測定に

行くことになるんですけども。こういったことも棚田+低炭素というものもぜひできればやっていただきたいというふうに思っています。

9. おわりに **棚田地域への期待**

- これまでの活動の強化、新たな活動の取り入れ  
 棚田米:生産の維持:生物多様性:  
 景観計画:伝統文化・伝統行事:地域振興
- 参加主体の拡大と強化
- 地域資源を活用する・組む、作る、育てる
- 何度も来てくれる人は大切:二地域居住、移住促進、
- 関心を持ってくれる人も大切:関係人口、交流人口、関心人口、アンテナショップ、サポーター、つなぐ棚田遺産フェア
- 自分たちが楽しみながら、多様な主体で村づくり地域づくりをすること
- 10年後、20年後、いまよりもさらに元気な棚田地域であっていただきたい。

これが本当に最後です。これまでも皆さんいらしてる方いろんな活動されてきたわけですけども、これまでの活動を強化する、新たな活動を取り入れるということ、参加主体の拡大と強化、地域資源を作る、育てる、何度も来てくれる人はもちろん大事ですが、関心を持ってくれる人も大事です。自分たちが楽しみながら、多様な主体で村づくり地域づくりをすること。10年後、20年後、今よりもさらに元気な棚田地域であっていただきたいし、再来年まだサミット決まっておりますが、10年後までスケジュールが決まるといいですよ。

拙いお話ですがありがとうございました。少しでも参考になれば幸いです。今日の午後、明日の午前こちらで勉強させていただきます。またいろんなところで勉強させていただければと思います。

ご清聴どうもありがとうございました。

# 第 1 分科会

テーマ

## 「棚田を見守る“人”が芽生える～関係人口の創出と外部との連携～」

■ コーディネーター



龍谷大学社会学部准教授  
坂本 清彦氏

■ 話題提供者 (パネリスト)



畑棚田保存会  
林 典男氏



鶴川棚田保存会  
山田 善嗣氏



せぎなお会  
橋本 章一氏



パソナ農援隊  
藤川 真理子氏

### 【坂本氏】

第1分科会のコーディネーターを務めます坂本清彦と申します。龍谷大学の社会学部で教員を務めております。本日、皆さんにいろいろとこの場で持って帰っていただけるように話の進行を務めさせていただきます。よろしく願いいたします。

この分科会は「棚田を見守る“人”が芽生える～関係人口の創出と外部との連携～」というテーマでパネルディスカッションという形でお話を進めてまいります。ただ、こちらに皆さんせっかく来ていただいてということですので、ただ単にお話を聞いてということではなくて、皆さんからもこのパネリストの方々いろんなアイデアなり質問なりをぶつけていただき、皆さんにも参加していただきたい、そういう形でお話ができるように進めていきます。

「棚田を見守る“人”が芽生える」というこのテーマなんですが、それとはもう少し踏み込んで、このパネルディスカッションでパネリストの4人とそれから皆さんに、こういうことをぜひ達成していただきたいという目標を私たちの方で設定しています。

一つは、今日は畑集落と鶴川集落の関係の方がお越しになってるんですけども、それぞれの集落の関係者の方々が取り組まれている内容について、皆さんによく理解していただく。ただ、細かいところまで全て理解していただくのは無理としても、どういったことが起きているのかという概要だけでも理解いただきたいと、それが一つ目。

もう一つは、全国各地から集まって来られている参加者の皆さんに、こちらのパネリストの皆さんからお題を出していただきますので、それについて皆さんのご自身の活動とか、これまでのご経験を踏まえて何かそのアドバイスや助言をいただいて、それをこの会場の中で共有できる範囲で共有したいと、それが二つ目の目標になります。

そういった形なので聞くだけのパネルディスカッション、分科会ではないということで、ぜひ皆さんにもよくお話を聞いて、私はこういうことが言えるなということを考えて進めていただければと思います。ということで、ここからはパネリストの紹介をさせていただきます。

手前から林典男さん、それから2番目に山田善嗣さん、橋本章一さん、それから藤川真理子さんです。4人のパネリストの方がどちらの集落でどんなことをされてるかあるいはどの組織でどんなことをされているかといったことも含めてご自身で紹介をしていただきます。

それともう1人、ちょっと簡単に紹介させていただきたい人がいます。私のゼミの学生で、今日この会のお手伝いをいただくアシスタントの福井さんです。よろしく願いいたします。以上です。

では早速ですが、林さんからご紹介をいただくということでよろしく願いいたします。



### 【林氏】

皆さんこんにちは。畑の棚田保存会から参りました林典男と申します。畑地区は日本の棚田百選の一つに滋賀県下で唯一認定をされているところですのでございまして、これから、認定された後、私どもが取り組んだ活動についてご報告をさせていただきますと思います。

これは畑地域の位置を図に示しております。琵琶湖の西岸に位置しており、琵琶湖から10キロぐらい西の方に入りました山麓の本当に小さな集落です。

地域の概要ですが、戸数は28戸、人口59人、高齢化率が61%となっております。水田面積は15.4haということで、この面積に関しましては認定当時の面積ですので、今は



若干減っているというような状況です。特産品としては棚田米であるとか畑漬け、棚田みそ等々ございますし、映画「男たちの大和」のロケ地になりました。最近ではNHKの連続テレビ小説「スカーレット」のロケ地にもなりました。

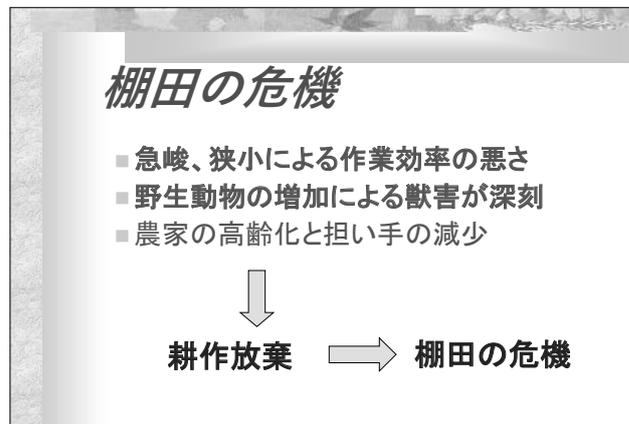
### 地区の人口及び農地

年度	世帯数	人口	農家戸数	耕地面積 <sup>a</sup>
S40	45	213	38	3063
S60	41	182	33	2657
H26	43	90	26	1540
H30	30	74	26	1540
R4	28	59	20	1063

地区の人口と農村の状況を表にまとめました。昭和40年度は世帯数が45世帯、人口が213人、農家戸数が38戸、耕地面積が3,063aと、30haくらいございました。それが平成26年は世帯数が43世帯、人口が90人、農家戸数が26戸、耕地面積が15.4haというようなことで、特に人口と耕地面積の減少が著しいということが分かっていただけないのかなと。令和4年度も一番下に書いておりますように、人口が59人というような状況です。今現在、耕地面積として耕作されていますのは10haというような状況です。

棚田の状況ですが、先ほども申し上げましたが、耕地面積は15.4ha。枚数にいたしますと359枚の農地がございます。1枚の面積は3aから4aということで全部の農地が未整備です。

その棚田が非常に今危機的な状況にあるということです。なぜかと申しますと、急峻・狭小による本当に作業効率が悪いということが一つですし、野生生物、特にイノシシ、シカ、サル増加による獣害が本当に深刻だということと、もう一つは農家の高齢化と担い手の減少、というよりほとんどなくなってきているというふうに言った方がいいかもしれません。そういう状況で耕作放棄地が増え、棚田が危機的な状況だという



ようなことになるわけですが、そういった「畑の棚田」が、日本の棚田百選の一つに滋賀県下で唯一認定をされました。認定されたことによって、確かに保全意識の高揚はできたわけですが、それと同時に認定されたことの重さというものをつくづく感じるようになりました。

## 棚田保全の取り組み

- 棚田オーナー制度
- 棚田ボランティアの受け入れ
- 大学や民間企業などとの連携



こういった状況の中で、地域の中だけで棚田を保全していくというのは非常に困難だなどということを感じまして、地域外からの力もお借りしながら棚田を保全していこうということで3つの取り組みを進めました。

一つ目は棚田オーナー制度。二つ目は棚田ボランティアの受け入れ。三つ目は大学や民間企業などとの連携です。

一つ目の棚田オーナー制度ですが、内容につきましては

## 棚田オーナー制度

- 内容: 100㎡ 33,000円  
棚田米40kg、特産品を土産
- 平成12年度 おまかせ
- 平成13年度 おまかせ、こだわり
- 平成16年度 おまかせ、こだわり、酒オーナー
- 平成19年度 おまかせ、こだわり、超こだわり、酒オーナー
- 平成22年度 おまかせ、こだわり、超こだわり、酒オーナー

宿泊型の採用(農家民泊)

100m<sup>2</sup>が33,000円ということで、お土産として米40キロと地域の特産品をお渡ししています。平成12年からスタートしまして、おまかせコース、それからおまかせとこだわり、おまかせ・こだわりと酒オーナー、おまかせ・こだわり・超こだわり・酒オーナーというような形でコースを設け、平成22年度からは宿泊型も採用をしてみました。

年度	おまかせ	こだわり	超こだわり	さけ	計	員数
H12年度	21	—	—	—	21	56
H13年度	20	18	—	—	38	151
H15年度	16	21	—	—	37	106
H16年度	19	15	—	13	47	152
H17年度	24	16	—	13	53	204
H18年度	30	24	2	16	72	243
H19年度	27	29	5	19	80	254
H20年度	37	28	4	13	82	305
H21年度	38	30	4	11	83	182
H22年度	51	28	4	12	95	293
H23年度	36	30	4	12	82	313
H24年度	46	20	3	10	79	286
H25年度	23	20	3	10	56	210
H26年度	23	20	3	10	56	220
H27年度	20	19	—	10	49	173
H30年度	25	5	—	6	36	120
R1年度	18	4	—	5	27	98

これを見ていただきますと、平成12年度から令和元年度までこんな形で推移をしているというところまで、大体平成17、8年ぐらいから23、4年ぐらいが一番オーナーさんが多かった時期です。おまかせ・こだわり・超こだわりと何かよく分からないというふうにお思いでしょうか、また後で時間があればお話をさせていただきたいなと思います。

## 棚田ボランティアの受け入れ

### 棚田ボランティアの概要

- 平成18年度より棚田ボランティアを募集し、休耕田の草刈りや、棚田周辺の林道の草刈りを実施
- 参加したボランティアには、特典として地域通貨“1畑(ハータ)”を進呈



- ・1枚で、棚田米1kgと交換
- ・1枚で、うかわファームにて500円分の野菜等と交換

二つ目の取り組みは棚田ボランティアの受け入れということで、これは元々滋賀県の事業でして、この事業に平成18年度から私どもも参画をしており、休耕田の草刈りや棚田周辺の林道の草刈り等を実施しています。参加いただいた方には、1畑という地域通貨をお渡しし、地域でお米1キロとか、あるいは直売所で500円相当のものと交換ができます。

次は大学との連携ということで、京都精華大学と私どもは仲良くしておりまして、オーナーとして学生も参加をしていただきましたし、「畑楽」という機関紙を作ってくれたり、「畑ウォーカー」という散策マップなんかも作成してくれました。

## 京都精華大学との連携

### 活動の概要

- オーナーとしての参加+他のオーナーへの補助
- 棚田たより「畑楽」の作成
- 「畑ウォーカー」の作成



## アストラゼネカ(株)との連携

### 活動の概要

- 平成18年度より、アストラゼネカ(株)の地域貢献活動と連携し、休耕田の草刈り等を実施



その他の連携…うかわファームマート、福井弥平商店など

次は企業との連携ということで、アストラゼネカという外資系の医薬品の会社が、平成18年度から地域貢献活動として来てくれておりました。こちらは3年ぐらいで地域貢献活動を終了したというようなことで、その後はないんですけども、一番下に書いてありますように、うかわファームマートさんや福井弥平商店さん、これは地元の造り酒屋さんなんですが、そこの連携は今も続いています。

## 成果と課題

- 成果
  - ・ 保全意識の高揚と棚田保全
  - ・ 活動を継続させることにより、棚田保全に対する意識をボランティア、大学、企業などにも醸成
- 課題
  - ・ 体験型の為、保全・地元中心
  - ・ 後継者対策

いろいろと活動してきたわけですが成果と課題ということで、成果としては保全意識の高揚と棚田保全、若干は減ってるんですけども、今は10ha余りの保全ができていますし、活動を継続させることによって、棚田保全に対する意識をボランティアや大学、企業あるいは住民の方々にも醸成が

できたのではないかなというふうに思っています。ただ、課題もございます。体験型というようなことで、やっぱり保全是地元中心だなというような形が私たちにとって大きな課題だなというふうに思ってますし、これから高齢化対策をどうしていくかということが一番大きな課題であろうというふうに思っています。

高齢化に伴う後継者不足というのが我々としてはこれからどうしていったらいいだろうということに悩んでいますので、皆さんからいい意見をいただきたいなと思います。ありがとうございました。

### 【坂本氏】

林さんどうもありがとうございました。畑のお話は皆さんよくご存知かと思います。

今日の午前中の部でもお名前が挙がってましたし、百選に選ばれているところで非常に著名な地域であります。ということでいろんな取り組みをされているんですけども、まだやはり大きな課題が残っているということをご理解いただけたと思います。では山田さんから次のご紹介をお願いいたします。

### 【山田氏】

皆さんこんにちは。鶴川柵田保存会の山田と申します。詳しくは後ほど申しますが、私どもの鶴川の柵田の保全活動というのは平成 28 年から取り組んでおります。今年で 6 年目ということで、まだまだ日が浅く、これからいろんな取り組みをしていく予定をしておりますが、この 6 年間取り組んできていろんな課題も見えてきましたし、また新たに得るものもたくさんあります。その点についてこれからお話をさせていただきたいというふうに思います。



私どもの鶴川の柵田はご覧の通り後ろに比良山系が連なっていて、前を琵琶湖という土地柄から細く南北に延びる石積み而建てたんです。

この石積みは室町時代に積まれたのではないかなというふうに聞いております。

柵田から見る琵琶湖、それから柵田の中央を JR の湖西線が走っており、柵田のオーナーの皆さんは、この景色に



魅了されるというか癒されるということで、毎年多くの皆さんに参加をいただいております。鶴川地域の柵田の面積は約 40 ha で、世帯数が 43 世帯という小さな地域です。ただ、地域には農産物なんかを販売する「うかわファームマーケット」という直売所があります。それと都市住民を対象とした貸農園「鶴川ふれあい農園」という市の交流施設がこの地域にはあります。この鶴川地域の柵田についても先ほど畑の方から話がありました全国の柵田百選に当時、平成 17 年だったと思うんですけども、エントリーをしています。しかし選定をされなかったと。その理由は耕作放棄地が非常に多いということで、選定から外れたというようなお話をいただいております。当時で農地全体の 3 分の 1 が既に耕作放棄地であったというような状況で、その後我々が予想する以上の速さで耕作放棄地が進んでいるというのが現実でございます。地元でも会議とかで集まった際、年々荒れてくる田んぼを見るのがつらいなど、何とかしないといけないというような話は出るんですけども、いい対策というものが地域の中でなかなか出てこないというようなことで、そういう思いはあるんですけども、さて何をしたらいいのかなという状況が続いておりました。このまま何もせずに年月を過ごしてはいけないということで、先ほど申しました鶴川には都市住民との交流施設があり、そういった中で都市住民の方に地域に来ていただいて地域の活性化につなげていこうということで、すでに畑でもやっておられた柵田オーナー制度をその時点で始めました。

柵田オーナー制度の導入というのは柵田保全だけではないんです。「うかわファームマーケット」という小さい直売所があるんですけども、非常に賑わいを見せていて非常に売上も開設当初は上がってました。平成 15 年にオープンしたんですけども、以後、近くに大きな道の駅ができたりして段々と売上が落ちてきたという中でこれも何とかなくてはならない。当時出荷されている会員の方が 150 名ほどおられ、鶴川が 43 戸のうち大体半分の方が会員となって出荷をされていたのを伺っています。そんな中で売上が段々と減ってきたため、柵田オーナーの導入によって「うかわファームマーケット」の集客を図っていこうということで、これも柵田オーナーを初めた理由の一つでございます。



鶉川の場合は耕作放棄地を復田してオーナーの田んぼとして利用をしています。当時5年ぐらい荒れていた農地なんですけども、5年荒らすと私の背丈以上の草が生えたりとかそういうようなものでしたが、復田をしてオーナーとして利用をして、当時大きく新聞に取り上げられたことで多くの皆さんに参加をいただいています。ただ、平成29年にそれに取り組んだんですけども、なかなか荒れている田んぼを復元して田んぼにするというのは復元的にも能力的にも非常に難しいということで、他に棚田を利用する方法がないか模索した結果、日当たりのいいところなので翌年の平成30年に果樹を植えました。当時協議会をつくりまして、温州みかんと梅、ブルーベリー、柚の4種類を設定して5年間で1haの栽培を目指そうというような取り組みを現在進めておりまして、まだ4年目ということで、これを商品として出荷なり、また果樹のオーナー制度としてするにはもう少し年数がかかるんですけども、これからそういうような形で果樹を売り込んでいこうということを考えております。



それと今日の朝からの講演の中で、県の方から説明があった通り、「しがのふるさと支え合いプロジェクト」で私どもの場合は企業と地元と協働でいろんな取り組み、地域活性化の取り組みをしようということで手を挙げました。それで令和2年に今日お越しいただいております「パソナ農援隊」と協定を結びまして地域の活性化に向けて何回か会議を重ね、いろいろ検討していた中で、棚田米のおにぎりをドライブスルー

方式で販売をしようということで、まだ試験的な段階ですが、今後はきちっとした販売の仕組みをつくりながら、定期的な販売ができるような形で取り組んでいこうと思っております。やっぱり地元だけではどういった取り組みをするか、また地域の魅力というものがなかなか分からないという中で、パソナさん、それから立命館大学の学生さんと一緒になりながら地域の魅力の発掘から始めて、棚田米のおにぎりを販売するというような形に至ったところです。

私どもも畑地区と同じで、高齢化によって年々田畑が荒れて、なかなか後継者がいないというような課題があります。この6年間でいろいろ感じたことなり課題なりたくさんありますが、やはり地元だけでは守っていけないということです。いろんな方々の支援を受けながら、また外部からのいろんなアイデアをいただきながら、一緒に棚田を守って行って地域の活性化につなげたいと思いますし、この棚田保存会が中心となって活動しておりますので、やはり継続するというのが一番今後の展望が開けてくるのかなと思います。そして、棚田オーナーの参加の皆さんの中でそういう耕作放棄された田んぼを貸してほしいと、そういう動きも出てきてますので、引き続き想いも熱い中、今後も棚田保全に取り組んでいきたい、またいろんな課題についてご意見をいただけたらありがたいと思います。ありがとうございました。

#### 【坂本氏】

山田さんありがとうございました。鶉川も非常に名の通った棚田がある地域で、しかも「うかわファームマート」という非常に活発に活動されている直売所もあるんですが、そういった資源がありながらも、やはり高齢化等のなかなか難しいところがあると。ただ、いろいろと外部との連携ということで取り組まれているところにヒントのようなものがあるのかもしれないです。またその辺の話は皆さんとお話ができればと思っております。ありがとうございました。それでは橋本さん、お願いいたします。

#### 【橋本氏】

畑の棚田の方から寄せてもらいました橋本と申します。よろしく願いいたします。

私は元々農家でも何でもなくて、京都から16、7年前に高島市の方に移住してきた者です。元々サラリーマンで、今、畑とか田んぼ、その他もろもろの地域の保全活動をやっているのは初めての経験ということで、分からないことがたくさんありました。そもそもなぜ田んぼを始めたかという、4年ほど前に農家民宿を始めようとして、地域の空き家を借りれることになって民宿を始めたんですけど、その民宿のすぐ前が田んぼで、そこがちょうどその年に元々作業をやられてた方が農業をやめるということで放棄になってしまうと。そのときにちょうど大家さんの方から「田んぼをやってみたらどうですか。」と声を伺いまして、初めは1区画3枚ほどの田んぼをやること

になったんですが、窓から見えてる別の田んぼも今年でやめるといこと、やるんだしたらこっちも一緒にやってくれといこと、よく分からないうちに農業を始めることになってしまいました。当然というわけではないですけど、何からしていいか分からない。稲作なんて初めてです。準備も分からない。そういうところで手探り状態始めたわけ。そうは言っても何もできないでは困るので、周りが農家さんばかりです。周りで聞いて、「用水路の整備をしないといかんよ、あとは田んぼを掻いて、それから水を張って。」と、代掻きとか初めてのことばかりで何をしたいのかなんて分からない状態。一人では当然できないので、今、事務局をやっている私の妻が、友人とか知人に SNS とかで人を集めて、初年度、ちょうど3年前なんですけど、40人ぐらいの人が集まりました。当然全員素人でよく分からない部分もあったんですけど、中には先ほどのオーナー制度がちょうどコロナで地区としては開催できなかった経過があり、その経験者の方も中におられて大いに助かったという感じ。何とか初年度スタートを切って、田植えして、草刈りして、収穫のときまで行ったといこと、今後もまあなんとかなるだろうと思いましたが、2年目の去年はやり方が悪かったのかどうか分からないんですけど、イモチとかそういうようなもので収穫量が激減しました。そういうことがあって、今年3年目、その辺の内容も市の農業の支援とかそういうので聞いて、何とか収穫の運びに至ったところ。それで、先ほど言った40人ほどの会員さんですけど、「せぎなお会」という会をつくりまして、その会で田植えとか稲刈りとか、もちろん最後収穫祭とかそういうものの企画をやって、収穫日はとにかく楽しんで農業をしていきたいという感じ。もちろん田んぼだけではなくて周辺の整備、草刈りがほとんどなんですけど、そういうのも含めて「せぎなお会」として少しでも地域の保管理をして休耕田をなくし、少しでも草原を手を入れた場所にしていきたいと思って活動しています。悩み事と言うとあかんです。やっぱり人手と資金、それと一番問題なのが指導できる人が会員さんにおられるか、もしくは育成するか、どうしていったらいいか分からない部分をフォローしてくれる人が集まるか、もしくは育成できるかという状況で、そういう感じの中で難しいことをやっている次第です。皆さんも高齢化によって放棄田が増えてきていることについて、どういった取り組みでどういうふうに対応しているかというのを聞いてみたいと思って。私のお話は以上です。ありがとうございます。

**【坂本氏】**

橋本さんどうもありがとうございました。一つだけ教えていただきたいことがありまして、また後で質問するんですけど、「せぎなお会」のその名前の由来だけ簡単に教えてください。

**【橋本氏】**

「せぎなお会」というのは、私が借りた家の大家さんの屋号なんです。私はあんまり経験なかったんですけど、昔は名前を言うのに地域の方はほとんどが同じ名字なので、下の名前を呼んでおられたというのを聞いたんですけど、そういう中でこの人かというのが分かるように屋号があったようなことをちらっと聞いて、それでその借りた家の屋号が「せぎなお」という屋号だったので、「せぎなお会」にしました。

**【坂本氏】**

ありがとうございます。それでは続けてまいりたいと思います。藤川さん、よろしくお願いたします。

**【藤川氏】**

この度はパネリストとしてお招きいただきどうもありがとうございます。本日登壇の機会をいただきましたこと、大変光栄に存じます。私、株式会社パソナ農援隊の藤川と申します。それでは簡単ではございますが、高島鵜川での活動内容についてご説明させていただきます。

**会社概要**



会社名	株式会社パソナ農援隊
本社所在地	東京都千代田区大手町二丁目6番2号
設立	2011年 12月1日
資本金	5,000万円
事業内容	農産物の生産・加工・販売事業 農業関連研修事業 農業関連コンサルティング・各種サポート
東京本社	〒100-8228 東京都千代田区大手町二丁目6番2号 TEL : 03-6734-1260 Mail : agri@pasona-nouentai.jp
拠点	大阪府・兵庫県（淡路島）・フランス/リ市
HP	<a href="http://www.pasona-nouentai.co.jp/">http://www.pasona-nouentai.co.jp/</a>

2

弊社は「社会の問題点を解決する」を企業理念とし、農業分野の雇用創造と一次産業の振興により地域の活性化と持続可能な豊かな社会を実現することをビジョンに、農産物の生産・加工・販売事業、農業関連、中山間地域関連の研修の企画・運営等を行っております。

**しがのふるさと支え合いプロジェクト  
協定締結 令和2年9月20日**



鶴川棚田保存会様とは、令和2年度に「しがのふるさと支え合いプロジェクト」にて協働活動の協定を締結いたしました。

協定の目的は、棚田保全活動や棚田地域振興業の検討等を協働で行うことにより、棚田保全や地域活性化を図ることです。協定における連携・協力事項は、棚田保全の活動、鶴川棚田地域の振興策の検討、そしてうかわファームマートの活性化です。

**棚田オーナー制度の稲刈り&田植えイベントのサポート**



活動内容としては、鶴川棚田保存会様が取り組まれている棚田オーナー制度の稲刈りイベントや田植えイベントのサポートに地元の皆さんと一緒に取り組んでいます。

作業後には棚田の素晴らしい景色を眺めながら棚田米のおにぎりをいただき、あまりの美味しさに感動したことは個人的に忘れられない思い出となっております。

**意見交換会**

～鶴川地区の今後の活性化策について～



また、定期的に意見交換会も実施しております。高齢化や耕作放棄地が進む鶴川地区の今後の活性化施策について、棚田保存会の皆様や行政の皆様、さらには立命館大学の学生さんや先生にも加わっていただき、討議を重ねております。全員参加で地域の強み弱みを出し合い、見えてきた課題をもとに今後行うべき活動を議論いたしました。その中の案の一つが「鶴川棚田米おにぎりプロジェクト」です。

鶴川の農産物を販売しているうかわファームマートの活性化に向け、鶴川地域自慢の棚田米を使った手作りおにぎりを収穫祭で販売することが決定いたしました。収穫祭本番に

**棚田おにぎり販売イベント企画&テスト販売**



向け、プロジェクトの具体的な内容について関係者の皆様を交え、実際に販売するセットの内容、販売方法、パッケージデザイン、価格など何度も討議し試行錯誤を重ね、最終案を練り上げました。最終案として、棚田米の販路拡大と鶴川棚田のファンづくりを目的に棚田おにぎりを商品化、地域の直売所でありますうかわファームマートで販売することに決定しました。テスト販売ではかなり好評を博し、ひとパック300円のおにぎり弁当が、たったの1時間で50パック販売でき、本番での成功にも自信を深めることができました。本番の収穫祭では、「おにぎりドライブスルー」と題して販売会を実施しました。地元の方や立命館大学の応援も得て、朝早くから用意した約100食のおにぎり弁当は正午を待たず約2時間半で完売し、大成功に終わりました。予想以上の盛況に朝早くから準備をしていた鶴川の方々も、今後も継続して販売会を行いたいと笑顔でおっしゃっていただきました。

**立命館大学の学生さんと棚田オーナーへのアンケート調査**



また、鶴川棚田オーナー制度に参加されている皆さんにも、一緒に活動を促すべく、どのような活動に興味を持たれているのか、参加意思をお持ちなのか、とアンケート調査を実施することを決定し、立命館大学の学生さんがアンケート作成から詳細の集計までご協力くださいました。アンケート結果として、多くのオーナーさんが保全活動のみならず協働活動にも興味を持っておられることが分かりました。

一連の活動の振り返りとして、企業としてもそうですが、個人的にも中山間地域の課題など、実際に地域の皆さんの輪の

<活動を通じた振り返り>

- 企業として個人として中山間地域についての知識習得
- 新鮮な空気の中で、気持ちよく活動に参加しリフレッシュ
- 地元の方に温かく迎えて頂き、喜びを共有できる
- 社内メンバーとの共通の話題が増える
- 社会貢献を実感できる
- 地域の方の笑顔が見れる

<今後の活動>

- 継続した活動参加
- おにぎりプロジェクトの拡大
- 社内外への活動PR
- 様々な企業や学生さん達を巻き込んで情報発信

10

中に入れていただくことで実践的な勉強ができたと考えております。また、普段はデスクワークが多い中、大自然の中で気持ちよく活動ができ、本当に心身ともにリフレッシュして社内のメンバーとも活動を通じて共通の話題も増えたように感じております。何よりも地元の方に温かく迎えていただき、本当に楽しく活動をさせていただいております。また、地域の方の笑顔が見られることでこちらとても幸せな気持ちになります。今後も非常に手応えを感じている「おにぎりプロジェクト」を社内外問わず様々な人達を巻き込んでPRしていきたいと考えております。そしてこの素晴らしい高島鵜川を国内だけでなく世界に発信できるよう、微力ではございますが、お手伝いさせていただければ幸いです。これからも地域の皆様、関係者の皆様と一緒にワクワク感を持って楽しみながら棚田の保全活動に邁進してまいります。ご清聴ありがとうございました。

【坂本氏】

藤川さんどうもありがとうございました。4名の方からそれぞれの自己紹介とそれから取り組みについてご紹介をここまでしていただきました。ここから少し私がコーディネーターとして個人的に関心を持った点、皆さんにも同じ関心を持っていただけたらと思うんですが、聞いていきたいと思います。

まず林典男さんからお聞きしたいんですけど、棚田オーナー制度を平成12年から始められて、一時期300人ぐらいの方が参加されてかなり増えていたのが、現状では90人でしたか、今一番新しいのがコロナの関係もあったということですかね、かなり減ってしまったと。その経緯なり理由なり、どのように考えてらっしゃるか、ご紹介いただけたらと思います。

【林氏】

一番ピークで300人ということで、そうなってきますと我々の受け入れ側として非常にしんどいと申しますか、まず地元の方の高齢化が進んで人口がどんどん減ってきているという中で、多くのオーナーさんを受け入れるということについて、田植えなり秋の刈り取りでも当然指導も入ってきますし、それと合わせてオーナーさんがお見えになる時はお昼の準備をするということで、その辺が非常にしんどく困難な状況になって

きたということで、オーナーさんの申込数は減ってはいませんが、逆に私どもの方から徐々に減らしてきたというのが実際のところですよ。

【坂本氏】

受け入れる数を減らしてきました。

【林氏】

受け入れる数を限定して、ここまでというような形で減らしてきたというような状況でございます。

【坂本氏】

実際のところ、例えば人手があればとか、こちらの受け入れ側としてやる気があればと言うのもですけど、余裕があれば300人なら300人、もっと受け入れても構わないというふうですか。

【林氏】

圃場の準備もありますので、そういうところを見るとピーク時が限界だったなと。だからそれ以後はやっぱり減らざるを得なかったというようなことでございます。

【坂本氏】

はい。分かりました。ありがとうございます。やっぱりオーナー制度は外の方に来ていただいているいろいろおもてなしではないんですけど、受け入れて怪我もないようにしなければいけないとかいろいろ課題があるかと思っておりますので大変ですよ。実はお話をさせていただいてそう思っていて、やっぱり大変ですよということかなと思います。オーナー制度に関心を持ってらっしゃる方は結構いると思うんですけど、そういうところは課題としてあるんだよということ、ご存知かもしれませんが知っていただければと思います。ありがとうございます。

山田さんにお聞きしたかったのは、うかわファームマート、こちらも最初は売り上げが多かったのが減ってきて、それは大きな店がつくれたからという分析をされてる。それで棚田オーナー制度によってこのファームマートの集客を図るということで、オーナー制度を始められたということだったんですが、実際オーナー制度を始められて、このファームマートの集客が上がったのか、何か効果があったのか、どのように認識されてますか。

【山田氏】

ファームマートの前に国道161号が走っているんですけど、平成15年にうかわファームマートができて、地理的な部分もあるかも分かりませんが、地元の方よりは京阪神の方がお客様としてたくさん来ていただいたという直売所の現状があって、それが年数が経って、今まで来ていただいた方が年を取られて、元々比較的年齢層の高い方が顧客としてたくさん来られてましたので、そういう中でやはり減ってきたという

ことで、何とか若い方の新たなお客様を増やしていこうと、棚田をキーワードに店の活性化というようなことで取り組んできました。ただ、オーナーさんの中でも今までうかわファームマートがあるのは知ってるけども、お店に寄ったことがないとかそんな方もおられたので、やっぱり一つ棚田オーナー制度を始めたことによって、確かに今まで来られなかった方が来られるという状況にはなってると思います。

#### 【坂本氏】

ファームマートの立地的には国道から棚田にちょうど入る入口のところにあり、行き帰りに車で来られる方なんかはちょうど通れる位置で、PR なんかにいかなかなかいいところだなと思ったんですけど、棚田オーナー制度自体が6年目とおっしゃいましたが、まだまだファームマートの認知度なり売り上げにはこれからいろいろ働きかけが必要かなというようなそんな感じの認識でよろしいですか。

#### 【山田氏】

はい、そうですね。鵜川の棚田というあの場所に棚田があったというのは、今までその前を通っていても琵琶湖の方ばかり見て山手の方はなかなか知らないと。ほとんどそういう方が多いので、何とかこれからは周知といいますか知名度が上がってくるのかなと思ってます。

#### 【坂本氏】

ありがとうございます。では次に橋本さんに一つお聞きしたいんですけども、元々は関係人口といわれる外部の方だったんですが、もう今となっては関係人口ではなくて内部の方になっているわけですね、移住されて。この畑の集落にどういった経緯でどう見つけ、ここの場所に決めたのかということと、それから地元の方々にどんな感じで受け入れられたのかなど、その辺の印象をお答えいただけたらと思います。

#### 【橋本氏】

なんで畑に来たかというのは、京都に住んでたんですけど息苦しくなったんですね。定年を前にそういう息苦しいところからのどかなところに来てゆっくりしたいなと思って、不動産を何軒かあたって連れてこられたところが畑なりその周辺だったわけです。最終的に決めたのは私ごとなんですけど、見たい気がしたんですね、ある日突然その景色を。気のせいだと思んですけど見たい気がしたのがきっかけで畑地区に家を建てて来ることになりました。地元の方からの受け入れについては先ほどの話とちょっと一緒の部分があるんですけど、定年になって60歳になってそういう地域に入ってくると、かえってお手伝いができないのではないかなと思ったので、定年の前、10年ほど前に来て、草刈りとか河川の掃除とかそういうのをお手伝いしながら徐々に入っていったと。そんな感じで結果的にはうまくいってるような感じなんですけど。たまたま

畑地区はそういう受け入れがいい感じのところだったんでうまくいっているところですよ。

#### 【坂本氏】

実際のところは林さんがそのときの経緯をぜひ喋りたそうな。ちょっとご紹介いただけたらと思います。

#### 【林氏】

畑地域そのものがその当時、それ以前から人口がどんどん減ってきてるような状況の中で、やっぱり転入して畑に住んでいただけということが非常にありがたい、ウェルカムというような感じで受け入れさせていただきました。橋本さんだけではなくて、他にも三重県の方からご夫婦で入ってこられたとか、あるいは尼崎の方から単身で入ってこられたとか4、5軒ぐらいいは畑の方に住んでいただいていますので、もっと枠を広げてお待ちをしているというような状況でございます。

#### 【坂本氏】

橋本さんの場合であれば実際に田んぼを作られて理解して、棚田の維持保全にもかなり貢献されてると思うんですけど、他の4、5軒の移住の方も同じようにされているんですか、どんな感じなんですか。

#### 【林氏】

橋本さんは、「せぎなお会」の“せぎなお”の周辺、あるいは自分のところの周辺でもう既に荒廃している、耕作放棄されているところを、昨年より今年は田んぼも1枚増やしてというようなことで耕作をしていただいておりますのでね。

他の移住者の方は、田んぼまではなかなかやっていただけないのが現状なんですけども、集落のさまざまな事業には率先して参加をしていただいていますし、集落にもう20年ぐらいになる人もおられて役員ももっていただいているということで、我々地元民としては非常に喜んでますし、移住してこられた方も地域の中に溶け込んでいます。

#### 【坂本氏】

分かりました。ありがとうございます。それでは最後、藤川さんなんですけれども、間違いなければパソナ農援隊というのは株式会社と書いてありましたよね。企業さんでいらっしゃる。鵜川の集落に関わることで、言い方悪いですけど、どうやって儲けているんですかとかいうか、どういう形でお金を得ていらっしゃるのかなど。無償のボランティアではないわけですよね。何らかの形で売り上げという形で取られてるんでしょうか。

#### 【藤川氏】

「しがのふるさと支え合いプロジェクト」という事業での活動に対してはボランティアという形です。ただ最初の1年間につきましては、活動費、協働活動に使う費用というのが県の

方から10万円いただいております、受け入れ側の集落の方にも最初の1年間15万円でしたかね、補助金としていただくというような形で、この活動自体は社会貢献として活動させていただいております。企業側としても社員教育が特にこういった農業であったり中山間地域の研修だったりとかそういった事業をやっておりますので、会社側としても実際地元の方の輪の中に入っているいろいろな学んでいるというところで、会社としてはそういったところの経験知識が利益となっているというような感じでございます。

**【坂本氏】**

ありがとうございました。すいません、ちょっと誤解をしていたかもしれません。先ほどの橋本さんと同じような質問になるんですけど、基本的には地域の方に温かく受け入れられていたようなご説明があったんですけど、実際のところ温かくとか冷たくとは言わないまでも距離を置かれてる方とか、全体として見たときに皆さん本当に大歓迎みたいなのか。山田さんからもどんな感じなのか、地元の方から受けた印象も含めて、まず藤川さんの方からお願いします。

**【藤川氏】**

拠点は大阪の方なので、本当はもういつでも、毎週でもお手伝いに行きたいと正直思っているんですけども、やはり距離があるため、イベントのときとかそういったときにお手伝いに行っています。実際一つの企業でどれだけお手伝いできるのかというところでは、本当に小さな力になりますので、今後はいろんな企業とかさまざまな人を巻き込んで、私たちだけで足りない部分を一緒にサポートできたらというふうには思っております、実際イベントのお手伝いとかさせていただいており、地元のお母さんたちと一緒におにぎりを作ったりそこでもいろんな話をしながら、笑顔でお話いただいているので、受け入れていただいているのではないかなと、勝手に思っているだけかもしれないですけど、山田さんどうですか。

**【坂本氏】**

実際地域の方としてはどのように捉えられてるのかなというところ、もしあればお願いいたします。

**【山田氏】**

元々鶴川集落というのは、こじんまりした、昔ながらとかそういう集落だったんですけども、それが変わりだしたというのは「うかわファームマート」が開設されたり、貸農園が開設されたり、そういう中で明るくという語弊かもしれませんが、集落がそういうような形で活気を見せてきたというのは確かに感じてました。その中で先ほど藤川さんが言われたように、やっぱり外の方も温かく受け入れられるような雰囲気とか、そういうものが段々と生まれてきているのではないかなと思ってます。

**【坂本氏】**

ありがとうございます。ということです、藤川さん。

**【藤川氏】**

安心しました。ありがとうございます。

**【坂本氏】**

もう一つだけ、特に林さんと山田さんにお聞きしつつ、橋本さんと藤川さんもしご存知でしたらということでお聞きしたいんですが、例えば畑の集落であれば地域通貨の1畑でいろいろ交換できるという地域通貨のお話であるとか、鶴川でいうとおにぎりですね。おにぎりはもしかするとパソナさんから持ってこられたのかも分からないですけど、あと果樹栽培のお話とか、こういった何かの新しい活動のアイデアというのは誰が生み出しているのかなというのがちょっと気になりまして、個別具体例で地域通貨のお話と果樹のお話を林さんと山田さんの方からご紹介いただけたらと思います。

**【林氏】**

地域通貨の話は、何年くらい前になるかという覚えてないんですけども、一時地域通貨がちょっと流行ったり、それから私のもと関わりを持っていた大学の先生がものすごく地域通貨に関しての専門家というか、そういうようなこともありまして地域通貨を作ったらどうかというご指導をいただいて、それから地域通貨というのを作って利用しているというようなことです。

**【坂本氏】**

アイデア自体はその大学の先生だったんですね。

**【林氏】**

そうです。

**【坂本氏】**

そういった外部の方からそういった知恵が入ってくるというアイデアが入ってきたという感じですね。ありがとうございます。山田さんはいかががでしょうか。

**【山田氏】**

果樹については、これは棚田オーナーを始めたことによって生み出されたというか考え付いたというか。

**【坂本氏】**

誰が考え付いたのでしょうか。

**【山田氏】**

これは保存会の方で水田として利用するのも限界があるという部分で、それであれば何がいいのかなということ、比較的管理がしやすいという、それで地理的な条件もあります

し、県でそういう補助制度がありまして、県、市、JA、地元という形で協議会をつくって、いろんな作物を選定しているとか、そういう中で生まれてきた経過でございます。おにぎりについてはパソナさんと地元が何回か話を重ねていく中で、我々は日頃毎日食べてるお米ですのでそう感じなかったんですけども、特にパソナさんは非常に美味しいということなので、それを売り出していこうというようなアイデアをいただいたということでございます。

#### 【坂本氏】

パソナさんの方からおにぎりを売り出していこうというアイデアを持ちかけられたということですか。それとも地元の鶴川さんの方でも既に何かそういう考えがあったということなんですか。

#### 【山田氏】

鶴川ではそこまで考えが及ばなかったところなんです。ただ、お米として販売する、これは「うかわファームマート」でも棚田米として売ってるんですけども、それをおにぎりにして、というのは全然思いがなかったですね。

#### 【藤川氏】

何回か検討会とかアイデアとか、スポット分析という地域の弱み強みいろいろ出し合って、どういった取り組みができるかなというので社内の方でも考えまして、5つぐらい提案をさせていただきました。その中でおにぎりの方が地元の方に受け入れられたので、じゃあこれを進めていきましょうというところで、いろいろ地域のデザイナーさんも山田さんからご紹介いただいて、看板作ったりとかのぼりを作ったりとかそういったところを皆さんと一緒にやってみようということでスタートしました。

#### 【坂本氏】

ありがとうございます。まだまだ私自身聞きたいこともたくさんあるんですけども、皆さんからの質問も募りたいと思いますし、実際議論するのは難しいかもしれませんがそれぞれの方々が抱えていらっしゃる、直面していらっしゃる課題をもう一回共有していただいて、できたらそれを手元の用紙に書いていただきたいと思います。それについて皆さんにお考えいただく、あるいはよければ周りの方2、3名ぐらいで隣でもいいですし前後でも構いませんのでお声がけをしていただいて、その課題についてこんなことができるのではないかなみたいなそういったお話をいただければと思います。これからその時間を少しだけ取ります。ちなみにですがこの棚田サミットの全体のテーマはご存じですか。テーマは「棚田をつなぐ人のかけ橋」です。せっかくここに集まってくださった方々、何かのご縁かと思えます。周りにいらっしゃる方がもしかしたらもう既に知り合いという場合もあるかもしれませんが、もしよければこういった機会ですら知り合いの輪を広げていただく、かけ橋をつなぐというのでもできるかなと思います。別に無理はなさらないでください。

ご自身で書き込んでくださっても結構です。もちろんご存知の通りコロナ感染が完全に収束したわけではないので、感染について気になるという方はご自身だけでも構いません。お話される際も、あまり近づいて話すとかということにはお気をつけください。という形で、もしよければ周りの方とお声がけをいただいて自己紹介いただいとお話をできたらしてみてください。それでは確認ということで林さんの方からこういうことを皆さんに考えていただきたいというところをもう一度ご紹介ください。お願いします。

#### 【林氏】

一番私どもで困っているなというのが、どんな活動をしててもやっぱりその中心となるのは地元だなというふうに感じてます。地元自身が今はものすごい勢いで人口が減ってきてますし、高齢化がどんどん進んできている。こういう中で棚田の保全そのものができなくなっている。どうしたらいいんだろうなと考えたときに、やっぱり都市住民の方々にてできれば永住をしていただいて、ここで就農していただくということが一番いいんじゃないかなというふうには思うんですけども、その辺が可能なかどうかという点です。ですから、私どもとしては棚田を守ってくれる人をどうつくり上げていくかということが一番の課題ということになります。よろしくをお願いします。

#### 【坂本氏】

ちょっと明確にさせていただきます。地元に住んでくださる方、そこまでコミットしてくださる方をぜひ関係人口創出というそういう中からそういうところまで至れるような方をぜひ見つけたい。見つけるために何かを考えたい、そんな感じでよろしいですかね。できればもう本当に地元へ地域に住んでくださる方を見つける。何かそのための良いお知恵があればお願いいたします。ありがとうございます。

それでは山田さんからご自身でちょっと提案したいというか皆さんに考えていただきたいお題をお願いします。

#### 【山田氏】

地元だけで守っていくというのはなかなか難しいですし、今、鶴川の場合は集落全体ではなしに、棚田保存会というこのグループで棚田を主体的にいろいろな活性化に向けた取り組みをしてるんですけども、やはり保存会自体が高齢化になってきて、一部地区外の方もおられますし女性の方もおられるという中で、今後保存会を存続するためには、保存会の今後のあり方というか当然後継者という部分も出てくるんですけども、そういう方法といいますかそのようなものを教えていただけたらなというふうに思ってます。

#### 【坂本氏】

地元だけでは難しいというお話があったんですが保存会ということの後から出てきて、保存会のあり方、保存会を継続

させていくための例えば後継者をどのように育てていくか、あるいは確保するか、そんな形のご質問でよろしいですか。

**【山田氏】**

はい。

**【坂本氏】**

ということで保存会という地域の組織があるんですけども、そこをこれからも継続的になんとか活動していくために、誰かその後継になる方、力を発揮できる方をどうやって育てていけばいいか確保していけばいいか、何かお知恵がありましたらお願いいたします。ありがとうございます。

それでは橋本さんからお願いします。

**【橋本氏】**

先ほどから保存会の話が出てると思うんですけど、「せぎなお会」と「保存会」の違いというのは、「せぎなお会」そのものは当然その地域に住んでない方がわざわざ京都とか大阪とか遠くから来てくださって、もちろん交通費も自腹で来ていただいているわけで、そういう中で「保存会」の方は前後お膳立てをして来ていただいているという感じが強くて、そのあたりでさつい部分もあるかなと思います。「せぎなお会」の方は用水路の整備から泥上げなど農業で一番嫌な部分があるの辺だと思うんですけど、そこからみんなでやっていくという形で、ちょっと違う雰囲気を出してるんですけど、その中で一番困ってるというのは指導できる人が少ないというか、いないというのでどうしたらいいかというのが分からない。簡単に言うと、せっかく刈り取った稲の束ね方が分からないとかそんなこともあるわけで、そういう方を指導できる方がほしいと、そんな感じで思っています。

**【坂本氏】**

はい、ありがとうございます。橋本さんからお話あった通り「せぎなお会」というのは橋本さんの奥様が SNS のお知り合いでつながってる方々が実際に畑の方に来られて農作業をされていると、そういうグループなんですけれども、基本的には外部の方々です。ただ農業の経験も少ない方も多いというところで、そういう方々をどのように農業の作業の指導をするのかとそこが課題になっていると。そういう指導者というか指導できる人をどう確保するか、育成するか、見つけてくるかそんなことに関して何かお知恵があったらということでお願いいたします。

いつも最後になって申し訳ないんですけども、藤川さんの方から何か課題をお願いします。

**【藤川氏】**

先ほど橋本さんもお話されたように、やはり地元の方の棚田の管理がやっぱり一番大変だと思います。草刈りだったり

とか用水路の整備だったりとか。そこを私たちも本当お手伝いしたいなという気持ちはあるんですけども、一つの企業だけではできないところもありますので一緒に活動してくれる人、仲間を増やすために鶴川の魅力をもっともっと情報発信していきたいと、仲間を増やしたいと思っておりまして、その情報発信の仕方を皆さんにお知恵をいただければと思っております。よろしくをお願いします。

**【坂本氏】**

ありがとうございます。一緒に活動する仲間というのは、鶴川の外の方々ということでいいですね。一般の方々、都市住民とかそういう方々に向けての仲間を増やすための情報発信のあり方について何か良い知恵がありましたらということで皆さんにお考えいただけたらと思います。

ここまでずっとほぼほぼ1時間半続けて話を聞いてきましたので、皆さんにお話しを考えていただくあるいは議論していただく前に5分程度の休憩をとりたいと思います。

<休憩>

**【坂本氏】**

先ほどお願いした通り、よければ周りでお声がけいただいで、皆さんの間でもいろいろお話を共有いただければと思います。そういうのが無理だということであれば今から10分程度様子を見ながら知恵を出していただく時間を取ろうと思います。

お題というか課題というか皆さんに提示させていただいたんですが、それへの答えというのは難しいということであれば質問でも結構ですしコメントというか感想でも結構です。思ったところがあればどなたに対してでも結構ですので、何か一言いただけたらと思います。

今いただいたコメントで早速ですが紹介させていただきたいと思います。これは「うかわファームマート」についてということなんですが、ご自身棚田オーナーだそうなんですけども、駐車場に入るのが難しかったみたいなことを書かれていて、そのところのアクセスをよくするといいかもしれないというようなコメントをいただきました。そういった感想がありました。コメントとして何か反応があればお願いします。

**【山田氏】**

ありがとうございます。よく言われるんですけども、鶴川地域は琵琶湖のいわゆる景観条例なり自然公園の関係でいろんな規制がかかってまして、看板の色、建物の色、それから看板の大きさとか、そこらへんも制限がかかってまして、我々が思い描くような啓発看板が作れないとか、そういう規制があるということで一定やむを得ないといえますか。

**【坂本氏】**

その土地柄というか規制の関係でやむを得ない部分もある

ということですね。ありがとうございます。そういったところでも実際にオーナーさんでありお客さんという言い方がいいかわからないですけども、ご意見ということもあるのでまた機会があったら検討していただければと思います。

もう1個これは質問なんですけど地域通貨の話です。地域通貨の実際効果はどんなふう感じてらっしゃいますかという質問ですがいかがでしょうか。

**【林氏】**

地域通貨ということを書いてますが、本当は地域通貨というのはその地域の中でぐるぐる回るのが地域通貨の本来のあるべき姿であろうというふうには思ってるんですが、そういう回り方はしないで、いわば金券みたいな感じですぐ換金されるというような、そういうものに換えれるというようなそんな状況になっています。ただ、今私どもで棚田ボランティアにお越しいただいた方々に500円程度のものと交換できるということでお渡しをさせていただいてるんですが、大体配布した分の回収できるのは半分ぐらいで、ボランティアさんの数が今非常に少なくなってきたので、今年の場合はちょっと多くて14、5人くらい来ていただいたんですが、それを全部配布しても回収できるのは約半分ぐらいということで稼働は大体それぐらいのものです。本来の地域通貨としての活用ができればいいかなというふうには考えているところでございます。

**【坂本氏】**

ありがとうございます。やっぱりボランティアの方々へ何かちょっとお返しする一つのオプションとしてということでも有効かもしれないが、地域通貨本来の機能というところにははまだという感じかなと思います。ご質問ありがとうございました。

パソナ農援隊さんにご質問ありまして、なんで大阪の会社が鶴川にという質問なんですけれども、なぜ県内の企業ではなくて大阪の会社がというところで経緯をご紹介ください。

**【藤川氏】**

令和元年度に「しがのふるさと支え合いプロジェクト」という滋賀県の事業になるんですけども、そちらの事業を弊社の方で受託させていただきまして今年で4年目になるんですけども、実際にこちらの事業をさせていただいてる中で、私自身も滋賀県に関わることになって、本当に滋賀県すごい素敵という魅力的な県で、何より人が本当に温かくてそこにも惹かれてきて、業務を通してちょうど鶴川さんのお話を県の方からご紹介があり、ぜひというところで協定を結ばせていただきました。

**【坂本氏】**

追加で質問なんですけど、滋賀県がそういった形で連携協定先を紹介するというのをされているものに、ちょうどうまくということですか。

**【藤川氏】**

そうですね。マッチングというか、その「しがのふるさと支え合いプロジェクト」の事業の中で企業とか大学だったりNPOだったりとか、登録を募集させていただいておまして、その登録した企業とか学校とか、あと集落の方ですね、マッチングの方は県の方でされるということです。

**【坂本氏】**

協定の締結先が保存会になるんですか。

**【藤川氏】**

そうです。

**【坂本氏】**

保存会とパソナさんとの間でということですね。ありがとうございます。

ちょっと質問を中心にいきたいと思います。畑の集落の方に限定されてしまうんですが、「棚田をつなぐ人のかけ橋」というようなことでもあるので、「棚田保存会」と「せぎなお会」の連携はあり得ますかというご質問をいただいております、こちら橋本さん、林さんいかがでしょうか。

**【林氏】**

元々畑地区の棚田オーナー制度なりその取り組みに関しては、集落全体の取り組みとして実施をしてきました。たまたま今コロナで休んでるんですけども、そういう中で橋本さんが別の角度で実施をされてきたということなんですけども、今後としてやっぱり私どもも高齢化が進んできた中でどうやっていこうかというようなことを考えたときに、連携していかないとなかなか2つのグループがあっちこっちで動いてるというのはやっぱり好ましくないというふうに私は考えてますので、できれば一緒に、一緒にできなくても連携をしようという取り組みをしていきたいというふうには考えております。

**【坂本氏】**

そういうラブコールがあったんですが橋本さん、いかがでしょうか。

**【橋本氏】**

元々全く関係ないわけではなくて、私も畑地区に住んでるので保存会の一員ということになってます。だから別にこだわってるわけではないというのが本音ですので、一緒にやっていきたいなと思ってます。

**【坂本氏】**

逆に言うと、今まであまり明確な連携というか一緒に何かやるという機会があまりなかったというそんな感じだったんですかね。

**【橋本氏】**

スタートのときにたまたまコロナの影響で保存会の方の活動ができなくなったというのが大きな問題で、そのときに私らのグループは市役所の方の制約もないので自由に活動できてた部分があるので。今年3年目なんですけど、その間に保存会の方の活動は一度もやってなかったんで連携という感覚ではなかった。今後コロナから回復してそういう制約がなくなった時点で、また保存会の方と話し合いとか持ってやっていったら連携なり何なりができるのではないかなとは思ってます。ただそういう話し合いそのものができてないのだからこの課題ということですね。

**【坂本氏】**

ありがとうございます。

これは林さん、山田さん2人に、これは橋本さんもそうかもしれないんですが、オーナー制度をやっている中で、希望するオーナー像というか、こんなオーナーの方に来ていただけたら嬉しい、ありがたいみたいなものがあれば。それから移住者の方でこんな方というのもしあれば、逆にそういうのがないということであればそれでも全然構わないんですけども。

**【林氏】**

非常に難しいご質問だなというふうに思いますけど、ありがとうございます。私どもとしてはやはり永住していただいて棚田保全に関わっていただきたいという思いがありますので、そういう考え方をお持ちの方にぜひオーナーさんにもなっていただきたいですし、ボランティアにも来ていただきたいし、ぜひ永住もしていただきたいというふうには思ってます。

**【坂本氏】**

山田さんも、もし何かございましたらお願いします。

**【山田氏】**

何回かオーナー制度に参加をする方の中で、荒れている田んぼを貸してほしいという方の話を最近聞きます。なかなか地元だけでは難しいということなので、そういうオーナーさんが地元の田んぼでお米を作ったり畑で野菜を作ったりとか、そういうふうな地域で空いている田んぼを借りていただくという方が段々増えてくると、地元としてはありがたいなと思います。

**【坂本氏】**

はい。ありがとうございます。とはいえ、別にこういう人じゃないと来てはいけないということでは決してなくて、おそらく関係人口って来てほしい人だけが来てくれるわけではなく、どんな人であれ関わっていただければということが私は本音かなというふうに何となく感じているんですけども、全然限定するわけでもなく、来れる人は少しでも広がればということでは大事ななというふうに思います。ご質問ありがとうございます。

課題への解決ということではなかなかなんですが、ちょっと質問の方がやっぱり多いですね。質問が多いのでまた質問をひとつ、こちらパソナさんに具体的な質問なんですけれども、「棚田保存会」に対して5つ案をしたということですがおにぎりの他のアイデアというのは何があったのかということに質問なんですけども。

**【藤川氏】**

いろいろ出てきていて、山田さん覚えてらっしゃいますか。一人キャンプ案は出ました。あとは、棚田で写真スポットを決めて写真撮影大会だったりホテルの鑑賞会とかそのあたりです。

**【坂本氏】**

それらはまだ実現には至っていないものなんですか。もう既にされたものですか。

**【藤川氏】**

まだです。まずはおにぎりからということで、地元の人からもぜひおにぎりをやってみたいということだったので。

**【坂本氏】**

ありがとうございます。全部紹介ができないのでいくつかアイデアというのではないんですけど、質問として出されてるんですが、これ一つアイデアというか提案という形です。「うかわファームマート」についてなんですけれども、うかわファームマートの宣伝に、近くにできたという道の駅を活用・連携できないものかという質問なんですけど、そういったアイデアとかというのは一つの連携の契機としていかがでしょうかということなんです。

**【山田氏】**

そうですね。それも一つ取り組みという部分では今後参考にさせていただきたいと思いますが、我々が今考えているのは、白鬚神社にたくさん人が来ていますし、鶴川の地域の中でもレストランとか喫茶店とかそういうものもありますし、まずはそこから連携をして、お互い相乗効果があるような形で協力していけたらいいなという、それは役員会でもそういう話は出ます。

**【坂本氏】**

保存会にそういった連携は、林さんの方もそうだと思いますし、それから橋本さんも外部の方というつながりをつくってらっしゃると思うんですけど、実際にそのつながりをつくる、誰とつながろうであるとかあるいはつながりをつくった後どうやって連絡しようであるとかというのはどんなふうになっているのかということ、橋本さんの「せぎなお会」の場合であればどんな形での関係性ですか。

**【橋本氏】**

事務局の妻に、ほとんど人を集めてもらっていて、私はよくわからないんですが、SNSとかみたいです。

**【坂本氏】**

せぎなお会の事務局が担ってくださっているという形ですね。(外部とのつながりは、)奥様が担っていると。

**【橋本氏】**

そうです。

**【坂本氏】**

それが役割分担だと思いますので。奥様と一緒に活動を熱心にされているということなんですけれども、そういった形で奥様も非常にSNS、Facebookでしたかね、熱心に使われているところで、そちらで「せぎなお会」の会員の方とつながってらっしゃるということですよ。

林さんと山田さんにお聞きしたいんですけれども、外部の方との連絡調整をする役割というのはそれぞれの保存会の中でどなたが実際には担ってらっしゃるんですか。

**【林氏】**

畑の棚田保存会ではそのあたりが地域の中では弱い部分でして、今は行政の方をお願いしているという状況でございます。

**【坂本氏】**

そういったところがやっぱりなかなか手が回らないということかと思えます。

山田さんはいかがですか。

**【山田氏】**

私も棚田保存会の事務局というのは、うかわファームマートにいますので、そこで事務についてはお願いをしています。

**【坂本氏】**

実際にうかわファームマートを運営されているのはどなたですか。

**【山田氏】**

運営協議会ということで出荷者が会員で、その会員の組織がそういう協議会をつくってます。そこは市から委託を受けて管理をしています。

**【坂本氏】**

そこから事務的な作業は会員の方が交代で担うとか、役割分担をされてるというような形でされているのですか。

**【山田氏】**

事務は、事務局がおりますので、そちらにお願いしています。

**【坂本氏】**

分かりました。ありがとうございます。

**【参加者】**

同じ保全団体、管理してる皆さん、今日のご苦労様でございます。林さんに聞きたいんですが、畑保存会は集落全体でやってるんですか。それとも何人かでやってるんですか。また、農賃と機械、これは個人持ちとか行政でしてるんですか。そういうもろもろ、ガソリン代、草刈り機等、そういうお金は行政で出してもらってるんですか。私は長野県千曲市の姨捨棚田から来た金井ですが、同じオーナー制度で、千曲市は100組あります。先日も稲刈りをやって、400~500人オーナーさんが来てます。非常に大変でございます。そんなところで、滋賀県の畑保存会の皆さんがオーナーさんのやってる草刈りまた農賃等、そのオーナーさんのいただいたお金だけでやってるのか、行政から委託料でもらっているのか、また国・県の直接支払、これからの棚田を守っていくには、そういう行政の援助がなければ棚田年金族でやってるようならどこも担い手がなくなると思うんです。その点、山田さん林さんの賃金と機械と、また保全団体が何人ぐらいでやってるのか、そこをお願いいたします。

**【林氏】**

ありがとうございます。私どもの棚田保存会は集落全体が保存会のメンバーということになっております。オーナーさんからオーナー料をいただいておりますけども、そのうち2割については集落が吸い上げます。残り8割については、元々そのオーナー田は田んぼの所有者がそれぞれおられるわけですので、その所有者に8割分をお支払いするという仕組みをとっております。それで2割分で田植え祭とかあるいは秋の刈り取り祭でオーナーさんがご家族連れでお見えになったときの昼食賄いとか、そういった費用については全部その中で賄っております。集落で出役をしてくれた保存会のメンバーに対して賃金を払っているのかということなんですけど、賃金は一切払ってません。では何してるんだということなんですけども、そういう収穫祭が終わった後で慰労会みたいなものをやってる。その程度しか現在のところはやっておりません。また、秋の刈り入れについては先ほども少し言いましたように、オーナー田に使っている農地というのは所有者がそれぞれおられて、日ごろの管理というのはその所有者の方々が実施をされてるわけですので、秋の刈り取り、それから草刈りそういったものについては全てその所有者が燃料代から農機具の維持費、肥料も全部を負担するというような形をとっております。先ほども言いましたように、オーナー料を3万3千円いただいているんですけど、そのうちの8割について地主にお支払いするという方法

で、その中で全て賭ってくださいということです。

**【坂本氏】**

ありがとうございます。山田さんの方からも何かありましたらお願いします。

**【山田氏】**

私どもの場合は、保存会員は地域それから地域外の方もおられるんですけども、女性の方含めて現在13名で保存会を運営しています。私どもは1区画3万円のオーナー料をいただいているんですけども、その中で機械のいわゆる農家の方がコンバインとかそんなものを出していただいた方についてはリース代として払いますし、いろんな作業に出ていただいたときには、時間当たりいくらというような賃金を支払うという形で現在は進めております。38区画ほどあるんですけども、そのオーナー料だけで今のところ十分回っていったらという状況でございます。

**【坂本氏】**

ありがとうございます。そろそろ終了のお時間になってきたので、解決策的なところでアイデアをいただいたものなんですけど、実際、これもしかすると活用されているかもしれませんが、これもある地域で実際に起きたことと、地域おこし協力隊を活用してというそういったアイデアをいただきました。もうかなりの人数を受け入れていて、2009年から90名を受け入れて70名が任期満了のうち50名が定住。つなぐ棚田遺産を守る人に成長したという経緯があったと。地域おこし協力隊は入っていないか。ということであればそういったものの活用もということ。ただ一方で、非常に客観的な冷静な捉え方とご意見ということで一ついただいているんですけども、端的に言うと棚田オーナーやボランティアでは根本的な解決にはならないと。ご指摘の通りかと思えます。今回の棚田サミットに向けてのPR動画がYoutubeに掲載されており、畑集落それから鶴川集落それぞれで収穫のものとかを動画にしているんですけども、山田さんと畑集落の方がやっぱりオーナー制度だけでは棚田を全部守っていくことはできないと。関係人口をこれからどう増やしていくかということが一つきっかけにはなるんですけども、それだけではということ。林さん山田さんもしかしたらお考えかもしれませんが、やっぱり住んでもらってという人は地元がやはり中心になるのでというところが一つキーなのかなと思いますので、これからはそういった本当に地元に住んでもらう方々も視野に入れつつ、関係人口を増やしていくところがやはりどうしても必要になってくるのかなというふうに思いました。

最後に、皆さんに本当に短くお願いしたいんですけど、外部の方あるいは地元の方も地域の方も含めて皆さんに、その棚田を守ろうという思いは一体どこから来るのかと。たくさん喋りたいと思うんですけども、一言皆さんのお考えなりを

お聞きできればと思います。林さんの方からお願いできますか。

**【林氏】**

一番大きいのはやっぱり先祖が苦勞して棚田をつくってきた。そして守ってきた。それを守っていききたいというのがありますし、棚田の機能はいくつかの機能があるんですけども、それは棚田をきっちり保全して初めてその機能が働くものだというふうに思っていますので、そういう意味で私は棚田を守っていききたいというふうに思っています。

**【坂本氏】**

ありがとうございます。山田さんお願いします。

**【山田氏】**

私はもう退職しましたけども、元々行政の職場に勤めていた関係で非常に現役の時にいろんな地域の方にお世話になりました。これからそういう地域に根ざした、お返しをしようとおかしいですけども、そういうような思いでなんとか地域を盛り上げたいなというふうな思いでやっています。

**【坂本氏】**

ありがとうございます。橋本さんお願いいたします。

**【橋本氏】**

私は地元というか地域に住んでたわけではないので、よそから来たということで先祖がどうこういうのはないんですけど、自宅の周辺の美観といいますかね、あまりにも草がいっぱい生えていたら帰ってきたときに嫌じゃないですか。そういうのを少しずつでも整備して、それが徐々に広がって結果的には田んぼをすることになってしまったんですけど、そういった感じで大きな理由はない。元々自宅の周りをきれいにしたいと、そういうところから始まっています。

**【坂本氏】**

ありがとうございます。藤川さんお願いいたします。

**【藤川氏】**

やはり私も最初は棚田のおにぎりを食べたときに本当に感動して、こんな美味しいおにぎりがこの世にあるんだというぐらいに本当に美味しく、この美味しいおにぎりはこの棚田でできてますし景観も素晴らしいですし、やはり守っていかないといけないなというふうに感じましたので、また地元の方も本当いつまでも元気でいていただきたいので、守り続けるのは大事なことだと思っております。

**【坂本氏】**

ありがとうございました。会場の皆さんもたくさん質問・コメントをお寄せくださりましてありがとうございました。

改めまして、4名のパネリストの方、非常にたくさんのお話しをしてくださいました。会場の皆さんから改めて拍手をお願いいたします。

2時間の長丁場だったんですけども、皆さん参加してくださいました方々のおかげで非常に面白い質問もたくさん引き

出せたと思います。今日午前から午後まで長い時間でしたが、少しでも何か持ち帰っていただけたら、あるいは皆さんの間で共有をしていただければというふうに思っております。拙い司会進行で申し訳なかったですが、ここまで皆さんお付き合いくださいますと本当にどうもありがとうございました。



## 第2分科会

テーマ

### 「棚田に根付く“価値”を繋げる～地域産業の振興と次世代への継承～」

■ コーディネーター



龍谷大学社会学部教授  
脇田 健一氏

■ 話題提供者 (パネリスト)



国境炭焼きオヤジの会  
北谷 三郎氏



NPO 法人麻生里山センター  
海老沢 秀夫氏



まるくもくらぶ  
藤原 穂波氏



結の里棕川  
是永 宙氏



NPO法人コミュニティわくわく高島  
坂下 靖子氏

#### 【脇田氏】

皆さんこんにちは。ようこそ第2分科会へお越しくださいました。龍谷大学社会学部の教員の脇田と申します。よろしくお願ひいたします。

今日のパネリストの皆さんですが、お名前とご所属といひますか、簡単にご紹介させていただきます。

一番皆様から向かって左が北谷さんです。国境炭焼きオヤジの会の代表をされています。

そのお隣ですが、NPO 法人麻生里山センターの海老澤秀夫さんです。

それから朽木という高島でも奥の方の山村の雲洞谷というところからお越しくださいました、まるくもくらぶの藤原さんです。

それから棕川というところからお越しくださいました是永さんです。

最後にNPO 法人コミュニティわくわく高島の坂下さんです。

今日の大事なキーワードですけど、炭焼きなんです。今どき炭って何ですかと思われる方もおられるかもしれません。県外からお越しの皆さんからするとですね。でも高度経済成長期の燃料革命というものが起こる以前は、ここが一大炭の生産地帯で、特に中山間地域の農家の人たちの副業といひますか、半農半炭みたいな暮らしがこちらの中山間地域の正業で、それはもう当然他の地域と一緒にですけども、高度経済成長期のときに段々廃っていったんです。ところが村を活性化させようという取り組みが始まる中で、不思議なことに相談をしたわけでもないのに、ここにおられる方たちのところでは炭焼きを始められたんです。これ不思議なことなんて僕は去年いろいろお話を伺って、ぜひこの分科会でコーディネーターするんだったら皆さんにお話を聞いていただきたいなと思って今日はこのパネリストになっていただきました。

これからお一人10分ぐらいご自分たちの関わっている活動についてのお話をいただきたいんですけど、この5人並んでおられる中で北谷さんだけが地元でお生まれになった方

です。あとの4人はよそから移住して来られた方。海老澤さんが一番長くて40年ぐらい経つんですね。他の方も20年とか結構移住者といひてもベテランの移住者なんですけど、今日の二つ目のキーワードは、この炭焼きに加えて「移住者と地元の関係」ということをスピーチの中で触れていただこうかなというふうに思っています。午前中、東大の先生とか農水省の人がいろんな補助金をつけて事業を行いますよと言ってるんですけど、一番大切なのはこの地域社会の中で人と人がどうつながっていくのか、付き合っていくのか、地元の人とよそから来られた人がお互いの良さを引き合いに出しながらどう良い関係をつくっていくのかなということだと思ひますよね。そのところの知恵といひますか経験を今日はお話いただけるとありがたいなというふうに思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。それでは早速北谷さんからお話をいただこうと思ひます。よろしくお願ひします。

#### 【北谷氏】

ご紹介をいただきました、国境炭焼きオヤジの会の北谷三郎といひます。よろしくお願ひいたします。

炭焼きの事で話してということですが、一応我々が暮らしております地域のことから少しご説明をして皆さんにご理解をいただきたいなと思ひますのでよろしくお願ひいたします。



私たちが炭焼きをやっておる地域は、高島市の中でも北部に位置しますマキノ町の野口という集落です。この野口という集落は元々雪の深い地域でして、隣峠一つ越えますと福井県敦賀市というところに位置しております。琵琶湖の西側を走っております国道161号が琵琶湖沿いを走っております福井県の方に達しておるわけですが、その161号の滋賀県の最北部に小さい集落が3つ並んでおります。南の方から野口、路原、国境という集落がございます。右を向いても左を向いても山しかありません。昔から国道のそばの少し開けた土地は皆田んぼになっておまして、そこで耕作をしながらいいた時間は山へ行って炭焼きをする。それを売ってそれで生活が成り立っておったような地域ですが、この貧しいながらもどかであった山村の状況が一挙に変わるような事態が昭和30年代、日本の経済が高度成長期になりまして起こりました。それと言いますのは、海外から石油、原油がどんどん入ってくるようになり、炭というものはもう世の中からお呼びでないというような形になって、炭を焼いても売れないということで、集落のほとんどの家が炭焼きに携わっておったんですが、炭焼きから撤退せざるをえんということが起こりました。そうしますと生活の糧を得るために他の仕事を探さないといけないんですが、地域を見てもなかなか工場とか事業所とかいうようなものは無くて、それぞれ福井県の敦賀の方や今津の方に働く場所を求めて出て行くということになって、そうしますとどうしても職場の近くに生活に移した方が便利もいいし通勤の不便なところも解消・軽減されるということでどんどん過疎化が進みました。働き手の現役世代が出ていって高齢者が残るというような過疎化が昭和30年代後半、1回目の東京オリンピックが開かれたころを前後にして進んでまいりました。農地につきましても、先ほど言いましたように国道のそばに小規模な農地があったわけですが、その働き手が集落の外へ働きに出る、また本拠を移すというようなことになると段々山際の方から荒れ、獣害とかそういうことも関係するわけですが、加速度的に集落の周りの耕地というのが荒れ地になってしましまして、今私どもが見ましても昔ここで田んぼを作っていたとは信じられないぐらいに草ぼうぼう、雑木は生い茂っている、また杉などの樹木を植栽しているところがあるところ、今、国道のそばの小規模な農地はもう皆無でございます。ただ中心的な集落であります野口の方には5haちょっとですかね、まとまった圃場があって、そこは三十何年前に圃場整備もできており、もちろん段差のある棚田そのものなんですが、大きな機械での米づくりもできるようになっております。それも作り手が段々高齢化してくる中で、つい2、3年前までは集落内の耕作組合なんかをつくって耕作をなんとかしてきたんですが、高齢化してきてもうやれる人間がいなくなったということで、昨今は耕作を受託する団体をお願いをして耕作してもらっているような状態で、野口区の中では田んぼを耕作している人間はゼロになっております。徐々にではありますが高齢化、過疎化が進んできて、

高島市の中でも1、2位を争う高齢・過疎化の集落になってきました。そういう中で、平成21年だったと思うんですが高島市の水源の里振興室という部局の方から、「野口が高島市でも高齢化の先進地になっている。もう少し進むと高齢者がもう自分の家に引きこもってしまって全く集落という機能も果たさないし、活力もないようになる。何かここで一つ集落の活力を生むような活動を立ち上げてくれないか。」ということ再三要請されました。当時私も区の執行部でありましたので、1回か2回要請されたぐらいでは腰が重い。我々の仲間もそうですので、1回か2回言われたぐらいだったら「考えておきますわ」というようなことで済ませておったと思うんですが、再三手を替え品を替え人を替え、振興室は非常に熱心に勤めてくれました。そうしますと地区としても、長い間無視しとくわけにもいかないので、何か我々でやれることがないかなという相談をしまして、結果がそれでは60年ぐらい前に地区から消えてしまった炭焼きをもう一回復活したらいいのではないかという機運が盛り上がりまして、それがきっかけとなって炭焼きをやるかということになりました。その後また何回も集まりまして、おそらく2か月も3か月もかかって相談をしたと思います。場所については滋賀県と福井県の境界、昔の近江の国と越前の国の境に先ほど言いました3つの集落の一番北の端の国境という集落があります。そこに60数年前まで炭焼きをやっておられた窯の跡があり、そこを使わせてもらおうかということで、道路からも近くてちょっと整備すれば軽トラぐらいの車は入れるため、地主さんも周りの木も切って炭に焼いてもらったらいいよと言っていただけだったので、そこで炭焼きをやるかということになって「国境炭焼きオヤジの会」という名称を決めました。そして同時にどういう体制でやるかということになりましたが、これも直接区なりそういう地区で縛りをつけるようなやり方ではなくて、一応有志ということで、志のある者が集まってやるかということで地区の大半の人がご苦労になったわけがございます。「炭焼きオヤジの会」という名前をつけましたが、これはオヤジばかりの仕事ではないということで女性の方もたくさん入っていただきました。女性の方が活躍してもらおう場もいろいろ作って、大変女性の方にも活躍をしていただいたということでございます。それからもう一つはどういう願いで炭焼きを



やるか。一応活動の目標というものを定めようということで、4点ほど目標を定めました。

一つは地域の活性化ということで、地域といってももう大方高齢者ばかりしかおられませんので、老人一人世帯とかいろいろあって、引きこもりになりがちになるような人にも何とかきっかけを与えれば出てくれるようになるだろうということで、炭を焼いて経済的に潤って集落を活性化させようということは毛頭思わずに、高齢者が集まってワイワイガヤガヤ一つの仕事をすることによって、一つの形の活性化になるのではないかという思いがありました。もう一つは60年前に炭焼きはもう地区から姿を消したわけですが、炭焼きというものは一つの地域の文化であり、また大きな技術の積み重ねとかそういうものがあって、その炭焼きをすることについて炭窯を構築する技術、また炭を焼く技術というものを、我々も学んで身につけると同時に、できれば次の世代に文化・技術をつなげていけたらいいというのが二つ目の目的でした。そして三つ目としては、周りの広葉樹の林を持続可能な資源として活用し、後々も今と同じような植生の林で保っていこうかということが三つ目の目的でした。最後に四つ目には、炭焼きを通じて他の地方・地域の方々、また我々とは別の年代の方々との交流を非常に大切に、活発にしていこうかというような四つの願いを立てまして、それから12年間、今日まで炭焼きをやってきたわけですが、その間におきましては、いろいろな関係の団体また個人さん、ボランティアの皆さんに大変お世話になりまして、また励ましもいただき何とかここまでやってきたわけですが、今の時点になりますと、歳いってきたなという思いは強くなっています。そして炭窯そのものも対応年数と言いますか使用年数をはるかに超えている状態ですので、そろそろ幕引きの時期を迎えているのではないかなというふうに考えております。以上、また後ほど発言の時間が与えられましたら皆さんのご質問を受けながらもう少し詳しくお話をしたいと思います。ありがとうございます。

#### 【脇田氏】

ありがとうございます。そろそろ幕引きと言っているのは、もうそろそろ炭焼きを辞めようかということですよ。

#### 【北谷氏】

そうです。

#### 【脇田氏】

この高島の中で炭焼き復活のパイオニアですし、中心的な存在が辞めるとおっしゃったことに対して、関係者一同、私も含めてショックを受けているんですが、それはそれでまた地元の側の事情があるわけですよ。今、北谷さんのお話の中にも、集落の外の人たちにお世話になったという話がいっぱい出てきました。それから村の事業じゃなくて志を持った有志の人たちでやりましょう、それからいろんなみんなが集まって

楽しめる場にしましょうという、何か変に活性化というよりもそこに暮らす人たちの暮らしの豊かさとか幸せとかそういうものを育てていく仕掛けとして炭焼きがあったようなお話だったように思います。

続いてはNPO法人麻生里山センターの海老澤さんからお話をいただこうと思います。海老澤さんは外から入って来られて、ご出身はどちらでしたかね。

#### 【海老澤氏】

関東の茨城県です。

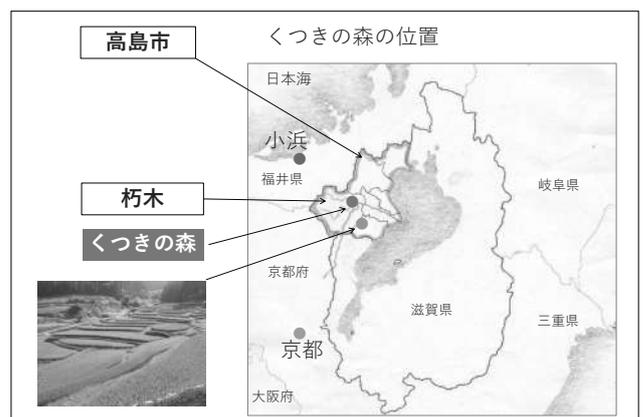
#### 【脇田氏】

それでは四十数年前に移住されてきてここでとうとう炭焼きをまた復活させることになった海老澤さんの方からお話を伺いたいと思います。よろしくお願ひします。

#### 【海老澤氏】

よろしくお願ひします。私は四十数年前に移住してきました。仕事があったからなんです、実は「くつきの森」という、今、高島市が所有している150haの森ですけれども、その前身が「朝日の森」という朝日新聞社が所有していた森でした。そこで山の管理人として働くことになったために移住しました。移住して初めての土地だったんですが、皆さんに優しく迎えられて今まで暮らすことができました。本当に感謝しています。最初移住したときに右も左も分からなかったんですけども最初に努力したことは、周りが山ばかりで、地元の人と同じ山を見て、同じような思いに浸れるようにしたいなど。だから村の先輩たちにいろいろ話を聞いたりするようには努力しました。炭焼きの話も聞いたり実際に見たことはあるんですが、自分でやってみたことはこの歳までありません。それでとうとう70歳を前にやってみようかということで、くつきの森に炭窯を復活させることになりました。

四つのことをお話しようと思います。くつきの森の簡単な紹介をします。二番目に残念な炭窯。一度作ったんですけど、失敗しましたという話です。そして三番目、炭焼きには原木がいるんですけどもこれも結構いろんな問題があるなという



ことで山づくりの話をしたと思います。そして四番目、最後にまとめとして、今働いているくつきの森、これからの森、どんなふうに考えていこうかなということをお話したいと思います。

くつきの森の位置ですけれども、棚田百選のある畑<sup>はた</sup>というところの山を越えると朽木地区に入るんですけども、このあたりにあります。日本海の小浜と南の方を結ぶ鯖街道というのがあり、その真ん中辺に位置しています。日本海まで車で30分、琵琶湖まで30分、京都まで1時間というような結構恵まれた位置にあると思っています。

NPO法人麻生里山センター

<地域の里山>  
草山・薪炭林・水田

↓

<朝日の森>  
1979年～2003年

↓

<くつきの森>  
2004年～ 高島市有林

▲  
地元有志がNPO  
2006年から指定管理



NPO 法人麻生里山センターと書いてありますがけれども、これは実はくつきの森を指定管理者として受託して管理者になって森を管理・運営している地元の団体です。麻生地区というのがくつきの森のすぐ近くにあって、そこの有志の人たちが中心になってつくったNPO 法人です。私もこのくつきの森の前身の朝日の森で働いていた関係からこのNPO でも手伝うことになりました。この麻生里山センターが管理しているくつきの森は、昭和40年が境ですね、その頃までは炭焼きもやっていたし、いろんな意味で山を使っていた地域の里山だった場所です。くつきの森の150haの3分の2は、実は昔は肥料にするための堆肥づくりのための草刈り山でした。残りが炭を焼いたり燃料にする芝を刈ったりする薪炭林。あと谷沿いに小さな田んぼが結構ありました。現在はそれぞれ全部草と荊山も木が生えたり植林されて山になりましたし、薪炭林も大きくなっています。水田はとうの昔に放棄されて水田跡には杉が植林されました。1979年から2003年まで朝日の森という時代がありました。都市部の子どもたちとか家族とかそういう人たちに森林に関わる機会を与えようという趣旨で始まった森です。私はその森を管理する方の担当で管理人として結構楽しくやっていました。ところが2003年に閉鎖になりました。私も現場の仕事がなくなって、しばらく東京へ出稼ぎみたいな感じで行ってましたけども、定年になって9年前に戻ってきました。それでくつきの森が2004年から。2004年はまだ高島市が合併してないので、当時は朽木村が、朝日の森時代にやっていたことを引き継ぐよということで購入してくれました。とても嬉しかったです。それが合併で高島市有林になって、そこを

ほっとけないなというので地元有志の人たちがNPOをつくって2006年から指定管理をしているというところなんです。この森では昔から炭焼きもやっていたので、明治時代くらい古い炭窯跡も点々と残っています。炭窯なんですけども、朝日の森時代にも2つありました。それは後の話にします。

### くつきの森の利用 森林環境を使って

- |            |                    |
|------------|--------------------|
| • 市内の保育園   | 里山あそび              |
| • 市内外の小中高生 | やまのご事業、教育旅行、総合学習   |
| • 企業       | 社員研修、森林貢献・地域貢献     |
| • 大学       | 調査・研究、ゼミ・実習        |
| • 余暇利用     | 散策・自然観察・キャンプ       |
| • 体験活動     | 森づくり、ものづくり、森林調査    |
| • ボランティア作業 | 毎週木曜日              |
| • 歩く       | 森林セラピー、クアオルトウォーキング |
| • その他      | 映画ロケ、CM撮影、野外結婚式    |

現在のくつきの森のことをお話したいと思いますが、現在いろんな受け入れをしています。保育園の子どもたちが森の保育園でもないんですけども里山遊びに結構使っています。市内外の小中高生が環境学習だとか教育旅行総合学習で使っています。企業も社員研修とか森林貢献・地域貢献ということで関わってくれたりしています。いくつかの大学が卒論の調査に使ったり研究に使ってくれたり、実習・ゼミなどにも使ってくれています。あとはレクリエーションというか余暇利用で一般の人たち、散策したり自然観察、キャンプ、これは団体のキャンプが多いですね。それから、森づくりとかものづくりとか森林調査、これは私たちNPOが提供しているプログラムで、来た方にいろんなプログラムを提供しています。ボランティア作業もあります。歩くこともできます。それからCM撮影とか映画のロケなんかもあります。

### 2020年8月 真夏の窯づくりでした

<参加者>

- NPOスタッフ
- ボランティアの方
- 過去のイベント参加者
- 呼びかけに応じた方
- 取材、ヒアリング



窯づくりですけれども2020年に始まりました。いろんな人たちに手伝ってもらって始まりました。

NPOの役員の中に炭窯を作った者がいたのでやってみようということになったんですけども、くつきの森としてはこれで儲けようというようなものでもないし教材とか体験施設

## やってみないと分からない ①技術の継承

- 以前の炭窯が壊れた
- 教材、体験施設として有用
- NPOの役員の中に炭窯づくりを見聞きしたものがいた
- 作ってみよう！
- 失敗！
- 再挑戦・技術習得



として有用かなと思って作ることになりました。結局失敗したんですけども、現在、再挑戦をしようと思っています。この挑戦がまた技術習得につながるのかなと思っています。

## 原木が手に入らない ②山づくり

- 木が太くなりすぎた



その中で原木がものすごく大きくなって、炭焼きには適さなくなっています。やっぱりちゃんとした原木林を作らないといけないということで、山づくりを考えることになりました。

## クヌギ山を育てる 子どもたちも参加



現在子どもたちなんかも巻き込んで、クヌギ山を育てることをやっています。15年くらい経って、もうそろそろ使えるようになりました。

現在もドングリを植えたり、去年は220本のクヌギを植えました。たまたま滋賀県で植樹祭があったためです。これもあと20年くらいすると使えるのかなと思っています。

一番左の写真はクヌギの木を下の方から切った跡です。すごい再生力があります。これをくつきの森のスタッフは「コピス」と英語でかっこよく読んでます。そして実験してるんですけど、

## 自然の再生力を生かす コピス & ポラード



シカがいるのであんなふうにくつきの森でやると食べられてしまうんですね。それで高い位置で切ったらどうかというのを一生懸命実験しています。真ん中の写真が上の方で切ったやつです。これを私たちは「ポラード」とかっこよく呼んでいます。一番右に、これは私の故郷の茨城県のクヌギなんですけども、相当古いものまでこんなふうな再生力があります。ぜひこのクヌギの森を将来に復活できたらいいなと思っています。

## 森の扉 ③人と森との橋渡し

<これまで>

- 地域の「入会山」のような存在だった森
- 朝日の森～くつきの森 40数年
- 都市部の方たちを森へいざなう「入口」の役目

<これからも>

- 余暇、自然あそび、学習、体験、健康、ボランティア……
- 保育園児・小中学生、家族、高齢の方……
- 地域を越えた人たちの「森の扉」に

森の扉と書いたんですけど、私たちの役目は、結局昔は地域の入り合いみたいな里山だったんですけども、それを閉じてしまわずにどんな人でもたくさんの人いろんな人が来てくれるような人と森との橋渡し役になっていれたらいいのではないかなと。私、朝日の森時代も含めてくつきの森の仕事をそんなふうな評価を自分ではしています。何かの形で入れるように、守っていくこと、そうすればいろんな人が来てくれて入れるようになりますし、これからも小さな保育園児からお年寄りまで来てもらえるオープンな森で維持したいなと思っています。

## くつきの森 “里山方針” —私たちNPOが目指すこと—

- ①里山の魅力をつたえる
- ②魅力ある里山をつくる
- ③里山に関わる仲間をふやす

最後です。私たちのくつきの森のNPOが目指すことを三つにまとめました。里山の魅力を伝えるという仕事をこれからも続けていきたいと思っています。そのためには炭窯というのを大きな力に、ツールになるんじゃないかなと思っています。二番目、そのためには魅力ある里山を作らないといけない。そのためにはやっぱり地域の者だけではなくて、もっと広い範囲の人、いろんな人に里山に関わってくれる仲間を増やしたいなと思っています。関わり方はいろいろです。利用でもいいし実際にボランティアで作業する。いろんな関わり方があると思いますがそんな仲間を増やしたいなと思っています。

少し長くなりましたが以上です。ありがとうございます。

**【脇田氏】**

ありがとうございました。朝日新聞社が教育のために作った森が結果としていろんな人に来てもらえる場所に、楽しめる場所にしていった。それが今もくつきの森になっても続いているということですね。集落の人たちだけでなく、いろいろな人たちがこの中に入ってこられる、そういう仕掛けに結果としてなっていて、そこが今、このクヌギの森の魅力を創り出しているというお話だったように思います。

「コピス」とか「ポラード」は何語なんですか。

**【海老澤氏】**

英語だと思います。

**【脇田氏】**

昔は20cmぐらいで切って炭にしていたのが、炭をやらなくなつて木がどんどん太くなつて。

**【海老澤氏】**

太くなって使いにくくなつてのと、あとはナラ枯れというカシノナガキクイムシという小さな虫が入り込んでクヌギの木を枯らしてしまうんですが、それがくつきの森にも入りつつあってちょっと怖がっています。

**【脇田氏】**

人が炭焼きで手を加えていることで森の学校が健全に再生されてたという側面があるわけですね。

**【海老澤氏】**

それはあると思います。とにかく昔は使ってました。

**【脇田氏】**

分かりました。ありがとうございます。三番目にお話をいただきます藤原さんです。雲洞谷に移住されてきた方です。よろしくお願いします。



**【藤原氏】**

よろしくお願ひします。雲洞谷にある「まるくもくらぶ」というところから来ました藤原です。

「まるくもくらぶ」というのはどういうところかという、まず朽木の雲洞谷というのは滋賀県高島市の先ほどのくつきの森とちょっと違う方向なんですけど、山の中にどんどん入ったところの標高600mの山の連なる谷間にある集落です。この集落はもう高齢化と過疎化がどんどん進んで、このままだと超限界集落、今でも超限界集落で、私が移住してきてちょうど7年目になるんですが、うちの家が一番若くて、子どもはうちの家しかもういない状態です。やっぱり集落をなんとか守りたい、田んぼを守りたい、山を守りたいという地域のお父さん方の願ひで、有志で「まるくもくらぶ」というのが出来上がりました。



まるくもくらぶで最初にやりだしたのが炭づくりです。

なぜ炭づくりをしたかという、朽木の炭は山村の暮らしを支える、本当に貴重な経済資源の一つでした。その炭窯をずっと集落の人たちは作ってきたんですが、やっぱり高度経済成長のときにもう一気になりました。一緒にまるくもくらぶで活動するお父さん方は七十代ぐらいになるんですけど、皆さん炭窯は作ったことがなかったんです。でも自分のお父さんの代と一緒に山に入って、この時代は山の中腹に炭窯を作って、山で切った木をその炭窯に入れて、火を入れて、その出来上がった炭を背負って下りてくるという生活をされてまして、炭窯に入れる木が周りになくなると、また違う山の中腹に行って炭窯を作るという感じの生活をされてたみたいで、

そういうことは皆さん経験がありました。でも炭窯づくりはしたことがなくて、まずそういう昔からある伝統をよみがえらせようということで、まるくもくらぶで2018年に初めて炭窯を作りました。82歳のおじいさまに聞きながら一から窯を作り上げて、その作り方は、まるくもくらぶのホームページに全部まとめて書いてありますので、また皆さんに見ていただけたらと思います。



### 山の木を切る

まるくもくらぶのお父さんにとっては、山の木を切ることは庭の手入れをする感覚と同じです。若いころからずっと続けている作業の一つであり、生活の一部でもあります。

今回はまず炭を作るときの手順を皆さんに見てもらおうかなと思っています。これは地域のまるくもくらぶのお父さんが山から木を切るシーンになります。私たちも連れて行ってもらうんですけど、足場が悪くて私なんかよく登れなくて。お父さんは20歳のときぐらいからずっと山の手入れを自分のお父さんとされてきて、木を切ったり山に登るといのは自分の庭を手入れするのと一緒に作業だと言いながらいつも山に登って、今も山の中から木を切る音が聞こえております。



### 木を運ぶ

この切り出した木を、まるくもくらぶのメンバーで山から転がして下ろしてくるんです。これがまたもうものすごい重労働で、うちの主人が一番若いんですけど一番役に立たなくて、地元のお父さん方がもうススッと、次そこ落ちるぞ危ないぞと声をかけながら山から木を運び下ろして、このように軽トラに乗せて炭窯のあるところまで運んでいきます。

今度はこの木を、ちょっと大きい木はお父さんが自分の斧で割ります。このようにちょうど炭窯に入れて炭にしてい大きい大きさに切り分けていきます。もうこのハンマーの重いこと重いこと。真ん中を狙うのなんてもう到底できないです。これはやっぱり熟練の技としか言いようがないです。私も見て圧巻でびっくりしてました。

### 木を割る



### 木入れ



今度は木入れになります。炭窯にどんどん木を入れていくシーンになります。中の人木が木を受け取って窯の中に縦に並べていきます。この並べ方にもいろいろ方法があるみたいで、私にはまだ分かってないところなんですけれど、多分北谷さんとかよく知っておられると思います。

### 火入れ



今度は木を入ると、まず蓋を全部して空気が入らないようにします。そして火を入れます。火を入ると、まずもくもくと白い煙がどんどん上がってきて、中の窯の温度がどんどん上がっていきます。2、3日経って中のものがちょうどいいぐらいに燃え上がると、今度は煙が青色になってきてそこから透明になってきます。その頃になると火を止めるタイミングらしくて、その時間が来るともう朝だろうが夜だろうが、夜であれば寝ずの番で、もうそろそろ火を止めないとあかんかなとか言って、ずっと煙の状態とか炭窯の熱さの状態を見ながらちょうどいい状態で蓋をします。



炭出し！

蓋して中を真空状態にします。

炭を7日くらい置いてちょうど引いてきた頃に炭出しの作業が始まり、これも中に人が入って中の炭を取り出してきます。うちが一番若いので炭出し作業をするんですけど、興味ある人にぜひ来てもらって、もう一人ぐらい一緒に入ってほしいと言いながらいつも作業をしています。出した炭をお父さんが大きさを合わせてのこぎりで切っていきます。それを袋に入れてちょうどいい箱に入るぐらいの大きさとかに切り分けて、秤で量って、米袋入るので、うちは8kg入れて作ってます。



出来上り！！

こうして炭が出来上がっていきます。これを「まるくも炭」と名付けて、欲しい人とかいろんな方に販売したりとかしてますけど、私から見たらすごく安いという値段で売っております。

まるくもくらぶでは、去年から炭だけではなくて休耕田になった田んぼを復活させようということでお米づくりも始めました。これが今、私が関わっているまるくもくらぶの活動になります。今、一連の炭ができるまでの作業を見てもらいまして、これがもう本当に昔からずっと伝わってきている炭を作る技術だと思うんですけど、本当にこの技術を次に、もう私ら若い者なんか絶対できないですし山の木を切るところからまず無理で、でもこれをやっぱりこのまま終わらしたくないと今すごく思ってます、でもこの木を切ったり割ったりできるお父さんがどんどんやっぱり年配になってきて、やりたいとか興味のある方がおられたら、それを学べるようなシステムをしっかりと作っていきなというの、今、私がまるくもくらぶで一番思っているところなんです。以上になります。

【脇田氏】

ありがとうございました。このまるくもくらぶのマーク、丸の中に雲と書いてあるんですけど丸は閉じていない。そのことの説明をお願いします。

【藤原氏】

お父さん方がまるくもくらぶという名前をつけたんですけれども、少しだけ丸が開いてまして、それは開いてるところからみんな入ってもらって、いろんな方とつながりながら皆さんが知りたいこと、自分が教えたいこと、そして自分たちと何か一緒にしたいことを、集落だけではなくていろんな人とつながりながらやっていきたいという思いを込めて「まるくもくらぶ」と名付けました。

【脇田氏】

ありがとうございます。このホームページもお持ちなんですけど、山の中の小さな山村なんですけど、立派なホームページで、この動画も全部藤原さんご夫婦で作成されたんですね。

【藤原氏】

そうです。動画は今までできなかったんですけど、子どもがYoutubeとかやってまして、子どもに教えられてなんとか作れるようになりました。

【脇田氏】

分かりました。ありがとうございます。地元の人に対する尊敬の念が動画から溢れてくるような感じがすごかったです。この技術と文化を上の方から継承されて、今も炭焼きを実践されていることに対する尊敬の念というかそれをすごく感じました。ありがとうございました。外の人との関係という意味では北谷さんも海老澤さんも藤原さんも何か共通している部分、それがうまくいってるかどうかはまた別ですけどね、そういう部分があるかと思っています。それでは是永さんお願いいたします。



【是永氏】

是永です。よろしくお願ひします。私は椋川という地域から今日来させてもらいました。

自己紹介すると私は鳥取県の米子市生まれで、2001年に椋川に移住してきました。こちらに来てからは農業とか林業とかの仕事のお手伝いをしながら地元の地域おこしの活動であったり、高島に来る前は不登校や引きこもりの若者の支援とかをしていたこともありまして、そういうような活動をしています。「結いの里・椋川」という団体は2008年に地元の方と任意団体ですけれども設立しまして、古民家を活用して交流活動を通じて地域の人の元気と地域の活性化を目指しています。



椋川を流れる川(寒風川)は日本海に流れます

椋川はこの丸のところですが、そのすぐ下の辺りがくつきの森ということになります。椋川は滋賀県なんですけど日本海側の水源になっていて水を流すと琵琶湖に流れずに小浜市(福井県)の方に流れていきます。



13世帯、23人が住んでいます  
(23人のうち、4人が我が家)

今の人口ですけど13世帯で23人が住んでおられます。これはもう24時間この村に住んでる人だけをカウントするとこういう人数ということになります。ちなみに23人のうちの4人が我が家ということで一大勢力を築いています。

自然の豊かな場所です。

日本海岸地帯の雪は大変で、これは2mぐらい雪が積もったときなんですけど、うちの女房が雪かきをしてるんですけど、どこにいるか分かりますでしょうか。もう家は潰れそうで大変なんですけどね。

椋川の地域ですけど、基本的に最近では農業が村の産業になっています。



炭焼きです。今日の分科会のテーマでもありますけど、椋川の地域も他の地域と同じように以前は全ての家が炭焼きの農家をされています。私がちょうど椋川に移住した頃は実際に炭をやっておられたのはこのおじいちゃんお一人1軒のみだったんですけども、森林組合とかに出荷されていました。僕も山仕事は好きだったので、このおじいちゃんに教えてくださいと言って手法を伝授してもらったみたいな感じで、そんなに何回も焼いたわけではないんですけどそういう形で教えていただきました。ただもう今はこのおじいちゃんも炭を焼いておられなくて、炭焼きでいうと村の地域の人でお宮さんとかの行事は今でもやってるのでそのために炭を焼いてる。数年に1回炭を焼くんですけど、炭をそろそろ焼こうかと言ったらみんなニコニコしながら集まってくるみたいな感じになっています。



麻糸(あさいと)

麻糸です。今は麻を栽培できていないですけど昔はこういう麻を使って糸を紡いだりとかしました。



機織り(はたおり)

機織りです。こういう暮らしの文化です。

サバのなれ鮓づくり



椋川は小浜から京都に向かう鯖街道の筋の一つの街でもあるので、鯖を使ったなれ寿司を作っています。

こういうような地域の暮らしの文化を生かしてまちづくりの活動をしているということです。

こういう豊かな自然の暮らしの文化を生かして毎年11月に「おっさん！椋川」というイベントというか収穫祭というか手づくりのお祭りを2004年から始めました。地域の暮らしの文化の取り組みが評価されて令和2年度ですけれども、「ふるさとづくり大賞」では「総務大臣賞」というのをいただきました。

そのお祭りですけど、こういう村全体を使って、それぞれの農家の軒先でそのおうちの美味しいものとか自慢のものを売って、そこでまた交流するというようなお祭りになっています。



参加者は車を降りて、地図をたよりに思い思いに村を歩いて「椋川」を感じてもらいます

公共交通機関がないので、ほぼほぼ皆さん車で来てくださるんですけども、車を置いて、手づくりの地図を頼りに村々を歩いて村全体を使った食べ歩きみたいな活動をしています。



この日ばかりは遠くに住む子や孫も村に帰って来て、おじいちゃん・おばあちゃんの活躍を手伝います。貴重な世代間交流の場になっています。

基本椋川にはおじいちゃん、おばあちゃんしか住んでいませんので、この日ばかりは遠くに住んでおられるお子さんとかお孫さんも村に帰って来られて、おじいちゃん、おばあちゃんの活躍を手伝うと、そういう世代間交流の場にもなっています。今日この紹介のときに移住者の役割というお題を脇田先生からいただき、このお祭りは2004年から始めてるんですけど、元々村の人もこういうお祭りをやりたいなと思っておられたんです。ちょうど僕がこちらに移住してきた頃は朽木の朝市というのがすごく賑わっていたので、一緒に山仕事に行くときに村の人があんなことを椋川でもできたらみたいなことをよく言っておられたんですけど、なかなか言い出しっぺがいなかったようです。そういうので、「やりたいんだったらやりましょうよ。」みたいな僕はもう軽いノリで移住者ならではのと思うんですけど、それで言い出しっぺになって、それでそこから始まったというか。移住者だから失敗してもできるかなみたいな、失敗しても大丈夫、まあ仕方ないな、あいつのやることだからみたいな感じでできるのかなと思います。もちろんこういう村ぐるみの活動を

しようと思うとやっぱりいろんなご意見の方が当然おられるので（うまくいかないことがあるかもしれませんが）、椋川の場合は地元のリーダー的な存在の方がすごく理解があるというか、私のような移住者がやることに対して応援したろうかというお考えがあったのでこういう形でできたのかなと思っています。

昭和40年頃	
54世帯	約300人
↓	
椋川に引っ越した頃(2001年)	
30世帯	約60人 (1世帯 1人)
↓	
現在	13世帯 約23人 (2世帯 5人)
過疎と高齢化はなかなか止まらない。	

とはいうものの高齢化はなかなか止まらなくて、元々300人ぐらいおられたんですけど、僕が椋川に来たときは30世帯60人ぐらいでした。今は13世帯23人で、本当にどんどん人口が減ってるという状況です。これも椋川に限らずにどこでもそうかなと思います。

山の活用ということで特に里山の広葉樹について取り組みを少しだけ説明させていただきます。

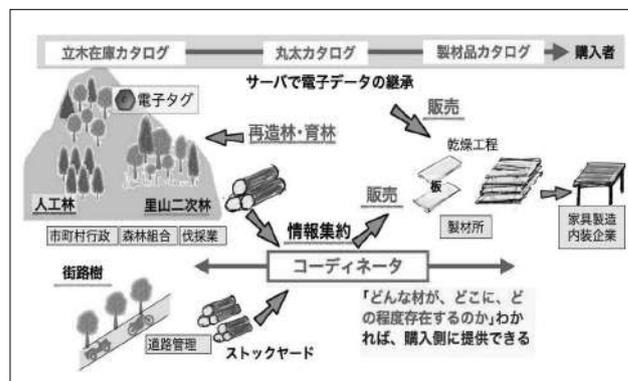
### シカの食害で山が荒廃



これは椋川の里山的な雑木林ですけど、これすごいきれいに見えますけど要は鹿が下草を全部食べてしまうのでこのような状態です。ぱっと見みると誰かが草刈りしてるのかなみたいな感じですけど、20年前に僕が引っ越してきたときは鬱蒼と笹藪だったのがもう今は笹が1本もありません。

山の木がお金にならないということは山に人が入らないから鹿が増えて、鹿の食害が増えて里山が荒廃していくというような悪循環があったり、先ほどナラ枯れの話を書いたときも海老澤さんもされましたけど、やっぱり炭がお金にならないから広葉樹を伐採しないと。雑木はどんどん大きく太くなって行ってそれがナラ枯れの一つの要因になっているのではないかな。これもやっぱり里山の荒廃の原因になってるかなということがあります。

では里山の雑木山をなんとか資源として利用できないかと。もちろん雑木の山、コナラとかクヌギもそうですけど、



そういう木を薪に使うとかパルプにしてしまうということもあるんですけど、そもそもやっぱり材として何か使えないかな、そういう仕組みがつくれなかなということ、神戸大学の黒田慶子先生という研究グループの方と協力しながらそういうモデル地区みたいなのをつくって、まだ動いてるわけではないですけど研究中みたいなことをやっています。



真ん中の若い子がドリルを持ってボタンみたいなのを木に打ち込んでるんですけど、あれが電子タグといってICタグになってるんです。あれを打ち込んでスマホでピッとやると位置情報とかが自動的に入力されて、あと木の樹種と樹高とか木の太さというのをそのときに同時に登録すると、この木がここにあるというのが登録されるというようなものです。今は結局なかなか広葉樹を活用できないというのが、広葉樹の材がどんな木がどこにどれぐらいあるか全然分からないから市場に流通しにくいということがありまして、こういうような要は資源管理をしっかりしてその情報をしっかり木を使いたい人に回して、それが木も流れるしお金も流れるし仕事も生み出さみたいなことになればいいなということ、神戸大学の先生とそういう連携をしたいと。こういう取り組みなんかを地域としても協力しながらやっています。以上です。

### 【脇田氏】

ありがとうございます。いくつもすごいと思うポイントがあったんですけど、一つは村のリーダーの方が是永さんの身元保証人というか受入の責任者というかちゃんとそういう人が

いて、結構心の広い人がいて、しっかりした人がおられて、それで村の人も納得してもらえらるという部分があるという。受け入れる側の仕組みと言いますか、人の存在というのが大きいんだなということをおっしゃったのと、あと先ほど藤原さんもシステムづくりとおっしゃってました。外からの炭焼きとか森林のことを学んでそれを仕事にしたい人が入ってこれる仕組み。まるくもくらの丸が切れてるところからいろんな人が入ってくる、そのシステムが必要だということなんですけど、今の是永さんのその電子タグでどこにどんな落葉広葉樹があるのかということのちゃんと管理して、それをいろんな事業者さんに届けられるような、これはやっぱりシステムですよ、仕組みづくり。森の価値を使いきれよう、人にもっと入ってもらえるような仕組み・システムをどう作るかということですね。海老澤さんの場合はそれを教育的なところでもう既に作っておられるというかお持ちなのかもしれませんけれども、外の人に何か関わりやすいその仕組みで地元の人がちゃんとそれをまた支える。何かそういう地元と外の両方の力が要るような気がしてきました。最後ですけども、坂下さん、よろしくお願ひいたします。

**【坂下氏】**

では最後に「たかしまの森へ行こうプロジェクト」について説明させていただきます。私自身 NPO 法人コミュニティねっとわーく高島の理事をしております。大津市の生まれ育ちで、夫と農業をしたいねということでも 17 年前にこちらの方に移住してきました、今、安曇川町というところで平飼いの養鶏とその鶏糞を使った循環型の農業をしています。鶏糞を使って野菜とブルーベリーを育て、平飼いの養鶏で卵を売りというのをしているんですけど、普段はコミュニティねっとわーくの方でフルタイムで仕事をしてまして、休日は農業をしているという生活をしています。

**NPO法人  
コミュニティねっとわーく高島**

【ミッション】  
だれもがまちへの想いを実現できる社会のために  
人と人、人と組織、市民と行政をむすび、  
持続可能な仕組みをつくる

NPO 法人コミュニティねっとわーく高島は、だれもがまちへの想いを実現できる社会のために人やいろいろな組織や、また市民と行政を結んで持続可能な仕組みをつくるということをミッションに活動しております。

二つの事業をしておりまして、一つは高島市民協働交流センターの運営を高島市の方から受託して行っております。

**たかしま市民協働交流センター**  
(高島市受託事業)

- 情報発信  
市民活動団体やグループを取材し、ネットや情報誌で発信
- 相談対応  
団体設立、助成金や寄付集めなど
- 協働促進  
多様な組織（企業、行政、教育機関、自治組織など）との協働をコーディネート
- 政策提言  
市民がまちの現状を理解し、持続可能なまちの仕組みを見つめるための機会や講座の開催

いろんな市民活動団体取材させていただきまして市民の方に情報発信をしています。またいろんな団体が法人設立をされたいときのサポートをしたり、また助成金や寄付金集めなどお手伝いしたり、そして協働促進ということで企業であったり行政であったり、あと教育機関など一緒に事業を進めていかれるときのコーディネートなんかもしております。そして最後政策提言と難しいことを書いてますけれど、要はこの町にどんな課題があるのというようなことを市民の皆さんと一緒に考えたり意見交換をしたりとかそんな機会を持っております。その中から出てきたのが「たかしまの森へ行こうプロジェクト」になります。

**たかしまの森へ行こう！  
プロジェクト(2016年～)**

【課題】

- ・高島市のびわ湖の水源地である豊かな森林が市民には遠い存在。
- ・森林を守り維持する山間集落の人口減少と高齢化
- ・持続可能な森林資源の活用と保全のために

【プロジェクト】

- ◎市民が森林へ足をはこぶ
- ◎市民が森林に関わる仕事を知る
- ◎森林に関する情報を市民につなぐ

【目標】

1人でも多くの市民が森林に関わる暮らしをする

こちらの仕事をさせていただいてもう9年目になるんですけど、9年前に市民の方々といろんなテーマについて円卓会議というのを持っておりました。その中で高島市の皆さん、この豊かな水源の森を資源だなど感じておられるんですけど、市民が森に関わるきっかけというのがなかなかないと、遠い存在だなどというのを感じておられるのも見えてきました。また森林を守り維持する山間集落がどんどん人口減少と高齢化が進んでいて、実際森の維持が難しくなっている。だから持続可能な森林資源の活用と保全、現在になかなかつながないところが課題として見えてきてます。そんな中で一人でも多くの市民が何らか森に関わる、森林に関わる暮らしをするということを目標にこのプロジェクトを始めました。

どんなことをしてきたかを簡単に写真でお見せします。まず山のガイドさんと山を歩いてガイドの仕事ってどんなことという



のをお聞きしました。

次に猟師に聞くということでシカやイノシシを捕っておられる猟師さんに森林の現状というのを聞く勉強会を開催しました。

それから今度は魚をとっておられる漁師さんとえり漁をしながら森林の荒廃と湖の変化について勉強会をしました。

そして釣った魚を漁師さんの指導のもとみんなで食べました。

それから朽木の奥で栃の実拾いと栃餅づくりというのをみんなで体験しました。

これは栃の実の皮をむく作業をお手伝いしています。

それから一つ、これも森の使い方だなということで、椋川の奥にあるキャンプ場でキャンプをして昆虫観察をしたりしています。

高島市内の製材所さんを訪問して高島産材で本棚づくりをするという勉強会もしました。こちらの製材所さんは高島の木をできるだけ使いたいとお仕事をされています。

こんな感じで本棚をみんなで作りました。

あと、台風でくつきの森さんでたくさん木が折れた時期がありました。それでボランティアを呼びかけて整備をさせていただくこともありました。意外と市外からもこんなお手伝いしたいというのが来られるというのが分かりました。

### 雲洞谷のお父さんに聞く炭焼き勉強会(2019年3月)

- ①炭窯・炭焼き技術への危機感  
80代のお父さんから60~70代の自分達が技術を継承しないと...
- ②持続可能な森林の活用と保全  
炭焼きによって森林の整備を続ける
- ③地域おこしへの可能性  
炭焼き体験や販売など地域外の人とのつながり

関心高い!! 20代~70代の参加者が市内外から

こんな勉強会を繰り返してる中で、先ほどお話いただきました雲洞谷で炭窯を復活したというお話をお聞きしまして雲洞谷の方とご相談して、ぜひその復活の経過、なぜそう

いうことをされたのかというのを勉強会でお話していただきたいということをお願いしました。このときに藤原さんが炭窯の作られる経過を全て写真で撮って記録を作っておられたので、こういった勉強会をすることができました。これが地元のお父さんだけだったら多分あんまり写真残ってなかったのではないかなと思うので良かったと思っています。ここでお願いいただいたのがとにかく炭焼きの技術がもう危機的だと。自分たちが今受け継がないと無くなってしまおうという思い。それから持続可能な森林の活用と保全。炭焼きによって森林を再生させていく。使いながら維持するというをしていきたいとおっしゃったこと。それから地域おこしへの可能性です。先ほども言われていた地域外の人を呼び込みたいということで、この復活をされたというお話をされました。私たちこの勉強会を滋賀県内にいろんな形で発信させていただきましたら、高島市内の人は半分ぐらいで、よそから二十代から七十代くらいの方が結構参加してくださりまして、意外とこの炭窯とか炭焼きに皆さん関心が高いんだというのが見えてきました。そしてくつきの森の海老澤さんから、「たかしまの森へ行こう」でくつきの森で炭窯を復活したいなというのを思っておられるというのをお聞きして、ぜひ一緒にお手伝いさせてほしいということをお願いしました。

### くつきの森で炭窯復活と炭焼き交流会

森林について体験と学びの場「くつき森」

- ・関心を持つ誰もが参加できる
- ・炭窯づくりを記録できる
- ・森の整備作業で材料がある

炭焼きで交流と活性化を

- ・市内の炭焼きグループのつながりづくり
- ・炭焼き関心を持つ市民を各グループへ
- ・炭で地域活性化している事例を学ぶ

くつきの森は森林公園くつきの森というのがフルネームでして、市民に開かれた学習や体験の場になっています。そういったところで炭窯を復活するということは、いろんな人が関わることができる。それで炭窯ができれば炭焼き体験とかも市内外から参加することができるし、子どもたちの体験の場にもなるということで広報などは私たちのセンターで、モノと場所はくつきの森さんでということで活動をさせていただきました。もう一つ狙いとしては、高島市内の今日ご発表いただきました炭焼きグループの皆さん高齢化しています。このグループさんが、どんな思いでやっておられるとかどんな状況にあるというのをお互いに知っていただきたいなということで、そういうことによって何か活性ができないかなということで、炭焼きの交流会などもしようということで進めてまいりました。

2019年9月から復活作業をしました。

市外の子どもたちも参加してくれています。



途中コロナで作業が止まったりもしましたが、やっと8月に天井の打ち上げ作業をしました。

そして10月には焼き固め、火入れの日を迎えました。

みんなで見守ってます。ここで天井が崩れないかとドキドキしていました。

そして初めての炭焼き体験。とても大きな炭窯ができましたので、中に詰める木もすごい大量で先ほどご説明いただいたようにたくさんのお木を詰めました。

そしてうまく焼けるか見守っております。

開けてみました。

灰になってました。

これだけ出てきましたという感じで初めて作った炭窯はとても大きくて、そしてひび割れとかちよっと空気漏れのところがあるんですが、こんなところで、初めてはこういう結果になってますけれど、またチャレンジしようというところにつながっております。

せっかく炭窯を作りますので、これを何かの活性化に使っていこうということで能勢の菊炭の里、大阪の方なんですけれど、そちらからお越しいただきまして、どうやって炭を使って地域活性をされているのかということも皆さんにもお集まりいただき、関心のある方にも参加いただいております。今年のお話は米原市の奥伊吹の方で地元の方々から炭焼き保存をしておられるところへ見学させていただいたり、そういったことをしております。

**炭の技術と文化をつなぎ  
地域へ人を呼び込む**

**ピンチ**  
炭焼きグループの高齢化のため  
炭焼き技術と生活文化の継承が危機

**チャンス**

- 相互のつながりと支え合い
- 外部から人材の受け入れ
- 炭を暮らしに取り入れる
- 「ここにしかないもの」を再発見、発信！

このテーマ、炭の技術と文化をつなぎ地域へ人を呼び込んでほしいと思ひやっております。今、ピンチです。今日もうやめますという声が出たんですけど、炭焼きグループの高齢化、それから技術と生活文化の継承はとてもピンチになっています。でもこれは私から見るとチャンスだなどと思っています。今までは自分たちの集落のメンバーだけでできていたことというのがあったので、よそから別に人が来てもらわなくても大丈夫だったんですけど、これからはお互いのつながり、それから外部から人を受け入れていこうという機運にもなるのではないかと考えています。それからよそから来た人、都会から来た人の新しいアイデアで今の暮らしにどうやったら炭を取り入れられるか、そんなことも一緒に考えていければなどと思っています。そして今日発表されていた方々、それぞれの地域にそれぞれの特徴があり、またここにしかないものというのがあります。そういったものもよそから来られた方だからこそその目で再発見し、そして発信することができる、そんな機会ではないかと考えています。

**コミュニティネットワーク高島は  
これからも  
炭窯づくりや炭焼き技術をつなぐ  
お手伝いしていきたい！**

「小さな林業の暮らし方を学ぼう」  
(2022年10月～)

小さな林業×グリーンウッドワーク  
小さな林業×里山の活用(炭、山菜、特殊伐採)  
小さな林業×山間集落の暮らし

私たちはこれからも諦めずに炭窯づくりや炭焼き技術をつなぐお手伝いをおせっかいながらしていきたいと思っております。もう一つ、炭を焼いて作るためにやっぱり木を切る技術とかいろんな形で木や里山のものを使うということが必要だなどということで、今年には小さな林業の暮らし方を学ぼうということでこれから講座を始めていく予定です。グリーンウッドワークは、それこそ広葉樹の生木から食器を作るような技術ですし、里山の炭や山菜や特殊伐採なども仕事になっていきます。そして先ほど椋川でもおっしゃっていただいたんですが広葉樹を資源として市場につなげていこうという仕組みを考えておられます。でも、木を切る人というのがもう地域にはやはり高齢化になって少ない。そういった形で通ってこられるような方、またここに住もうかというような方につながればなということなのでこの講座をしたいと思っております。以上になります。ありがとうございました。

**【脇田氏】**

ありがとうございました。5人の方のお話を伺っていて、結構何か新しいステージに行けるかどうかの今いいタイミング

なのではないかなというワクワクした期待感が気持ちで湧いてきたんですけど、北谷さん、四つの団体の方のお話を聞かれて、もう来年からやめますとっておられるんですけど、何か少し希望は出てきませんか。

### 【北谷氏】

皆さんのお話を聞いてますと、非常に向こうの方に希望が見えるような気がいたしますし、先生も昼休みの席で言っておられましたようにまだまだ諦めることはない、頑張ればと言われるわけですが、今までも私どもの方もいろいろ外部からお願いをしましたし、また積極的に外部から手伝ってやろうと励ましも受けましたし、そういう方に手伝ってもらってきたんですけど、今私どもがもう幕を引かないといけなかなと思ってることは、一つは地元の方がそういう外部の方を受け入れる力もなくなってきた。是永さんのように後継人になるので好きなようにやれよと言って任せられるだけの力もなくなってきて、私は文化なり伝統なりの炭焼きというものは、別に私らが今ここで幕を引いたから伝統が途絶えたというようなことにならない。現に私どもが炭焼きを始めたときにも先ほども申しましたが、60年前に炭焼きをやっておられた場所は土ばかりで炭を作っているわけですので、土も崩れて草が生えていて、窯の真ん中には大きな木も生えているような状態でしたが、そこを発掘という大げさですけども掘り起こして炭窯を作れたわけですから、今我々が炭焼きをやめても、もし将来我々と同じような気持ちを持って炭焼きを起こそうと思う方ができれば、それは起きてくると思うし、今無理にどうしても継続しないといけなものではないような気がします。私の方は、先ほど言いましたように水源の里対策室から再三要請されたので炭焼きをやったんですが、我々の子どもの頃は山ぐらいいか遊ぶ場所がなかったわけで炭窯も大きな遊びの場所の一つであって、炭焼きというものに非常に懐かしい思いを持っていた。そして炭焼きという言葉にも非常に思い出深いというか懐かしい響きを心に感じるようなそういう世代の人間がたくさんいたので、炭焼きだったらできるかなというような感じで初めたこととございます。そういうことで今炭焼きから撤退をしても、またそういう志を持った人が現れれば地元であろうと外の方であろうと本当に一からやるぐらいの気概でやってもらえばできるし、今のあるもののいいところだけを取って続けようかというぐらいの根性では、ちょっとできない仕事ではないかなというふうに思っております。

### 【脇田氏】

分かりました。ありがとうございます。外の方が来てても地元の方に受け入れる力がなければうまくいかないですよというご指摘はすごく大事ですね。椋川は是永さんを住まわせて村のいろんな実行部隊の隊長にして、いろんな活動の先頭を切ってもらおうような人を育てることをされてきたので、そここのころはうまくいっているという。外の人を迎え入れて育てるとか、

迎えるのにも力があるとか何か双方の力がうまく絡み合っただけで力が出るとかというところについて何かご意見のある方、当事者である是永さんに伺ってみたいんですけど。その時は必死だったのでよく分からなかったと思いますから、今から思えばというところで何かございますか。

### 【是永氏】

元々山のそういう暮らしが好きだったこともあるんですけど、よく田舎暮らしをするにあたって、例えば農業をしてないといけなとか、大工のちょっとした工作できないといけなみたいな、そういうスキルがないとそういう田舎暮らしは無理だとかいう話も聞くんですけど、僕は逆にそういうのは全然なくてあるのは好奇心だけ。それで分からないからこれ教えてくださいと、お味噌はどうやって作るんですかとか、わら細工はどうやってやるんですかというのをずっと、僕はそういうのは甘え上手だったというのもあるのかもしれないんですけど、逆にこうした方がいいでしょうみたいなやり方じゃなくて、下手に出るではないんですけど教えてもらう。その中で思いがいろいろお互いに交換することができて村の人も、是永ちょっと頼りないけど付き合っとうかみたいいな感じでいろいろ仲良くなれたかなと。あとちょうど僕は結婚した状態で入ったので、夫婦で入ったというのも一つ大きかったです。

### 【脇田氏】

わざわざ新婚夫婦が入ってくれて喜んでくれているわけですね。それで家族も増えて。

### 【是永氏】

そうですね。子どもが一人二人三人と増えてですね。

### 【脇田氏】

甘え上手というこれ大事ですね。言い方なんですけど、謙虚に話して、何も知らない私なんですけど、ぜひ教えてくださいというある意味謙虚な姿勢ですかね。

### 【是永氏】

向こうからしたら忙しいときに教えてというのも迷惑かもしれないんですけど、村の人たちもすごい面白がって僕に付き合ってくれたし、やっぱり村の元々のいろんな伝統的な暮らしを学びたい一心でした。下心があんまりなかったんですけども結果的にそうだったかなと。やっぱりよその地域では移住者は一切来るのはあかんみたいな感じのところもその当時はありましたから、そういう意味では僕が入るにあたって、地域のそういうリーダー的な方がおられて、いろんなご意見の方をまとめて受け入れてくださったかなというふうには思ってます。

### 【脇田氏】

ありがとうございます。藤原さんも都会の生活者であって

入ってこられたわけですね。何か農業をちょっとは知ってる  
とか、何かいろんなことをちょっとでもできるというか、全くない  
中で入ってきたのでしょうか。

**【藤原氏】**

私のところは、一から環境を子どものために変えるというそ  
の思いだけで雲洞谷の方に。とにかく人の少ないところに行き  
たいと子どもの願いを聞きながら雲洞谷の方に入ってきたので、  
実際田舎暮らしが好きとか田んぼが好きとかいろんなものを作っ  
てみたいとかそんなのは全くないまま、もう本当に引越しするぞと  
決めて1か月でもう朽木の山奥に来ました。そんな中でやっぱ  
り何も知らない私たちに隣の家のお父さんがいろいろ支えてくれ  
て、集落の方々やせっかく来たから畑でも作ってみたらどうかと  
言われて初めちょっとネギを植え、大根を植え、こんな苗もあるよ  
と言われて、そういうのをやってもらったならそのうちサルがいっぱ  
い来て、もうあなたのところにサルがいるからうちのところも来るわと  
言っている間にか囲いができてきて…。

**【脇田氏】**

囲いを作ってくださったんですか。

**【藤原氏】**

まるくくらぶのお父さんが全部囲いを作ってくれまして、サル  
の入らない畑を作ってくれたり、雪が多いときはどうしたらいい  
か分からなくて車が出せなくて、周りからみんな集まってくれて  
こうやって雪を掘るんやとか、屋根雪に気を付けないかかんと  
か、もう本当に何も知らないところからいっぱい教えてもらって、  
支えてもらって子どもにも「おはよう」とか、「どうや」とか声をか  
けてもらって、そんな中でやっぱり子どもたちも元気に育ってき  
ましたし、私たち夫婦ももうこの生活で、都会に用事を出て  
帰ってくるとほっとするんですね。もうここは自分が最後まで住  
むべき場所だなというのを去年か一昨年ぐらいに自分たちの中  
にストンと落ちてきた時期があって、そうなるとうどんどんいろ  
んなことが面白く思えてきて、「あなたなんかできひんで。」と言  
われながらも、栃餅はどうやって作るんですかとか、田んぼの  
水はこの時期に入れなあかんのかとか、いろんな情報をもらい  
ながら何もできないんですけど、ちょっとずつちょっとずつそうい  
う話を聞いていく中ですごく楽しいのと、人の暮らしの根本がこ  
こにあるんだなというのをすごく感じて、いろいろまだ何も学べ  
てないんですけど、ちょっとずつ学んでいきたいなと。きっと私  
みたいな人が世の中、都会に住んでる人とかでもいっぱいいる  
のではないかなと思って、そういう方にはそういう機会がなかな  
かないので、そういう機会ができたらいいなというのがすごく思  
いながら、せっかくいろんな技術を地域の方は持っておられる  
ので、それをつなげられたらいいなと最近思っています。

**【脇田氏】**

お子さんの希望を叶えるために雲洞谷にお住まいになった

けど、周りの人にそこに暮らし続けるためのいろんなサポート  
をもらう中で、ここが自分の終の棲家となった途端にこの集落  
で暮らすことの見え方が変わってきた、覚悟が定まったという  
ことで見え方が変わってきたという感じですか。

**【藤原氏】**

そうですね。覚悟はもうその時決まりました。それでやっぱ  
りここでいろんな人を呼び込んで、この集落をここで終わらせ  
たくないと思って、次の段階、次の段階というのを今、新た  
に考えるようになってきました。

**【脇田氏】**

すごく謙虚なお話なんですけど、北谷さんのところに伺った  
ときに、雲洞谷はうまいことやっているなど。うちにはできな  
いけどパソコンとかインターネットとかを女の人にさせて何か情  
報発信していると言って、それはどの人のことかなと思ったら  
藤原さんのことだったんですが、そのまるくくらぶのお父さん  
たちにできないこともされてるわけですね。

**【藤原氏】**

主人がIT関係に勤めてまして、やっぱりその情報発信と  
いうのはすごく大事だなと思って、お父さん方はお米を作るん  
ですけどこんな売れへんと言うんですね。めちゃくちゃ美味  
しいんです。うちの子はもうそこでできたお米と野菜以外は食  
べなくなるぐらいやっぱり美味しい。それをやっぱり売れへん  
ではなくて売る仕組みを知らないというか、そのサポートでき  
るところは私たちがさせてもらって、私たちの知らないところを  
お父さん方に教えてもらってというそういうやり方が一番で、私  
たちができるのはもうこんなことしかできないんですけど、そう  
いう形でちょっとずつ発信をしていっている最中です。

**【脇田氏】**

大事なヒントが今のお話の中にも是永さんのお話の中にもあ  
るような気がします。補助金とか助成金とかそういうことも必  
要ですけど、一番人々の暮らしのレベルのところでの付き  
合い方というか、何かそういうことも全とお二人のようにうまく  
誰もがができるわけではなくて、失敗している例もたくさん多分あ  
るのではないかなとは思っていますけれども、人をつないでい  
くこの仕組み、先ほど藤原さんはそういうシステムとおっしゃ  
ってましたし、是永さんは山の中で埋もれている価値、今はお  
米の話でしたけどそういうのをコーディネートして外につない  
でいくとか、それを坂下さんところのNPOの仕事とも関連す  
ることかと思えます。くつきの森は教育の場でも市民の活動  
の場でもあるので、くつきの森のようなものも仕組みも外の  
人とある意味教育とか自然を愛好する人たちがつながって  
いたりする場だと思いますし、外と内の人をつなぐ、それから  
内にある資源、大切なものを外に（発信していく）。坂下さん  
から経済的に価値をもたらすようにうまくしていくというその

仕組みのあり方について、何かご発言があればいただきたいんですけど、どうでしょうか。

#### 【坂下氏】

藤原さんも是永さんも集落の地元の方からは見えない価値というのを気づいて、これ大事だわ、これ面白いわと言ってご自身で学ばれたり、あるいは外へ発信しようというようなことを考えられたり、ずっとそこで暮らしている人にとっては当たり前のことになってしまっている味噌づくりであったりお米の美味しさであったり、そういったものをよそから来たものだからこそ新しい目で見て、「これって本当にすごいな。」と思うからこそ外へ向けて発信したい、自分もちゃんと習いたい、それで外の人にも伝えたいといったところが地元の元気にもなりますし、その方がその地域でずっと暮らしていく上でも地域の人たちにとっても、そういう価値があるのかという発見につながるので、そんな視点を持って入られたというのがいいのかなと思います。そういったところを拾い上げて私たちも外へ発信できればなと思っています。

#### 【脇田氏】

そこに住み続けるためのヒントとかコツがお二人の経験の中にはあるように思いました。ちょっと視点を变えて海老澤さんに伺っておきたいなと思うんですけど、広い意味での教育の場・楽しみの場としてくつきの森はあると思うんですけど、こういう森の関わり方というものが他の集落の雲洞谷とか椋川とかそういうところでも応用・展開することはできますでしょうか。くつきの森が持つるノウハウみたいなものを他の周りの在所の人たちが導入することはできますかね。またそれを応援することもできますか。

#### 【海老澤氏】

あまり考えたことはないんですけど、私個人では森の管理人という立場なので人が入りやすいとか使いやすい場所づくりみたいな空間づくりみたいなことは一生懸命力を入れています。利用の仕方は多様なので、特に最近の若い世代の人たちの使い方にはとてもびっくりするようなものも出てきたり、私たちでは考えられないような、例えば川原があって、とても心地の良い大きな木のある広場があって、こういう場所を使ってテントサウナとか、今一生懸命やろうとされていますので頑張っってやってよというふうに応援しています。あとうちの森の使い方でも撮影というのは結構あります。企業のコマースのロケとか映画のロケとかも含めて、あとはコスプレさんの隠れたメッカになっています。これも来るもの拒まずで使ってもらっていたりもします。場所づくりとなりますと多分釣りもそうで、さっき榊餅の話とかいろいろございましたけど、昔の知恵・技を今になかなか生かしていくのは難しい中で、こんなことがあったよというのを体験して知ること。知ることというのは本当に大事だと思うので、そういう機会を特に子どもたちとかには与えてあげたいなと思っていて、くつきの森では炭はなかなかまだ

成功してないんですけど、何年か前からやってるのが、昔から朽木の人たちはシナノキという木の皮を剥いで、そこから繊維をとって紐にするという文化があちこちでありました。そしてシナノキは自然に生えているんですけどわざわざ植林したりもしている。そういうのを今教わっており、ちょっとこの前もやったんですけど、そういうことも細々と続けたいなと思うので、みんなの持っている知恵や技というのを藤原さんみたいな人が拾い上げて発信するのはいかがでしょうかと思うんですけど難しいですかね。

#### 【是永氏】

よそとの連携みたいな話だと思うんですけど、結いの里もやっぱり村の人も少ないし、実際結いの里で何か企画してやると言っても企画是永、広報是永、実行是永みたいな感じでやってるんですよね。だから自分もそればかりではなくていろんな活動もしたりもしてるので、やっぱりそういう意味では企画の部分だけを別に全部が椋川で完結するのではなくて、よその団体さんが椋川の間を使ってこんなことをしてみたいんですけどみたいな、そういう椋川という場であったりとか場合によってはおじいちゃん、おばあちゃんに協力してもらってとか、山とか田んぼとか使ってもらったりとか、公民館を使ってもらってという椋川で完結しようと思っていなくて、どうぞ活用してもらってくださいみたいな、そういうやり方もいいんだらうなというふうにも今思っています。

#### 【脇田氏】

人材とかそれぞれの集落にはいろいろ技を持つてる方が、味噌づくりの名人とかがおられると思いますが、ご高齢の問題もあるんですけどそういう人たちが講師として、例えばくつきの森に行くとか逆にくつきの森で何かツアーを企画して椋川の方にみんなで研修に行くとかそういう連携もありなのではないかなと思うんですけどいかがでしょうかね。

#### 【是永氏】

それは良いです。そういえば以前ですけれども、今日も棚田の例で出ましたが棚田の畑地域の人と椋川の人で僕も畑の方にはいろいろ関わりがあって、畑の棚田の保全の活動にもお手伝いに行ったりしてるんですけど、わら細工の話になったときに、椋川のわら細工と向こうのもので全然違うんですよ。同じようなものは作ってるんですけど。同じ市内なんですけどちょっと離れてるだけなのにいろんな違いがある。これは実際におばあちゃんたちを連れて一緒にやってみたら面白いなと思って、椋川のおばあちゃんたちを大挙して連れて行って、畑のおばあちゃんたちと交流をしました。

#### 【脇田氏】

素敵な話ですね。

**【是永氏】**

そんな活動もやったりもしてお互いにこれが当たり前だったけど違うんやみたいな発見があったりして面白かったです。

**【脇田氏】**

そういうことができるのも、移住者の人たちの力なんですかね。地元の方が集落を超えて他の集落の方と連携するということはあんまり聞いたことがないんですけど、だから集落をまとめてその中でしっかり継承していくというお話は北谷さんのお話の中でもちゃんと伝わってきたんですけど、集落を超えて何かお付き合いする、支え合うという。北谷さんはよその窯のことが気になって、80歳で自分の車を運転して心配して覗きに行っておられるじゃないですか。何か情報交換したりアドバイスしたりということも含めてなんですけど、何かこの集落を超えての人の支え合いみたいなのは可能でしょうか。それか先ほどからおっしゃってるシステムとかコーディネートということにつながっていくような気もするんですが、どなたでも結構ですけれど最後にもう時間があまりないんですがご発言いただけますでしょうか。

**【北谷氏】**

うちの目的の一つは他の地域とも他の世代の人とも交流を進めることを大きな柱にしてきたわけで、是永さんがおっしゃった畑地域と交流というようなことは非常に羨ましいぐらいですが、うちの現状を考えますと、とてもじゃないですがそういう力はもう今は残ってないと。非常に苦しい思いというか悲しい思いを持って今お話してるんですけど、そういう力が今は残っていないということをお伝えしたいと思います。

**【脇田氏】**

私は寂しいなとちょっと思ってるだけで、ただ先ほど北谷さんが今、自分たちでこれを終えてもまたきっと人は現れるのではないかということに何かすごく希望を感じますし、先ほど言ったコーディネートする力とかそれから人を呼び込む力とか内と外の間で団結があると、もう少しうまく何か組織ができると、国境のような人が絶えてしまうということもなくなるとかもしれないと思うんですけど何かどうぞご発言ください。

**【藤原氏】**

朽木もいっぱい集落があるんですけど、つながりがもうないんです。お父さん同士が隣の集落に助けを求めに行くとかいうのは全くないんですけど、代わりに私みたいな女子が他の集落の人とつながって、ここの集落の人こんなこと言ってたけどどうやろうと、ちょっと一緒に行ってもらったりとか見てもらえないかなとか言うと、スッと一緒に動いてくれたりとかするんです。もう一点は、やっぱり移住者というのが大きな強みであって、よく「あなたはよそ者やから。」と言われるんですけど、私にとって「よそ者」というのは褒め言葉だと思ってまして、「よそ者やから

私はできるんです。」といつも言うんです。「いろいろなしがらみがあつてうちは動けないんや。」とやっぱり集落の人はよく言われてまして、でも「あなたはよそ者やからできるやろ。ちょっとあなた行っておいで。」とよく言われるんです。

**【脇田氏】**

上手に使われてる感じですね。

**【藤原氏】**

そうなんです。でもそうやって使ってもらえたらいいかなと思います。そういうしがらみが何もない分、やっぱり動きは軽快にいけるので、どんどん言っていただいでちょっと私聞きに行ってくるわという形で上手に集落の人も使ってもらえたらいいかなというのは思います。

**【脇田氏】**

分かりました。ありがとうございます。坂下さん、全体をNPOの立場から概観してというかご覧になっておられる立場かと思うんですけど、最後に何かそういうお立場からこのシステム、仕組みづくりというところに何かもう少し踏み込んだ発言をお願いしたいんですけどいかがでしょうか。

**【坂下氏】**

私もその仕組みをつくりたいと思って少しずつ動かしていますが、本当に今地元にも力がないとおっしゃっている。でもくつきの森で炭窯を作られるんだったらちょっとサポートに行きたいなという思いも持っておられる。こういったつながりというのをできるだけ自然に発生するのもいいですし、みんなで一緒に勉強会をするのもいいですし、そういう機会を、顔をもっとつなぐ機会を作っていきたいなと思いますし、お互いもうしんどいや、あるいはこんな力がほしいんやというのを言い合えるような関係性ができるような場を持てればなと思ひながらお聞きしました。

**【脇田】**

ぜひよろしく願います。愚痴を聞いてもらうのは大事ですよね。それで心が少し軽くなる場所がありますからね。分かりました。

今日は5人の方にいろいろすごく含蓄のあるというか、実体験に基づいたいいお話をたくさん聞かせていただきました。今日ご来場の皆さんのそれぞれの地域での活動の何か役に立つヒントを与えることになればいいのかなと思いますし、これからの高島のこの炭焼きとか森づくりといいますか地域づくりといいますか、このネットワークの展開を期待していただけたらなというふうに思います。今日はお聞きくださいましてどうもありがとうございました。本当はフロアからも質問とかいただきたかったんですけど予定の時間を過ぎてしまいました。10分と最初言っていたんですけどみんないっぱい話しますからなかなか難しいですね。

**【参加者】**

先ほど映像の中で京都に1時間、日本海に30分、琵琶湖に30分というご説明がありました。お客を呼ぶには持って来いの場所だと思います。そこで、冬場の参考にさせていただきたいのは、かまくらを作って冬場をかまくらの中でシカの料理をする。そういうお客の呼び方もご検討いただければと思います。

**【脇田氏】**

どちらにお住まいですか。

**【参加者】**

長野県です。

**【脇田氏】**

長野県は高速道路を使えば早いです。ぜひそちらの村づくりの

ノウハウをこの高島に伝授していただくと。かまくらという発想なかったですよ。びっくりしました。作ってるんですか。

**【参加者】**

いや、雪が2mもあるということですので。

**【脇田氏】**

先ほどもネガティブな話しか豪雪では出てこないですけど、そういう観光にポジティブに使うということですよ。ありがとうございました。

時間が5分過ぎてしまいました。司会の不手際でこんなことになってしまってるんですけども、ご満足いただけましたか皆さん。今日はどうもありがとうございました。



## 第3分科会

テーマ

### 「棚田を囲む“暮らし”を感じる ～農山村の魅力体験と移住促進～」

■ コーディネーター



龍谷大学経済学部教授  
にしがわ よしあき  
西川 芳昭氏

■ 話題提供者 (パネリスト)



マキノ町森西区  
みおもり せいざぶろう  
峯森 清三郎氏



マキノ町在原農業組合  
ふくい あさひこ  
福井 朝登氏



みなくちファーム  
みなくち あつし  
水口 淳氏



宿泊施設オーナー  
おがわ たかし  
小川 太賀司氏

#### 【西川氏】

龍谷大学経済学部の西川です。不慣れですが、「棚田を囲む“暮らし”を感じる～農山村の魅力体験と移住促進～」というテーマで今から2時間前後の時間を4名のパネリストの皆さんとお話を進めさせていただきたいと思います。私自身棚田サミットに参加させていただくのが22年ぶり第6回以来なんです。非常に自分自身が勉強することも楽しみに参加させていただいています。22年前の棚田サミットのときは、フィリピンのイフガオの棚田の保全をされてる方を日本に招いて福岡県の当時浮羽町・星野村で行われ、そちらの棚田との交流に裏方で参加させていただいて、それ以来棚田のことに興味を持ちつつなかなか学ぶ機会がなかったんですけども、今回高島市さんご縁がありましてこういう形で皆さんと一緒に暮らしの魅力について、そして移住について考えさせていただきますことを楽しみにしております。進め方なんですけれども最初に4名のパネリストの皆さんに簡単に自己紹介のような形でさせていただいて、2巡目に魅力のこと移住促進のことについて具体的にお話をさせていただけたらと思います。1時間ちょっと過ぎたあたりでこんな質問をしてみたいとか、私たちこんないい事例を知ってるよというのがありましたらご発言の用意をいただけたらと思います。それではそれぞれ皆さんの方から自己紹介をさせていただけたらと思います。最初に峯森清三郎さんの方からご発言をお願いいたします。

#### 【峯森氏】

皆さんこんにちは。マキノ町の森西という棚田から来ました峯森清三郎と申します。基本は農業をやっておるんですけども、ミネモリサンチという名前をつけて体験型というような農業の収穫体験とかそういうことをして、かれこれ約10年経ちました。でもいろんな農産物を出してもやっぱりコロナで直売所の来客数が減る。作ってもやっぱりお客さんが来ないと売れない。じゃあ家でそれを使おうというふうな発想して、小さな小さなカフェを始めました。うちで出すカフェはもうとにか家で採れたもの、いわゆる乳製品、肉、調味料以外は全て

うちのものというコンセプトですとずっとやっております。今日も朝から来られたお客さんは栗拾いに来られました。僕はプライベート栗拾いと言って一家族だけでゆっくりと栗を拾って、そういう形で全て自分のところでオーガニックの野菜、米、花、そういうものを使っての提供。そんな頻繁にはないんですけども、帰りにカフェに行ってこの野菜くださいと味見して喜んで買って帰ってもらえると、そういうカフェをやっております。先生が移住ということをおっしゃられたことで今ふと思い出したんですが、私が10年前にそのようなことをやったときによく「移住者ですか。」と言われたんです。「どこから来られました。」と。「いいえ、私は学生のときは出てましたけどそれ以外は生まれも育ちもマキノです、ここです。」と。移住者ですかと、本当によく言われたんです。ということは地元の人はこういう発想がないというふうに見ているんだろうなと。だから観光農園とまでいきませんがそういうことをしたり、オーガニックをしてみると街から来たちょっと変わり者みたいな、そういう人がするというイメージがあったのかなと今先生のお話で移住という言葉聞いてふと思い出しました。でもやっぱりそこには生まれてからずっとそこで生活しておりますが、棚田というのははっきり言って農作業には不便なところです。もう田んぼの草刈りは斜面があまりにも大きいので、うちの区では大きなユンボの先にモアをつけて刈ってるんですけど、それが下まで届かない。ユンボのアームを伸ばしても半分までしか届かないというような斜面がいっぱいあります。しかもそれも道のそばの斜面しか刈れませんよね。田んぼ植えてるので中まで入れませんよね。もうそれに今年ちょっと負けました。とういうふうな非常に活動とか生産しにくい場所で、ただ棚田というだけあって、勾配があって麓の山の奥まで行けば琵琶湖が一望と、そういうロケーションが何か生かせないかなというふうなことも今ここにおられる人たちともいろいろ相談をしております。私たちが平日頃見ている感動も何もしないものを、街から来られた人は見てほっとされるんですよ。だから僕が一番嬉しかった褒め言葉が、ここはゆったりした時間が流れてると言われたのを未だに覚え

てます。田んぼや畑をウロウロされてるだけです。うちペットのヤギやらウサギやらおるんですけども、エサでワーワー言ってるだけで流れる時間が違うねと。あつ、街から来られた人はそういうもんなんだと。だから最近はそのようなこともちょっと頭の隅において決して急かすわけではなく、「もしよろしければ後はどなたもおられませんのでご自由に。」と言いましたら、お昼ごはん食べて夕方4時、5時まで喋っている方もおられました。ましてこんなコロナのときだから相席もないです。ゆったりして、そういう時間が売れるというか求めておられる。それにきちんとこちらが応えていけばいいんだと。別に変わった美味しい料理だったら街に行ったらいくらでもありますよね。でもこちらに来たらおにぎりのみそ汁とサラダでのんびりされて、よかったと言って帰ってもらう。そういう提供の仕方もあるのかなと思っております。長く喋りましたけれども移住ということから考えて、地元でそういうことをこれからやっていきたいなと思っております。よろしくお祈りします。

#### 【西川氏】

峯森さんありがとうございます。ミネモリサンチというカフェをされていると。それでカフェを開いたときに「移住者ですか。」ということ聞かれたと。そういうのが地域の状況というんですか雰囲気語ってくださっているのかなと思います。

続いて福井朝登さん、自己紹介をお願いいたします。

#### 【福井氏】

皆さん初めまして。マキノ町の在原というところに住んでます福井と申します。よろしくお祈りします。マキノの中でもかなり北の標高が340mという本当に山の中の山村に2002年、20年前に移住してきた者です。元々大津市に住んでました。仕事は建築の設計事務所を構えて働いてたんですけども、田舎暮らしがしたくてということいろいろ探して縁があつたどり着いたのが今の在原というところ。僕20年間ずっと住んで、毎年冬になると思うんですけど、もうものすごい豪雪地帯で2m、3mという雪が積もるような地域です。にもかかわらず毎朝滋賀県の事業という形で除雪車が道をしっかり開けてくれる。5kmの道のりなんですけど毎朝きちつとスクールバスとか仕事に行く人が朝7時には出れるように、ものすごい大金の税金を投入して、わずか40名もいないような小さな村のために冬ごとに道を開けてくれるという。下に住んでる人たちから「なんであんなところに住んでいるの。」と言われますし、みんな下に住んだほうが税金も無駄遣いにならないのになとかいう気負いをずっと抱えながら。でも僕はあそこで生活というのがすごく大好きで、今日この棚田サミットというのに来させてもらって朝から話をずっと聞いてて、国を挙げて応援してくれているのかなというふうに、自分なりに住んでいいのかなというちょっと肩の荷が下りたわけではないですけど、ただずっと何もかも行政におんぶに抱っこで生活するのではなくて、やっぱり住んでる僕らが元気にそこで生きていく

ということがやっぱり大事なことなんだろうなというのは改めて考えさせられましたし、こういう棚田地域に住むということが、巡り巡って何か世の中のためになつてくるような気になつて今日でした。僕は20年間普通にというか兼業農家ということで、外に働きにも行ってるんですけど、毎年どなたかお年寄りが亡くなられてとどんどん人も減って、本当に役員のなり手も同じ顔ぶれがずっと何年も続いて、僕も今、農業組合長を10年目とかそういう感じで、いよいよ今後10年後どうなるのかというところを今更ながら気づいてしまつて、このままではいかんということでは原という山奥の集落の暮らしを体験できるような、そういう施設を開設すべく今年から動き始めてるということです。いろいろ農業的な暮らしもそうなんですけど、僕は建築方面の仕事をやりましたので、田舎暮らしのハードルとして住むところというのがすごく大きいと思うんですけど、古いボロボロのそういう家なんか自分で直したりするようなそういう改修塾みたいなものを今月から始めていくんですけども、そういう形で田舎暮らしに興味がある人の衣食住の住の部分で何か体験することで、何か身近に感じてもらえるようなことを続けていけたらということと、農業的なことであつたり、地元の豊かな資源を使った何かを皆さんにいろんなことを提供できていけるようなそういう事業をこれから始めていきたいという感じで今やっております。今日はよろしくお祈りします。

#### 【西川氏】

福井さんありがとうございます。今日4人のパネリストの中では移住者といいますが外から入ってこられた方は福井さん1人ですので、その視点での発言をまた後ほどお祈りしたいと思つています。続きまして水口淳さんお祈りいたします。

#### 【水口氏】

皆さんありがとうございます。みなくちファームの水口と申します。



僕は今この両脇におられるお二人がずっと農業をされてるマキノ町森西というところの出身で、でも僕は次男だったので早くにこのマキノ町というところを出て隣町にずっと住んでたんですけど、34歳のとき、今から9年前に農業するためにマキノ町に戻ってきて、今この「みなくちファーム」という農家を営んでいます。



経営作物としては野菜がメインで水稲、イチジク、これを今、棚田と言われてるところで栽培しています。それとあとは大豆、このマキノ町の特産品である原木シイタケ、こういうものを栽培して地域の直売所と県外、主に東京ですけど飲食店に向けて販売しています。



これがさっき言ったマキノ町の特産品の原木シイタケです。自分のところで作ってる大豆とお米を使ってこういう味噌の製造・販売とかもやっています。



これが森西というところなんですけど、みんなで稲刈りのイベントをして稲架掛けまでするというイベントです。ここにおられる両脇のお二方にも協力してもらって、本当に地域の方に助けてもらってこういうイベントもやっています。

僕が就農したときは妻と一緒に夫婦で新規就農という形で始めました。おかげさまで順調に大きくなってきて、いろいろな人に野菜を買ってもらって喜んでもらえて最初はやっぱり

ビジネスとして入った農業がいつのまにかどんどん好きになっていって、やっぱり好きになっていくとどんどんまたお客さんも増えて作る面積も大きくなって、またそれに応えるために面積を大きくしていく。ずっとその繰り返しでやってきました。



農業を始めたときに、峯森さんのご紹介で農村の中を馬と歩くという経験をさせてもらって、そのときに自分がちっちゃい頃から見えた景色と違った農村の風景というのを見ることができて、あと農業を始めたときからずっと妻といつか馬を飼って自分たちが馬の上に乗って農村の風景の中にいたい、それをいつかお客さんに経験してもらいたい体験してもらいたいと、それをずっと目標にやってきました。農業を始めて9年目にやっと馬を飼ってそういう体験を提供できるというところまで実現することができました。今年からは妻はこのみなくちファームとは別の会社で別事業としてこの馬の観光事業というのをスタートさせています。



うちは原木シイタケを栽培するときに山の中の広葉樹を自分たちで切ってきてそれを栽培に使うという林業的な、昔ながらの木こりみたいなことも仕事としてやってるので、森林というのが荒廃していているというのをひしひしと感じます。それを防ぐために、本当にささいなことなんですけど、ドングリから苗をつくって木を植えていく、人の手を使って維持し続けるしかないのではないかなという思いで「森の実験室」というグループを作って植林活動もやっています。以上です。また詳しいことは後ほどよろしくお願ひします。

## 【西川氏】

水口さんありがとうございます。企業としての農業ということをしてながら、また乗馬体験それから里山の管理というようなことについてもお話をいただきました。ではお待たせしました。小川太賀司さんよろしくお祈いします。

## 【小川氏】

小川太賀司といいます。よろしくお祈いをいたします。私の仕事としては宿泊施設のオーナーという形になってます。場所の方は明日行かれる方もおられるかと思うんですがメタセコイア並木から歩いて5分ぐらいのところにあるペンションを経営しております。それと農業の方もちゃんとやっておりまして、水稲とブドウとか果樹ですね、あとみなくちファームさんと同じようにシイタケなどをやっております。ペンションの中においてペンションの仕事をしてるといろんなお客さんに会えるんですよ。その中にやっぱり田舎暮らししてみたいよねとか、移住してみたいよねという人の声をたくさん聞いている中で、ずっとペンション経営をしていて、どうにかしてこの人たちのサポートができるといいかなと思ってそのサポートができるような形で進めています。その中の一つがうちのペンション6時間働いたら宿泊料タダで泊まれるんですよ。その6時間で農業体験してみないかということをしてみたい、今でしたら学生さんが普通に泊まりに来て超格安の価格で泊まっていったりされます。そういうことをしていると、こういうこともやってみたいということがいっぱい出てくるので、そんなことになる、「みなくちファームさん、ちょっと一人働きたいと言うので、ちょっと働かしてくれへんやろか。」というような仕事を振ったりをするんです。お客さんを田舎暮らしに誘い込んで、他の人にお祈いをするという形をとっています。それで私の主な仕事がそこになると、あと趣味でもないんですけど狩猟。元々シカとかイノシシを駆除する、捕ったりするということもやってまして、意外と田舎暮らししたい人は狩猟がしたいという人が結構いるので、その中で結構話が合ったりする。実は私こんな免許を持っていますという人も結構いるので、「今年からやってみないですか。」と言うと、「やります。」と言って、今年の多分11月1日ぐらいには登録が取れるので、マキノの山でわなを掛ける方が出るのかなと思っております。私の狩猟に関するこれが棚田とかいう話ではないのかもしれませんが、狩猟をすることによって私らとしては獣害が減る。そうすると、田んぼとか畑が作れるようになるという話です。それで移住した人はシカやイノシシを捕ります。それを捌いて肉にして食べるということまでできるんですよ。ということを一連でしようと思うと、なかなか猟師さんだけでは無理ですし農家さんでも無理ですし宿泊していても無理ですということなんですが、これを一緒にやっていると意外とこれができる。わなを掛けるところから捕るところまで、ものを作るところから売るところまでができるような形がうちのペンションになるのかなと思ってます。ペンションに来て、西川先生も他の方もそうなんですけど、みんな聞いてきてくれるん

ですよ。僕たちこういう思いで農業をやってます、ペンションをやってますというのを聞いてくれるとついついよく喋るので、もし何か興味があるんでしたら一度ペンションに泊まりに来てもらって、ゆっくり喋ると田舎暮らしであったり狩猟であったり、移住というのかどうか分からないですが、最近移住の感じも変わったんですけど、二拠点生活をされてる方もずっとうちに来てもらっていたりしますし、そういういろんな人を受け入れる体制は、僕の中ではちゃんと整ってるとまでは言いませんけどちゃんとできると思うので、もし来ていただければその辺の説明はいっぱいしますし、そんなのでよければ一度来ていただけるといいかなと思っております。よろしくお祈いいたします。

## 【西川氏】

小川さんありがとうございました。私もお邪魔して、私は結構なもんですから気を遣ってお酒なしで4時間、5時間延々とお話をしてくださるので楽しくて私はリピーターになってるんです。狩猟を含めて里山の管理、先ほど人の手をかけていくというお話が水口さんの方からもあり、いろんな側面から4人の方の自己紹介をしていただけたかと思ひます。全てがもちろん農業と棚田に関係するんですけど、峯森さんのところはカフェを通じた「食」というものが少し特徴的なのかなと。福井さんは古民家を修理したりという「住」というふうなことも含めて考えていらっしやると。水口さんのところは農業法人としての農業生産というのが中心ですけれども、体験それから今も言いましたけれども森の管理ということにお世話になっていると。小川さんのところはペンションですけど交流というふうなことが中心になりつつ狩猟も関連して狩猟免許を取りに来るといふ若い方もいらっしやっており、そのような形に活動が広がっていつてるのかなと思ひます。そのようないろんな営みの中で棚田の魅力、またこの中山間の魅力ということについて考えながら活動していらっしやるのかなと思ひます。

2巡目ですけれども、今できるだけ端折ってくださいというふうにお祈いしたので、もう少し詳しく皆さんの活動の中で農山村の魅力体験、または魅力発信というようなことにつなげて少し具体的にまたお話しいただけたらと思ひます。同じ順番でお祈いいただいてよろしいでしょうか。峯森さんの方からお祈いします。

## 【峯森氏】

そこに住んでいると、その魅力というのが非常に分りにくいんですよ。もう慣れてしまつて。冬になったら雪が積もつてというのが当たり前ですし、街から来られるとちょっと積もつてだけでびっくりされますし、やはり自分の魅力を発信ということは自分がそれを見つける目を持っているかなというのを最近つくづく思ひます。自分が感動しないものを人に与えることはできないし、先ほど言いましたけれども、やはりうちの野菜は収穫体験に来られたらハウスの中で味見してもらうんですよ。僕はよくお客さんと喋るんですけど、お肉とかハムとかいろんな

ものは試食コーナーがあって美味しかったら買えますけど、なんで野菜は試食コーナーがないんだろうと僕はいつも思うんです。見た目だけではなくて味でやっぱり選んでほしい。それを気に入ればすごく好意的に買っていただけますし、それに自分がやっぱり惚れてない人には勧められないなど。今ここで作っているこれがやはりすごく魅力のあるものだなと、自分が好きなものだなと、食べて美味しいんだよというのがあって笑顔で自信もってすすめられるんですね。それが棚田で作ってるお米であろうと流れる時間であろうと景観であろうと、そういう見る目を養うというのは、僕は本当に外から来られた人にみな教えてもらいました。そういう地域の魅力というものが自分で感じて、うれしいな、ここからの見晴らし良いなと思うとやっぱり外の人に自信を持って喋れる。そうしたらやっぱりそれを共感してくれる人もいます。10人中10人とは言いません。やはりその価値観は人によって違いますから。でもそれで来られたお客さんから教えてもらい、こちらからも与えるものがあり一球一球という関係で10年ほどやってきましたけれども、これからもそれが持続できたらなと。先ほど、「移住」という言葉がありましたけれども、決して田舎はいいよとは言いません。先ほど隣の福井さんがおっしゃったように僕らでもあそこすごいなと思うところなんです。雪も多いし山の道はもう僕らは冬でもちょっと怖いなというところに住んでおられる。当たり前なことだけど。でもそこに生活している者がいるということは、そこに何らかの魅力があるんですね。だから街から単に移住で田舎いいですよと、そんなきれいごとを言って騙して連れてきてもおそらく無理だと思います。よく別荘地に来られた方は2、3年の雪を経験したら帰っていかれるという笑い話がマキノにはありまして、感じてもらうメソッドを考えればやはりその受け取り方は千差万別かもしれませんが、受け取る内容は人によって違っていいと思うんです。だからやっぱり田舎はデメリットもあるけどメリットもあるなど。これからの特にコロナになってからちょっと日本人の考え方が変わってきたのかな、うわーっというフィーバーするだけではなくて、じっくり腰を据えて生活するというふうに変わってきたのかなと田舎の隅でそんなことを考えてます。そういうふうの魅力の発信、その魅力というのが人によって違います。私の感じるものと隣の福井さんが感じるもの全部違うと思います。でもそれぞれの魅力というものが一つでもあれば発信できるなど。それを感知してもらったらひょっとしたら田舎へ来てくれる人が増えるのではないかなと。増やすのが目的ではないので。来てもらえるのにぎやかになる。あなたも一緒にどうですかというスタンスでこれからも行きたいなと思っております。

#### 【西川氏】

ありがとうございます。最後に交流人口にしましても移住にしても、そもそも増やすことだけが目的ではないと言いますか結果としてそういうことが起こるというのは後半のディスカッションでも考えていきたい部分かなというふうに思います。そのためにはやはり住んでおられる今峯森さんご自身がおっしゃい

ましたけども目を養うと言うのでしょうか、住んでる人が自分たちのおかれている地域の魅力に気づくこと。そのことを伝えていくことによって共感してもらえる人、感じてもらうが増えるのではないだろうかと。もちろんみんなではないということは前提になります。全ての人に感動してもらうというのは難しいと思いますけれども、感動してくださる方が一定程度いることが交流につながり、また移住につながっていくのではないかなというようにことを言うてくださったのかなと思います。引き続き福井さんの方からお願いいたします。

#### 【福井氏】

僕も移住してきて田舎暮らしの何がいいのとよく聞かれるんですけど、20年経つと、静かだなとかもう本当にありきたりなことしか思い浮かばないというか、言葉では表せないんですけどすごくいいですね。ぶっちゃけ本当にもうすごい山奥なんです。もう毎晩子どもを下まで迎えに行くとか、雪の日は車出るのも朝起きてまず何をしないといけないかという、除雪して車の前の1mぐらい積もっている雪を除かないといけないとか、棚田地域ということで獣害がひどいので、とにかく草刈りも多いし獣が入ってこないように柵をつけて終わったらまた外してとか、もう面倒くさいんですね。でも、例えるならば宝くじがもし当たったとしても軽トラを買い換えるかなというぐらい。だから引っ越しは絶対ないなというふうに思ってるんです。この先もどうなっていくか自分が歳取ったらどうなっていくかということもそれはもうそっちに置いて、今こんなに何か分からんけど居心地がいい生活はやっぱり手放したくないというのが僕の田舎の魅力を表現する唯一の方法かなと思ってます。僕20年間生きていろいろちょっと失敗とかね、親に迷惑かけたりしたことあったんですけど、やっぱりこの村に居続けてきてよかったなと今でもしみじみ思いますし、入った当初はもうよそ者は信用せんみたいなことを直接おじさんから言われたこともありますし、でも結局2年3年一緒に草刈りや水路の泥上げとか汗流して慰労会で酒飲んでということを繰り返していくうちに、「田んぼを貸したるか。」とか、「うちの畑やるか。」というふうに言ってもらえるようになってきたという意味ではすごくシンプルなんですよ。田舎での生活というのは共同体がまだ残ってる場所なので。だからやっぱり一緒に何か作業して面倒くさい草刈りとかでもみんなで一緒にやったら何か気持ちいいし、そういうアナログなところが僕の性に合ったのかもしれないですけど、のんびりしてるのが僕に合ったたという感じだと思います。それを発信していくということではやっぱり友達が遊びに来てくれたり今後やっていく活動でいろんな人に来てもらって、その一端を感じてもらえることが今後やっていけることかなというふうに僕は今思ってます。以上です。

#### 【西川氏】

はい、ありがとうございます。宝くじが当たっても今の居心地

を手放したくないというのはすごく印象に残りました。実際この4人の中で外から移住してこられた方として1人だけ登壇していただいているんですけど、その実感としてその気持ち、なかなか言葉にはならないけれども、それを発信していきたいというふうなお話をしていただけたかと思います。それでは水口さんお願いします。

### 【水口氏】

僕はさっきも言いました通り一回集落から出て、実際今住んでるところはさっきの棚田の集落ではないんですけど、農業をやるためにマキノ町というところに戻ってきました。農業するまではアパレルを輸入してインターネットで販売するという仕事をしていたんですけども、リーマンショックでやっぱり売上げが低迷して、このままこのビジネスでは生計立てていけないなということで次の仕事を考えなくてはいけないというふうになって、その時に実家が兼業農家で野菜作ったりしてそれを直売所、産直に販売したりして年金暮らしですけどそれなりの売上げがあって、やっぱりそれを見ていたらこの地域で農業で生計立てられるのではないかなという思いで農業に参入しました。最初はどこかで勉強したわけでもなく、元々はこういう田舎育ちですし、何とかやったら何とかなるのではないかなというそんな気持ちで入ったんですけど、やっぱり野菜づくり下手くそなので、そして何か付加価値を付けなくてはモノが売れていかないので、無農薬の有機栽培で農産物を作るという選択をしました。実際そうやってやっていると、始めたときは34歳で農業の世界ではまだ比較的若いということもあってお客さんも周りの人もたくさん応援してくださって、何とかそれで生計が立つようになって、ある程度の設備投資とかもできるぐらいの売上も立って、5年目で社員を自分ところで受け入れられるようになって、今は正社員2名とパートアルバイトさんが2名、元々はそこに妻も入っていたんですけど、妻は先ほどの馬の事業の方に今は行ってるので、それで何とか運営しています。中山間地域と呼ばれるところで農業をやっていると、やっぱりたくさん課題はあります。就農をせずと右肩上がり微妙に上がってますけど、やっぱり3、4年目ぐらいでただ農産物をつくって販売するというのではやっぱり限界が見えるようになってきました。どうしても作業効率が悪い。畦畔も高いし草刈りも時間がかかる。1枚当たりの面積も小さい。設備投資してもその効率を考えると償却の率が悪い。どうしても機械を生かすきれない。大きい市場にも遠い。大きな農業はおそらくよっぽどやり方を考えないとできないなと思って。でもちょうど農業を始めて3年目ぐらいから、私も経営者ですからずっと農業に関わる以上ビジネスなんですけど、やっぱり楽しいという思いがすごく出てきて、やっぱりできたら一生この仕事をこの場所でこの農業に関わっていきたい。自分の周り好きな人しかいないので、その中でずっとこの仕事を続けていきたい。好きなものと好きな人に囲まれて、小さいときから過ごしてきた景色の中でずっと農業をしていきたいと思うように

なって、そこから舵取りの方向を変えるというか勝手に変わっていきました。もちろん売上は確保しにいきますけど、それをどこに使うかというのはやっぱりすごく考えるようになって、若いときはアパレルの仕事をしていたときもあって、それなりの売上があって利益も出してどこか自分が船の船頭になりたいとか、その船に乗っていろんなところに行きたいとかそういう思いで最初の方はしてたんですけど、やっぱりいろんな人に助けられて、こんな条件の悪いところで、この地域に助けられて農業を続けてこれたので、自分もその地域の歯車ではないのかなといつからか思うようになって。でも小さいときとか若い時ですね、僕は本当に遊ぶところがなかったので、こういうところで虫を捕まえたりそんなことしか遊ぶ場所がなかった。だから若いときはこの景色が本当に嫌いでした。この景色の中で一生終わっていくのかなと。これで満足なんかなと、そんなわけないだろうとずっと思って生きてきました。でもやっぱりここに帰ってきてしまって、やっぱりここがすごく好きだったんでしょね、この景色が。落ち着くし楽し、周りの人は声かけてくれるし。そういう思いを農業を通じてたくさんの人に知ってもらいたい、味わってもらいたいなど。そのために農業をしていこうというふうになって、さっきの馬もそうですけどこの地域の関係人口を増やしていきたい。結局それが自分ところの売上げの確保にもつながりますし、そっちの農業でいいのではないかなというふうになって、今ありがたいことにたくさんスタッフも来てくれていて、その子たちも1人は森西に空き家を買って住んでくれて、もう1人は隣町に引っ越してきてくれて農業をしてくれています。これからはずっとそういう農業との関わり方、地域との関わり方、それをやっていこうと思うとしっかり舵を取って経営して売上げも確保していかなければいけませんけど、これからはどこにお金を使っていくかいうのを考えながら農業をしていきたいなと思ってます。以上です。

### 【西川氏】

ありがとうございます。ビジネスとしての利益を出していくけれども地域の中で助けられているから地域の歯車として、という言葉が使われましたけど、地域の一員として地域の中で生きていきたいと。そのためにこそしっかり経営しなくてはいけないという生活者としての視点とビジネスパーソンとしての視点というのがうまく噛み合った形で、活動という言い方はしたくないですが生きておられるのかなというふうに思いました。あと移住との関係では、社員さんがおられてその社員さんが実際この棚田のある森西地区に空き家があったのでそこに移住してこられた。もう1人の方は隣町ですけども近くに引っ越してこられた。この企業としての良さがあるからここに人が入ってくるというようなことを具体的にお話いただいたのかなと思います。

お待たせしました。小川さんにじっくりとお話いただきたいと思えます。

### 【小川氏】

思っていることはみなさん喋ってくださりましたので、こっちとしては移住のときの聞きたいなちょっと深い移住の話を見せてもらおうかなと思ってます。これは3年前に若い子でカブに乗って日本一周してるというお客さんが入って来ました。その子に何してたのと聞いたら、ある地方で地域おこし協力隊にいったんだよみたいな話をしていた、何のために日本一周するのと聞いたら、体調崩してちょっと仕事ができなくなって自分の次の移住先を探したいということで、カブに乗っているところを転々としている若い子に会いました。まだ25歳か26歳ぐらいの子でした。その子と喋っていて「移住するのは全然できるんですけど、実は大きな深い闇があるよ。」という話で2人で盛り上がってしまっ、移住という人は体一つで行けるのでいいんですけど、それについて回ってくる周りのことであたり地域のことであたり、そういうことがもうすぐたくさんある。例えば移住者に優しくする人がいました。その人とずっと信頼関係があるのに、その移住者が違う人に仕事を教えてもらいました。そうしたら最初に教えていた方が気分を害してもう移住者とつながらなくなるんですよ。ほったらかしにされるという。移住者をほったらかしというのは結構起こってしまいます。そんなことをそこら中で聞いたんです。周りの人だったり地域の風習に合わなかったりという話をいっぱい聞いたんです。それで私がその中で思ったのは、それはあかん、もう何とかしてあげないと多分移住者は絶対増えないという僕の頭があって、それで提案しましたのがうちのペンションに泊まってくれていいよと。それで近くの農家さんに派遣してあげるからそこで働いてその地域の人と仲良くなったり、地域のことが分かってくると空き家があればその空き家に入ったら別にそんなに苦しまなくずっと続けられるよと。とりあえずお試しで入らないかという話を一生懸命したんです。そうしたら、うちに泊まりに来てた子が峯森さんのところのお仕事に入ったり他のところに行ったりということをしてくれたんです。そういうことをしてあげると集落に溶け込めるんですよ。溶け込めるということはそのまま移住したところで問題なく入り込める。それがなくてももう本当に歳いってから地獄かというようなことになってしまうのではないかなと思っているので、とりあえずお試し移住。それからでも移住は遅くはないのかなというふうな形で僕はそういう方面でサポートをしています。それが今どうなるかが分からないので、最近ちょっと西川先生と喋って思うことがあったりするんですけど、普通にいる人たちに移住しないかと言ったところで、私移住したいという人なんかほとんどいない。なぜかと言うと、今の生活でいいと思ってるから別に移住なんかする必要がない。でも僕らの知ってる移住してる人とか田舎暮らしをしようと思ってる人は、会社をクビになったり体調を崩したり、何か人生のきっかけというところで移住をしよう。先ほど出てきた日本一周している方が言いましたのが、今の日本で寝るところと食べる場所は絶対困らない。何かあったら、どうにかしてもらえませんかと言ったら泊め

てくれるし、ご飯ぐらいは食べさせてくれるし、働くところがないと働かせてくれると言ったんです。ということは、そういうことができるのであれば必要なお金はあるとは思いますが、お金がなくても大丈夫ではないかな。それやったら田舎暮らしができるよねということになるんだと思います。今の生活に満足していたら田舎暮らしなんか別にいいと思うんですけど、ちょっとこのままやったら将来が嫌やわ、体壊して死んでしまうわという仕事をしてる方というのはいっぱいいると思います。そんな人がもし何かのきっかけで田舎暮らしがしたいと思ったときに、うちのペンションに来てくれたらこういうことができるよ、サポートしてあげるよということが言えると僕は思っていて一生懸命やっています。

これも西川先生と喋って出てきていい言葉だなと思ったのが二拠点生活。半農半Xみたいな話にもなるんですけど、休みの日にうちのペンションに1人だけ年齢が50歳の方が休みのたびに3泊だけして農業をしてまた仕事に帰る。それでまた休みのたびに来てうちの手伝いをして帰るということとずっとここでも3か月ぐらいしてる方がおられます。当然その人は無料の条件を使われるのでそれでもいいんですけど、この生き方って全然いいと思います。土日休みのときは自分の好きなことをやって仕事は仕事ですという形というのが僕はすごくいいなと思っていて、移住だけが田舎暮らしではない。だからそういうところで二拠点生活、本業は本業である。その代わり土日はこういうところでもいろんなことをする。それがそのうち定年になったらこっちに引っ越してこっちに住めばいい。その時には自分の人脈とか地域でも自分の立ち位置とかが分かるので、僕はそれはそれでいいなと思ってこれからはそっちの方面、たちまち移住はできない、ただ、移住したいと思ったときにちゃんとこっちは移住できる体制をいつもとっておかないと駄目だなというようなことは思っています。先ほど峯森さんも言っていた通り、田舎暮らしがしたくて来たのはいいけどこんなことやってられないわ、もう帰りますというようなことにだけはならないように僕らはサポートしてあげないと駄目だと思ってるので、このような形のサポートもしますし、考え的に変わって、少し違うこともするかもしれませんが、結局は後悔しない生き方というのを思ってるんですよ。そのために僕らはこういうことをしているのかなと思います。僕らの仕事はどうあがいたところで人の人生に触れることなんてできないんです。だけど僕らはそういうサポートはできると思うので、これからもこんなサポートをしていきたいと思っております。

### 【西川氏】

ありがとうございます。移住しないですか、するする、とそういうことは普通ないというか、ほとんどの人は今の生活に満足してるからと。でも何かあったとき本当に人生に何か変化があったときかにかこのままでもいいのだろうかというようなことを思ってる人がいたときに、何か人生のきっかけのときに受け皿に

なれるような集落であり、またその地域であるというのが一つの移住ということを進めていく可能性かなというお話だったかなと思います。それからその一つの受け皿ということの手段としてお試しというのがあるのかなと。リピーターのような形でいいし県の事業で2週間のお試し移住というのも今日午前中のお話でありましたけれども、そういうものも生かしながらやっていけるのではないかなと。それから今二拠点生活というのがコロナで一気に話題になってきましたけれども、二拠点生活というのも少しずつ移住への一つのポイントかなというお話をしていただけたかなと思います。棚田地域とか中山間地域への移住ということとそれから新規就農みたいなものというのは表裏一体なんですね。分けて考えるとなかなか難しいと思うんですけど、私がやはりこの移住のこと、それから今本当に農業者の高齢化の数が非常に増えているということを考えてときに、農業に魅力がないとか農村の魅力がないというふうに思われている部分が今までだったと思うんですね。それこそ昭和末期から平成初期ぐらいに一般の考え方でも、それが今少しずつ変わってきてるのかなと。私が大学に勤めている関係で大学の就職支援とかキャリアセミナーとかそういうのも結構気にするんですけど、10年以上前になると思うんですけど、東京都心の有名大学ではキャリアセミナーの中に農業というのを出してきたんです。例えば公務員を目指す人、商社を目指す人とかそういうのに並んで農業というのを出してきて、実際に大学を卒業して就農している先輩たちを呼んできてキャリアセミナーをやっている。機能的な農業をしている人ももちろんいるんですけど、地域のリーダーになってる人、熊本県の阿蘇地域でいわゆる中山間地域の農業をしている人、そういうような人を呼んできて学生たちに若い人たちに農業をまたその地方で暮らすということが今のSDGsの言葉でいうディーセントワークというんですかね、そこにある暮らしというんでしょうか生活、先ほどクビになるとか体調崩すとかこんな目にあってまでなんで仕事を続けなくてはいけないのか、そういうのではなくて農業というのは本当に自分の生き方を追求できる生活なんですよということを大学のキャリアセミナーで導入するというそういうふうな動きも出てきていると。そういうふうなものこの棚田地域、中山間地域の農業に移住というものをマッチングさせることができればいいのかなと。その具体的なものとして今の小川さんのペンションのようなものがありますし、あとは他の地域でもたくさんあると思うんですけど農家カフェ、農家レストランのような形で体験してもらおうというそういうものもあるのかなと。さらには水口さんのところのように企業として雇用というものを通してある程度安定した形で農業に入ってきてもらう、地域に移住という形を実現してもらおうというのがあるのかなというふうなことをお話を聞きながら考えていました。

一応一通り皆さんの活動とか考えておられることをお聞きしたんですけど、実はマキノ町の森西地区で私どもの学生が体験をさせていただいて、ちょっとお時間をいただいて

学生の人2、3分で発言をお願いします。

### 【龍谷大学生】

こんにちは。初めまして。龍谷大学経済学部西川ゼミに所属しております3年生の鶴岡です。玉置です。

私たちは高島市のマキノ町の森西集落をゼミの調査地として活動しております。

なぜ森西で調査をしているのかということについて、龍谷大学から比較的通いやすい場所に森西があるからということと森西集落は棚田という魅力を持っているからです。

**設定した課題**

- ① 棚田に人を呼び込み活性化させるにはどうすればよいか
- ② どうすれば棚田での農作業に魅力が見いだせるのか

今スライドに出ている棚田に人を呼び込み活性化させるにはどうすればよいか、それとどうすれば棚田での農作業に魅力が見出せるかという2点を課題として設定して調査をしています。

**森西集落の取り組み**

- ・ビニールハウス栽培、椎茸栽培が盛ん  
→道の駅や直売所に出荷
- ・カフェ経営「ミネモリサンチ」  
無農薬、有機栽培 野菜使用のランチ提供
- ・ペンション経営「ペンション メタセコイヤ」
- ・農業法人 みなちゅファーム(有機)

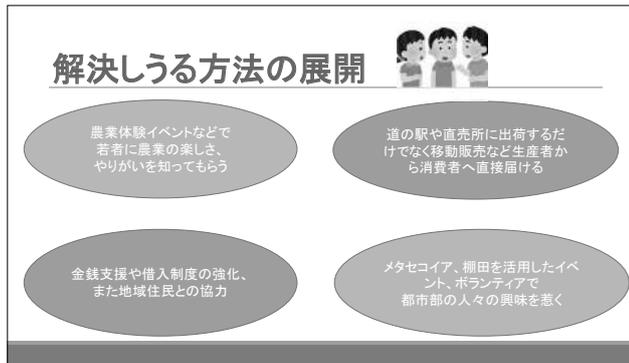
森西集落の取り組みについて、先ほどたくさんお話していただきましたが、無農薬、有機栽培で育てられた野菜使用

**全国の地域で共通する問題点**

- 農業地域の少子高齢化
- 農業所得の減少
- 新規就農者に対する制度不足
- 魅力の再発見の難しさ

のランチを提供しているカフェ、ミネモリサンチ。ペンション メタセコイヤ、無農薬で育てられた野菜を販売しているみなくちファームさんが挙げられます。

全国の地域で共通する問題点として、こちらの4つが挙げられると私たちは考えています。

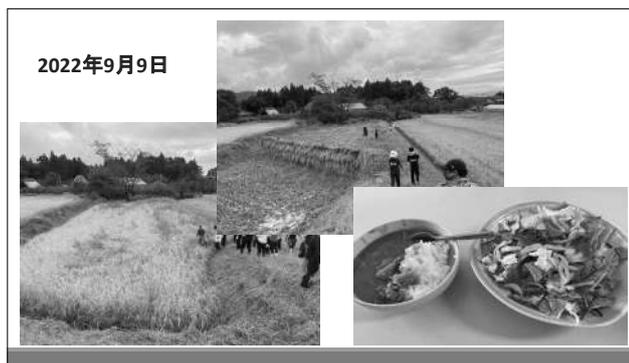


それらに対して農業体験イベントなどで若者に農業の楽しさ、やりがいを知ってもらうこと、メタセコイヤ、棚田を活用したイベント、ボランティアで都市部の人々の興味を引くことが課題を解決しうる方法の展開であると考えています。



代わりまして玉置が喋らせていただきます。今年の5月7日にその調査の大きなイベントとして水口さんの土地の一部をお借りして田植えを行いました。こちらが実際の写真になります。一から苗の植え方を教えていただき、一番右の写真のローラーで自ら印を付けるという作業を行いました。

小川さんから支援をいただき、Tシャツの制作も行いました。またミネモリサンチからランチをご提供いただきました。



9月9日に稲刈りをしてきました。手作業で行なったため田植えよりかなり大変だったので機械を使っただけが無事終わることができました。この日もランチのご提供をいただきました。感想といたしましてミネモリサンチの方で栽培されている野菜収穫体験を私もさせていただいたのですが、市場に出回っている野菜はあまりなく、付加価値のような野菜がたくさんありとても美味しかったです。マキノ町に通う難点といたしまして通いづらいという点があるんですが、それ以外を考えるとすごい魅力がたくさんあり、棚田で栽培された作物やお米に対して非常に関心が高まりました。この経験を通して、普段からスーパーや道の駅などで購入する際は意識して購入しようという気に私たちはなっております。以上で発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

### 【西川氏】

無茶ぶりで発表していただきましたありがとうございます。他にフロアの方からもうちの地域ではこんなことをやっているとかパネラーの人たちが喋った中でこの部分をもう少し詳しく聞きたいというのがありましたらぜひご発言いただけたらと思います。

### 【参加者】

私は佐賀県の江里山の棚田というところから来ました阿南と申します。今回いろいろとお話しありがとうございます。私は今、江里山の棚田に移住をして、実は以前にも5年前に福岡県の東峰村の日本棚田百選である竹の棚田に仕事の関係で移住をして棚田のサポートをしてました。今回は3年前から佐賀県の江里山の棚田で棚田地域の活性化ということで、こちら県も県の事業として単身移住をさせてもらってます。それで今自分から移住したいという気持ちで入られた方を受け入れるという話をいろいろ聞かせていただきまして、私そのものは自分の意思とは全然関係なく呼び込まれてそこに住むという経験をしています。幸いにも日本棚田百選である2つの地域、今回のつなぐ棚田遺産にも両方とも入ってますけども、どちらも限界集落であつたり半限界集落という場所になります。私とその集落に移住して全然違う地域に入って1か月ぐらいたら、この2つの棚田地域で地元の方が同じことを言ったんですよ。それで言われたのが、嫁いできたり婿養子で来た人以外で移住してきた人は阿南さんが初めてだよ。だから明治以降、明治時代もそうですね、多分みんなそんな形でしか移住を受け入れなかった土地で今の棚田地域、特に限界集落と言われているところでの一番の問題ではないのかなというのをすごく感じます。先ほどもペンションの話をした方の話で、暗い深い闇という話もあったんですけど、実際私が都市部から街中に住んでいて分かったことが、街中の人間関係というのは社会であると思うんです。片や集落というのは村社会であつて世間体の中での生活なので、私が今やろうとしているのは関係人口をどうにかして作らなくては

いけないということなんですけども、社会的な人間関係の中で、人間をその村社会である世間体の中に入れていくというのをどんなふうにやったりしていいのかなと今すごく悩んでいるんです。先ほど言われた、ある教えた人は他の人が教えたから教えてもらえなくなったというのは完全な村社会、世間体の中での話なので、これから先どんどん都市部の人たちが少しずつ田舎に興味は持っているんだけど、そんな人たちがどのような形で今後受け入れていこうと皆さんが思っているのかというところのお話を聞きたいなと思っています。長々と行ってしまったんですけど聞きたいことは、思ったよりコロナ禍で都市部の人たちが田舎を好きにならなかったな、移住してこなかったかなというのはすごいここ3年間感じており、今お聞きしたいのはそういった街中の人たちをどのような形で受け入れていきたいかというそんなところのお話を皆さんにお聞きしたいなと思います。よろしくお祈りします。

#### 【西川氏】

ご自身の経験からの非常に鋭い観察の部分からのご質問だったと思うんですけども、小川さんがまず一言答えていただいて、その後も差し支えなければ峯森さん一言いただけたらと思います。

#### 【小川氏】

回答になるかどうか分からないんですが、よそから来た人が集落に受け入れてもらえるかももらえないかというような話だと思うんですが、あんまりこれを言うといけないかもしれないですが、2つぐらいの方法があるのかなと思います。1個に関しては、行ったところで限界集落であれば10年ほど待ってもらったら何とかなるのではないかなというのが1点。あともう1個は先ほど僕の方のやり方として話はさせていただいたんですが直接その集落に住まずにそこに通う。通うことによってそこと馴染んでくるという形が僕としてはいいのかなと思っていますので、実際集落も全員が高齢者でもない。例えば中に若い人もいると思うんですよ。その辺と上手につながりを持っていくと、いきなり良いところですよみたいな話にはならないとは思いますが、徐々にはいけると思います。長いスパンで見てもらう。それで10年経ったらなんとかなるよという話になると思うので、一応そんなことでできるのがいいのではないかなと思っています。

#### 【西川氏】

ありがとうございます。非常に具体的なお話かなと思います。水口さんにも、外に出て帰ってきたときに再度受け入れてもらう時の話もあったと思うんですけどお話しをお願いしたいと思います。

#### 【水口氏】

僕は若いときにマキノ町というところを出て帰ってくるときに

は出てから17年経ってたんですけど、もうちょっと簡単に受け入れてくれるのかなと思って農業を始めたんですけど、やっぱり17年の空白はすごく大きくて、農業を始めるときに良い農地は誰も貸してくれなかったんですよ。本当にもう草とか木が生えてもう手がつけられなかったところで、そこをちゃんと開墾して農地に戻せたら農家だというような、それぐらいの勢いでやっぱり拒絶されました。でも農業をやると決めて、もうそれでやるって決めていたのでそんなところでも入っていくかなくて。それで半年かかって開墾してやっと綺麗な農地にできて、農業始めたらやっぱりそれを見てくれてた人たちはよくきれいにしたなと、じゃあうちの農地も使ったらいいわと、そういうふうにも認めてくれて、おかげさまでどんどんどんどん増えていったんですけど、この話は単にそこに入る人の努力次第だというのではなくて、やっぱりもっと優しくしてほしいですよ。限界集落と呼ばれるところだったらなおさらもっと下手に出てほしいというか、正直な話ね。だからその意識の向け方というか、もうだって僕らが今こういうところで農業しているのはすごい怖いですよ。あと10年したら僕、今43歳なんですけどもう既にやっぱり怖い。この先10年でどれくらい荒れていくのだろうか。それを言ったら、小川さんも大きな農家さんですけど、ぶっちゃけ森西集落で小川さんのところとうちだけで山際を防げるのか。防がないといけないのかな。今のうちに何とかしておかないといけないのにと。それを年配の方が分かっているのか分かってないのか。そこを誰かしてくれる人、つないでくれる人、優しく伝えてくれる人というのが間にいるとすごくいいのではないかなとそういうふうに思います。

#### 【西川氏】

少しずつ過激な言葉が出てきて私は嬉しいんですけども、峯森さん、もし何か補足することがあればお願いいたします。

#### 【峯森氏】

先ほどのご質問と答えが合っているか分からないんですけども、街の方とのギャップということありますよね。だから僕もこういうカフェとかしているとかよく聞かれるんですよ、空き家多いですかというのは。ものすごく聞かれます。ちょっと親しい人からも聞かれるし、初対面の人からも言われます。そのときにその人が何を求めているのが分からないと全然斡旋できませんよね。雰囲気でも田舎暮らしと思ってる人には私は正直返事をしません。田舎は何かメルヘンな世界みたいなのんびりしていると。いやそんなことはないですよ。僕は歳いったから逆に街に行きたいんですよ。街の方が正直便利だと思います。今ご質問がありましたように、街の人の意識、田舎者の意識どちらが悪いとかいうのではなくて、育った文化の違いだと思います。これはなかなか一致しないと思います。田舎者でも街があつてる人もいるし、街で住んでいても田舎的な人もいるし、それはやはり一番向こうのペンションをされてる方がおっしゃったように、しばらく一緒にいないと分からないと

思うんですよ。ただ条件がいいから家を貸そうか、とかそういう物理的なものではないと思います。そこにはお試しという言葉の小川さんは使ってましたけれども、先ほども小川さんは自分のところで泊まっている若い人をうちに斡旋してくれたと。去年も今年も草刈りを頼んだんですよ。それを見ているお年寄りから「若いのが草刈りしている、あれは何や。」という話しをすると、「わしのところも頼んでくれんか。」と2軒頼まれて、結局いっぱい周れなかったんですけど、そういう人と話をしているとずっと受け入れてくれると思うんですよ。やっぱり今困ってるから。困っているのを助けてくれるから。でもそれがじゃあうちの集落の若い人の移住にすごくつながるのかということ僕はちょっと疑問視してます。年配の人ほど、うちの集落は割と変わったことをしても認めてくれるので、それほど拒絶感はないと思うんですけど、それでもやっぱり若い力は欲しい。でも隣に住んで欲しいのかどうかということなんです。それとも一つ思うのが限界集落でも子どもは産まれてましたけど、やっぱり家の息子・娘たちは皆出て行ってます。だから限界集落なんです。そこによその力を求めるというのは何かちょっと違うのかなと思うときもあります。そこで産まれた息子や娘たちがここで働きたいと言うことは結構あるんですよ、この田舎でも。でも働き口がない。それで水口さんみたいに農業で一本立ちする馬力もない。じゃあ仕方がないから街に行ってしまう。そういう子たちを戻してやる方が僕は先かなと思うときはあります。街で夢を追いかけてこられる若者も大事です。すごく大事です。その夢を育ててあげたいと思います。協力はします。でも自分たちの足元で、ここで産まれてここで育ててここで働きたいと言ってる若者もたくさんいるのは移住の視点からは外れてます。移住ではないから。僕はその観点が抜けていて、ものすごく残念だなと思っています。

#### 【西川氏】

ありがとうございます。指名していなかったんですけど、福井さんに都会から村に入られた方という立場から何かもし一言あればお願いします。

#### 【福井氏】

僕は受け入れてもらうためにめっちゃ頑張りました。というのは、「お前はよそ者やから信用してないぞ。」と1年目に言われたんですよ。それはそうですよ。訳の分からない若者が入ってきて、ポロポロの家の前で TENT を張って家を直してそこで寝泊まりしてるという、それを信用はできないと思うんです。今僕は20年住んで、村入りも許してもらったんですけど、「なんで駄目なんですか。」と言ったら、「村には財産があるから。」と言われたんです。何のことかよく分からなかったんですけど長年住んでいるとやっぱり村にも財産、山であつたり山の木を切ったときの村の収入であつたり、電線が通ってる線の下の木を伐採したときに村にお金が入ったり、そういう村にも一定のお金が入ってくる財産をよそ者には分けたくない

いう最初の心境としては分かるんですよ。僕らは別に財産目当てで田舎暮らしをしたわけではないですし財産があることも知らなかったけども、やっぱり知らない人がいきなり入ってきて、いきなりウェルカムというのはなかなかないというのは僕も分かります。気持ちも。空き家はたくさんあるのに、なぜ移住したいという人も一定数いるのに、なぜこれだけ進まないのかというのは、やっぱり受け入れる側もどんな人が来るか分からないという不安が先立つから不動産情報にも載せないし、それはもう朽ちていく家が増えていくというのが現状なのかなと。やっぱり小川さんが言ったようにお試し移住して。僕はもうとにかく村の奉仕作業は全部出て、もう年寄りばかりですから、僕は3倍ぐらい働くんですよ。それであいつおらんとあかんというぐらいまでめっちゃ頑張るんですよ。そしたら段々、この子やるやつやなというふうに使われてくるとちょっとずつ意見も話もしてくれるし田んぼも貸してくれるし、いつの間にか農業組合長頼むわみたいでやらされてるのか任されてるのか分からないんですけど、そんな感じで結局古いかもしれないんですけど、新しく来た人には一緒に汗を流して一緒にその喜びを分かち合う。そういうのに参加して飲みニケーションではないですけど、怒られることもあるし嫌味を言われることもあるんですけど、そういうのも実はすごい大事なのかなというのすごく感じますね。結局そういうコミュニケーションが嫌で移住してきたからといってそういう草刈りとか飲み会に一切参加しない人は、やっぱり20年以上一緒にいても村の中ではちょっと浮いた感じの人もいらっしゃるし、だからやっぱり受け入れられる側の人へのアドバイスとしたら、もうとにかく若さという武器を使って、とにかくめっちゃ汗かいたらすぐ受け入れてもらえるのではないかなというの僕の実感です。

#### 【西川氏】

ありがとうございます。非常に具体的に移住を考えるとときに大切な問題だと思うので、まだまだ続けていけると思うんですけども、ちょっと他の質問があればお受けしたいと思います。私がお聞きしていて、やっぱり困ってる人がいて、それで実際に入っていきたいという人がいるからそれが移住につながる訳ではないというような峯森さんの言葉というのがすごく大きいのかなと思います。限界集落だからといって移住者が手放しで歓迎されてる訳ではないというふうなところは、どう考えていくのかというのは大きな課題かなというふうに感じました。

他にフロアの方で何かご自身のご体験でもいいですし、何か行政の方とかでうちではこんなことやってるけれどもというのがありましたらどなたでも結構ですけれども。

#### 【参加者】

兵庫県の姫路の北で「棚田フェス」というイベントをしたり棚田の保全活動をしている棚田 LOVER's の永菅と申します。自ら棚田くんというニックネームで活動しております。今回

特に素晴らしい事例で非常に共鳴するんですけども、特に伺いたいところが、リピーターがとても重要だと思っており、リピーター確保のために、先ほども奥様が馬を飼ってとか様々な取り組みをされていらっしゃるんですが、今までの方がもう一回来てくださったりとか、リピーターになるようなエピソードとか、こういうことをしたからまた満足して来てくださったみたいなそういうふうな事例があればぜひ学ばせていただきたいので、お伺いできればと思います。

#### 【西川氏】

ありがとうございます。一度来てくれた人がまた来てくれるということはどんな感じなのかというのは、直接は小川さんだと思んですけど、もしカフェの方でリピーターとかいらっしゃったら峯森さんの方からもお願いしたいと思います。まずは、小川さんからお願いします。

#### 【小川氏】

来るお客さんは結構交流を求めている。喋りたがっている、僕がよく喋るのでそう見えるのかもしれませんが、すごく喋りたがっておられるような気がする。自分の思いを伝えたかったり自分の生き方はこうやってこんなことあって、でも今からこうしたいというような話を言いたくて仕方がない人が結構いる。だから多分それを聞いてあげるだけでまた来ますと、例えば最近ではないんですけど、世の中には口だけの人も結構いますが、「これから日本一周行って帰りにまた寄ります」と言ったその子はちゃんと来て、「一周してきてこんなことがありました」と話に来てくれたというエピソードがあり、やっぱり聞いてあげるだけで全然リピートになってくる。それだけやと僕は思います。今までうちに来てるリピートさんはめっちゃ喋ってる人ばかりなんです。この1年間あったことを全部伝えてくれるという人ばかりなので、そういうことかなと思っています。

#### 【西川氏】

ありがとうございます。ミネモリサンチのところではいかがでしょうか。

#### 【峯森氏】

今日栗拾いに来られた親子さんがリピーターさんなんです。3歳のお兄ちゃんが去年栗を足で剥いて取って軽トラに乗った。そんな記憶を3歳の子どもが辿れるんです。それでどうしても今年も行きたいと言うことで来られたと、ものすごいリピーターなんです。それで小川さんからお話しがあれども、小川さんは喋る。僕は聞いてます。やはり何回か来てくださるお客さんは何かを求めておられるんですよ。先ほど言いましたように、美味しいものを求めてこられるのは、うちは正直「ん?」と思っています。自分のところはプロの調理人でもないですから。でも何回か来てくださる方は、何を求めて来てくれるのかなというのは私のこの目でずっと見てるんです。そこに

ポイントがボンと当たればリピーターになってくれるんです。向こうの求めているものとこちらの与えているものがずれば、やっぱりリピーターは無理だと思います。非常に難しいのは抽象的な言葉ですけども、来られるということは向こうが何らかの目的で潜在的に何かを求めてそこまで足を運ばれるんですよ。その何を求めているのか本人の口から聞くときもあるし、本人も何だろうというときもあるし、こちらはそれを何とか掴みたいと思います。そこところがマッチすればリピーターが増えるのではないかなと。今年も何度も先生が大学生の生徒さんを連れてきてくださいました。僕はその学生さんを森西のファンにするんだと公言してます。僕はファンになればリ屈抜きでリピーターになってくれるのではないかなと勝手に思ってます。

#### 【西川氏】

ありがとうございます。もう少しだけ時間があるので、もしほかにもご発言されたい方がいらっしゃったらぜひ手を挙げていただけたらと思います。

#### 【参加者】

福島県の二本松市の棚田で取り組んでおります菅野といいます。まだ福島は山菜、タケノコの出荷停止、あと炭焼きをやる人も山の汚染で激減してらるんですね。棚田というのはそういう山の暮らしと一体であったと思います。そういうこの山と棚田の暮らしが一体であった、その技をどうやって次の世代に伝えていくかというのが大きな課題かなと思っているんです。今のお話しで皆さんのマキノ地区というのは素晴らしいネットワークがあるなどということをお話を聞いて感じました。このマキノ地区の地域づくりを通したそういう技の伝承を、くらしと一体の技の伝承を今後どういうふうと考えているのかというのを一つお聞きしたいと思っています。二つ目は棚田の取り組みで特に女性の参画、若いお母さんと子どもたちを集落のさまざまな活動にどう参画していくかということも私も考えて、例えばかかし祭をやって子どもたちやお母さんにかかしを作ってもらったり、焼き物体験で子どもたちに参画してもらったりしてるのですが、マキノ地区におけるお母さん方や子どもたちの参画も取り組みの事例があれば教えていただきたいと思います。

#### 【西川氏】

ありがとうございます。一つは山と農がつながっているそのような暮らしというものを、またそれに伴う技をどう伝えていくかというようなこと。それからもう一つはこのような活動におけるお母さんたち女性たちと子どもたちの参画についてということだったんですけども、私、水口さんのお母さんにお食事の話一度お聞きしたことがあるんですけどもそのあたり、水口さんちょっと振ってもよろしいでしょうか。

#### 【水口氏】

まず山を活かすというところから、うちも原木シイタケを

やっていますので、原発事故まで福島が日本一のクヌギの産地だということは存じてます。それが原発以降出荷できないというのは僕もずっと気になっており、この高島市もすぐ隣の県に原発が何基もあって、やっぱり他人事ではないんですよ。実際にこんなに棚田がたくさんあって自然も豊かで、でももしそんな事故があったら実際に影響はなくても恐らく農産物は一切売れなくなると思います。今までどれだけ応援してくれていても、その風評被害という中で僕は正直ものを売っていく自信がないです。原発が良いか悪いかという話は置いて、さっきの木を植えるという話もそうですけど、なぜ利益を捨ててもそういうことをやっていかとうとやっぱりそういうところを維持して残していく。それでそこにたくさんの方が関わっているとそこを守っていかなあかんなど、やっぱりどこかでその声が上がってくるのを僕らは待ってるわけです。自分たちでできることは正直限られてますしそこまでのお金もないし人もないけど、そのうち棚田であったり里山であったりお金も生んで雇用も生んで、それが循環して回っていたら放っておかれはしないだろうとそういう思いで今必死に、言ったら僕らは場所を活かした農業というのに特化してやろうと進めてるんです。農道の中を馬で歩く、あえてクヌギを植えて農地に入ってくる獣をドングリの力で防ぐんやとかね。実際止まるかどうか分からないですよ。でもやっぱりそういう取り組みをしている人間がいる、そこにいるということで、何もしていない地域よりは目を向けてもらえると思うんですよ。それがさっきリピーターの話がされてる方がいたと思うんですけど、うちは観光地のメタセコイア並木というところのすぐ近くで農業所を構えてるんですけど、そこに来てくれるお客さんで実際にクヌギの植林に参加してくれるお客さん、これはやっぱり全然違います。すごい宣伝してくれるんですよ。こういう取り組みしてくれてます、あそこに行ったらこんな素敵な棚田がありましたと。野菜買ってくれるだけのお客さんも大事なお客さんですけど、野菜が美味しかった、無農薬の野菜でした、綺麗でしたと、やっぱりそれしかインスタに載せてくれないうすよね。でもそっちの取り組みを応援してくれるお客さんはやっぱり僕らの生活を褒めてくれるんですよ。生活がすごい良かったですと。やっぱりそこを拡散してくれると結局まわりまわってそれを見たお客さんが野菜を買ってくれたり。単純に野菜を買ってくれるお客さんを狙い撃ちしていくんだったら広告を打つなりチラシを打つなりするんですけど、やっぱりそうではない。本当にコアなリピーターの方というのはこっちが本気でやってないと来てくれないんですよ。リピーターになってくれないです。やっぱり応援してもらえるような経営体でありたい地域でありたい。そのためには一生懸命やるしかないんかなと。さらに女性の話なんですけど、儲かってる農家さんは女性の力がすごく大きいです。女性がやっぱり前に出て行くべきだと思いますし、うちも正社員は2人も女性なんです。もう最初からずっと同じように仕事してもらってます。僕がずっとやってきたこと、種まきからトラクターに

乗って、コンバインも乗る。機械も一通りチェーンソーも使う。チェーンソーを持って木を切る。農業とか農村に興味を持ってる方は機械に乗ってる姿を見て道具を使ってる姿を見てカッコいいあって、やっぱりプロやなって思うと思うんですよ、単純に。そこに女性が関わってるというのは、誰でも楽に仕事ができるように機械があるわけで、そこが男じゃないと乗れないとかそんなわけじゃないですし、僕が見ててもやっぱり女性がトラクターに乗ってる姿はカッコいいと思います。それに憧れてうちに来てくれる。新たに仕事したいと言って来てくれる子もいますし、同じように仕事できますし同じことをやってもらう。それでその一連の最初から最後までやった方がやっぱり仕事してる方も楽しいです。うちはそういうやり方をしています。誰がその仕事をしてでもできるようにしてもらってます。

#### 【西川氏】

ありがとうございます。すごい広範囲に渡ることとお話ししていただいたんですけど、場所を活かした農業ということとその他にお金にならないことをしていくとか、あとはリピーターといいますが野菜を買ってくださる方はもちろんありがたいことだけど、それだけでなくその活動に、地域に目を留めてくださる方との関係を大事にしていきたいという、どう伝えるのかというところは直接の答えになっていなかったかもしれませんが、地域の山との暮らしというふうなことをどうつなげていかとうようなことに関してのお話を聞いたのかなと思います。女性についても男だから女だからというのではなくて、女性がトラクターに乗っているのがかっこいいよねとかそういうふうなお話もしていただけたなと思います。ちょっと私の個人的なあれなんですけどミネモリサンチはレシピとかを考えておられるのは奥様なんですけれども、ぜひ奥様のレシピのこととかお料理のこととか、奥様の取り組みをちょっと紹介していただけたらと思います。

#### 【峯森氏】

季節によって採れるものが違うので、今はかぼちゃのドリア。僕はあんまりカフェに入れてもらえないんですよ、汚いから。息子のお嫁さんとよく相談をしてカフェとかスイーツとか料理は試行錯誤してます。だからホームページでも季節によって変わりますとしか書いてませんし、よく僕に聞かれるんですけどもごめんなさい、分かりません。ジェノベーゼどんなものですかと僕この間初めて食べたんですけど味は言えません。でも家内は全然そういう本来の仕事ではなかったんですけども、一応家のもので一生懸命作ったレシピでやっています。これはいまだに僕に言われるんですけど、「あなた売れない野菜を捨てるけど、私はいらないからそれで何か作るところから始まったのよ。」と。これはおそらくずっと言われ続けますね。そういう形で完全に分業しています。

#### 【西川氏】

今日の会場に来てるんですけど、うちの学生もミネモリサンチ

の奥様のレシピのお話を聞きながら野菜がどのように料理になっていくのかのお話を聞くのが楽しみでリピーターになっている人もいますので、そういうところもあるのかなと思います。最後に今日実際に皆さんの話を聞いて何か感じたことを4人の皆さん一人ずつお願いします。小川さんからお願いします。

#### 【小川氏】

最後に一言僕の思いだけを伝えさせてもらいます。僕のところでは農業の体験というのを提供しています。これは今すぐ農業をしろとか、田舎暮らしをしろということは全く思っていないです。ただ、人生の岐路がどこかにあると思います。そのときにそういえば昔農業体験をあそこでしたわ、あのとき稲刈り楽しかったわという記憶であるとか体験があれば農業につながると思っています。だからその思いだけでまたやるわという人が増えてくれたら僕はいいと思って、今後このような形を続けていきたいと思っています。ありがとうございます。

#### 【西川氏】

ありがとうございます。水口さんお願いいたします。

#### 【水口氏】

これから森づくりとか僕らも今すごく興味がありますし、そういうところで関係人口を呼び込む、人を呼び込む。僕らの棚田の背景って針葉樹なんですよ。でもそれが広葉樹だったらもっともっと綺麗だと思います。それを売りにしてもらおう、ものが売れないのならばその景色を売りにしてもらおう。最初はお金を落とさないかもしれないですけど、そこに来た人が何かいいアイデアを持った人がきつと来てくれると思います。僕もやっぱりそういうところは見に行きたいし勉強していきたいなと思ってるので何か一つ参考にしていただければと思います。ありがとうございました。

#### 【西川氏】

ありがとうございます。福井さんお願いいたします。

#### 【福井氏】

僕は今動き始めたところなので、今日3名の先輩方の話を聞いて本当にもうめちゃくちゃよかったぞという気持ちでいっぱいです。またいつか皆さんに会える日があればと思います。ありがとうございます。

#### 【西川氏】

ありがとうございます。では峯森さんお願いいたします。

#### 【峯森氏】

今のこの場も最初喜んで手を挙げて出させてくれと言うのではないですよ。当て職できたんですけど、皆さんの反応を見たりこういう話をしたりしてまだまだ先を見据える気力はありますので、体力は減ってきてますけど。それが面白いです。

その面白さがある限りまた変わったこともできるんだろうなと。これは自己満足かもしれませんが、今日のこの前に立たせてもらったの感想です。ありがとうございました。

#### 【西川氏】

時間があっという間だったんですけど、今日のテーマは生活とか経済の多様化とかいろいろな生き方というのがある中で、今どこに住むのかという自由度が高まっていると。そしたら農山村地域に魅力を感じて移り住んでくる人が多いのではないかと。ではそのための地域からの魅力の発信、それから移住定住に対してどういう活動をしていったらいいかということについて話し合おうというのがこのテーマだったんですけども、もちろんそういうテーマについても十分話ができたかと思いますが私自身やはりこういうものに出させてもらって思ったのは、4人のパネリストさん、それから質問して下さった方、あと学生もそうなんですけれども、この高島、マキノの森西も在原も地域での生活を楽しんでいるというんですかね、今生きてること、もちろんいろんな問題点もあるし将来に対する不安もあるんですけども、今このときを大切にしているのかなというようなことを改めて感じました。私自身はリピーターで来てるのはもちろん半分は仕事ということもありますけれども、仕事で関わる地域として今本当に森西でやらせていただけて、地域の魅力、森西の棚田の魅力、背後にある山、見える琵琶湖の風景すごく好きで、何よりも魅力的な人たちがいることがすごく素敵で、その人たちにお話を聞いてもらおう、または話を伺うということが私をリピーターにしている原動力だと思うので、やはり地域の魅力というのは自然環境やそこで作られている農作物と同時に、そこに住んでいる人たちが本当に日々楽しく生きているその姿に触れることではないかなと思います。もちろん問題をあげればきりはありませんけれども、生活を楽しんでいるという良い面を向けて一緒に進んでいけたらと思います。今日全国から集まってくださっていますのでこの後もいろんな形で交流をして知恵・知識の交換をしていただけたらと思います。これで今日の第3分科会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。



テーマ

## 棚田まもりびとミーティング

### ■ コーディネーター



NPO 法人棚田ネットワーク  
名誉代表

なかしま みわひろ  
**中島 峰広氏**

### ■ 話題提供者 (パネリスト)



NPO 法人地域おこし  
代表理事

やまもと ひろし  
**山本 浩史氏**



仰木自然文化庭園構想  
八王寺組 会長

こうさか まさひろ  
**上坂 雅彦氏**

### 【中島氏】

それではこれから始めていきたいと思います。今日は棚田ネットワークの仲間が手伝ってくれます。棚田ネットワークの仲間というのは、この木戸さんは何とこの連絡協議会会員の第一人者なんです。記念すべき人です。それと高野光世さんです。棚田ネットワークの実質的の代表ですね。それで私の歳は89歳になるんです。要するに上皇と同じ歳です。上皇より僕は1週間早いですよ。だからそれで代表を交代しました。これからは名誉代表ということです。こちらが代表の杉山さんです。

最初に特別なお客さんを皆さんに紹介したいと思います。農水省のナンバーツー。農林水産省の青山さんを紹介したいと思います。青山さんというのがどういう人かという、昭和の末期に入庁されて3年後にかの棚田の聖地と言われる高知県梹原町へ出向するんです。出向して2年目に、奥さんと2人で棚田の1枚を借りたんです。農作業体験をやりたいとおっしゃって体験される。それを役場の職員はじいっと見ていたんですね。あんな東京から来た偉そうな役人ができるのかなと。ところが1年間見事にやって、なかなかやるじゃないか、これだったら都市住民に手伝ってもらえるかもしれないと言って、1992年に梹原町で棚田オーナー制というのがスタートするわけなんです。だから言ってみれば、その元祖と言っていいし、そして棚田オーナーの第1号になったのは青山さん。いわゆる神在居の青山さん、あの頃いくつくらいでしたか。

### 【農林水産省農村振興局 青山局長】

31歳です。

### 【中島氏】

今はいくつですか。

### 【農林水産省農村振興局 青山局長】

61歳です。

### 【中島氏】

それぐらいの歴史が経ってるわけです。それで青山さんちょっと時間がないので申し訳ないですがショートスピーチをお願いします。

### 【農林水産省農村振興局 青山局長】

先ほどご挨拶させていただきましたけれども、先ほどは行政としてご挨拶させていただきましたが、今日は棚田関係者として皆さんの前でお話できることを大変嬉しく思います。1991年に先ほど中島先生の方から過分なご紹介いただきましたけれども、町役場のみんなが協力してくれて、田植えもやり、稲刈りも手伝ってもらって脱穀機を使って脱穀などをしましたし、みんなに手伝ってもらって体験をさせてもらいました。スタッフとして面白いので、都会の人を呼んで体験してもらったらいけないのかという話をしましたところ、町の審議会では、「誰が田んぼの作業をやるのにお金を払ってまで来るやつがおるか。」と言われてまして、料金は四万十川の源流だったので4万10円という設定をいたしました。これは馬鹿高いと言われてまして、町役場からは「そんな4万円も取るんだったら、大量のお土産を持って帰ってもらえ。」というのを当時言われてまして、「いやいやそうじゃないんです。そこは体験することなので、お金にしたところで4万かかってもご飯一杯300円ぐらいにはかからないので、コーヒーと同じなんです。都会の人は喜んで体験しに来ますから。」という説得をしました。たぶん町の出身者であつたら通らなかつたんですけど、農林省からの出向者でありましたので、しょうがないやらしてみるかということで始まりました。当時はインターネットもありませんでしたので、新聞社に全部お手紙を書きまして、そして朝日新聞に「四万十川で4万10円で田んぼのオーナーに」というふうに掲載してスタートしたわけでありまして。先ほど基調講演で山路先生の方から、なんでオーナー制度なんて名前がついたのかというふうに言われましたけれども、当時バブルの全盛期でありまして、土地に関係したいという都会の人たちの憧れがありましたので、「あんた土地のオーナーに、田んぼの

オーナーになれるんだよというふうに言おうよ。」ということで、カタカナですけれども和製英語でオーナーと、小作人なんですけどオーナーと呼んだという経過がございます。

棚田(千枚田)サミットとなっておりますのは、第1回が梶原町でやりましたので、そういう意味で梶原は棚田と呼んでなくて千枚田だったんです。神在居は千枚田なので。私たちが千枚田オーナー制度とずっとと言っておまして、棚田オーナー制度と言われ始めたのはそのあとでありますので、梶原が第1回の誘致の勝負に勝ったので、千枚田という名前を残したいということを強硬に主張して、棚田(千枚田)というふうに現在なっているのはそういう経過がございます。そういうことで今まで私黒子ですので、表には出てきておりませんが、今日皆さんにこうしてご挨拶できて大変光栄に思います。どうかよろしくお願いたします。

第1回のときに選定した田村俊夫さん。移住していただいてこの先、この先というか田村さんには失礼なんですけど、こういう移住者を増やす契機というのが棚田の地域を維持していくには重要だなと。今も棚田を見てまわりますと、農家の人がやってるなんて全くなくて、都会の人ばかりが保全活動に勤しんでいただいています。そういう意味では、地元のことを評価して喜んでやってくれる人たちにやってもらうというのが筋であって、農業の一環でやってもらうのはなかなか難しいと思っておりますので、政策面でもそういう方向に話を前提としてやっていかなければいけないかなと思っております。どうか今後ともよろしくお願いたします。

### 【中島氏】

という前振りです本番を始めたいと思います。今日は最初に2人のゲストスピーカーをここに呼んでおります。棚田保全というのは大きく砕いてお話をすれば、一つは観光支援としてこれを活用して保存していこうと。具体的には能登白米の千枚田。これは国道沿いにありますからあそこに道の駅を造れば十分に成り立って、それで子どもが体験できるという。それから先ほどお話のあった棚田オーナー制。もう一つは棚田米。棚田米を生産してこの上の二つにつなげていこうという。大きく分ければ三つぐらいに分けることができるのではないかとということで、今日はこちらの左側にいるのが上坂さん。地元です。高島市のお隣、大津市の延暦寺の下に上仰木という集落があります。ここで都市住民を中心にしたオーナー制を展開している。一方の山本さんは、いわゆる米どころで米づくりをしているところです。

まず山本さんのところをお話すると、「NPO 法人地域おこし」という団体を今つくっているんです。2004年に中越地震というのがあったんです。それでその時にこの池谷という集落はこれで終わりだと。地震の後6戸か7戸になってしまったんです。だからこれは消滅集落だと当時言われたんです。ところがその後、地域おこし協力隊の京都大学を卒業したある成人がやってきて、棚田グループなんですけど

この地域おこし協力隊を中心に、今、地域おこし協力隊のOBが2人、一人奥さん連れですから実質3人。それといわゆる農村体験をしたいとやってきた成人と。実は山本さんは自分の棚田がありますからそれで米づくりをしているんです。それで大体年間32tを出荷している。60キロを1万9千円から2万円と。山清水米というので売り出している。それで3千万円から4千万円ぐらいで全部上がってるのかな。売り上げの話は内々の話だから正確なものではないと思ってお聞きください。結局それを元手にして地域おこし協力隊のOBが今、給料を月給数十万円ぐらいもらってると思います。きちんと給料を払っているんです。だから保存会でも、いわゆる志だけで保存活動をやるというのは限界があるわけです。元気なうちに、そしてバリバリやる時にはあんまり考えられないかもしれないけど、もう歳も取ってもう終わりかなという頃になると、やっぱりそういうことも考えます。だから保存活動と言えども、きちっと給料を払えるような形で保存活動を目指していただきたいということで、今、山本さんのところはそれを目指しているということです。一方、上坂さんは地元です。上仰木ね。あの辺りだとかなり兼業農家を中心なんです。都市に近いでしょ。兼業農家のOBと言ったらいいか、いわゆる定年後、自分の土地があって兼業農家の家で親父が生きてるうちに手伝っている人と手伝わなかった人は大きな違いが生まれます。手伝わなかった人は兼業農家になって兼業を卒業しても、田んぼはなかなかやりません。60歳か65歳ぐらいになって全く経験なしですぐやれというのはなかなかできません。かと言って、若い連中に教わってやるというそれぐらいの勇気もないんですね。だからこういう人は大体やらない。若いうちから兼業農家の時代から手伝っていた連中は定年後きちっとバトン継ぐという傾向を私は見られるのではないかと思います。OBの場合は、その兼業農家のOBたちが大体村の役員をしたOBなんです。6人から7人こういう人たちが中心になってオーナー制度を展開していくという事例であります。

そこで早速お二人に自分たちの取り組みについてお話をさせていただいて、皆さんが話の展開をしていただく。それではよろしくお願いたします。

### 【上坂氏】

こんにちは。高島市へようこそおいでいただきました。いい話は後に置いておきます。こんな大きな会場でまさか話をすると思ってなくて、いつもこのミーティング、小さな会議室で20人ぐらいで喋ってるので毎回お邪魔してたんなんですけど、地元だからもう喋れと先生に言われるもんですから、お願したいと思っております。

まず私の経歴なんですけど、平成20年にこの上仰木地区の農業組合長をさせられてます。「お前やれ。」と言われてから農業に携わって今の農業組合の顧問であったりとか振興協議会を立ち上げたときの会長をさせられたりとか、もうやるもん

がないから農業委員やれと言っても津市の農業委員もさせていただいて、現在は副会長までさせられております。その中でこの八王寺組というのを立ち上げてまして作らせてもらってます。私も実際に兼業農家です。兼業農家ででありながら約30枚の田を一人でやっています。それプラスこの会をやっている。私も兼業農家で親父がまだ元気なときは百姓してません。田植えと稲刈り、たまに草刈りを手伝うくらいで、琵琶湖でジェットスキーをしまくってました。でも親父が倒れてからやっぱり百姓をしないといけないというのと、ちょうど農業組合長をさせられたときに田んぼに目が向くようになって、諸先輩方からも「ちょっと何とかせなあかんぞ。」ということを言われました。

5月3日が毎年祭りなんですけど、戦前でやっている行事と同じことを平成、令和になってもやっているとかな、昔ながらの伝承を今も引き継いでいるというような地域であります。

### 上仰木はどなたところ？

- 滋賀県大津市北部、琵琶湖西岸の標高200m前後の丘陵地に位置
- 谷の傾斜の部分を利用し、集落を取り囲むように広がる階段状の土壁の棚田(46ha)
- 伝統的な生活文化が根強く残る
  - 1200年以上前の平安時代から比叡山寺の荘園として棚田が形成され、稲作が主に行われている
- 地域整備に関する共同作業が多い、甲組自治会12組、232軒の内188軒が農家
- 山の管理・水路の清掃など

【仰木全体では世帯数: 621軒 人口: 約1930人 (2022年7月1日現在)】

仰木上空から撮影した外方面をのぞむ。作成: 地域プロジェクト

### 仰木の里山環境や農地の現状

- 高齢化や若者層の流出による担い手不足
- 深刻な獣害の増加  
これにより、里山環境・農地の維持管理が難しい状況になってきた

↓

- 問題を解消するための取り組みの検討(上仰木にて/2007年)

現在の住居表示による地域区分  
青いエリアが仰木の古からの集落で、赤色(右)が仰木の里(ニュータウン)  
この赤色は従来の棚田や丘陵地から幅員が狭い農地帯から農地帯によって切り開かれ、新興住宅地にもなった。  
(両方合わせて全地域が、旧比叡山寺の荘園)

田舎者である仰木はもつ平によって埋め立てられても、比叡山の麓線沿いには1kmの距離を越え、土壁、水たまり、草刈、下草刈りなど、そのまままで伝承し、里山の環境を維持している。

大津市は南北に縦長のところで琵琶湖の一番狭くなっている山手が仰木というところで、上仰木なんですけど自治体が甲組自治体という呼び名があって12組で232軒のうち188軒が農家です。専業農家は3軒ほどしかありません。あと全部兼業で自分とこの販売・食べる米を作るという農家がほとんどなんですけど、田植え機からトラクター、コンバイン、乾燥機、脱穀機、一軒一軒全部備え付けられてます。自分とこの米は自分とこで処理して自分とこで食べるという農家が188軒も集まった地域であります。そして琵琶湖から堅田です。堅田から比叡山延暦寺がもう大規模で広がってまして、比叡山を超えると京都市。平安時代は物流のルートにもなりましたし、ちょうどここに横川中堂と書いてますけど横川は比叡山延暦寺の北の果て横川の山門として、延暦寺用のお米を作る荘園として大体1200年前から形成されていると言われていた地域です。

そんな中、仰木の里山なんですけど、この赤色(スライド右図の右部分)の部分は今はもう新興住宅地です。この青色(スライド右図の左部分)が旧の仰木町で、上仰木はこの辺に位置するというような位置状況なんですけど、大津市は都市部から近いんですけど、近くて便利な田舎と言われながらもやはり高校を出てから大阪や東京の大学に行くというのは皆さんのところと変わりません。もう出て行ったら帰ってこない。じゃあ後継ぎ、担い手どうするのとか、サル、イノシシの獣害柵を作っても破ってくる。どうしたらいいんだろうというので検討会を開かれて、当時2007年の2月にこの八王寺組は発足しました。

### 仰木祭《今昔》写真帖

仰木祭の歴史をたどる写真帖

仰木祭 (作成: 地域プロジェクト「じぞうの目録1号」より)

### 仰木自然文化庭園構想 八王寺組について(1)

【八王寺組の成り立ち】  
2007年2月発足

- 地域活性化の必要性を感じていた「若者世代(30代~50代)」
- 荒れた田んぼを公園にしたり、集落を巡るハイキングコースの整備などを構想
- 地域の農業後継者不足を懸念する「高齢世代(60代~)」

↓

「農業から離れてしまっている地域の若者をなんとかしたい! 10年後の担い手不足が心配」

「高齢世代と若者世代で世代を超えたひとつの団体を作ろう!」  
(上仰木・辻が下地域農村活性化委員会の協議のもと発足)

【どんな構成の団体にするか?】

- 高齢世代の知恵や技術を若者世代に伝授するため、縦の繋がりがある農業組合と連携
- 地域全体の活性化のために、自治会とも連携
- 地域住民が中心となり運営し、高齢者から若者世代まで幅広いメンバー構成で仰木の良さを地域の住民に理解してもらおう

↓

「地域住民が主体でやらなければ!」

中山間直接支払制度の上仰木・辻が下第三集落協定推進会の別働隊

我々、その時は若者世代でした。三十代五十代はもう百姓するのが嫌です。百姓したくないから荒れてる田んぼを公園にしたりハイキングコース、遊ぶところを作らないかという意見と、当時の60歳以上から、「農業離れてしまっている若い奴らを何とか農業できるように引っ張っていかないと、10年後の担い手が心配だ。」ということで、世代を超えた中で一つの組織をつくらうかというので、歴代の農業組合長を呼ばれて、こういう組織づくりからお前ら現場に立てて大先輩に言われたら、やはりもう従わざるをえないというのが田舎で育った者の定めでありまして参加するようになりました。それと地域活性化もしないとあかんということで、自治体とも連携していく中でとりあえず地域住民が主体でしないといけないぞ

ということを先代の会長に言われてやり出すようになって、まず何をしようかとなったときに、周りの人から理解を得たというので地域の後継者対策、農地保全、地域活性に向けて仰木の自然と文化の魅力を掘り起こしながら活動するというので「仰木自然文化庭園構想」という前書きがつかまして八王寺組。これは「はちおうじ」と書くんですけど、「はっちよじ」と読みます。

## 仰木自然文化庭園構想 八王寺組について(2)

### 【八王寺組の理念】

「地域の農業後継者対策・農地保全・地域活性化」に向けて、自治会や農業組合と連携を図りつつ、農山村の自然と文化の魅力を掘り起こし、魅力ある地域の創造を目標に活動する「仰木自然文化庭園構想 八王寺組」と命名

しかし、イベントの実施や広報などをどうする？

↓  
まずは地域住民の理解を得る

### 【構成】

地元農家:20名 地域住民:1名 地域外:1名  
会長/副会長2名/事務局2名/幹事11名  
/相談役2名/監事2名/指導員2名

顧問[上仰木自治会長・上仰木農業組合長]

HP:仰木自然文化庭園構想 八王寺組  
<http://kamiogji.jp/>



そんな中で地元の農家を中心に、ほとんどメンバーが農業組合長のOBです。そこに上仰木の自治会長と現役の農業組合長もという形で増えて、農業組合長、毎年変わっていきます。変わって行って卒業したらうちの組へおいでと言っで引っ張ります。引っ張られたらやめられません。もうずっとメンバーが増えていくような組織づくりをしています。

## 八王寺組の主な活動(1)

### 【棚田ボランティアの受け入れ(棚田保全活動)】 2009.8~

耕作放棄地が増えつつある棚田地域を守るため、地域住民とともに休耕田の草刈りや農道整備、崩れた土手の修復、復旧作業などを「しが棚田ボランティア」制度の取組みとして行っている。棚田保全活動を元に地域住民に対し、八王寺組の活動を認知してもらうボランティア参加の都市住民の方々に仰木の良さを知って頂く

※現在では、オーナー田の草刈りを中心に、休耕田の草刈り、水穴補修など年7回行っている



## 八王寺組の主な活動(1)

### 【棚田ボランティアの受け入れ(棚田保全活動)】 2009.8~

耕作放棄地が増えつつある棚田地域を守るため、地域住民とともに休耕田の草刈りや農道整備、崩れた土手の修復、復旧作業などを「しが棚田ボランティア」制度の取組みとして行っている。棚田保全活動を元に地域住民に対し、八王寺組の活動を認知してもらうボランティア参加の都市住民の方々に仰木の良さを知って頂く

※現在では、オーナー田の草刈りを中心に、休耕田の草刈り、水穴補修など年7回行っている

募集方法:遊賀棚田ボランティア制度(たな友)を利用/八王寺組のホームページでも募集し独自にメールでも配信参加者への返礼。地元で採れた食材を利用した「わさいな弁当」(仰木地区の地域活性化委員会の直売所で販売)

※ボランティア参加者が棚田オーナーとなり近隣に移住される方もあり、ボランティア参加者が仰木のファンになって頂く入口の一つとなっている

**たな友**  
遊賀の棚田保全を目的とした棚田を守り、農作業をお手伝いするサポートグループです  
<http://tanatomo.jp/>



まず何をするかというので先ほども滋賀県さんからのお話がありましたけど、2009年に、当時滋賀県から美味しい蜜をすすめられました「補助金もらえるならやり。」と言われて、「3年だけよ。」とやったりしたんですが、「しが棚田ボランティア制度」というのを利用して休耕田の草刈りであったりとか、雨が降ったらあちこち土手が崩れます。崩れたときの直す尽力になってもらったり、耕運機一台しか通れなかった道をトラクターが通れるように広げたりとか、農道整備なんかをしてもらっております。年に7回ほどやってまして、我々八王寺組が独自でメールで案内したり、先ほども散々滋賀県の方がアピールされてました「たな友」という制度を利用してボランティアに来ていただいて、まず仰木を知ってもらい、仰木ってこんなところだよというファンになってもらう方の窓口となってもらって、その方がオーナーになってもらったりもしています。

## 八王寺組の主な活動(2)

### 【その他イベントの実施】

地域住民と棚田オーナーさん、棚田ボランティアの参加の都市住民の皆さんとの交流会  
仰木がロケ地となった昔の映画の上映会の企画、地域を歩くスタンプラリー、生き物観察会、観光協会等の田植え体験受け入れなどを実施。  
地元の自治会などのイベントにスタッフとして企画～運営に参加  
上仰木の棚田で採れた日本晴を使用した純米吟醸酒を酒造会社と共同開発

※近畿版 第5回ディスカバー農山漁村の宝 コミュニティ部門 認定【2022.1】



その他に昔の映画の上映会。これ東映で美空ひばりさんがまだ若かりし頃の時代劇映画をしょっちゅう仰木で撮影してました。そんな上映会をして地域の人に楽しんでもらったりスタンプラリーを行ったり餅つき大会、しめ縄作り、生き物観察会等々を作りまして、その中でヒットしたのが日本酒です。

## 八王寺組の主な活動(3)

### 【清酒 八王寺の共同開発】 2014年~

上仰木棚田(棚田オーナー田、後継者育成田)で収穫した「日本晴」を本望田にある浪乃音酒造にて醸造・販売  
12月に純米華厳産生原酒を予約販売し、取り立てのフルーティーな女性好みの味わいからGW以降は  
極速熟成させ身が取れた日本晴利用者にはたまらない味が自慢(要予約)

(棚田オーナー田の酒米コースの返礼品に一升瓶4本又は四合瓶8本進呈)

大津市のふるさと納税返礼品に認定されています(ふるさとチョイス・ふるなび・さとふるで検索)



※販売した一升瓶1本200円・四合瓶1本100円が浪乃音酒造から寄付されており  
毎年3万円以上の寄付が棚田保全に役立っております  
製造・販売元:浪乃音酒造株式会社 遊賀農大津市本望田1丁目7番16号 TEL:077-573-0002

これは2014年から100%上仰木棚田で採れたお米の日本晴という品種を使って、堅田にあります浪乃音酒造で造ってもらっています。これが非常に純米吟醸の無濾過の生原酒という美味しいお酒になってます。淡麗辛口で美味しいなどというのがあるんですけど、我々酒造の販売資格がないので酒造店さんに販売してもらって、四合瓶が1本100円、一升瓶が1本200円、売り上げがあった中から寄付という

形で我々がもらってるということです。

### 八王寺組の主な活動(4)

**【ストローベイルハウス建築】2012年～**  
 成安造形大学の授業活動の受入で、地元の自然素材を使用し活動拠点となる小屋(野小屋)を建築  
 仰木の村山の間伐材を利用した柱や、土壁用の土の採取から熟成まで学生達と共に作業  
 稲わらを集め、キューブ状のベイルにする為、稲刈り、ハサ掛けを行いベイルで加工  
 学生・農業組合・ボランティア・スタッフにて結の再現での棟上げ  
 ストローベイルの土壁塗りのワークショップでみんなで壁づくり

それと2012年から三か年計画でストローベイルハウス、藁の家、こういうストローベイルを使った壁の家を造るという作業をしました。これは大学の授業の一環なんですけど、学生であったり農業組合であったり、あといつもボランティアで来てもらっている常連さん、スタッフとかで結の実現。昔は家建てるときは村中の人が集まって人力で棟上げをするというのを、この平成になってから行ったり、またワークショップを開いたり、刻みも全部学生がしました。難しいところは私がしました。こんな形の拠点、一応農業倉庫です。

### 指定棚田

- 仰木地区の棚田を棚田地域振興法(令和元年8月16日施行)の指定棚田に指定されました  
 \*棚田地域振興法: 貴重な国民的財産である棚田の保全、棚田地域の有する多面に渡る機能の維持増進、棚田地域の持続的発展(国民生活の安定)向上を目的に  
 \*指定棚田: 農林水産省、総務省、文部科学省、国土交通省、環境省が、棚田地域振興法(令和元年法律第42号)第7条第1項の規定に基づき、令和2年5月20日指定
- 令和4年2月現在、指定棚田地域は、40道府県において698地域が指定されています。  
 (大津市内では仰木のみ)  
 \*滋賀県内では5市町12地域が指定されています
- 八王寺を含む上仰木地区の棚田での棚田保全や地域振興に取り組む為の「上仰木棚田振興協議会」が令和2年6月設立(近畿初)  
 八王寺組を中心に中山間直結支払い事業: 第三集落協定推進と第二集落協定推進が参画
- 協議会の事業活動計画で成安造形大学と連携・学習田の参加生徒を200名に増やす・ドローンを使った省力化を行い中山間直結の棚田加算

そんな中で指定棚田。これ前回長門サミットのときだったと思います。こういうのができるよというのを聞いて、それを大津市と滋賀県にもうさんざんお願いして、仰木全体で指定棚田に指定していただいて、じゃあすぐ協議会を立ち上げなあかんということで、私ら右も左も分からないのに協議会立ち上げというところで大津市にすごく協力していただきまして、そこに八王寺組中心にして中山間直結を行ってます第三集落協定推進と第二集落協定推進が参画しまして、それが近畿で初めてだったらしくて近畿内で言われてたんですけど、それで事業計画の中で私たちがしてることをそのまま盛り込んで、成安造形大学との連携で学習田の参加人数を増やしますよと、農業用のドローンを使って省力化しますよということで中山間の棚田加算をもらって利用をさせてもらってます。

そんな中で、棚田遺産にも認定していただいて、上仰木棚田で90ha。隣に平尾棚田があります。そこも48haで同じ仰木棚田でくっつたらと言われたんですけど、田んぼの中の

### つなぐ棚田遺産

2020.5公示  
 ・旧田市町村・仰木村の指定棚田は着色した部分が指定棚田の対象の圏域  
 ・赤色が中山間直結支払い制度の第三集落協定推進会の圏域(約40ha)を対象に協議会の活動地域として設定  
 \*つなぐ棚田遺産に認定 2022.3認定  
 ・上仰木棚田(90ha)  
 ・仰木 平尾の棚田(48ha)

※滋賀県棚田面積(田)47,100ha  
 大津市内耕地面積(田)2,040ha

ルールであったりとか水の使用であったりとかいろいろとルールも違います。組織も違います。文化も違うので、別棚田として認定してほしいと滋賀県にお願いして二つの棚田に分けました。

### しがのふるさと支え合いプロジェクト①

- 成安造形大学  
 【協働内容】  
 ・棚田ボランティア活動への参加  
 ・棚田オーナー制度の活用  
 ・仰木の文化継承に関する地域を活性化させる

成安造形大学のプロジェクト演習「近江・里山フィールドワーク」にて田植え・稲刈り・脱穀作業の棚田保全活動と仰木集落の民俗文化に触れるフィールドワークを行っています。一年間を通じて仰木の魅力を発信し地域活性化のプレゼンを行い、活動のヒントとなる事を学生から得ています。

※しがのふるさと支え合いプロジェクトとは、滋賀県が農山村の活性化や新たな価値の構築を目的に、中山間地域と企業・大学・高校・NPO等が協働活動を行うプロジェクトです

先ほど滋賀県が何回も言っていました「しがのふるさと支え合いプロジェクト」。成安造形大学に来てもらってます。一応田んぼで稲刈りして稲架掛けして、仰木の歴史・文化を学ばせて、そこから最終レポートでどういふふうな魅力があるのか、それをこう生かしたらいいんじゃないのというのを学生にヒントもらいながら、これは上仰木だけではなくに仰木全体の活性化に委員会でも参考にしてもらって活動してます。

### しがのふるさと支え合いプロジェクト②

- 株式会社ツールドラック  
 【協働内容】  
 ・仰木自然文化庭園構想 八王寺組の事務局支援および活動参加  
 ・仰木自然文化庭園構想 八王寺組の活動の海外向け情報発信

イベント時の事務局のサポートや棚田保全活動への参加を行っていただき、SNSで英文での海外への発信を行っています

それともう1社でツールドラックさんというインバウンドの受け入れをしてらっしゃる企業さんです。企業活動は我々事務局のスタッフ側の人数不足をまかなうためにイベントごとに参加していただいてスタッフとしてお手伝いいただく。あと僕がさっぱり

分からない英語で SNS を通じて海外に発信してもらおう。上仰木でこんなことやってますよ、上仰木ってこんなところですよというのを英語で全部やってもらうというので、今年の田植えのとき、イギリス人のご家族全部英語が飛び交うようなところで、ワールドワイドな田んぼになったと他のオーナーさんなんかにも言われています。

### 中山間直接支払い推進会との連携

- フィールドの八王寺地区を含め、12集落約40haの集団で中山間直接支払い事業第三集落協定推進会(第三集落)が令和3年度で5期目を迎え
- 10割単価21,000円/反+棚田加算10,000円/反(令和4年度より超急傾斜加算14,000円/反が追加)されています
- 棚田加算の必須項目の2項目を八王寺組が引き受け、集落全体で対応



中山間直払を受け入れてます。第1期から10割補助ももらって今5期目に入って12集落の40haの棚田加算も受けて、それと棚田加算の2項目を八王寺組が引き受けて達成をさせてもらっています。

### 棚田オーナー(1)

#### 【棚田オーナー制度の運営】2010年～

米作りや農作業に関心があり、地域で取り組んでいる棚田の保全活動に理解いただける個人や家族を対象に、上仰木の棚田オーナーを募集。

（今年で13年目を迎え、毎年約9割更新。約1割は前年度からの継続）  
地主さんが高齢のため10年耕作放棄され、流れ放題だった棚田を復旧し、オーナー田として利用。（天津市内をはじめ、京都、大阪、神戸から参加して頂いております）

《充実コース》  
米作りの全工程を体験、稲作を学びながら自力で米作りをしたという方

《体験コース》  
田植えと稲刈りを体験したい方に、時間が無い方も、できない作業はスタッフが代わりにします。  
田植え・稲刈り・脱穀の3回参加が必須

《漬づくりコース》  
オーナーさんの区画でとれたお米で漬ったお漬を運送

《サポーター制度》  
1口100株の稲株主となって頂き収穫したお米約5kgを運送



棚田オーナーのコースに行きます。充実コース、体験コース、酒づくりコース、サポーター制度というこれで耕作放棄地とあと耕作できない高齢者さんの田んぼを借りてこの暦を作っています。1から10まで全工程を一緒にやろうねというのが充実コースです。これは新たな兼業農家さんを探るために始めました。皆さんがずっとやってらっしゃる田植え・稲刈り・脱穀の3回だけというのが体験コース。ほとんどがこのコースの方です。

その田んぼなんですけど、もうちっちゃなところなんです。全部で5段ほどしかありません。1枚1枚小さな田んぼに1軒ずつのオーナーさんで、あと大きなところも3つ4つに区切って2010年から始めました。7区画からスタートしています。徐々に増えていって今は33区画でやってる中で、県立の北大津高校と高等養護学校が使ったり西安造形大学が使ったりというので1区画3万円で30kg補償。こんなちっちゃい田んぼで30kg取れないので、お米を補充して合計30kgというので1軒ごとにお米を全部分けてます。自分のところで刈り取ったお米を

### 棚田オーナー(2)

#### 【第一オーナー田 航空写真】

【区画数】  
2010年度～7区画  
2011年度～13区画  
2012年度～22区画  
2017年度～22区画+11区画  
2020年度～24区画+11区画  
2021年度～32区画+11区画  
2022年度～33区画

北大津高等学校  
北大津高等養護学校 1区画  
西安造形大学 1区画

耕作できなくなった3軒の圃場を管理

1区画3万円で30kg補償

赤痢の圃場がオーナー田



そのまま持って帰ってもらえるというシステムを組んでいます。

### 棚田オーナー(3)

#### 【オーナー田 コネ作業・代掻き作業 写真】



そんな中で畔付けもします。代掻きもします。ちっちゃい田んぼはこうして引く張ったり普通にしてるんですけど、大きいところはすいませんもうハローで流したりしてます。

### 棚田オーナー(4)

#### 【オーナー田 田植え作業 写真】



田植えも我々のところは後ろ向きで植えます。全部後ろ向きでおりるといって、田んぼの形状に合わせてまっすぐ植えるのとあと横はこの形状に合わせて植えますよということになって植えています。

あとこの普通の草刈りとか、よくボランティアさんに手伝ってもらいながら充実コースのオーナーさんとかと一緒にやっています。しよっちゅうテレビの取材に来て放映してもらったりとか、大きいゴキブリのようなゲンゴロウがいて僕は虫が嫌いなので見たらゾッとするんですけど、水を落とすときには山盛りに出てきます。イモリとかもいますしタガメやらもいますし、普通にいるような環境下のオーナー田です。

棚田オーナー(5)

【オーナー田 草刈り保全作業 写真】



棚田オーナー(7)

【オーナー田 交流会作業 写真】



棚田オーナー(5)

【オーナー田 稲刈り作業 写真】



これは今年の稲刈りです。ハサ掛けして今年は全てで12基建ってます。三段仕立てです。うちのところは真ん中に1本杭を打って木の杭と竹で三段に組んで、あと突っ張りをしてというのが今こんな状態でありますし、皆交流しながら昼ご飯食べたりというのをやっています。

棚田オーナー(6)

【オーナー田 脱穀作業 写真】



これは脱穀です。オーナーさんごとに脱穀をして、あとはそのボランティアさんに藁を撒いてもらって11月に摺ると。

これはコロナ後の交流会です。田んぼでやりました。コロナ前は拠点の前で餅つきをしたり全部やってたんですけど、密になるので、田んぼの中では密にならないであろうということで、全工程今年も去年も一昨年も一回も中止することなく全部やっています。オーナーの作業も全部行っていました。ボランティア活動も中止せず全部受け入れてやったら、みんな自粛自粛で子どもたちも遊ぶところがないという中で、家族連れのオーナーさんに来てもらったら子どもは走り回ってました。一応

マスクしながらソーシャルディスタンスを保ちながら3年間取り組んできたんですけど、これはこれで良かったかなと思います。

最後です。当時八王寺組を作ったときの高齢者世代の目論み通りに、私もどっぷり百姓するようになりました。うちのメンバーも何人かもうどっぷり百姓するようになりまして、百姓するからそのまま田んぼを作り続けられる。親戚の田んぼ、近所の田んぼを僕らが集約していくということで棚田保全をできるのかなど。でも私も10年経ってもう55歳になりましたので、さらにあと10年後どうしようかなというのが今後の課題。それとやはり田んぼをするのに若者世代が収入アップをさせるために農協に出しては全然お金になりません。ですので、上仰木棚田米というのを登録商標してブランド化を今やっています。申請中です。そこで集落営農するために小規模なライスセンターを作りたいなとずっと思ってるんですけど、お金がないのでなかなかできてないというのと、この間棚田学会で聞きましたWi-Fi環境。田んぼ中にWi-Fiを巡らして、田んぼを見に行かなくてもセンサーをつけたいらこの田んぼが水なんぼ入るとか、大雨が降るから水路を閉めに行かんとあかんけど、雨降るのに僕ら兼業農家なのでサラリーマンしていたら行けません。でもオンラインで繋がっていてスイッチポンで水路が閉まるというようなものを今後付けていきたいなと思っていますのでどうぞよろしくお願いします。

【中島氏】

いろいろな状況にあるかと思います。でも今のところはうまくいっているという事例ではなからうかと思っています。それでは次に山本さんお願いします。

【山本氏】

ご紹介をいただきました山本と申します。よろしくお願います。テーマとして移住者を受け入れて地域復興をしようというこういう取り組みをお話したいと思います。

まず新潟県の中のここが十日町になります。これが池谷集落の原型なんですけど、棚田はここにありますが双方に谷あいとかそういうところに点在しているという状況になります。私の方が活動している事務所はここにあるんですね。古い分校を教育委員会から無償で借りて運用しております。



### 池谷集落の人口推移 国勢調査1960年～

国勢調査年	世帯	男	女	合計	残存率
62年前 昭和35年 1960年	36	112	99	211	100.0
昭和40年 1965年	30	82	87	169	80.1
52年前 昭和45年 1970年	24	66	58	124	58.8
昭和50年 1975年	17	42	42	84	39.8
42年前 昭和55年 1980年	15	33	29	62	29.4
昭和60年 1985年	11	22	22	44	20.9
32年前 平成2年 1990年	8	14	18	32	15.2
平成7年 1995年	7	12	12	24	11.4
22年前 平成12年 2000年	8	12	10	22	10.4
平成17年 2005年	6	7	8	15	7.1
12年前 平成22年 2010年	8	-	-	17	8.1
3年前 平成31年 2019年	11	-	-	23	10.9
現在 R4年 2022年	8	-	-	16	7.5

©特定非営利活動法人地域おこし



### 入山集落の人口推移 国勢調査1960年～

	世帯数	男	女	合計	前回調査比
S35 1960年	15	40	55	95	-4
S40 1965年	9	20	29	49	-46
S45 1970年	7	13	16	29	-20
S50 1975年	3	7	5	12	-17
S55 1980年	4	6	4	10	-2
S60 1985年	3	7	3	10	0
H2 1990年 H1年閉村				0	-10

©特定非営利活動法人地域おこし

これが冬になるとこういう感じになります。半端ない豪雪地帯です。

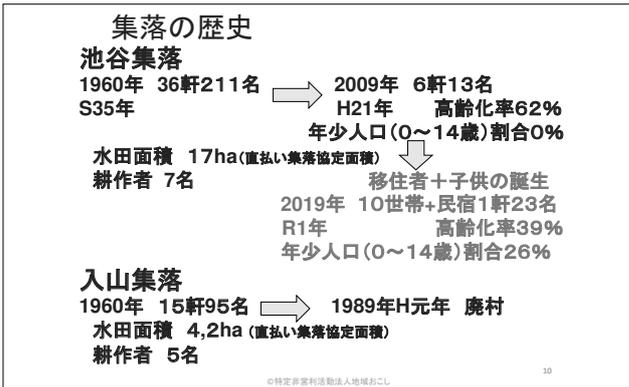
自慢ではないんですが、これは2005年震災の翌年に私が撮影した池谷集落の当時の集会所です。昔は米の倉庫だったんですが、実はこれ玄関ではなくて2階の窓です。2階の窓から2階に移ると。冗談ではない本当の話です。

この池谷集落の人口構成なんですが、今から62年前、昭和35年では211名がいた。平成16年の2004年に中越地震がありました。それでさらに一番少なかったときはここに数字がないんですが6世帯13人というのが一番底でした。その後私の方で活動する中で現在は一番多いときで11世帯の23人まで増えたんですが、今はちょっと減って8世帯の16人というふうになっています。

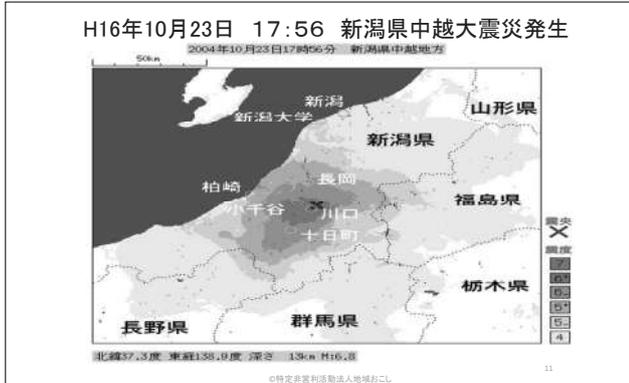
これをグラフに表すとこんな感じになります。

これは私の生まれ育った入山というところなんですが、

昭和35年15世帯の95人。私は1951年生まれですのでこの中の1人が私になるということになります。これが池谷集落36軒211人いたのが2009年に6軒13人まで減った。その後移住者が増えてこういうふうになったと。



入山集落は同じくやっぱり15軒95名いたんですが、平成元年に廃村になりました。それぞれ規模的には池谷集落は中山間地で協定面積で17ha。こういう感じになります。



2004年の大震災ですね。



集落なんかもこういう感じになりました。

先ほど中島先生のお話ありましたけれども、これはもう村をたたくしかないかなというふうなときがあったわけです。

この地域おこしのきっかけなんですけど、2000年の年に東京在住の日本画家Aさんというふうに出ておきますが、出会いがありました。この方は日本の農村農業に危機感を持って、画を描くことで応援したいと。それで私の2階をアトリエとして提供したんですね。それで2004年に大震災を迎えた。この画家さんが、都会が持つ力を呼び込めば大きな可能性があるよという話。それで国際NGO、元々Aさんと繋がりがあったNGO「JEN」というところに支援を要請するわけです。最初は全く乗り気ではなかったんですよ。というのは発達した日本はわざわざJENが出掛けるほどのことではないのではないかとこのように思っていたらしいんですが、あまりにも熱心に要請するので結果的にJENが応えてくれたと。当時の文書を改めて読んでみると、被災した逆境でも地域おこしに必ず繋がれるというふうに表示しています。具体的には、年間を通してボランティアを派遣してくれる。5年10年の位置づけで考えるというふうに言われました。

JENとは当時は海外のみに出ているわけでした。

「特定非営利活動法人JEN」に復興支援要請

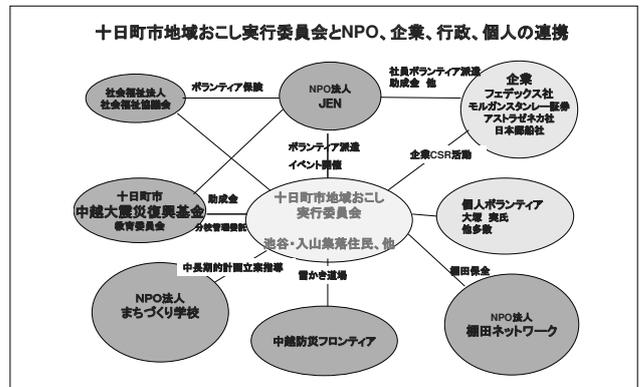
JENとは

「平和な国際社会作りを目指し、世界各地で紛争や自然災害などにより厳しい状況にある人々へ、『心のケアと自立の支援』をモットーに、きめ細やかな支援活動を行う」国際協力NGO

本部：東京都新宿区

現在進行中のプロジェクト 4 国・地域  
(アフガニスタン パキスタン 東北 熊本)  
終了プロジェクト 16 国・地域

そこでJENから要求されたのはボランティアが自活出来る施設を探してほしいと。地元でボランティアを受け入れる団体をつくってほしいと。それで私どもが十日町市地域おこし実行委員会というのを地元の住民で構成をしたわけです。



これは当時のいろんな関係図なんですけど、私もこの頃から棚田ネットワークの会員にさせていただきました。

拠点作り

震災翌年(H17年4月)市よりボランティアの宿泊所として、池谷分校を借用、「やまのまなびや」と命名  
数回の改修を経てボランティア活動の拠点に、現在NPO法人地域おこしの事務所



先ほどの分校をいろいろ整理しながら先ほどの集会所なんですけど、改築を約1,600万円かけてやっています。

これは中島先生も落成式に来ていただいています。

これが式の内容です。それで中越大地震の復興基金というのが、国が新潟県に3千億円、10年間の利息で運用しなさいという復興基金というのがあったんですね。

このプロジェクトの中に地域復興デザイン計画、こういうメニューがあったので、ここに手を挙げて、いろんなところから知恵をいただきながら、2年間で20回ほどワークショップをやっております。

2007年12月池谷集会所「実るいけだん」落成式



### デザイン計画 (1)

- 1)米直販の本格実施 ⇨ 収入を増やす
- ・ミニ精米プラント導入(20年8月導入)
  - ・「山清水米」ブランド構築(20年10月)
  - ・米直売のための受注システムの構築(21年2月)
  - ・販路拡大のための活動



ということかという、一つはお米を直販にして収入を増やそう。

2007年池谷集会所「実るいけだん」落成式



### デザイン計画 (2)

- 2)都市交流の促進・事業化を模索 ⇨ 仕事・収入を増やす
- ・エコツーリズム
  - ・ボランティア受入れ
  - ・収穫祭、山菜まつりの開催



二つ目は都市交流をどんどんと進めよう。

#### 資金調達

- 1、新潟NPO協会
  - 2、ニュー新潟振興機構
  - 3、郵政公社
  - 4、十日町市役所
  - 5、企業・個人による寄付(……………)
  - 6、中越大震災復興基金
  - 7、ボランティアによる募金(自前)
- ……………以上、池谷分枝[山の学びや]改修関係……………
- 8、中山間地直接支払い制度
  - 9、農村6次産業起業人材育成事業(内閣府)
  - 10、直販収益事業

### デザイン計画 (3)

- 3)後継者育成・定住促進 ⇨ 住まい・住む人
- ・空き民家の改修
  - ・農業研修生の受け入れ
  - ・短中期滞在者の受け入れ
  - ・地域おこし協力隊募集
  - ・新規就農者支援
  - ・定住希望者への支援活動



三つ目は後継者をとにかく探そうと。それで後継者のための住まいを造ろうということでこの空き家を改修して、先ほど中島先生から紹介のあった私どもの事務局長の多田というのはここに住んでおります。地域おこし協力隊という制度はちょうどこの当時にできました。

当時いろんなインターン制度というのがありました。新潟県が中越大震災復興基金で「イナカレッジ」というインターン制度、あるいは新潟県独自のインターン制度、十日町市独自のインターン制度、こういうのを私どもの団体が実務を請け負うという委託事業を受けまして、本当にかなり多くの方々が移住をしに来てくれました。地域を決めてもらって仕事の手立てがあれば、インターンとかも移住が見込める。

2007年11月、中越大震災復興基金「デザイン策定支援事業」認定

### 池谷・入山「復興デザイン」プラン ～にぎやか村プロジェクト07～ << 基本構想 >>

2007年10月

### 2014年～当時のインターン制度

- 「にいがたイナカレッジ」  
... 中越大震災復興基金
- 「にいがたで「暮らす・働く」応援プロジェクト」  
... 新潟県独自政策
- 「十日町市独自インターン受入事業」  
... 十日町市独自政策

©特定非営利活動法人地域おこし

30

### 2018年～ 棚田オーナー制再開



©特定非営利活動法人地域おこし

34

### 2015年 新規就農者研修住宅めぶき建設



©特定非営利活動法人 地域おこし

それともう一つ、新規就農者研修住宅というのを建てました。これはクラウドファンディングなんかを使いながら独自に建てたわけです。

### 移住者3名が「めぶき」入居(当時)



©特定非営利活動法人地域おこし

33

それで移住者は3人。このうち彼(写真の真ん中)もインターンで来た後に実際に応募して、今でも私どものNPOの主要なスタッフとして頑張ってもらってますし、この人(写真の右)も集落に移住しています。

棚田オーナー制度。これは再開としてありますが、実はかなり前から取り組んでいたのですがなかなかうまくいかなかった。この頃本格的にもう一度ちゃんとやろうということでこういう制度をいわば再開をしたわけです。

これ見ていただければと思うんですが、農作業等の様子

### 棚田オーナー制 選べる4つのコース

農業・化学肥料不使用コース		割当面積
3)小口	10,000円+税 (平均収量5.5kg・最低保証3.75kg)	25㎡
4)標準	35,000円+税 (平均収量22kg・最低保証15kg)	100㎡
特別栽培米コース		割当面積
1)小口	10,000円+税 (平均収量11kg・最低保証7.5kg)	25㎡
2)標準	35,000円+税 (平均収量45kg・最低保証30kg)	100㎡

©特定非営利活動法人地域おこし

35

### 2020年～農作業等の様子をYouTubeで発信



©特定非営利活動法人地域おこし

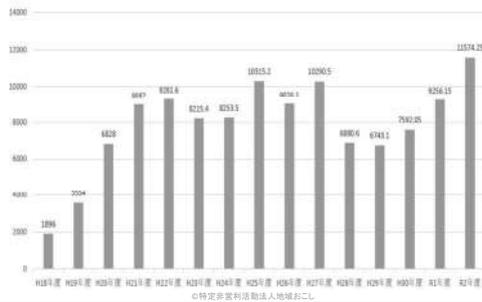
36

をYouTubeでどんどん発信するようにしています。チャンネル登録者が大体2万5,000人ぐらいです。

もう一つはふるさと納税の返礼品にも登録をさせてもらいました。

おかげ様で「山清水米」として1俵大体3万6,000円かな。これは令和2年度、一昨年ですが、ここからグーッと伸びてるのが分かると思うんですが、この3年度は特に一番販売個数がいいんです。約17tまで実は行ったんですね。これは先ほどのYouTubeやふるさと納税の返礼品に登録をしたということがかなり大きいのではないかと考えています。全体としてはとてりあえず米は相当あるんですが、私どものところは農協には絶対出さなくて、独自にいろんなところで販売してる。中でもこの山清水米で販売するのが要するに一番効率がいいわけです。

## 棚田米直販量推移



## 2010年 初の移住者3名家族来る 地域おこし協力隊員として



2010年に初の移住者3名家族、渋る奥さんを何とか説得して連れてきて、当時お子さん1人だったんですがその後2人増えて今5人家族です。

## 2011年3.4月 2名の移住女子来る



若い独身の女性も移住しに来てくれました。今では1人は2人のお子さん、もう1人は3人のお子さんと元気に頑張っています。

こういうことをずっと経験して集落の中でもすごい意識の変化があったと思います。もう村をたたもうかというあきらめから、若しかしたらというふうな希望が生まれてきた。「年とっちゃいらねぞ!」「もう10年早く地震が来てくれとったら」というような雰囲気を持っていた。ただこういうふうに言ってくれた方たちは残念ながら、今ではもうほとんどの方が亡くなったという状況です。外からの移住者無しに集落存続は出来なかったというふうに考えていますし、集落と農地の将来を移住者に委ねる覚悟というのを示した。あとはもう亡くなった方たち

## 集落 意識の変化

あきらめから、若しかしたらという希望へ

「年とっちゃいらねぞ!」

「もう10年早く地震が来ればよかった」

外からの移住者無しに集落存続は出来ない

集落と農地の将来を移住者に委ねる覚悟

がそういう覚悟をして証明したということだと思います。

## 移住者 地域へ根ざす

- 地域おこしの活動を主体的に進める意識
- 「骨を埋める覚悟」
- 集落と農地を引き継げる仕組み作り

集落と移住者の上手いバトンタッチが必要

逆に移住者たちは地域に根ざす覚悟を持って来た。地域おこしの活動を主体的に進める意識、骨を埋める意識。各集落と農地を引き継げる仕組みづくりと、こういうふう頑張っているというのがあります。集落の側で「農地をお前たちにやるよ」と、「俺らもう死んだらお前たちしかいないからやるよ」というのと、移住者たちがそこをちゃんと引き継ごうと、この上手いバトンタッチができたんだというふうに考えています。

## NPO法人としてのビジョン

- ① 池谷・入山を存続させる
- ② 十日町を元気にする
- ③ 日本の過疎の成功モデルを示し日本や世界を元気にする

私どものNPOとしては、まず集落を地域を存続させる。そして十日町を元気にする。ちょっと大きく見て日本の過疎の成功モデルを示し日本や世界を元気にする。こういう組織を広げたビジョンを考えています。

それでも米を中心とした農業だけでは厳しい。いかに直販米の比率を高めることができるか。もう一つは農外収入を高める。具体的には公道の機械除雪業者として参入することを考えています。それぞれが機械除雪できるような資格免許を取って具体的にそういう仕事にも就き始めています。もう一つは自分たちの集落ばかり移住者が増えたってやっぱり地域

### 今後の課題 移住者が済み続けられる環境

- ・ それでも米を中心とした農業は厳しい
- ①いかに直販米の比率を高められるか
- ②農外収入を高める・・・公道の機械除雪参入模索
- ③池谷を含む地域全体への移住者の増加
- ④多面的機能を持つ地域への公的助成

全体が元気にならないと、そもそも小さな集落だけに生き残ることは難しいので、やっぱり地域全体の移住者を増やす。こういう努力をしていかなければならない。そこでこの多面的機能を持つ地域への公的助成というのを引き続き頑張ってもらいたいというふうに考えております。ご清聴ありがとうございました。

#### 【中島氏】

時間内におさめてくださって本当にありがとうございました。今話を聞いておりました私も池谷には何回も行っているのですが、やっぱりそこに住んでいた農家の方が新しい移住者、この場合は地域おこし協力隊になって入村してきた人たち、この人たちに自分の農地をあげる、使ってもらおう。そういう気持ちにならないと入村してきた若者は、「地元の人はまだ本気じゃないな。」と思うかもしれないし、集落の人はもう自分の子どもたちがやらないとすればそれしか道がないわけですから、そういう気持ちになってもらわないとこれから先頑張っていくという道はないのではないかと。池谷の場合は冬はものすごい雪ですからね、この除雪作業を冬の間仕事ができるようになれば、かなり楽になるのではないかとというような気も致します。池谷集落について何かご質問があれば受けます。

#### 【NPO 法人明日香の未来を創る会】

どうも素晴らしい詳しいご説明ありがとうございました。我々は奈良県の明日香村の棚田のグループで、NPO 法人でやってるんですけども、今のお話の中でお聞きしたいことが2点ありまして、まず1点目が、私十日町の竹所のカール・ベックスさんという有名どころとか星峠とかに行ったことあるんですけど、素晴らしい棚田で観光客の方がたくさん来られました。我々のところと違うところがあって質問したいんですけどね、我々のところがイノシシとシカがいっぱいまして、どうしても柵をして対処しないと、もう景観はちょっと二の次ですよ。ですけど星峠も竹所も全然してなかったんですけども、それはなぜなんですかね。イノシシがいらないんですか。

#### 【山本氏】

そもそもイノシシは住まないと思ってたんですよ。ところが、最近私も一番入る田んぼに250mぐらいの電柵を設けまし

たし、あとホームセンターに行っかかしとラジオを5か所、24時間ラジオをつけっぱなしです。とりあえずこれはそこそこ効果があったかなと思います。シカはそれほど増えてはいないんですが、最近ぼつぼつと見るようになった。

#### 【NPO 法人明日香の未来を創る会】

我々のところは10年前は全然そんなことなかったんですけど一気に増えたんですよ。どうしてもそれは大変な状態なので。何もされてなかったので素晴らしいなと思ってたんです。ありがとうございます。

2点目、先ほど移住者の方も施策もとってやっておられると。特に若い移住者は竹所に聞くと結構若い女性の方々が移住したい移住したいと言って申し込まれてるんですよ。若い方が移住してきてどのように生計を立てていかれるんですかね。新潟平野だともものすごい大きな米どころですから、あれだけの規模でやると当然お米で生計は立てられるかと思うんですけど、棚田の小さいところではなかなか。かと言って東京大阪のような都会に兼業ですぐ務めるということもなかなか難しいかなと思うんですが、どういう形でされてるんですか。

#### 【山本氏】

そもそも都会から移住してくる若者たちは別にお金儲けでくるんじゃないんですよ。例えばそういうきれいな環境でのびのびと子どもたちを育てたいとか、もう一つはうちの事務局長の多田なんかは、今例えば食料の自給率も37%ぐらいを誇ってますよね。いずれ日本の食料自給率は高くなると。そのときのために今から自分でちゃんと食糧を作るという技術を身につけたいし、いずれ地元の棚田地域も中山間地も食料確保のために大事な場所になる。こういうふうには必ずなる。そういう話をイメージしてるんですが、そういう先を見越して自分の夢を求めていく。だからむしろそういうただ来てくれるとかではなしに、俺たちはこういうことをやりたい、それで賛同する他に若い者はいないかという人、気の合う人は必ずいます。これは本当ですよ。そういうふうには答えられます。

#### 【NPO 法人明日香の未来を創る会】

ありがとうございます。移住された方もお子さんが生まれて幸せな生活を送れてるというのは感じたので、ちょっとやっぱり考え方が都会に住む人たちとは違う観点でうまく移住して来られたらなと思いました。ありがとうございます。

#### 【中島氏】

一回お訪ねになるべきです。雪がすごいんですよ。2m3mですからね。2階から出入りするくらいですから。他に何かありますか。

#### 【鞍掛山麓千枚田保存会】

愛知県鞍掛山麓千枚田保存会の小山です。

私、平成3年五十の歳から32年、棚田を地域の宝として残そうと。それで今お話にあった山本さんにちょっとお尋ねしたい。その前にこういうふうに関先生はNPOとか広いところの田んぼのお話でした。でも日本には我々みたいな小さな田んぼでもこの地域を守る。私はこの小さな3.6haしかない田んぼです。でも景観は素晴らしい。もう日常皆さんが町場で働いて癒しの場を提供するとか、そういうことで情報発信を主にやっております。それで一つ、山本さんところで3万8,500円かな、そのような高価なお米をと言いますけども、普通の場合ほどのぐらゐの単価であるか。それから事例ですけども、我々小さな田んぼで1軒あたり12aぐらゐです。だから販売もほとんどない。生産性は全くないわけです。それに余剰米、もし飢饉があったらという蓄えがあるわけです。そのお米をこの景観を守ってくれるならもうできるだけ応援をしたいというお菓子屋さんの方で、郵便局とタイアップして千枚田五平餅というのができた。五平餅というのは申にさして販売するわけですけども、新米だと水分が多いから落ちてしまう。だから古米でやった。それを何と1俵あたり2万円で買っていただけなんです。それまで我々小さな百姓で売ってお米はない、もし飢饉があったらということに蓄えていた。それで残ったお米はどうするかという鶏の餌にもならないぐらゐですよ。それをなんと2万円で買っていたらと。そういうような企業が我々の小さな零細の百姓を応援してくれる。そういう形もあるということをお皆さんに一つの事例ということで。山本さん普通の田んぼ米の場合は。

#### 【山本氏】

ネット販売の場合は1kg650円で販売させてもらっています。これ1俵は60kgでそれから精米にすると何kgか落ちます。約3kg落ちたとしてこれ650円掛ける57kgで計算しますと3万7,050円です。この中には梱包だとか精米手数料や送料なんかも全部入っています。玄米の状態例えば農協に出すと1俵大体1万7,000円から1万7,500円です。だから自分たちで直接販売すると当然精米したり販売したり送ったりいろんな手続きもかかるんですが、それはNPOの収入にもなるし、彼らの給料にもなるわけです。そんな形で650円で販売させてもらっているのですが、例えば東京の高島屋さんに行って、お客さんをしっかり見ると1kg800円ぐらゐです。まだまだ高いんですよ。それに比べたらちょっと安すぎたかなという声もあるぐらゐなので。私のところはたまたまブランド力のあるお米の産地というところで、そういうようなところではこういう取り組みが成功しなかったら他に成功するはずがないという、そんな気持ちでやってることも事実です。

#### 【鞍掛山麓千枚田保存会】

どうもありがとうございます。私は古米で2万円って素晴らしいなと。それで古米も2万円ですけど新米も2万円。ただこういう素晴らしい景観を何とか残していただきたいという

お礼の気持ちでやらしていただいているということです。

#### 【中島氏】

そういう気持ちで買ってくださる都市住民がたくさんいると助かるんですが、なかなかたくさんいないでしょ。

#### 【鞍掛山麓千枚田保存会】

おかげで今年の場合は天候不順で4割から半数で、それにおいてもめげず稲架掛けして頑張っております。そういう小さな棚田もありますということです。ありがとうございました。

#### 【中島氏】

山本さんのところは自分の家のライスセンターがあるんですよ。ライスセンターを作る必要がある。農水省の方からそういう事業があるから県に相談しろと言われたんだよね。県に相談して補助金をもらってやろうとしたらもらえなかったそうで、だから自分たちで集めて。そういうときは農水省から何か言っていただけないでしょうか。では大石さん(佐渡棚田協議会)、お願いします。

#### 【佐渡棚田協議会】

どうもお世話になっております。岩首という離島の中で最も知られてない村からはるばる一日かけてやってきました。棚田が嫌いで都会に逃げた人間が本当にこんなにどっぷり浸かることになったのは、目の前にいる変なおじいちゃんに騙されて洗脳されたからです。それ以外何もない。ただ故郷に40年前に東京から帰ったときに拒否されずに受け入れてくれたのは故郷の里山と棚田でした。米がなくなるということは多分僕の故郷がなくなるということというふうに関、それから40年間やってまして、何もない人間が変なことを担うんじゃないという典型だと僕は今思っています。ただ諦めなければどこかで手を差し伸べてくださる方はいるというふうに関中島先生を含め思っています。今僕が廃校になった小学校を使いながら16年になりますが、年間600人ぐらゐ首都圏の大学生が来てくれていて、その中には東京大学に行けなくなって、1年間僕の農作業をさせ、途中で学校に戻ると、いや、やっぱり駄目だったからまた帰ってきましたみたいな。でも1年後には無事東京大学を卒業して、今はコンサルタントをやっています。そういう人がもうちょっと頑張れば、また違った価値観の世の中になるから頑張れと言ってくださっているの、ただそれだけを頼りに頑張っているのが現実です。しかし未来は見えてきません、残念ながら。本当に米だけではまずもって食えません。今回の振興法でも農地としては守れないけども、棚田の持つ多様な環境を多くの国民に知ってもらうことによって、そこから価値を生み出すということはこの1年ですか、コロナの禁止がなくなった後、岩国の棚田に来てくださる訪問者は、今までは僕のようなリタイアしたおじいちゃんおばあちゃんだったのが、今一気に若い女性の2人3人組になって

ます。やっぱりこの閉塞された世の中で、多分癒しを求めるときに棚田と自然というのはすごい大切なものなのかなというふうに思ってます。本当に諦めずに僕の棚田は400年前につくられたと言われてますが、400年前の先人の血と汗の思いを無くさないようにみんなで頑張ります。ぜひ頑張りたいと思いますし頑張ります。

### 【中島氏】

北さん(小川地域棚田振興協議会)。新しい女性として棚田で何が一番困りますか。あるいはどうしたいか。

### 【小川地域棚田振興協議会】

皆さんお疲れ様です。私は和歌山の紀美野町という町から来たんですが、和歌山県の和歌山市内、ちょうど閑空から1時間、世界遺産の高野山から1時間、北部に位置するところの紀美野町という町なんですが、そこで棚田再生を平成19年から取り組み始めました。実は私まちづくり関係の会長を務めていたこともございまして、先ほどいろんなことを申し上げましたけど、本当に小さな人口が8,500人ぐらいの小さな町で、やっぱり主要産業は農業なんです。ただし、その農業という基幹産業でありながら農業だけで食べていけないというところで、やっぱり観光と農業をしっかりつないでいく必要があるんじゃないかなというところからこの棚田というところ、中田の棚田といいますが、この中田の棚田というところについては、皆さんも棚田の再生をされてると思うんですけど、それは多分地権者さんが数名おられたり、ずっと取り組んでこられたという地域が多いと思うんですが、私たちの取り組み始めた2019年には、もう最後の1人がお米を作ってるという状態で、もうあとは竹林とか本当に草というより木が生えているような状況なところがかなり多くて、それを一生懸命草刈りを続けてやってまいりました。そして3年目の今年、やっと4反の棚田の再生をしまして、この前ちょっと稲刈り、少し餅米が残ってるんですが採れるようになったところです。ですので、先ほどから本当にキロいくらで売る云々とおっしゃってますけど、まだまだそこまでできません。それから、今お話にあったオーナー制度。こちらもある程度応援ができる状態になればオーナー制度という形で皆さんに貸し出すことは可能なんですけれども、まだまだ今開墾状態ですので、これを引き受けてくれるオーナーさんというのはなかなか見つからないです。そういうことの中で地域の方に何とか手伝っていただきたいという思いで、今年から「地域共同作業日」みたいな日にちを決めて協力を得たんですが、やはり中山間地の田舎なので、自分のところの田んぼをするので精一杯なんで、なかなかこの棚田再生には関われないというような思いを持っている方が多くて、3年間続けてきた中で少し方向性を切り替えて、今おっしゃった地域おこし協力隊という制度などを活用してしっかりと棚田を残したいという思いを持った人を探していきたい。そして移住定住を進めながらその人たちに頑張っ

もらって、地域も一緒に元気にしていくという方向に少し転換をさせていただく時期がきているのかなと思って、そういう過渡期でもあるので勉強のために来させていただきました。一応棚田は自然栽培の方法で栽培してるんですが、まだまだ新参者の棚田再生。歴史は古いです。600年続いているこの荒地を中島先生から棚田を再生するときに教えていただいて、それで本当に頑張っって何とかこれを再生して続けていく仕組みをつくらうと決意したんですけども、まだまだ初めてのところなので皆様のご指導ご鞭撻というのをいただきながら中田の棚田ならではの方法で何とか前に進めたいと思ってます。今日はどうもありがとうございます。

### 【中島氏】

ありがとうございます。和歌山県紀美野町って皆さん聞いたことないんでしょうけど、海南市の内陸側になるんです。その北側。これから紹介する喜田さん(丸山千枚田保存会)は、かなり有名な丸山千枚田で保全活動をされている。

### 【丸山千枚田保存会】

こんにちは。三重県の熊野市というところにある丸山千枚田保存会の喜田と言います。先ほど提案いただいた先生方の話じゃないんですけど、実は奈良県の明日香村の稲淵の棚田毎年見学に行っって、今イノシシの話ちょっと出たんですけど、ずっと歩いて上まで行って帰ってくる間に獣道が何本も通っってあって、非常にここまでやられてると思ってびっくりしたんです。丸山千枚田も実は獣害というのが非常に頻繁にありまして、一昨々年、例年の3割ぐらい食べられたという事実があります。ただイノシシに関しては、目隠しをして穴を掘らさなければ止まるんですけども、千枚田という環境が景観を非常に重視してまして、観光客がたくさん来ますから、そういうトタンで目隠しをするということができないんですよ現実的に。だからどうすればいいかなと思って考えてるときに、いろいろ電柵とかそういうことがあるんですけど、全部駄目です結局。僕は実は狩猟免許を取りまして、ワナを1人30個まで掛けられるのでそれを田んぼ周りに仕掛けて、今年イノシシを十数頭とシカを40頭ぐらい捕獲したんですけども、やっぱり捕っってやらないと駄目です。明日香村の稲淵の棚田は彼岸花が非常にきれいで、これを育てられてるということがあります。冬の間葉っぱを刈れないんですよ。本当は刈っって電気を流しておけば、イノシシが触ればもう次の年は入らないんですけど、冬の間止められる。そういう事情があるそうで、多分イノシシは冬の間入ったのがまた夏も入るという突破してるというふうに思いますので、環境を重視するうえから非常にこれは難しいと思いますし、もっと奥のところの草を刈っってきれいにしていくこと以外にないかもしれないですね。丸山も田んぼから大体40mぐらい山の方まで草刈りを頻繁に行っってだいぶ軽減してます。それから豚熱という病気があるんですけど、イノシシがその病気によって去年は非常に少なくなりました。

ところが、豚に感染しますから豚業者がワクチンを使って、これは自分の豚小屋だけじゃなくて山に撒くんですよ。これが野生のイノシシに病気をうつらなくて今年は非常に増えました。そんながあるので、行政の方もそういうところもちょっと気を向けてくれれば非常にいいかなというふうに思います。言ってもあんまり聞かないです。うちはあんまり強く言えないんですけどね。実は補助金いっぱいもらっていますのであんまりきつく言えないです。そんなことでやっぱり草刈りを頻繁に行うのと、電柵だけではちょっと止まらないので、景観等のことも加味して僕らも含めて考えなければいかんかなというふうに思います。

### 【鞍掛山麓千枚田保存会】

喜田さん、今の獣害ですけど、確かに電気柵とかいうようなことである程度は。それと今病気でだいぶ減りました。でもここどうですか1か月ぐらいかな急激に増えたんですね。その対策に今取り組んでいるわけなんですけど、うちはおまけに20頭ぐらいのサルの群れが5つぐらいあったわけですが、その群れが今50頭ぐらいになってるんで、もうみんな10年ぐらい前からサルが来たら終わりだなと、どうしても守れないと。そのサルの被害はもうものすごい。四谷の千枚田が420枚あるわけなんですけど、その半分ぐらいはサル。サルは賢くて自分がぬかるみへ入ると足を取られるから稲を踏みながら穂をこやって食べている。そういうことで今千枚田をうちでそのまま継続できるかできないか、本当にそれこそサルをどうやって追っ払うか、それが一番の悩みです。それで喜田さんの言われるようにイノシシは平成12年ごろから全国的に増えてきました。それでシカは17年から増えました。それで私過去3年間、捕獲頭数から見た獣害被害というところで今年論文をまとめております。こういうふうなことでこの獣害が一番中山間地で棚田を守るネックになってるんじゃないかなと思います。

### 【中島氏】

ありがとうございます。

### 【NPO 法人明日香の未来を創る会】

奈良県の中部にあります明日香村。日本中央集権律令国家誕生の地です。そこで棚田オーナー制度をやってまして今年で27年目です。今から5年前の2017年に大規模な獣害が起きて、オーナーさんの田んぼ全滅です。お米を一区画40kgを保証するというので、NPO法人にあった蓄えのおかげで全部お米を買って渡しました。そのこともそうなんですけど、そのことによってオーナーさんのモチベーションが下がって、持続していただけないんじゃないかという非常に大きな危機感を持ちました。それで地元の小学校を借り切ってオーナーさん全員に集まってもらって集会をやりました。150人規模ぐらいで来てもらいました。明るくなるかなと非常に不安を持ちながら翌年オーナー制度また新年度始め

たんですけど、さすがに10組程度減りました。もう嫌気さしてやめました。でも気持ちのあるオーナーさんが継続してくださってそれは何とかその危機を一旦乗り越えたんですけども、その後が我々明日香村の一つの特徴でもありますけれども、地元とオーナーさんとの連携が非常に強いもんですから、イノシシ対策をみんなでやろうということで電柵を張ったりトタン板を張ったりする。総延長で何キロにも及ぶ作業です。オーナーさんも有志の方大体20人から30人ぐらい手伝っていただきました。わずか1日でそれをやり遂げました。その結果ずっとそれ以後イノシシからお米は守れるという状態が続いています。また地元からの協力をいただいて、今丸山千枚田のお話もありました通り、棚田のもっと上の方も草刈ったり、木を切ったり竹藪を切ったりということをしていただいて、今のところ何とか守れてまして、今月は13日に稲刈りをやります。それが済んだと思ったらコロナのことが起きたのでこれもかなりどうしようかなと、オーナー制度を止めようかなという議論までいったんですけど、これもオーナーさんと地元が協力して特に奈良県在住のオーナーさんが積極的に協力してくださって、とりえず苗代作りまでは地元と奈良県のオーナーでやろうということになって、それ以外の他府県をまたいでの移動は少しご遠慮いただきながらやったんです。その年うまく何もかも守れて収穫できました。その結果コロナがやってきても非常にオーナー制度としては強いものができて、オーナー総数でいきますと2020年のオーナー数に対して今年なんと170%増ということで、非常に関係人口を増やすことに成功しています。もう毎回作業のときは200人ぐらいいらっやる。棚田に久しぶりに大きな賑わいが戻ってきた。これが来年再来年も続くかどうかは分かりませんが、オーナーさんと地元との共同作業がうまくいったんじゃないかなというふうに思っております。

### 【中島氏】

何でそんなにオーナーがたくさん増えたんですか。

### 【NPO 法人明日香の未来を創る会】

よく分からないんです。おそらくWebからの発信とかそういったものの効果があるのと、やはり大都市圏に近いですから、大阪とかその辺の方が増えたのが大きな要素だと思います。

### 【中島氏】

櫻井さん(毛原の棚田『体感』ツアー実行委員会)、オーナー制度を始めた頃から電柵とかそういうのをやりましたよね。ちょっとその取り組みをお願いします。

### 【毛原の棚田『体感』ツアー実行委員会】

皆さんこんにちは。今日は初めてこの棚田サミットに参加をさせていただきました。これまで27回ですかね、歴史ある中で、私のところの地域も、平成9年から棚田の保全をグループで取り組みをしてきたわけなんですけど、ただ1人だけではなしに

3人参加をしていただいています、この小さな集落にとっては画期的な取り組みになったというふうに思っております。皆さん方の活動のいろんな情報を聞かせていただいて、これからの取り組みの参考にしていきたいというふうに思っています。

皆さん方からいろいろお話がありましたように、私のところの京都府から2か所棚田百選に選ばれているその1か所で、12戸で25人ぐらいのほんとに小さな限界集落に近いところなんですけれども、やはり先ほどからありましたように、この棚田の保全をしていくためには今の有害鳥獣の対策が非常に大きな課題になってまして、今ICTを利用した獣害対策の方法をワークショップで書き出しながら取り組んで、その対応を今検討しておるといことと、やはり小さな集落では農家の高齢化で今平均年齢が70歳を超えてきているような状況になっておりますので、そういう中では新しい移住者の方をやっぱり迎え入れる。そのためにということで、27年度から棚田の稲刈りとか田植えの体験イベントをやって集落を外へPRしていこうと、地元を知ってもらう取り組みを始めたのと、平成10年から棚田のオーナー制度もあわせて取り組みをしております。性格的に違うのは棚田のオーナー制度というのはやはり実際に集落へ入ってもらって、それで農家がやってきたような農作業、地域の特色も踏まえて作業をマスターしていただく。そういうことによって移住定住へつなげていくということで、これは私の集落においては二十数年前から、いわゆる田舎にありがちな排他的な村の風習というのを、都会から受け入れることで、村の人たちの気持ちがある取り組みの中によって変わってきたというのが一番大きな変化だと思います。集落全体がよそからの方をどんどん受け入れていく、そういう気持ちになっていかないと集落だけではもうこの棚田もそうですし集落の機能自体も守っていけないという非常に厳しい現実がありますので、そのあたりを今いろんな知恵を出して頑張っております。そのためには、いろんな関係人口の方々にはその取り組みに参加をしていただけたということが大事になってきますし、それとあわせてインターネットを使った情報発信によって、遠くからでも参加をいただける状況が今ありますので、そういう環境を整備していくということで、集落全体のWi-Fi化を進めたいという取り組みもやっており、また今日の参加を契機にして、今後皆さん方の活動をいろいろネット等を通じて参考させていただいて、頑張っていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願ひします。

#### 【中島氏】

京都府福知山市の毛原の取り組みについてでした。私のオーナー制の累計で言えば最初から収容交流型。一年間に何回も来るんですよ。電柵まで張るといオーナーさんなんです。それでそういう経緯で組数は少ないんですけど、非常に堅実に実施されている。毛原、覚えてください。

棚田ネットワークも柿木代棚田に体験に行くんですけど、最初は工事現場にあるようなトイレでしたが、最近きれいなトイレができたんです。あれはなぜできたんですか。

#### 【鴨川市中山間地域等活性化協議会】

どうもこんにちは。私は千葉県の鴨川市から今日参加させていただきました。先ほどから基調講演の中でも、千葉県の鴨川って言いますと大山千枚田、これがもう本当に有名です。黙っててもマスコミは来るし市の施設はあるしそれだけで羨ましいなという面もありますけども、川代地区の柿木代棚田ということで、直弘の2年目から取り組みをさせていただいて、約20町のエリアの中でやらせていただいております。今、中島先生から「工事現場にあるようなトイレ」ということで、ちょうど山口県のサミットのときに棚田振興法ができた。そういう中でそういうトイレとかそういう施設なんかに交付金を使って良いのかと言ったら、良いということとそれを参考させていただいて、おかげさまで素晴らしいトイレもできましたし、また中島先生のいろんな力添えの中で、今年3月25日の「つなぐ棚田遺産」の仲間入りもさせていただきました。しかし今現在その施設もまだまだトイレができたぐらいで、その他のものは何もできてません。その中で、千葉県の中で2例目ということで新聞にも取り上げられて、千葉県中の人から急に棚田が見たいということで来まして、大山千枚田は先ほど中島先生もおっしゃってましたけども観光的な施設にもうなってしまったと。出来上がったのだと、ちょっと言い方おかしいですけども。しかし川代の柿木代棚田は自然の中でいいじゃないかというオーナーさんとか見学に来た人に言われて、それもそうかなとは思いますが、もう少し川代集落の中でみんな一緒にもう一歩前に進んでいきたいなと思っております。それであと後継者の問題もいろんな話が出ましたけども、うちなんかの集落は60軒の家の中で実際に専業で従事してるのは5、6人しかおりません。川代の棚田のお米は美味しいということで皆さんからも言われてますので、それをブランド化して集落を一つにすることも考えていきたい。先ほどの事例もありましたけども、それを参考にして集落の人たちとやっていきたいというのは私の現在の考えです。今後も一つよろしくお願ひします。

それであと一つ、質問していいですか。青山局長さんにちょっとお伺いしたいんですけど、先ほど今年からもう少し棚田振興法が拡充したという話がありましたけども、どういう面が拡充といいますかプラスになったのかなと、どうでしょうか。

#### 【農林水産省農村振興局地域振興課 富田課長】

青山局長の下で働いている農水省の地域振興課というところの富田といいます。よろしくお願ひします。皆さんの話をとても感動的に今聞いていて、ますます頑張らねばなという決意を改めてしたところなんですけれども、今年から何が変わったかを少しご紹介すると、まず中山間直弘なんですけど棚田振興法

というのが令和元年にできて、それで令和2年に棚田加算というのが直払にできました。これは(10aあたり)1万円もらえるということですが、その中でもさらに超急傾斜地域、10分の1以上の斜度の強いところについては単価をアップしまして1万4,000円という単価が設定されておりますので、今日、江藤先生もご紹介されてましたとおり、全国で棚田加算が大体6,800haです。超急傾斜も今年調べてる限りは2,000ha使われてるというデータもあります。ぜひ皆さんお使いいただければと思います。それからまたこれは局長も大きな肝いりもありましたように、農村型RMOというのをやっています。これは何かと言うと地域運営組織と言いまして、全国で自治会と連携されてるとかいろんなお話があったと思うんですけどまさにそのことでありまして、自治会さんとそれから農業者さんって今までバラバラで動いてませんでしたか。でもそれってやっぱり縦割り、我々が縦割りののがいけないんですけど、そこをやっぱり一緒に活動することによっていろんな方に棚田なり農地を使っただけ、そういう体制整備をやりましようっていうのを農村型地域運営組織(RMO)の形成支援事業という事業を今年から新しく進めさせていただいてまして、これは農水省だけじゃなくて総務省さんとか厚労省さんとか文科省さん、あと福祉、そういった人と連携した枠組みでやらせていただいているので、ぜひ県か農政局にご相談いただいて、ご活用いただけたらありがたいなというふうに思います。県の方にはもう情報はお伝えしていますので。先ほど県庁の方にもお話してたんですけど、やっぱり棚田地域ってそういう地域運営組織で守って行くってすごいびったりだと思いませんか。今いろんな方が活動しているので、あと協力隊もいらっしやると思いますし、そういった体制をしっかりと一個集落じゃなくてたくさんの集落、例えば繋がって作るとか小学校区単位ぐらいでちょっと見てみるとか、そういったものに応援したいということで作っていますので、ぜひお問い合わせいただければと思います。

#### 【鴨川市中山間地域等活性化協議会】

鴨川市で直払を29集落でしているのですが、そういう中でやってもいいわけですか。

#### 【富田課長】

いいです。ぜひその時は農家さんだけでなくいろんな方で、例えば婦人会もあれば、青年会もあれば子供会もあれば、いろんな人たちがいると思うんで、みんなで1枚ずつ田んぼを見てもらって、それでここは荒らさないようにするためにはどういうふうにすればいいのかと、そういったことをみんな話して合っただけの場になればいいなと思って、青山局長から強い指導を受けておりますのでよろしくお願ひします。

#### 【鴨川市中山間地域等活性化協議会】

ありがとうございます。

#### 【中島先生】

ありがとうございます。前の前のサミットの山口県長門市。牛飼についてお願いします。

#### 【本郷集落協定】

山口県の長門市、前回の第25回のサミットをやらせていただきました。本日ここにいらっしやる方にもいろいろご協力いただきまして、この場を借りてお礼を申し上げます。それで皆さんのところでは、今オーナー制やいろいろな形で棚田を管理されているんですけど、私25回のおきにもちょっと皆さんとご議論させていただいたのは、棚田の中の放牧という形で棚田の管理を今やっております。現在小規模ですけども1.5ha。これは夏季放牧、要するに夏の間に2から3か月の期間だけを牛を使って棚田を管理する。これによって耕作者の草刈りの作業が少しでも和らげられる、少なくなるんじゃないかなと、それもあるし、もう一つあるのは先ほどからもお話があるようにイノシシの対応。この辺は獣同士でやっぱり自分の生息域というものをかなり意識するみたいです。確かに牛の放牧を始めてやはりそのブロックだけはイノシシの出現範囲は確かに減ってます。やっぱりその辺の効果はあるのかなと。今私のところはこの放牧を今年度からは2か所増やして、また3haぐらい増やして行って、人間の手だけじゃなくて牛の舌を使って棚田を守っていくところをやっていると思っております。あと私のところはせっかく棚田を支援していただいて地域の人なり、関係人口を増やしていこうという取り組みの中で、棚田でバーベキューをやるということ、まず中山間の参加者の方でうちの棚田でバーベキューをしました。それを聞いた人は、うちもやりたいと。それでたまたま今年の5月ですが二十代の若者30人が、「おっちゃんやらしてくれない。あの場所焼肉してもいい。」って言うから、「やってもいいよ。」と言ったら本当に自分たちで企画して、うちの棚田でバーベキューを3時間ぐらい、本当に喜んで帰ってくれました。これはやはり先ほどから話がありますように、ただチラシで見ただけじゃなくて、やっぱり自分で足を運んでその棚田を見てそこで何かを感じてもらったら、本当に棚田というのは繋がっていくんじゃないかなというところで、来年も今2組ほど予定はしております。あと、うちの作業というか行事をいろいろやってくれる地域協議会の方がおられて、その方のお友達が草刈りサミットをしています。草刈りはスポーツだとして、草刈りを一つのスポーツのイベント、一つの人の集まるイベントということで今年もやらせていただこうと思っております。前は天候の関係でできませんでしたが、前回よりは人数が増えていると作り直して、それで「こんなところにも棚田があるんだね」、「やっぱりこんなものを守っていかないといけないんだよね」と。一番はこの草刈った後の爽快感と達成感。またそれによって体を動かすということがやっぱり身体の回復にもなるという思いの中で、今やらせていただこうと思っております。今後とも皆さんの意見を聞きながら、参考にさせて

いただきながら、もう5年また10年、できればもう12年でも頑張っていけたらという格好でやってまいりますので、また足が向けば、長門にも来ていただけたらと思います。ありがとうございます。

**【中島氏】**

次に、菊地さん。福岡県うきは市。

**【棚田まなび隊】**

福岡県のつづら棚田というところで活動しています棚田まなび隊の菊地と申します。元々大学の集落研究で集落に入ってきて、数年調査していくうちに耕作放棄地がみるみる増えていく、空き家も増えていくというような現状を目にしまして、「棚田は大変」って言うので何が大変か学ぼうということで、あともう一つはオーナー制度を地域でされてるんですけど、どうも地域の方にはかなり負担なんじゃないかというような思いもあったので、できるだけ自分たちでやるということを主眼に置いてスタートしました。最初2枚からスタートして来年10年目になるんですけど、今8枚耕作していて、ただ1反にも満たないもうほんの小さな田んぼで、多くても反収4俵くらい。

それが3年前イノシシが入って3俵になって、一昨年ウンカが入って反収2俵。昨年はいもち病にやられて1俵です。ですから全員で分け合うんですけど、1人1升配布というような状態で、皆さんオーナー制度で保証とかされてますけど、そんなものとも、もうとにかく無いわけですから、無いというような状態でやってますけれども我々は「まなび隊」ということでやっているの、前提がお米じゃなくてとにかくそういう状況を学ぼうということで、学びをある意味売りにしてるようなオーナー制度ともいえないですけど押しかけオーナーみたいな感じで活動をしています。毎年毎年あれだけ困難でやってるんですけど、今年はとりあえず収穫を終えて掛け干しをしてるところで、脱穀して最終何俵になるかというのを、今のところ何の害もないのでとても楽しみにしています。今日は大変勉強になりました。ありがとうございました。

**【中島氏】**

終わりだと言われてますから残念ですけど、もっと聞きたい人がたくさんいるんです。だけど今日はこれぐらいにして、また来年の楽しみにとっておきたいと思います。残念ながらこれで終わりにしましょう。ありがとうございました。

## 【分科会の振り返り】

第1分科会

龍谷大学社会学部准教授 **坂本 清彦** 氏



皆さんこんにちは。第1分科会のコーディネーターを務めた坂本です。第1分科会の概要を今から報告させていただきます。

第1分科会は「棚田を見守る“人”が芽生える～関係人口の創出と外部との連携～」というテーマでパネルディスカッションを持ちました。畑集落と鶴川集落それぞれ棚田を利用する集落であり、それぞれの保存会の林典男さん、山田善嗣さん、それから畑集落に移住された橋本章一さん、鶴川集落と連携協定を結んで活動されているパソナ農援隊の藤川真理子さんをお招きしていろいろお話を聞きました。「関係人口の創出と外部との連携」という一つ大きなテーマがありましたので、それぞれの集落でこれまで取り組まれてきた外部連携の取り組みについて、例えば、棚田オーナー制度であるとかボランティア制度であるとか、大学や企業との連携活動、それから都市との交流施設うかわファームマート、そういった取り組みについてお話をお聞きました。移住された橋本さんや、それから協定を結んで活動されているパソナ農援隊藤川さんは、それぞれ

の集落に非常に温かく迎えられて活動をいろいろ行われてきています。橋本さんは元々京都にお住まいだった方なんですけれども、そういった中から活動をどんどん広げられて、今は移住をされて外部の方をお招きして棚田を守る活動をされていたり、パソナ農援隊の藤川さんは大学との連携なんかも進めておにぎり販売なども展開されているそうです。そういった外部との活動が広がっていく一方で、地元の人たちとしてはやはり地元を、棚田を守っていく上での中核の人材となる集落の人たち、集落の後継者がいないということがやはり日々深刻な課題として提起されて、それを会場の方も共有をいただけたと思います。とはいえ、先ほどの鶴川のおにぎりの話にせよ、それから他にも取り組まれている果樹栽培やその他の地域通貨といった取り組み、まだまだこれからなんですけれども、そういったアイデアも外部の方との連携から、あるいは交流から生まれてきたアイデアということなので、そういったところにこれからの希望を見出していければという話になりました。第1分科会の概要は以上です。どうもありがとうございました。

## 【分科会の振り返り】

第2分科会

龍谷大学社会学部教授 **脇田 健一** 氏



皆様2日間にわたりお疲れ様でした。高島を楽しんでいただけましたかね。そうあってほしいと思います。

私は第2分科会のコーディネーターを担当しました脇田です。第2分科会は「棚田に根付く“価値”を繋げる～地域産業の振興と次世代への継承～」というテーマで、この地域産業というのは炭焼きのことです。高度経済成長期に燃料革命が起こるまで、これ全国的にもそうですが、ここでは中山間地域の農家にとっては炭焼きというのが重要な副業であったわけです。それは燃料革命で途絶えるわけですが、その後、村を活性化させる取り組みの中に、この炭焼きというものがいくつかの集落の中で取り組み始められるようになりました。そのことに注目して第2分科会は開催しました。

第2分科会は5人のパネリストの方がご登壇され、地元の方は1人で、あとの4人の方はみんな外からの移住者の方でした。そういうパネリストの構成でのお話だったんですが、移住者がこの地元に入ってくるには、地元の暮らしの仕組みや文化・技術に対する移住者側の尊敬の念といいますか、そういうものに対する好奇心というものが必要だし、地元の方にもそういう移住者の人たちを優しく支えていくとか、見守っていく、定住できるように陰ながら支えていくような、そういう人たちの存在が必要なんだと。そういう内と外の力が良いハーモニーを醸し出すような形の中で、人々の定住が進んでいくのではないかという

ことが昨日のパネリストの皆さんの方からは説明されました。加えて、移住者の役割ということで、地元の方はいろいろなしがらみの中で勝手に発言できたり行動できたりしないので、「あなたたち移住者でしょ、ちょっとお願いできないかしら」ということで、地元の方にはできないことを移住者の方が提案したり、いろいろつないでいったりということもあるんですよと、そういう移住者の側のこの役割といいますか、そういうご指摘もありました。ただこういう外と内のつながりをどういうふうにつくっていくのか、個人や集落だけに任せておいては駄目なんじゃないかなという問題提起もありました。システムづくり、外の人と内の人をつないでいくようなそういう仕組みづくりが重要なんじゃないかというご指摘でした。確かにそうだと思います。加えて炭焼きの炭もそうですが、落葉広葉樹の木材とか内にある資源と外にあるニーズ、需要をうまくマッチングしていくような仕組みも必要なんじゃないか。もう待てないほどのスピードで、今、高齢化がどんどん進んでいる状況の中で、だけどそういう問題と何かポイントが見えてきたので、ピンチをチャンスにして今こそ従来のこの集落単位を超えた集落の連携とかそういう公共の何かネットワーク、仕組みづくりの中で、この問題を何とか越えていきたいなというところで昨日の第2分科会は終了いたしました。ご来場いただいた皆さんどうもありがとうございました。以上です。

## 【分科会の振り返り】

第3分科会

龍谷大学経済学部教授 **西川 芳昭** 氏



皆さんおはようございます。第3分科会のコーディネーターを務めさせていただきました西川です。

第3分科会は、「棚田を囲む“くらし”を感じる～農山村の魅力体験と移住促進～」をテーマに、高島市の一番北に位置します旧マキノ町、今朝からエクスカッションでメタセコイアの方に行かれた方は実際に訪問して下さったと思うんですが、そちらに住んでおられる4名の方、3名の方がご出身、1名が移住者の方をパネリストにして、後半はフロアからの発言をいただきながら一緒に考えていきました。

体験に関して、野菜収穫や食事、その他農作業とかの体験、これはどこの地区でも行われていることなんですけれども、その中でUターンをして農業法人を営まれている水口さんからは、企業としては生産したものを買ってくれる人が嬉しいけれども、体験にお金じゃなくてアイデアを持ってきてくれる人、そういう人が長い付き合いになるという発言がありました。またペンションを営まれている小川さんからは、すぐに農村に移住とかそういうのではなくて、ここに来て、マキノで、高島で体験したことが人生の岐路に立ったときに思い出す、そういう体験を提供していきたいというお話がありました。

また、Uターンしてカフェを始めた峯森さんからは、最初始めたときに「移住者ですか」というふうに周りに聞かれたことがあると。農村の魅力、この棚田でできた農産物

を都会から来た人に提供する、そのようなごく普通のこと  
が地域の人たちにはなかなか伝わらない。農村の魅力は  
住んでる人はなかなか気付かないと。そこはUターン者  
またはその移住者の役割ではないかというお話がありまし  
た。他の分科会の内容とも共通するんですけれども、受  
け入れ側が、自分がその地域に惚れ込んでいなければ人  
にすすめることはできないというのが共通点だったかと思  
います。一方外から移住されてきた方、福井さんという方  
が一番北の本当にもう少し行くと福井県というところの集  
落に入っておられる方なんですけれども、実際大変なところ  
だと。「ぶっちゃけ田舎だし山奥だし冬は朝起きたら雪かき  
から始めなければいけない。でも言葉には表せない良さ  
があるんだ」と。そういうふうになるためには、やはり移  
住してきて村のことには何でも参加する。都市の付き合  
い方と村の付き合い方というのは違うんだからその違い  
というのを理解した上で村に溶け込んでいくと。そうい  
うことが大事だというお話をされました。全体で共通  
するのはやはりお互いに知り合っていくこと、段々と知  
り合っていくことの重要性、そういう意味ではリピーター  
の制度または県の事業にもありますけれどもお試し移住  
制度、そのようなものを利用していくのが大切だという  
ことで皆さんの話がまとまりました。今回のサミット  
のような機会を生かして人と人との出会い、そういう  
ものをさらに深めていきたいというお話になりました。以上  
で第3分科会の報告を終わります。ありがとうございます。

## 【分科会の振り返り】

特別分科会

NPO法人棚田ネットワーク名誉代表 **中島 峰広 氏**



中島でございます。棚田まもりびとミーティングは農水省の農村振興局長および地域振興課の課長および課長補佐に参加していただきまして開催いたしました。最初に農村振興局長からショートスピーチをいただきまして、その後分科会を始めました。今回は話題提供者として2人の方をお招きいたしました。1人は新潟県十日町市、地元では池谷<sup>いけだに</sup>というのでしょうか、NPO法人地域おこし代表の山本浩史さんという実際に農家の方なのですが、この方から発表していただきました。池谷集落というのは中越地震のときに戸数が8戸になりまして、やがてこの集落は消滅するのではなからうかと、あそこはもう駄目だよと、消滅集落だというように言われたんです。ところがその中越地震をきっかけにいたしまして、NGOのJENという国際組織が中心になって支援を始めることによって注目されるようになって、その後地域おこし協力隊の隊員が現在2名定着しておりますけれど、こういう方たちの支えによって見事に復活をいたしまして、消滅集落から奇跡の集落だというぐらいに呼ばれるようになりました。ここでの取り組みはやっぱり十日町市ですから、米どころですからお米の生産、山清水米というネーミングでもって新潟県の認証を得てお米を作っております。現在は大体面積的には6.5ha、約32tの棚田米を出荷しております。大体値段が60キロで1万9,000円から2万円。小口の場合はもう少し精選して3万6,000円を出荷するというような取り組みをすることによって見事に復活を遂げたということなんです。キーポイントは要するにライスセンターをつくったということ、これが大きな力になったと思います。皆さん方のところでお米を作ろうとして特別に出荷しようとしても、自分たちの自前のライスセンターがなければ農協のカントリーエレベーターに入れ

られてしまう。そうすると差別化はできないんですが、これが可能になったということだろうと思います。その山本さんが言うには、集落や農地を若者に譲るという覚悟が必要なんだと。もう最終的にはそこまで覚悟しなければ残らないよというようなお話でした。もう一つは地元滋賀県の大津市、比叡山の山麓にある上仰木という地区ですけど、ここで行われている取り組みのお話です。棚田の今後の生きる道としては観光資源として、あるいは棚田米の生産をし、あるいは都市住民のサポートを受けて維持すると、こういう方法があるかと思いますが、その都市住民の支援を得て行く、いわゆる棚田オーナー制、これを実施しております。かつての農事組合のいわゆる組合長という役員が中心になって運営をするようになって今のところは順調にいて今年オーナー数が32組に達している。こちらは上坂さんという方が中心です。それで現在のところはとにかくうまくいってるけど、今後はやはりこの後を継ぐ人たち、この仰木でもやっぱりそういう問題が深刻になりつつあるというようなご報告でした。その他もう時間がなくて出席した地区だけ紹介しておきますが、愛知県新城市の四谷棚田、千葉県鴨川市の川代棚田、長野県上田市の稲倉の棚田、それから山口県長門市の本郷の棚田、和歌山県紀美野町の中田の棚田、新潟県佐渡市の岩首の棚田、福岡県うきは市のつづらの棚田、三重県熊野市の丸山千枚田、京都府福知山市の毛原の棚田、そして最後に福岡県八女市かつての星野村の広内の棚田などの方々が発言をされました。時間があまりなくて申し訳なかったんですが来年はもう少し時間を長くしていただきたいとそういうふうであります。以上でございます。

## 【次期開催地挨拶】

全国棚田(千枚田)サミット連絡協議会副会長

和歌山県那智勝浦町長 **堀 順一郎**



皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました、次期開催地の和歌山県的那智勝浦町長の堀と申します。

まずは昨日今日と開催されました高島市でのサミット、本当に素晴らしいサミットでございました。昨日は子どもたちの歌声から始まりまして、市民の皆さん方の歌声、そして基調講演。先ほど分科会の報告がございましたように本当に中身の濃い分科会もございましたし、力強い共同宣言もございました。本当に素晴らしいサミットだったと思います。観光エクスカッションも本当に楽しく、堪能させていただきました。本当にありがとうございます。何を言ってもやはり高島市長様を始め、高島市の市役所の皆さん方、関係者の皆さん方に本当に心から感謝を申し上げたいと思います。次期開催地でこういうことができるかどうか、大きなプレッシャーを感じておりますが、少しでも皆さん方に満足いただけるようなサミットにしていきたいということで準備に入りたいと思います。

那智勝浦町での開催は、来年の令和5年11月18日・19日とさせていただきます。和歌山県の南端に位置する那智勝浦町はいわゆる台風一過と言われ、9月・10月は本当に台風の襲来が多く、そこを避けたいということで11月の18日・19日とさせていただきます。

特に那智勝浦町の棚田につきましては山沿いの集落でございまして、特に色川地域というところに集中してございます。色川地域というのは那智勝浦町の中心部から車で40分から50分かかるようなところでございまして、南平野、小阪、口色川、大野、そして田垣内というそれぞれの集落に、それぞれ棚田があり、小阪地域では棚田を守ろう会ということで皆さん方活動いただいております、この中にも数名

いらっしゃいます。また、今日は県庁職員にも応援に駆けつけていただいております。色川地域では、実は40年前からIターンの方々がどんどん増えてきています。地元の方々も本当に協力していますし、Iターンの方々もいかに地元へ溶け込むか。先にIターンした方々が仲介をして、地元の方々と一緒にセッションしてIターンにつなげるということで、色川地区で人口が今700人程度ですが、半分の350人を超えるような、Iターンの方々のほうが多くなるようなそんな地域でございます。しかしながらやはり伝統文化を新しい力でつないでいこうというような動きもございまして、ぜひ来年はそういった取り組みも見ていただけて、交流も深めていただけたらというふうに思います。

那智勝浦町は世界遺産と生マグロと温泉の町です。熊野古道に象徴されるように、去年一昨年ぐらいまでは熊野古道を海外の方にたくさん歩いていただきました。今は残念ながら歩いていただけていないんですけども、そういった世界遺産もございまして、温泉は177の泉源がございまして、様々な温泉がありますので分科会等で疲れた後に温泉に浸かっていただけたらというふうに思います。そして何よりも生マグロ、これは冷凍を一回もしていなくて海で一本一本釣り上げる自然に優しい漁法、延縄漁はえなわと言うんですけども、その水揚げしたマグロを締めて冷凍しないものですから、本当にモチモチとした年中美味しいマグロが食べられるところがございます。しかもそこで棚田の米と一緒にするとさらに美味しさが増しますので、ぜひ那智勝浦町へお越しいただき、食あるいは温泉も楽しんでいただけたらと思いますのでどうかよろしくお祈りいたします。

皆さんお待ちしています。

## 【お礼の挨拶】

第27回全国棚田(千枚田)サミット実行委員会会長  
高島市長 **福井 正明**



閉会にあたりまして、一言御礼のご挨拶をさせていただきます。

昨日と今日の2日間、本当にお天気に恵まれて、このように無事、閉会式を迎えられますのも、全国棚田(千枚田)連絡協議会の会長を担っていただいております山形県の大蔵村の加藤村長様はじめ、関係者の皆様のご協力はもとより、こうして全国から大変多くの皆様にご参加をいただき、そしてこのサミットの運営にご理解ご協力をいただきました賜物であります。関係各位に対しまして、改めて心から御礼を申し上げる次第でございます。

少し話が変わりますが、高島市には陸上自衛隊の今津駐屯地と航空自衛隊の饗庭野分屯基地が所在をしてございまして、その中の航空自衛隊の饗庭野分屯基地が開設されてちょうど50年の節目を迎えましたことから、今日は朝から分屯基地で祝賀記念行事をされており、そのために先ほど来、F15それからF2といった航空自衛隊の戦闘機が展示飛行をされており、少し驚かれた方もいらっしゃるかもしれませんが、ご理解を賜ればというふうに思う次第でございます。

今回のサミットにご参加いただきました皆様はそれぞれ

棚田の現状なり、あるいは様々な課題について情報を共有いただけてきたものと思います。日本の原風景とも言えます棚田の保全はもとより、我が国の農業あるいは農村の多面的な特性をしっかりと先人から受け継ぎ、そして次の世代にそのような形でしっかりと引き継いでいくのが我々の役割であり、使命であろうというふうに改めて認識をさせていただいたところでもあります。

来年は先ほどご挨拶いただきました、和歌山県的那智勝浦町で第28回のサミットが開催される運びとなっております。堀町長様をはじめ那智勝浦町の皆様には、これまでもそうですが、これからも引き続きまして来年の開催に向けいろいろとご苦勞を賜ることと存じますけれども、どうかよろしくお願いしたいと存じます。

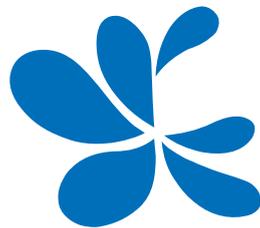
結びになりますが、改めて全国各地からこの第27回全国棚田(千枚田)サミットにご参加いただきましたことを心から御礼を申し上げますとともに、ご参加いただきました皆様がそれぞれ各地域で、ご健勝でご活躍をいただきますことを心からご祈念申し上げまして、御礼のご挨拶とさせていただきます。

2日間本当にありがとうございました。









滋賀県 高島市

## 第27回全国棚田(千枚田)サミット実行委員会事務局

---

〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地(高島市農村整備課内)  
TEL:0740-25-8529 FAX:0740-25-8519 e-mail:nouson@city.takashima.lg.jp